

馬場東矢次Ⅱ遺跡
新川鎬木遺跡
井出二子山古墳
保渡田八幡塚古墳

1999

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

馬場東矢次II遺跡
新川 鏑木 遺跡
井出二子山古墳
保渡田八幡塚古墳

1999

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



井出二子山古墳とその周辺



馬場東矢次Ⅱ遺跡出土の縄文土器

序

群馬用水建設事業は、昭和38年度から昭和44年度までの6年計画で水資源開発公団によって実施された。この用水は沼田市岩本町で利根川から取水し、子持村湧上で赤城幹線・榛名幹線に分岐し、それぞれの山麓に導水されている。その幹線・支線あわせた総延長は約80kmにおよんでいる。

本報告書は、その群馬用水赤城幹支線・榛名幹支線の建設及び付随する道路建設等に伴う埋蔵文化財の発掘調査の報告書である。

この埋蔵文化財の発掘調査は、群馬県の埋蔵文化財保護行政の黎明期であった昭和43・44年度に実施され、昭和43・44年度に「水資源開発公団群馬用水事務所」「群馬用水幹線水路地域埋蔵文化財調査委員会」により概報二冊が刊行されたが、その後諸般の事情によりその本格的な整理作業が行われなかったものである。平成11年度、群馬県教育委員会からの委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団で整理を実施した。30年以上前の発掘調査の報告書であり、既に発掘担当者の中には故人となられた方もあり、図面等の資料の散逸は免れぬところであったが、関係者から資料の提出や、助言等の御協力を賜り、無事に刊行のはこびとなったものである。

本報告書の刊行は、検出された遺構や遺物から該当市町村の原始・古代を明らかにするとともに、黎明期の群馬県の発掘調査体制やその方法など群馬県の埋蔵文化財保護行政の歴史を知る上でも意義があると考ええる。

末筆ながら発掘関係者及び群馬県教育委員会等行政機関に心から感謝の意を表し序文とする。

平成12年3月

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

- 1 本書は、群馬用土地利用改良事業にかかわる埋蔵文化財発掘調査に伴う報告書である。
- 2 本書で報告する遺跡とその所在地は下記のとおりである。

馬場東矢次II遺跡（当初遺跡名馬場矢次大前田遺跡）	勢多郡宮城村大字馬場字東矢次419番地他
新川鎬木遺跡	勢多郡新里村大字新川字鎬木2223-3番地他
井出二子山古墳（当初遺跡名伊勢廻井出遺跡）	群馬郡群馬町大字井出字二子山1403-1番地他
保渡田八幡塚古墳（当初遺跡名伊勢廻井出遺跡）	群馬郡群馬町大字保渡田字八幡塚1956番地他
- 3 発掘調査は、群馬県教育委員会が群馬県農政部耕地開発課から委託を受け、さらに、群馬用土地利用改良地域埋蔵文化財調査委員会に委託して実施された。調査担当者及び調査期間は下記のとおりである。

馬場東矢次II遺跡	担当者	松本浩一
	調査員	鬼形芳夫、平野進一、松尾宣方
	期 間	1969(昭和44)年11月25日～12月7日
新川鎬木遺跡	担当者	相沢忠洋、梅澤重昭
	調査員	鬼形芳夫、平野進一、松尾宣方
	期 間	1970(昭和45)年2月15日～2月18日
井出二子山古墳・	担当者	相沢忠洋、平野進一
保渡田八幡塚古墳	調査員	鬼形芳夫、桜場一寿、石塚久則、徳江 洋、春木 茂
	期 間	1971(昭和46)年11月15日～12月8日
- 4 本書作成のための整理作業は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県教育委員会より委託を受け、1999(平成11)年4月1日から2000(平成12)年3月31日まで実施した。
- 5 本書作成時の事業団組織及び担当者は以下のとおりである。

管理・指導	小野宇三郎／赤山容造／住谷 進／神保侑史・水田 稔／坂本敏夫・佐藤明人
事務担当	笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、岡嶋伸昌、片岡徳雄／大沢友治
文章執筆	第1章 原田恒弘
	第2章7・第3章7(縄文土器・石器) 水田 稔
	第6章1 藤根 久・今村美智子(㈱パレオ・ラボ)
	第6章2 植田弥生(㈱パレオ・ラボ)
	上記以外 徳江秀夫
編 集	徳江秀夫
編集補助	高橋フジ子、桑原恵美子、須田育美、新平美津子、小池 縁、嶋崎しづ子、田中富美子、佐藤美代子、田中富子、富沢スミ江、小菅優子
遺物写真	佐藤元彦
保存処理	関 邦一／土橋まり子／小材浩一、高橋初美
- 6 分析等については以下のとおりである。

石器石材の同定	飯島静雄氏(群馬地質研究会)
---------	----------------





埴輪の胎土分析 (株)パレオ・ラボ

炭化材の樹種同定 (株)パレオ・ラボ

- 7 発掘調査の記録類、出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 8 本書の作成にあたり、下記の諸氏、機関から御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表する。
内田憲治、梅沢克巳、小川卓也、加部二生、清水 豊、田辺芳昭、田村 孝、南雲芳昭、若狭 徹
群馬町教育委員会、新里村教育委員会、宮城村教育委員会
また、縄文土器の整理作業については、事業団職員、谷藤保彦から多大の援助を受けた。

凡 例

- 1 遺構の挿図中で使用した方位は磁北である。
- 2 遺構及び遺物の挿図の縮尺率は各図中に表示した。他と縮尺の異なるものについては随時その縮尺を付した。
- 3 挿図中で使用したスクリーントーンは次のことを表す。

住居焼土		住居白色粘土面	
灰釉陶器施釉部分		土器黒色処理	
- 4 縄文土器、埴輪の赤色刷部分は、赤色塗彩が施されていることを示す。
- 5 第1図は建設省国土地理院発行の20万分の1地勢図(長野、宇都宮)を、第5図、第43図、第68図、第69図は、同発行の2万5千分の1地形図(鼻毛石・大胡・大間々・桐生・下室田・前橋)を使用した。
- 6 縄文土器、石器以外の土器・埴輪については各章ごとに遺物観察表を作成した。観察表の記載については以下のとおりである。
 - a 量目の項目中の口は口径、高は器高、底は底径、あるいは基底部径を表す。また、数値に()のあるものは復元値を、< >のあるものは残存値を表す。
 - b 色調は農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の『新土色帖』に基づいている。
 - c 埴輪の胎土・焼成、口縁部先端の形状、突帯の断面形状の分類については本文章中に凡例を記してある。
 - d 埴輪のハケメの項の数値は、2cm幅の中に何本のハケメが確認できるか記したものである。
 - e 埴輪の成・整形の特徴中の基底部、基部粘土板の重ねの左右は、底面方向から各個体を観察したときの粘土の重なりを示している。
- 7 写真図版 PL1、27、41は国土地理院発行の空中写真を使用した。
- 8 写真図版 PL2は宮城村教育委員会所有の原版について資料提供を受けた。
- 9 写真図版 PL42-1・2は群馬町教育委員会所有の原版について資料提供を受けた。

目次

口 絵

序

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表 目 次

本文中写真目次

写真目次

第1章 調査に至る経緯……………1

第2章 馬場東矢次II遺跡の調査

1. 調査の経過……………9

2. 遺跡の位置と地形……………9

3. 周辺の遺跡……………12

4. 調査の方法……………16

5. 基本層序……………16

6. 調査された遺構……………17

7. 出土した遺物……………21

(1) 縄文の土器……………21

(2) 縄文時代の石器……………22

(3) その他の土器……………51

第3章 新川鎭木遺跡の調査

1. 調査の経過……………55

2. 遺跡の位置と地形……………55

3. 周辺の遺跡……………56

4. 調査の方法……………59

5. 基本層序……………59

6. 調査された遺構……………60

(1) 各区の調査……………60

(2) 1号竪穴状遺構……………60

(3) 住居……………62

7. 出土した遺物……………69

(1) 縄文土器……………69

(2) 縄文時代石器……………69

(3) その他の土器……………80

8. 成果と問題点……………86

第4章 井出二子山古墳の調査

1. 調査の経過……………89

2. 古墳の位置と地形……………89

3. 周辺の遺跡……………91

4. 調査の方法……………98

5. 基本層序……………98

6. これまでの調査成果……………100

7. 調査された遺構……………110

8. 出土した遺物……………117

(1) 埴輪……………117

(2) その他の土器……………119

(3) 鉄鏃……………119

9. 成果と問題点……………164

第5章 保渡田八幡塚古墳の調査

1. 調査の経過……………169

2. 調査の方法……………169

3. 基本層序……………169

4. これまでの調査成果……………170

5. 調査された遺構……………183

(1) 保渡田八幡塚古墳の周堀……………183

(2) 竪穴住居……………184

6. 出土した遺物……………185

(1) 円筒埴輪……………185

(2) 形象埴輪……………185

(3) 1号住居出土遺物……………185

(4) トレンチ出土の遺物……………185

(5) 伊勢廻り地区出土埴輪……………186

(6) 伊勢廻り地区出土の土器……………196

7. 成果と問題点……………197

第6章 分析

1. 井出二子山古墳出土埴輪の胎土材料……………211

2. 保渡田八幡塚古墳1号住居出土炭化材の
樹種同定……………222

写真図版

抄 録

挿図目次

第 1 図 掲載遺跡の位置 5

馬場東矢次II遺跡

第 2 図 馬場東矢次II遺跡の位置10
第 3 図 赤城山南麓の地形11
第 4 図 遺跡の位置と周辺の地形12
第 5 図 周辺の遺跡15
第 6 図 基本層序16
第 7 図 調査区の位置17
第 8 図 1 区18
第 9 図 2 区18
第 10 図 3 区・6 区19
第 11 図 4 区19
第 12 図 5 区20
第 13 図 イ 区20
第 14 図 1 区出土の縄文土器(1)23
第 15 図 1 区出土の縄文土器(2)24
第 16 図 1 区出土の縄文土器(3)25
第 17 図 1 区出土の縄文土器(4)26
第 18 図 1 区出土の縄文土器(5)27
第 19 図 1 区出土の縄文土器(6)、2 区出土の縄文土器(1)28
第 20 図 2 区出土の縄文土器(2)29
第 21 図 2 区出土の縄文土器(3)30
第 22 図 2 区出土の縄文土器(4)31
第 23 図 2 区出土の縄文土器(5)32
第 24 図 2 区出土の縄文土器(6)33
第 25 図 2 区出土の縄文土器(7)34
第 26 図 2 区出土の縄文土器(8)35
第 27 図 2 区出土の縄文土器(9)、3 区・6 区出土の縄文土器(1)36
第 28 図 3 区・6 区出土の縄文土器(2)37
第 29 図 3 区・6 区出土の縄文土器(3)38
第 30 図 3 区・6 区出土の縄文土器(4)39
第 31 図 3 区・6 区出土の縄文土器(5)40
第 32 図 3 区・6 区出土の縄文土器(6)41
第 33 図 3 区・6 区出土の縄文土器(7)42
第 34 図 3 区・6 区出土の縄文土器(8)、4 区出土の縄文土器(1)43

第 35 図 4 区出土の縄文土器(2)、5 区出土の縄文土器(1)44
第 36 図 5 区出土の縄文土器(2)45
第 37 図 各区出土の石器(1)46
第 38 図 各区出土の石器(2)47
第 39 図 各区出土の石器(3)48
第 40 図 各区出土の石器(4)49
第 41 図 各区出土の石器(5)50
第 42 図 各区出土のその他の土器51

新川鎬木遺跡

第 43 図 周辺の遺跡57
第 44 図 基本層序60
第 45 図 遺跡の位置61
第 46 図 調査区の位置62
第 47 図 A-I 区・A-II 区・A-III 区63
第 48 図 A-IV 区・A-VIII 区・A-IX 区64
第 49 図 A-V 区・A-X 区65
第 50 図 A-XI 区・A-XII 区66
第 51 図 1 号住居67
第 52 図 2 号住居68
第 53 図 A-I・II 区・IV 区出土の縄文土器70
第 54 図 A-VI 区~VIII 区・IX 区出土の縄文土器71
第 55 図 A-IX 区出土の縄文土器、A-X 区出土の縄文土器(1)72
第 56 図 A-X 区出土の縄文土器(2)73
第 57 図 A-X 区出土の縄文土器(3)、A-XI 区出土の縄文土器(1)74
第 58 図 A-XI 区出土の縄文土器(2)、A-XII 区出土の縄文土器(1)75
第 59 図 A-XII 区出土の縄文土器(2)、鎬木遺跡出土の縄文土器(1)76
第 60 図 鎬木遺跡出土の縄文土器(2)77
第 61 図 各区出土の石器(1)77
第 62 図 各区出土の石器(2)78
第 63 図 各区出土の石器(3)79
第 64 図 各区出土のその他の土器80
第 65 図 1 号住居出土の土器81
第 66 図 2 号住居出土の土器82

井出二子山古墳	
第 67 図 榛名山東南麓の地形	90
第 68 図 周辺の遺跡(1)	92
第 69 図 周辺の遺跡(2)	93
第 70 図 調査区の位置	99
第 71 図 基本層序	100
第 72 図 保渡田古墳群の位置	102
第 73 図 井出二子山古墳の墳丘・中島	103
第 74 図 井出二子山古墳の舟形石棺	104
第 75 図 井出二子山古墳の埴輪(1)	105
第 76 図 井出二子山古墳の埴輪(2)	106
第 77 図 井出二子山古墳の埴輪(3)	107
第 78 図 井出二子山古墳の埴輪(4)	108
第 79 図 井出二子山古墳の埴輪(5)	109
第 80 図 井出二子山古墳の埴輪(6)	110
第 81 図 N-1・2・3・4 トレンチ、S-1 トレンチ	113・114
第 82 図 S-2・3 トレンチ、E-1・2・3 トレンチ	115・116
第 83 図 円筒埴輪(1)	120
第 84 図 円筒埴輪(2)	121
第 85 図 円筒埴輪(3)	122
第 86 図 円筒埴輪(4)	123
第 87 図 円筒埴輪(5)	124
第 88 図 円筒埴輪(6)	125
第 89 図 円筒埴輪(7)	126
第 90 図 円筒埴輪(8)	127
第 91 図 円筒埴輪(9)	128
第 92 図 円筒埴輪(10)	129
第 93 図 円筒埴輪(11)	130
第 94 図 円筒埴輪(12)	131
第 95 図 円筒埴輪(13)	132
第 96 図 円筒埴輪(14)	133
第 97 図 円筒埴輪(15)	134
第 98 図 円筒埴輪(16)	135
第 99 図 円筒埴輪(17)	136
第 100 図 円筒埴輪(18)	137
第 101 図 円筒埴輪(19)	138
第 102 図 円筒埴輪(20)	139
第 103 図 円筒埴輪(21)	140
第 104 図 形象埴輪(1)	141
第 105 図 形象埴輪(2)	142
第 106 図 形象埴輪(3)	143
第 107 図 その他の土器	143
第 108 図 井出二子山古墳採集の鉄鏝	144
保渡田八幡塚古墳	
第 109 図 基本層序	170
第 110 図 調査区の位置	171
第 111 図 保渡田八幡塚古墳の墳丘	172
第 112 図 保渡田八幡塚古墳の中島	173
第 113 図 保渡田八幡塚古墳の埴輪(1)	174
第 114 図 保渡田八幡塚古墳の埴輪(2)	175
第 115 図 保渡田八幡塚古墳の埴輪(3)	176
第 116 図 保渡田八幡塚古墳中島出土の土器	178
第 117 図 E-2・3・4 トレンチ	179・180
第 118 図 S トレンチ	181・182
第 119 図 円筒埴輪	187
第 120 図 形象埴輪	188
第 121 図 1号住居出土の遺物(1)	189
第 122 図 1号住居出土の遺物(2)	190
第 123 図 E-4 トレンチ出土遺物	191
第 124 図 トレンチ出土の遺物	192
第 125 図 伊勢廻り出土の円筒埴輪(1)	193
第 126 図 伊勢廻り出土の円筒埴輪(2)	194
第 127 図 伊勢廻り出土の形象埴輪	195
第 128 図 伊勢廻り出土の土器	196
第 129 図 埴輪胎土中の粒子組成図	219

表 目 次

第 1 表 群馬用水土地改良事業にかかわる埋蔵文化財 調査	4
馬場東矢次 II 遺跡	
第 2 表 馬場東矢次 II 遺跡周辺の遺跡一覧	14
第 3 表 馬場東矢次 II 遺跡出土石器一覧	22
新川籙木遺跡	
第 4 表 新川籙木遺跡周辺の調査遺跡	55

第5表	新川鎬木遺跡周辺の遺跡一覧	58	第16表	保渡田八幡塚古墳出土形象埴輪観察表	199
第6表	新川鎬木遺跡出土石器一覧	69	第17表	保渡田八幡塚古墳1号住居出土遺物観察表	200
第7表	新川鎬木遺跡出土遺物観察表	80	第18表	保渡田八幡塚古墳トレンチ出土遺物観察表	202
第8表	新川鎬木遺跡1号住居出土土器観察表	81	第19表	保渡田八幡塚古墳(伊勢廻り)出土 埴輪観察表	206
第9表	新川鎬木遺跡2号住居出土土器観察表	84	第20表	保渡田八幡塚古墳(伊勢廻り)出土 土器観察表	208
井出二子山古墳					
第10表	保渡田古墳群周辺の遺跡一覧	94	第21表	埴輪試料と胎土の肉眼的特徴	217
第11表	井出二子山古墳出土円筒埴輪観察表	145	第22表	埴輪胎土中の粒子組成表	218
第12表	井出二子山古墳出土形象埴輪観察表	160	第23表	埴輪胎土の粘土および砂粒の特徴	220
第13表	井出二子山古墳出土土器観察表	162	第24表	保渡田八幡塚古墳1号住居(平安時代) 出土炭化材の樹種	225
第14表	群馬県内出土の蓋形埴輪	165	第25表	保渡田八幡塚古墳1号住居出土炭化材樹種の 検出試料数	226
保渡田八幡塚古墳					
第15表	保渡田八幡塚古墳出土円筒埴輪観察表	199			

本文中写真目次

図版1	埴輪胎土中の微化石類	221	図版4	保渡田八幡塚古墳1号住居出土炭化材樹種	229
図版2	保渡田八幡塚古墳1号住居出土炭化材樹種	227	図版5	保渡田八幡塚古墳1号住居出土炭化材樹種	230
図版3	保渡田八幡塚古墳1号住居出土炭化材樹種	228			

写真目次

馬場東矢次II遺跡		2	3区・6区遺物出土状況
PL1	馬場東矢次II遺跡の位置	3	5区北・東壁北半部分土層断面(南西から)
PL2	赤城山南麓の地形と馬場東矢次II遺跡	PL8-1	4区全景(南から)
PL3-1	馬場東矢次II遺跡遠景(南から)	2	4区東壁南半部分土層断面(西から)
2	馬場東矢次II遺跡遠景(南から)	3	4区南半部分(東から)
PL4-1	1区遺物出土状況	4	5区全景(北から)
2	2区全景(南東から)	5	5区全景(南から)
3	2区西壁土層断面(東から)	PL9	1区出土の縄文土器
PL5-1	2区遺物出土状況	PL10-1	1区出土の縄文土器
2	3区・6区北半部分(南西から)	2	2区出土の縄文土器
3	3区・6区北半部分(東から)	PL11	2区出土の縄文土器
PL6-1	3区・6区ピット(東から)	PL12	3区・6区出土の縄文土器
2	3区・6区遺物出土状況	PL13-1	3区・6区出土の縄文土器
3	3区・6区遺物出土状況	2	4区出土の縄文土器
PL7-1	3区・6区遺物出土状況	PL14-1	1区出土の縄文土器

- 2 1区出土の縄文土器
- P L15-1 1区出土の縄文土器
- 2 2区出土の縄文土器
- P L16-1 2区出土の縄文土器
- 2 2区出土の縄文土器
- P L17-1 2区出土の縄文土器
- 2 2区出土の縄文土器
- P L18-1 2区出土の縄文土器
- 2 3区・6区出土の縄文土器
- P L19-1 3区・6区出土の縄文土器
- 2 3区・6区出土の縄文土器
- P L20-1 3区・6区出土の縄文土器
- 2 4区出土の縄文土器
- P L21-1 5区出土の縄文土器
- 2 縄文土器の細部
- 3 その他の土器
- P L22 1区出土の縄文土器（底部）
- P L23 1区・2区出土の縄文土器（底部）
- P L24 各区出土の縄文土器（底部）
- P L25 各区出土の石器
- P L26 各区出土の石器

新川籙木遺跡

- P L27 新川籙木遺跡の位置
- P L28-1 新川籙木遺跡遠景（南東から）
- 2 新川籙木遺跡遠景（南東から）
- 3 新川籙木遺跡遠景（北東から）
- P L29-1 調査区全景（西から）
- 2 A-V区遺構検出状況（東から）
- P L30-1 調査区東側部分全景（西から）
- 2 A-VI区遺構検出状況
- 3 A-VII区遺物出土状況
- P L31-1 1号・2号住居検出状況（西から）
- 2 1号住居土層断面（南から）
- P L32-1 1号住居検出状況（西から）
- 2 2号住居検出状況（西から）
- 3 1号住居カマド検出状況（西から）
- 4 2号住居カマド検出状況（西から）
- P L33-1 A-I・II・IV区出土の縄文土器
- 2 A-VI・VII区出土の縄文土器
- 3 A-VIII・IX区出土の縄文土器
- P L34-1 A-IX区出土の縄文土器
- 2 A-X区出土の縄文土器

- 3 A-X区出土の縄文土器
- P L35-1 A-X区出土の縄文土器
- 2 A-X区出土の縄文土器
- 3 A-XI区出土の縄文土器
- P L36-1 A-XI区出土の縄文土器
- 2 A-XII区出土の縄文土器・新川籙木遺跡出土の縄文土器
- 3 新川籙木遺跡出土の縄文土器
- P L37-1 新川籙木遺跡出土の縄文土器
- 2 新川籙木遺跡出土の縄文土器
- 3 各区出土の石器
- P L38-1 各区出土の石器
- 2 弥生土器・埴輪
- 3 1号住居出土の土器
- P L39-1 1号住居出土の土器
- 2 2号住居出土の土器
- P L40 2号住居出土の土器

井出二子山古墳

- P L41 保渡田古墳群の位置（A井出二子山古墳B保渡田八幡塚古墳 C保渡田薬師塚古墳 D三ツ寺I遺跡）
- P L42-1 保渡田古墳群全景（南西から）
- 2 井出二子山古墳全景（南西から）
- P L43-1 井出二子山古墳全景現況（南から）
- 2 井出二子山古墳全景現況（西から）
- P L44-1 Nトレンチ列（南から）
- 2 Sトレンチ列（北から）
- 3 S-1・E-1トレンチ（西から）
- P L45-1 N-2トレンチ土層断面（北西から）
- 2 N-2トレンチ土層断面（南西から）
- 3 N-2トレンチ中堤葺石検出状況（西から）
- P L46-1 E-1トレンチ土層断面（北東から）
- 2 E-1トレンチ墳丘裾部葺石検出状況（東から）
- 3 E-2トレンチ（北西から）
- P L47-1 E-2トレンチ土層断面（北から）
- 2 S-2トレンチ土層断面（南西から）
- 3 S-2トレンチ土層断面（東から）
- P L48-1 S-3トレンチ土層断面（南東から）
- 2 調査風景
- 3 調査風景

- P L 49 N-2 トレンチ出土の円筒埴輪
 P L 50 各トレンチ出土の円筒埴輪
 P L 51-1 N-2 トレンチ出土の円筒埴輪
 2 N-2 トレンチ出土の円筒埴輪
 3 N-2 トレンチ出土の円筒埴輪
 P L 52-1 E-1 トレンチ出土の円筒埴輪
 2 E-1 トレンチ・E-2 トレンチ出土の円筒埴輪
 3 E-3 トレンチ出土の円筒埴輪
 P L 53-1 S-1 トレンチ出土の円筒埴輪
 2 S-2 トレンチ・S-3 トレンチ出土の円筒埴輪
 3 井出二子山古墳出土の円筒埴輪
 P L 54-1 井出二子山古墳出土の円筒埴輪
 2 井出二子山古墳出土の円筒埴輪
 3 井出二子山古墳出土の円筒埴輪
 4 円筒埴輪の製作技法
 P L 55 円筒埴輪の製作技法
 P L 56-1 円筒埴輪の線刻
 2 その他の土器
 P L 57-1 井出二子山古墳出土の形象埴輪
 2 井出二子山古墳採集の鉄鏃

 保渡田八幡塚古墳
 P L 58-1 保渡田八幡塚古墳全景（西から）
 2 保渡田八幡塚古墳全景（南から）
 P L 59-1 A トレンチ（南から）
 2 A トレンチ内堀葺石検出状況（南から）
 3 A トレンチ土層断面（南西から）
 P L 60-1 S-1 トレンチ
 2 S-1 トレンチ土層断面
 3 S-2 トレンチ
 4 S-2 トレンチ土層断面
 5 S-3 トレンチ
 6 S-3 トレンチ土層断面
 7 E-4 トレンチ（南から）
 8 E-4 トレンチ土器出土状況
 P L 61-1 1号住居全景（西から）
 2 炭化材出土状況
 3 土器出土状況
 4 貯蔵穴周辺
 P L 62-1 保渡田八幡塚古墳出土の円筒埴輪
 2 保渡田八幡塚古墳出土の形象埴輪
 P L 63 1号住居出土の遺物
 P L 64 1号住居出土の遺物
 P L 65 E-4 トレンチ出土の遺物
 P L 66 トレンチ出土の遺物
 P L 67 伊勢廻り出土の遺物

第1章 調査に至る経緯

群馬用土地改良事業は、1963（昭和38）年度から水質源開発公団群馬用水建設事業として、赤城・榛名山麓を中心に大規模な農業改良事業が策定された。

本事業の主要な主幹、支線水路の建設は水質源開発公団が、田畑輪換、畑地灌漑等を中心とした土地改良事業は群馬県営事業とし、1969（昭和44）年度に至る6年次を目標に実施された。

上記の主要幹線水路は、利根川右岸の沼田市岩本に取水口が建設され、北群馬郡子持村洲上まで隧道により導水され赤榛分水工に至る。そこから更に赤城、榛名両幹線に分岐される。

赤城幹線水路は赤城村・北橋村・富士見村・前橋市・大胡町・宮城村・粕川村・新里村に至る1市1町6村に及ぶ。榛名幹線は子持村・渋川市・吉岡町・榛東村・群馬町・箕郷町を経て鳴沢池の上流部に流入し1市3町2村、双方で14市町村が対象となる。

両幹線は各受益地帯に分水するため、揚水場及び支線を設けている。赤城幹線水路では西部一支線、東部三支線、榛名幹線では相馬、十文字、小倉、吉岡、箕郷群馬、榛名の六支線総延長は80kmに及ぶ。

赤城幹線地域の起伏の連なる丘陵部には畑地が、侵食谷には主に水田が営まれている。榛名幹線では子持山南部、利根川と吾妻川に挟まれた起伏の多い地域と、榛名山南麓の丘陵地帯、山麓の裾野平野地形の畑作地帯が中心となっている。

群馬用土地改良事業の主体は畦畔の整備や削土、盛土等大規模な地形の改変を伴う新規開田事業の田畑輪換と、畑地灌漑（スプリンクラー）用給水管の部分的な埋設を行う灌漑水利施設の設置である。

いずれも遺跡地への影響が懸念されるため、群馬県教育委員会では、1968（昭和43）年度に赤城幹線地域、1969（昭和44）年度に榛名幹線地域の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、赤城幹線地域では471遺跡、榛名幹線地域で208遺跡が確認され、文化財の保護について以下のとおり協議、調整を行った。

①包蔵地における田畑輪換、新規開田は文化財への影響を最小限度に止める等配慮する。②畑地灌漑用の導水管の埋設は、試掘等の結果を踏まえ、埋設深度を調整する。③試掘並びに発掘調査は県教育委員会が行う。試掘に要する経費は群馬県教育委員会、本調査については事業者側の各負担とする。

なお土地改良事業と発掘調査の円滑を期するため、群馬県教育委員会事務局社会教育課、群馬県耕地開発課、群馬用土地改良事業所、群馬県中部教育事務所、同西部教育事務所等諸機関で「群馬用土地改良地域埋蔵文化財調査連絡協議会」が組織された。

しかし発掘調査は担当職員の不足と調査対象地域が広範囲にわたること、しかも営農に支障のないごく短期間に調査しなければならず困難を極めた。

そこで赤城村を除く13市町村教育委員会を以て下記により「群馬用土地改良地域埋蔵文化財調査委員会」が設立され、その主要業務は発掘調査、会計事務、渉外交渉、諸記録の作成等を行う事とした。

委員長	田村 寧	新里村教育委員会教育長
副委員長	田中善太郎	北橋村教育委員会教育長
同	喜美候部継宗	榛名町教育委員会教育長
会計監査	田島清一郎	宮城村教育委員会教育長
同	生方 真治	子持村教育委員会教育長
委員	白石実三郎	粕川村教育委員会教育長
同	井上宇之助	大胡町教育委員会教育長
同	岸 恒雄	前橋市教育委員会教育長
同	古屋 雅一	富士見村教育委員会教育長
同	栗田 義雄	吉岡町教育委員会教育長
同	石坂 金由	榛東村教育委員会教育長
同	清水藤太郎	箕郷町教育委員会教育長
同	藤井 熊雄	群馬町教育委員会教育長

本委員会では工事の年次計画に基づき、発掘担当者、調査員を委嘱し、1968（昭和43）年度から1972（昭和47）年度にかけて調査を実施した。以下、各年次ごとの調査経過は下表のとおりである。なお担当者、調査員、各教育委員会、地元有志のご尽力に感謝申し上げます。

先述のよう、調査に先だって実施された分布調査の結果は、1969（昭和44）年に『群馬用水事業地域埋蔵文化財分布調査報告書Ⅰ（赤城幹線地域編）』が、1970（昭和45）年に『群馬用水事業地域埋蔵文化財分布調査報告書Ⅱ（榛名幹線地域編）』として群馬県教育委員会から刊行された。

また、1968（昭和43）年度の調査結果は『群馬用水幹線水路地域埋蔵文化財調査報告書』（文献1）に、1969（昭和44）年度は『群馬用水土地改良地域埋蔵文化財発掘調査報告書（昭和44年度調査概報）』（文献2）に、1971（昭和46）年度は『群馬用水土地改良地域埋蔵文化財発掘調査（概報）』（文献3）としてその概要が報告されている。

その後、群馬県埋蔵文化財調査事業団は、群馬県

教育委員会から、過年度公共開発関連出土品整理事業として整理事業の委託を受け、1982（昭和57）年度の整理作業を経て、1983（昭和58）年に『奥原古墳群』（文献4）を、1989（平成元）年度の整理作業を経て、1990（平成2）年に『本郷の場古墳群』（文献5）をそれぞれ公開している。

今年度の整理作業は、群馬用水土地改良事業関連の整理作業としては、先の奥原古墳群、本郷の場古墳群に続くもので、通算3年目となる。

今回報告の4遺跡は、1969（昭和44）年度に調査が実施された馬場東矢次Ⅱ遺跡（調査当初、馬場矢次大前田遺跡）と、新川篤木遺跡、1971（昭和46）年度に調査が実施された井出二子山古墳、保渡田八幡塚古墳（調査当初、伊勢廻井出遺跡）である。

第1表 群馬用水土地改良事業にかかわる埋蔵文化財調査

年度	遺跡名	所在地	担当者	調査月日	遺構	遺物	備考
1968 (昭和43) 年度	原山・鴨入・十二沢 峯 白山 西房 大林Ⅱ	箕郷町富岡	尾崎喜左雄・相沢貞順	7月13日～7月21日	遺構なし	縄文土器少量	文献1
		新里村関	相沢忠洋・外山和夫	6月19日～6月28日	平安住居1軒	土師器、須恵器、縄文土器少量	文献1
		宮城村苗ヶ島	相沢貞順・松本浩一	8月1日～8月5日	遺構なし	遺物少量	文献1
		宮城村柏倉	相沢貞順・松本浩一	8月4日～8月5日	遺構なし	遺物少量	文献1
	粕川村室沢	相沢貞順	11月5日～11月9日	縄文前期住居2軒	縄文土器・石器	文献1	
1969 (昭和44) 年度	吹屋古墳群 分郷八崎 本郷古墳群 矢次大前田 新川篤木	子持村吹屋	松本浩一	8月10日～8月17日	古墳3基	鉄器	文献2
		北橋村分郷八崎	相沢貞順	9月21日～10月1日	弥生住居、古墳	縄文・弥生土器、石器	文献2
		榛名町本郷	梅澤重昭	10月24日～11月13日	古墳4基	埴輪、鉄器	文献5
		宮城村馬場	松本浩一	11月25日～12月7日	遺物包含層、縄文竪穴状遺構	縄文土器	文献2
	新里村新川	相沢忠洋・梅澤重昭	2月15日～2月28日	平安住居2軒	縄文土器、土師器	文献2	
1970 (昭和45) 年度	奥原古墳群 山内出 分郷八崎 富士見村内	榛名町本郷	梅澤重昭・松本浩一	8月1日～8月22日	古墳36基	鉄器、須恵器、埴輪	文献4
		新里村武井	相沢忠洋	9月26日～12月10日	平安時代住居？		
		北橋村分郷八崎	相沢貞順	8月2日～8月23日	弥生住居	縄文・弥生土器	
		富士見村	梅澤重昭・松本浩一	1月12日～4月26日	遺構なし		
1971 (昭和46) 年度	伊勢廻井出 八幡塚東 八幡山 十王駄塚	群馬町井出	相沢忠洋・平野進一	11月15日～12月8日	井出二子山古墳周堀	埴輪	文献3
		群馬町保渡田	相沢忠洋・平野進一	11月15日～12月8日	保渡田八幡塚古墳周堀、平安住居1軒	埴輪、土師器、その他土器、石製模造品	文献3
		北橋村箱田	相沢忠洋・平野進一	1月10日～2月12日	縄文住居3軒、古墳住居2軒	縄文土器・石器、土師器、須恵器	文献3
		富士見村小暮	相沢忠洋・平野進一	7月26日～8月3日	遺構なし	縄文土器	文献3
1972 (昭和47) 年度	藤生沢	新里村	原田恒弘・平野進一	4月下旬	縄文住居	縄文土器・石器	

第2章 馬場東矢次II遺跡の調査

1. 調査の経過

調査は、1970（昭和45）年11月25日～12月7日にわたって実施された。調査対象地は群馬用水土地改良事業に伴う新設の道路建設予定地である。

本遺跡の周辺は、1963（昭和38）年発行の『群馬県の遺跡』に、遺跡番号465番とし、縄文土器の散布地として周知されている。遺跡内容については「粕川村との境に近いゆるい傾斜の桑畑一帯に非常にたくさん土器破片が散布している。中期～後期。標高220m。」とされている。

なお、調査の翌年1971（昭和46）年3月発行の『群馬県遺跡台帳』Ⅰにおいては、台帳番号2235（宮城村番号9）に大字馬場矢継757（旧地番）周辺の2,930㎡が縄文時代の包蔵地として登録されている。

1968（昭和43）年発行の『群馬用水幹線水路地域埋蔵文化財調査報告書』では特段の記録はない。既に周知の遺跡として認識済であったためであろう。

調査の終了後、遺跡の周辺には、工場の進出や倉庫の建設などがあったものの畑作地帯としての大きな景観の変化もなく今日に至っている。

その中で、1997（平成9）年に今回報告した調査区の南側部分に西接する宮城村大字馬場字東矢次419-22において、養豚舎建設を原因とする調査が宮城村教育委員会により実施された。遺跡の内容は、縄文時代後期の土坑5基と今回報告の本遺跡と同様の縄文時代の遺物包含層である。ただし、出土した縄文土器の時期は、本遺跡よりもやや古い時期のものである。そして、この遺跡は所在地名をとり、馬場東矢次遺跡と命名されている。

本遺跡の名称については、『群馬用水土地改良地域埋蔵文化財発掘調査報告書』（昭和44年度調査概報）で馬場矢次大前田遺跡と報告されている。大前田の地名については、本遺跡とは距離をおくため、遺跡名から除去しておきたい。さらに宮城村教育委員会調査遺跡と区別するため、調査年からすると遺跡の命名の順番が逆点する感もあるが、今回報告の本遺跡の名称を馬場東矢次Ⅱ遺跡として報告する。

2. 位置と地形

本章で扱う馬場東矢次Ⅱ遺跡は、宮城村大字馬場字東矢次に所在する。

宮城村は、群馬県の県央東部に位置し、前橋市の市街地からは、東北東方向に約13kmの距離にある。遺跡名に冠した馬場は、同村の大字の一つで、村の東南地域の一角をなしている。東側は、赤城山南麓を流下する粕川の河道を境界として、粕川村と行政区を接している。この、行政区境は、遺跡の南端ではその方向を東西方向に変え、両村を南北に画している。遺跡の南側は、粕川村稲里である。

さらに、本遺跡の位置を詳述すると、上毛電鉄新屋駅の北方2.2km、県道三夜沢・国定停車場線と県道上神梅・大胡線が交差する馬場十字路口から南西約1.2km、馬場の集落の南西縁にあたる。

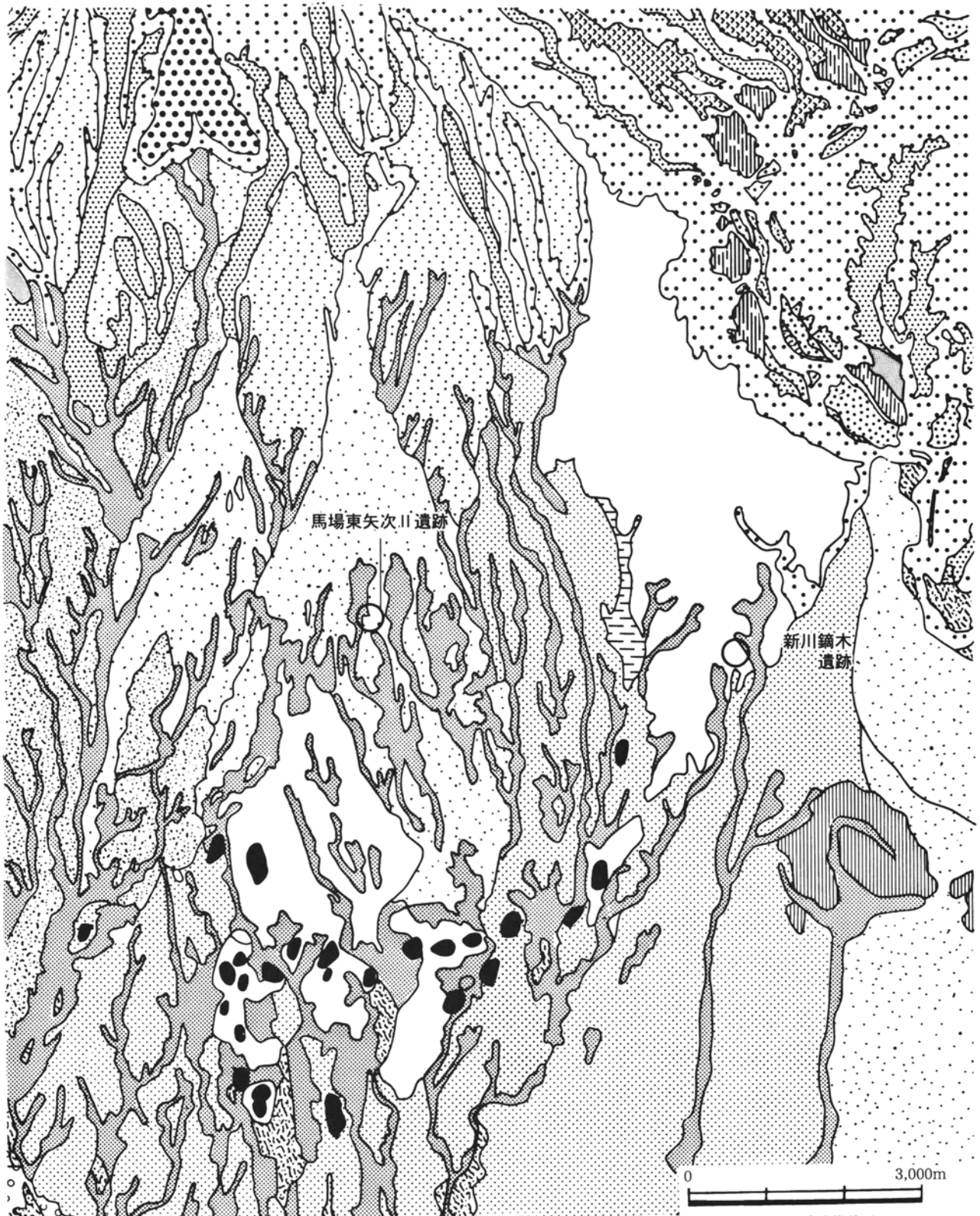
遺跡の周辺には、現在も農村風景が広がっている。調査時の土地利用は、畑や果樹園であったが、群馬用水の通水後、その受益地である水田への安定的な給水や畑地灌漑が行われるようになった現在も、遺跡地の周辺一帯は、畑、桑畑、果樹園が主体で、水田耕作は、客体的である。

本遺跡の立地する赤城山南麓は、標高500m前後の山地帯から丘陵性の台地への地形変換点がみられる。これより下位には山体が降雨災害などによって崩壊し、河川の運搬作用の結果、いくつかの扇状地が形成されている。本遺跡を含む宮城村東半部と粕川を挟んだ粕川村室沢・月田地区には粕川扇状地が形成され、等高線が同心円状に走行する状況が看取できる。粕川右岸の粕川村安通・洞遺跡の調査では、この扇状地に堆積する砂質の灰褐色土層下から縄文時代中期の土坑が検出されており、扇状地が完新世になってから形成されたことが明らかになっている。

本遺跡の立地について、周辺の地形をもう少し微視的に観察すると、本遺跡は、前述のよう粕川扇状地上に位置しており、北方向から南方向に傾斜する緩傾斜地上に展開している。標高は、調査区の北端、

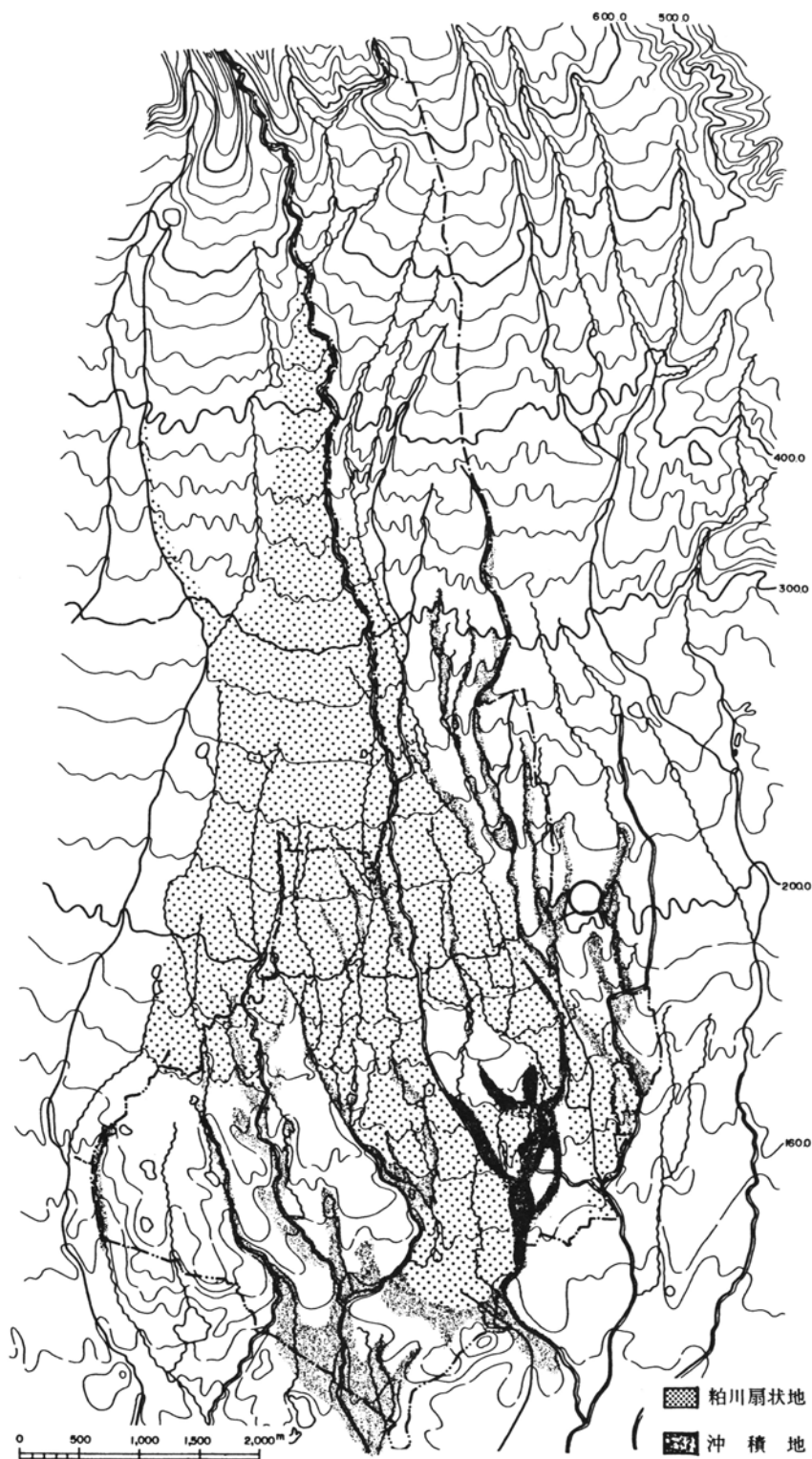


第2図 馬場東矢次II遺跡の位置



- | | | | | |
|--------------------|----------------------|-------------------|-------------------|---------------------|
| 火山原面 | 緩斜面および
土石流涵養型谷底平野 | 溶岩流 | 谷壁 | 火砕流堆積面
(大胡火砕流以外) |
| 岩屑なだれ
(818年)堆積面 | 河成段丘
(後期更新世後半) | 扇状地
(後期更新世後半) | 火砕流堆積面
(大胡火砕流) | 河成段丘
(後背湿地：完新世) |
| 谷底平野 | 丘陵 | 河成段丘
(旧中州：完新世) | 河成段丘
(中期更新世) | 前橋・伊勢崎
台地上の後背湿地 |
| 扇状地
(後期更新世前半) | 河成段丘
(後期更新世前半) | 流れ山 | 梨木泥流堆積面 | |

第3図 赤城山南麓の地形



第4図 遺跡の位置と周辺の地形

最高位で約240m、南端、最低位で約236.5mとなっている。

遺跡の東西には、湧水により開析された谷地形が認められる。東側の沖積地は、矢次沼を経て、南側、粕川村稲里の方面に延びており、遺跡の東方、泉川が東南方向に流下する地点に谷頭を有している。西側の沖積地は、張摩川を伴い、南方向に延びるもので、やはり、遺跡の南西方向に谷頭が存在すると思われる。本遺跡の調査は、圃場整備事業による畑地面の表土の移動がないということから道路部分に調査の対象が限定され、遺構の検出は無かったが、本遺跡の周辺、二つの谷頭を臨む低台地上に縄文時代後期の集落が展開していたものと考えられる。

3. 周辺の遺跡

馬場東矢次II遺跡の位置する赤城山南麓地域には、多数の遺跡が存在することは周知のことである。ただし、本遺跡の近接地で開発行為が進行することが無いため、直接、本遺跡との関連を分析、考察するための材料となる遺跡は少数である。その中で、本遺跡の南方約200~300mに位置する粕川村稲里所在の稲里矢次遺跡では平安時代の住居1軒を検出した。また、この遺

跡の西方に位置する稲矢次遺跡では、古墳時代後期から平安時代の住居28軒が発見されている。ともに、小支谷に面した台地上に占地している。本遺跡から南方約700mに位置する取切遺跡では古墳時代後期の住居1軒、奈良・平安時代20軒の住居が検出されているが、これとともに縄文時代前期の土石流の痕跡が検出されている。

本項では、馬場東矢次II遺跡周辺の歴史的環境を構成する遺跡について縄文時代を中心にその代表的なものを概観してみたい。第5図は、2万5千分の1の地図上に本遺跡周辺（南方・北方、それぞれ2.7km、東方・西方、それぞれ1.9kmほどの範囲）の調査遺跡の位置を提示したものである。行政的には宮城村と粕川村、地理的には荒砥川と粕川の流域にあたる。標高は、宮城村柏倉所在の柏倉大沢遺跡が340～350m、粕川村新屋所在の稲荷田で160m前後である。

旧石器時代 今回提示した範囲からははずれるが、宮城村苗ヶ島所在の榊形遺跡の所在が著名である。舟底形の細石刃核、細石刃、スクレパーなどがAs-YP（浅間板鼻黄色軽石）とAs-BP（浅間板鼻褐色軽石）の間のローム層中から出土している。また、市之関前田遺跡では野岳、休場型や矢出川技法により製作された細石刃石器群が出土している。この他に市之関遺跡、苗ヶ島白山遺跡、市之関吉ヶ沢遺跡、矢継遺跡からもスクレパーやポイントなどの石器が発見されている。

縄文時代 縄文時代の遺跡は、標高550m付近を上限として赤城山南麓一帯にその分布が認められる。

第1章でも記したが、本遺跡の他に苗ヶ島白山遺跡、柏倉西房遺跡、粕川村大林II遺跡が群馬用水関連の事業で調査が実施された遺跡である。先の2遺跡では特段、住居等遺構は検出されず、少量の縄文土器・石器の出土をみたのみであったが、大林II遺跡では、確認した4軒の住居のうち、前期黒浜式期、諸磯式期の住居各1軒ずつ調査している。これに先だって隣接する大林I遺跡では関山・黒浜式期に比定される住居1軒が調査されている。

早期では苗ヶ島大畑遺跡で鶴ヶ島台期の住居1軒が炉穴・土坑・陥穴とともに発見された。柏倉芳見沢遺跡や市之関吉ヶ沢遺跡、鼻毛石鎌田遺跡、苗ヶ島弥源司遺跡でも調査が実施され、ともに陥穴群が検出されている。柏倉芳見沢遺跡では160基を数え、平面形が小判形を呈していた。市之関吉ヶ沢遺跡では11基が発見された。いわゆるTピットと呼ばれる形状のもので等高線に沿って平行に2列が配置されていた。

前期の遺跡も数多く知られており、調査内容も充実している。市之関遺跡では関山式期の住居1軒が調査されている。先述の市之関前田遺跡では前期関山式期の住居8軒、中期加曾利E4式期の住居44軒（敷石住居8軒を含む）、100基以上の土坑が検出されている。また、柏倉芳見沢遺跡では関山式期の住居が4軒発見された。

粕川村域内では、室沢・月田地区で実施された圃場整備事業に伴い、前期の遺跡の調査が行われ、15遺跡で住居を中心とした遺構が検出された。濃密な遺跡の分布状況が確認されている。これらの遺跡は粕川の右岸、兎川や童子川といった河川に向かって発達した開析谷をのぞむ台地上に形成されている。室沢地区には長田A遺跡、長田B遺跡、長田C遺跡、長田D遺跡がある。長田D遺跡では黒浜式期23軒、諸磯式期12軒の住居と両時期と考えられる土坑30基以上が検出された。他の3遺跡も黒浜・諸磯式両期の住居が認められた。月田地区の11遺跡、ヌカリI遺跡、ヌカリII遺跡、近戸I遺跡、近戸II遺跡、月田1～10遺跡においても黒浜・諸磯式両期の住居・土坑が検出されている。

中期では先述の市之関前田遺跡の他に鼻毛石鎌田遺跡、鼻毛石中山遺跡が知られる。鼻毛石中山遺跡は中期前半の環状集落で、中央の広場を取り囲んで配置された土坑（180基調査）と住居（4軒調査）の存在が知られ、集落の南側には盛土遺構が見つかった。

今回報告する馬場東矢次II遺跡出土の土器は、後期加曾利B式期を主体とするものであるが、これら

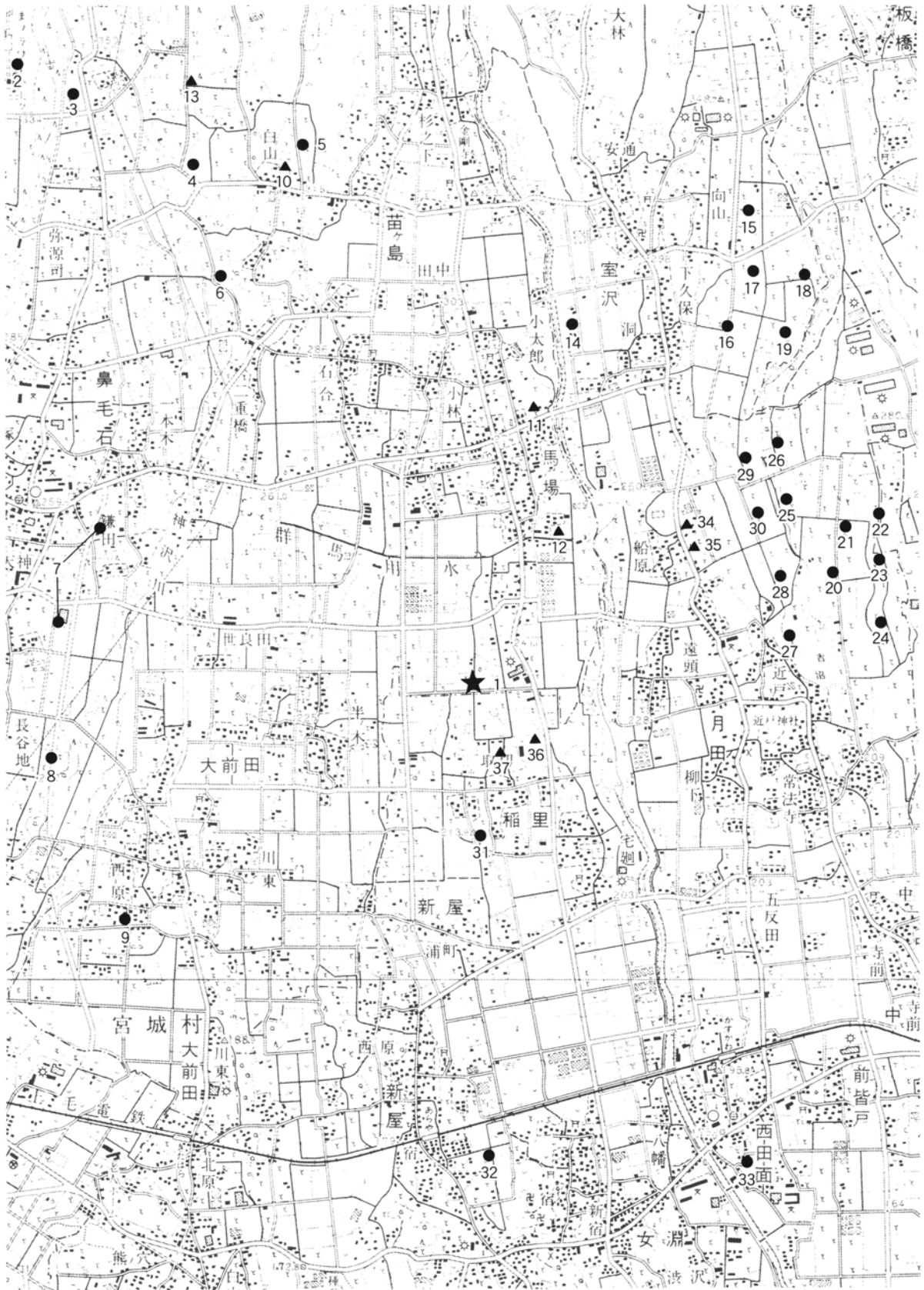
第2表 馬場東矢次II遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	縄文					古墳	奈良	備考	文献
			草創	前	中	後	晩				
1	馬場東矢次II	宮城村馬場字東矢次			○	○				本報告の遺跡。縄文中～後期包含層。西側に馬場東矢次遺跡隣接。	
2	柏倉大沢	宮城村柏倉字大沢		○						縄文前期住居・土坑。	1
3	谷源地	宮城村苗ヶ島字谷源地			○					縄文中期散布地。	1
4	鼻毛石弥源司	宮城村鼻毛石字弥源司	○							縄文早期陥穴・土坑。	2
5	苗ヶ島白山	宮城村苗ヶ島字白山		○						旧石器・縄文中期土坑。	1
6	苗ヶ島弥源司	宮城村苗ヶ島字弥源司			○					縄文中期包含層・散布地。	1
7	鼻毛石鎌田	宮城村鼻毛石字鎌田			○					縄文中期住居3軒・縄文陥穴・土坑。	4
8	鼻毛石中山	宮城村鼻毛石字中山			○					縄文中期住居4軒・土坑。	5
9	大前田上十二	宮城村大前田字上十二			○					縄文中期土坑。	4
10	白山古墳	宮城村苗ヶ島字白山						○		古墳。	6
11	新山1・2号墳	宮城村馬場字新山						○		古墳。	6
12	古屋敷古墳	宮城村馬場字東畑						○		古墳。	6
13	片並木	宮城村苗ヶ島字片並木						○		平安製鉄跡・住居・掘立柱建物。	7
14	安通・洞	粕川村室沢字安通・字洞				○	○			縄文後・晩期包含層・敷石住居・埋甕。	8
15	大平	粕川村室沢字大平		○						縄文前期住居。	9
16	長田A	粕川村室沢字長田		○						縄文前期住居・土坑。	9
17	長田B	粕川村室沢字長田		○						縄文前期住居・土坑。	9
18	長田D	粕川村室沢字長田		○				○		縄文前期住居・土坑、奈良・平安住居。	9
19	長田C	粕川村室沢字長田		○						縄文前期住居・土坑。	9
20	月田3・4	粕川村月田字芝坂		○						縄文前期住居・土坑。	9
21	月田5	粕川村月田字芝坂		○						縄文前期住居・土坑。	9
22	月田6	粕川村月田字芝坂		○						縄文前期住居・土坑。	9
23	月田7	粕川村月田字芝坂		○						縄文前期住居・土坑。	9
24	月田8	粕川村月田字芝坂		○						縄文前期住居・土坑。	9
25	月田9	粕川村月田字芝坂		○				○		縄文前期住居・土坑。	9
26	月田10	粕川村月田字芝坂		○	○			○	○	縄文前期・奈良・平安住居。	9
27	近戸I	粕川村月田字近戸		○						縄文前・中期住居、古墳後期住居、奈良・平安住居。	9
28	近戸II	粕川村月田字近戸		○				○		縄文前期住居・土坑、古墳1基。	9
29	ヌカリI	粕川村月田		○						縄文前期土坑。	9
30	ヌカリII	粕川村月田		○						縄文前期土坑。	9
31	取切	粕川村稲里字取切		○				○	○	縄文前期土石流趾、古墳後期住居、奈良・平安住居。	3
32	稲荷田	粕川村新屋字稲荷田				○		○	○	縄文後期・古墳後期住居、奈良・平安住居。	9
33	前田	粕川村西田面字前田		○				○		縄文前期土坑、古墳中期住居。	4・10 11・12
34	茂呂木	粕川村室沢字茂呂木						○		古墳。	11
35	月田古墳群	粕川村月田字富士宮・字長峰						○		古墳群。月田薬師塚・丸塚・鏡手塚、西原、壇塚、長峰、他7基の円墳。	13
36	稲里矢次	粕川村稲里字稲矢次						○		平安住居。	12
37	稲矢次	粕川村稲里字稲矢次						○	○	古墳後期～平安住居。	11

凡例 時代区分中の○は住居の検出を表す。

参考文献

- | | |
|-----------------------|-------------------------------------|
| 1 【柏倉大沢遺跡】1991 群馬県教委 | 7 【片並木遺跡】1969 宮城村誌編集委員会 |
| 2 【年報11】1992 群埋文 | 8 【稲荷山K1・安通・洞A3】1981 粕川村教委 |
| 3 【年報9】1991 群埋文 | 9 【粕川村の遺跡】1986 粕川村教委 |
| 4 【年報12】1993 群埋文 | 10 【年報13】1994 群埋文 |
| 5 【鼻毛石中山遺跡】1996 宮城村教委 | 11 【年報14】1995 群埋文 |
| 6 【宮城村誌】1973 宮城村役場 | 12 【年報15】1996 群埋文 |
| | 13 【月田古墳群B ₁ 】1982 粕川村教委 |



★ 馬場東次II ● 縄文 ▲ その他



第5図 周辺の遺跡

と同時期の遺跡の分布数はあまり多く知られていない。宮城村村内における調査事例では当該期の遺構の検出は皆無に近い。粕川村村内では室沢地区の安通・洞遺跡で後期後半の遺物包含層、後期の敷居住居、埋甕、晩期の埋甕を伴う配石遺構3基が調査され、後期、晩期の耳飾、土版、岩版などの遺物が多数出土している。

また、新屋の稲荷田遺跡で堀之内期の住居が発見されている。

弥生時代 本遺跡の周辺では当該期の遺跡は発見されていない。宮城村村内では柏倉芳見沢遺跡で中期の土器片が発見されているのみである。粕川村村内でも高標高地での遺跡の存在はない。弥生時代後期から古墳時代前期の集落はその立地を低標高地上としている。

古墳時代 古墳時代の集落も全体には散在傾向にあると考えられるが、宮城村村内では白山古墳や新山Ⅰ・Ⅱ号墳、古屋敷古墳などの小古墳が存在することから散在ながら古墳時代後期から奈良時代にかけてピンポイントではあるが周辺地域に開発の手が入り込んでいたと考えられる。白山古墳では横穴式石室内から銅鏡、方頭大刀、蕨手刀、和同開珎、飛燕型鉄鎌が出土している。

粕川村村内の月田古墳群では鏡手塚古墳、月田薬師塚古墳などを含む月田古墳群が形成されている。

奈良・平安時代、苗ヶ島所在の片並木遺跡が著名である。平安時代の製鉄炉、作業場1軒、竪穴住居1軒が検出された。製鉄炉は石組構造であった可能性が指摘されている。出土遺物から9世紀代の所産とされる。

4. 調査の方法

調査は、南北方向に延びる新設道路の予定内に、旧道沿いの物置小屋を基点にし、この物置小屋より南へ長さ10m、幅2mのトレンチを5箇所、4mの道路予定幅内に設定した。それぞれに北側から1区から5区の名を付した。さらに各区内をa、bに

二分、北側をa、南側をbと細分、遺物採集上の区別とした。また、調査の進行にしたがい遺物包含層の範囲を知るために、調査区を物置小屋の北方にも設定した。イ区、ロ区がそれであり、ともに長さ5m、幅2mのトレンチである。

調査の方法は、表土の削作、除去からすべて人力によっている。スコップで表土を除土することからはじめ、遺物包含層については、層位ごとの取り上げに努めた。口縁部、底部等の比較的大きな破片は随時、写真撮影と出土位置を実測して取り上げた。土層の状況についても東壁について写真撮影と実測調査を実施した。

遺物出土状況については20分の1の平面図を平板測量で作成した。土層断面については20分の1の実測図を作成した。

写真撮影は35mmモノクロフィルムと6×9版カメラによるブローニーフィルムを用いていたものである。

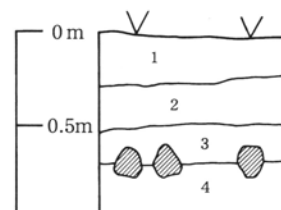
5. 基本層序

第1層 表土、耕作土層

色調は、暗褐色をおびる。耕作によりくだけられ、バサバサしてしまいがたい。

第2層 黒色土層

白色の小粒子を多量に含む。非常に硬くしまっている。下層に移行するに従い、第3層の灰褐色土が混入するようになる。また、色調も変化、漸移的に第3層へと移行する。白色の小粒子は上辺に集



第6図 基本層序

中する傾向が認められる

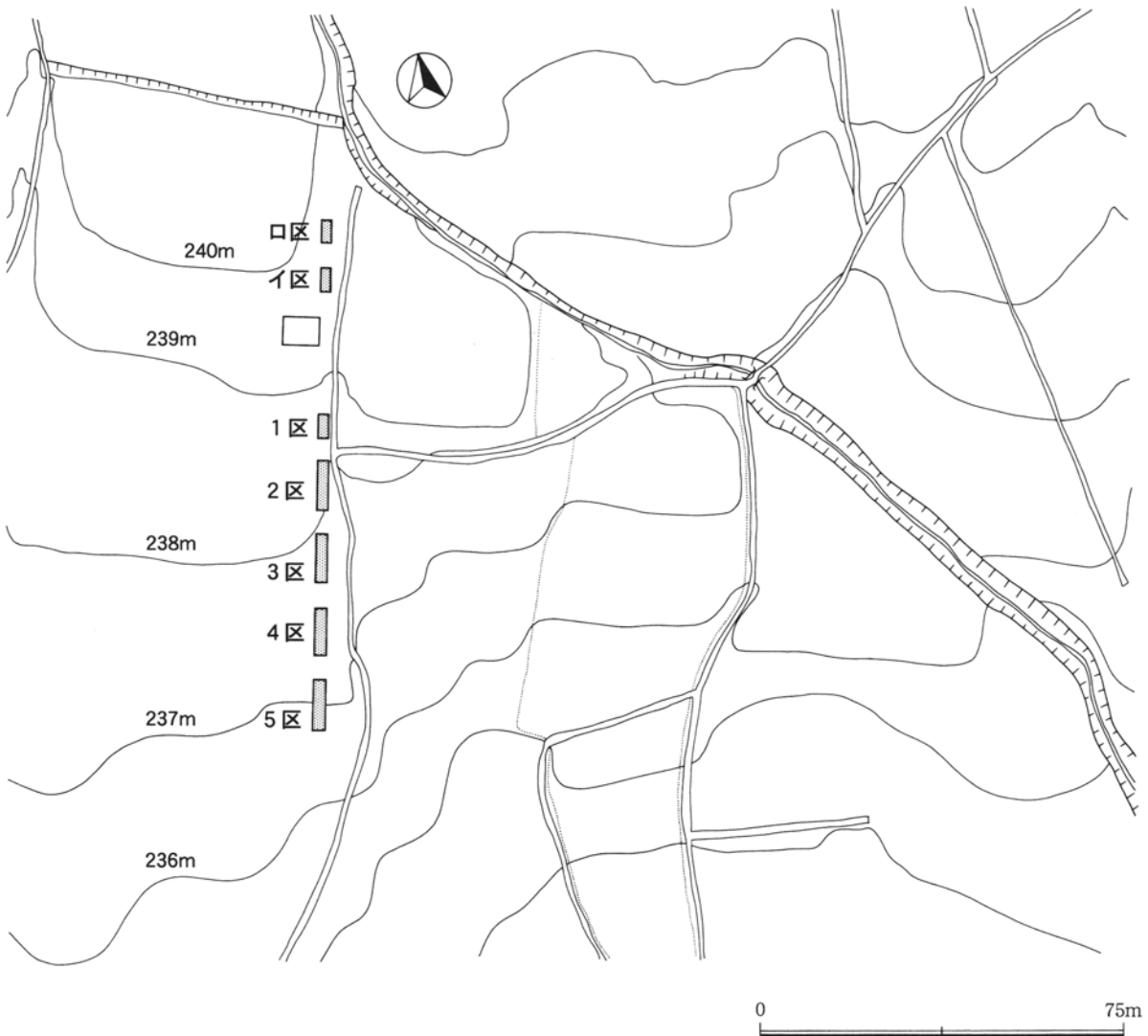
第3層 灰褐色土

砂質の小粒子で構成される。上辺には混入物がほとんど認められず、非常に硬くしまっている。層の中位より下層は10×10×15cm程度の河原石が混入するようになり、層位が下がるにつれて、石が大きくなり、かつ、混入の度合いが密になっていく。

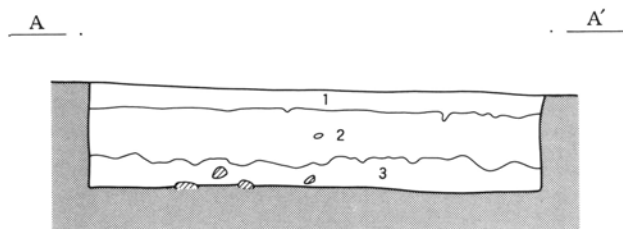
第4層 ローム層

6. 調査された遺構

前述のように本調査においては、道路施設予定が遺物散布地として周知されていたため、南北約100mの調査対象区内に南北の長さ10m、東西の幅2mの試掘トレンチを5箇所設定して調査を実施した。調査が進行するにつれ対象区全域が縄文時代の遺物包含層であることが判明し、それぞれの調査区内から量、内容（土器の型式など）に相違があるものの遺物の出土をみたが、具体的な遺構については検出しえなかった。以下、個々の調査区ごとにその状況について概要を記しておく。なお、出土遺物は遺物収納箱（縦62cm、横42cm、深さ15cm）に11箱である。



第7図 調査区の位置

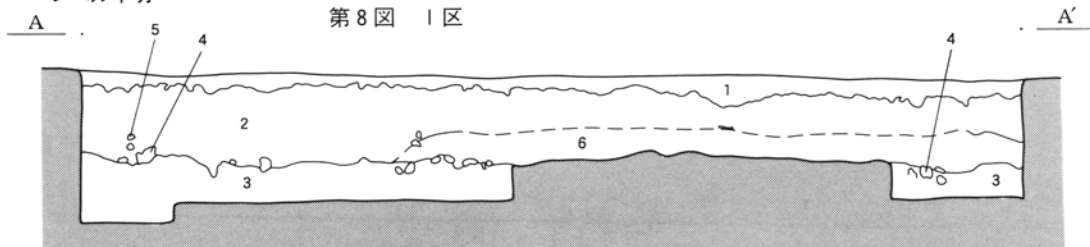


1区-b東壁セクション

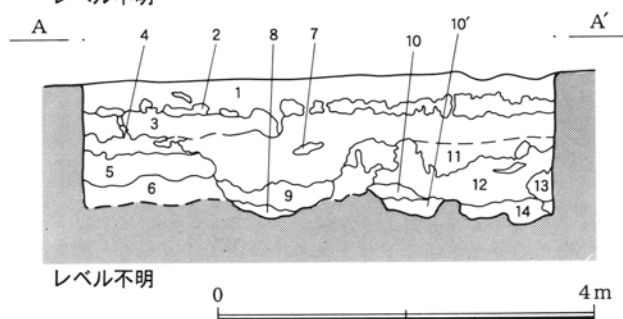
1. 耕作土層
2. 黒色土層 白い小粒子を多量に含む。非常に固くしまる。
3. 灰褐色土層 砂質の小粒子で構成される。下層には河原石を混入する。

レベル不明

第8図 1区



レベル不明



レベル不明

第9図 2区

2区トレンチセクション

1. 耕作土層 サラサラの褐色土。
2. 黒色土層 固くしまっている。土層はとくに黒い。1層と明確に分離が出来る。土器の包含層。
3. 褐色の砂層 サラサラしているがしまっている。灰色を呈する軽石も混じるが2層ほどではない。褐色のためによくはわからない。2層は上部から下部まで、軽石が全体的に混じる。軽石の粒は細かい。
4. 灰白色土層 砂質で粒が荒い。ブロック状を呈する。3・4層は明確な分離がばらつく箇所もあるが出来る。
5. 褐色土層 6層の色調が強いもの。ブロック状をなす。
6. 褐色土層 2層とほぼ同質と考えられるが色調が褐色を呈する。2層との明確な分離が出来ず漸次にかわる。土器はほとんど含まない。わずかに上層にみられる程度。褐色の色調に濃淡がある。

2区北側トレンチ西壁セクション

1. 耕作土層
2. 褐色粘質土層 しまっている。
3. 褐色土層 1層とあまり変わらないが、しまっている。軽石もわずかに含む。多少黒みを帯びている。
4. 黒色土層 準黒色土でしまっている。軽石の細かいものを含む(全体的)。
5. 褐色土層 4層とやっと分離出来る程度。4層と同様の軽石を含むようである。
6. 褐色砂質土層 非常に細かくさらさらしている。軽石はなし。5層とにおいて分離は出来るが明瞭にはわかれな。明るく、白っぽい。
7. 0.5~1cmの砂利のブロック。
8. 0.5~1cmの砂利のブロック。

9. 褐色土層 粘土(ローム)も混じる砂質の層でまだらである。水によるものか。色調は褐色(橙)でしまっている部分と黒い部分がある。多少下層の方が黒みを帯びている。
10. 0.5~2cmの砂利のブロック。 10', 砂利大きい。
11. 褐色土層 褐色の土層が軽石を含まず、上層との明確な分離は出来ず砂質がかっている。
12. 橙褐色土層 ロームが混じる。橙褐色の砂質土層、小石も混じりまだらを呈する。しまっているところとさらさらしているところがある。多少下層の方が黒みを帯びている。
13. 黒色土層 黒い褐色で黒みが強くいくらかしまっているがさらさらしている。軽石は含まず。
14. 0.5~2cmの砂利の内に細かい砂が混じっている。

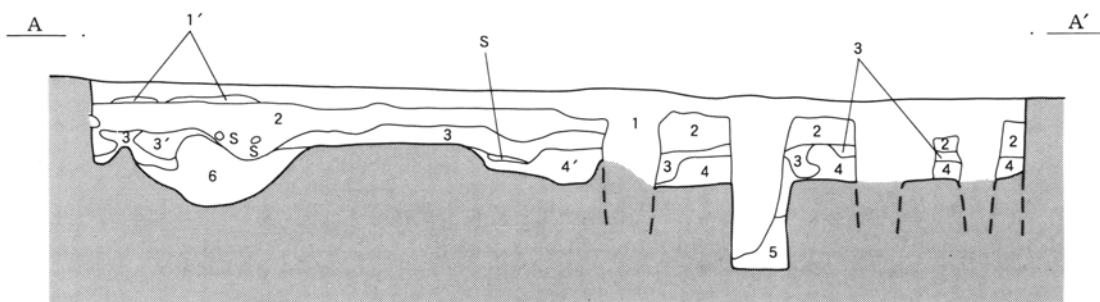
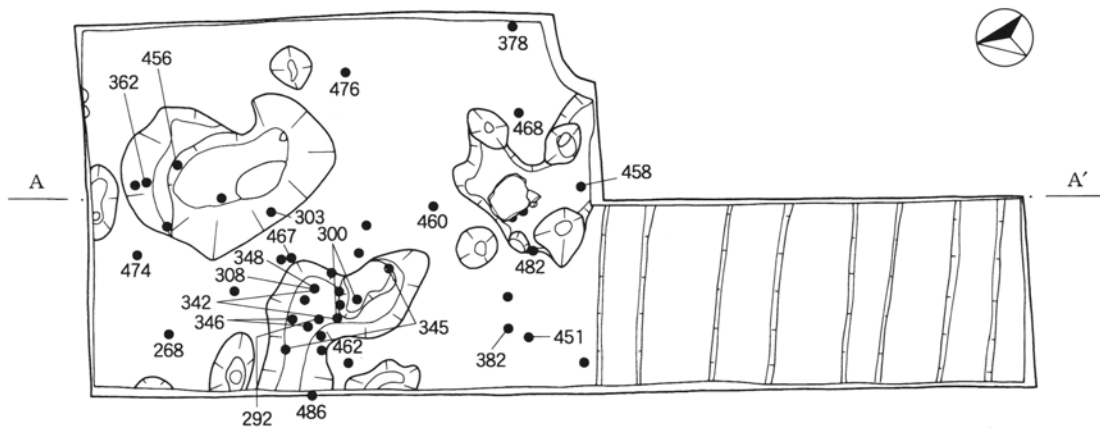
1区

1区は北側部分に生活道があり調査できなかったため、トレンチ南部のみの調査である。土層は第1層の耕作土の下に基本土層の第2層、第3層が累重しており、第3層上面までの深度は約80cmである。特段の遺構を検出しえなかった。第2層の上半部か

ら集中的に遺物が出土している。

2区

1区同様遺構の検出は無かった。土層の堆積状況は幅2mの範囲内でトレンチの東壁、西壁でその様相がやや異なっていた。東壁は、本調査区北側の1区東壁、あるいは南側の3区東壁の堆積状況と基本

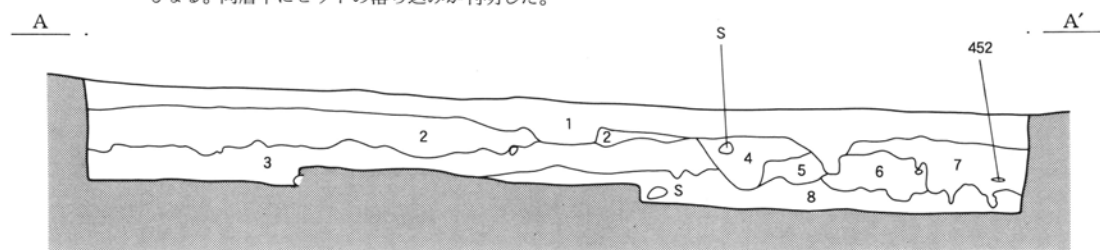


レベル不明 第10図 3区・6区

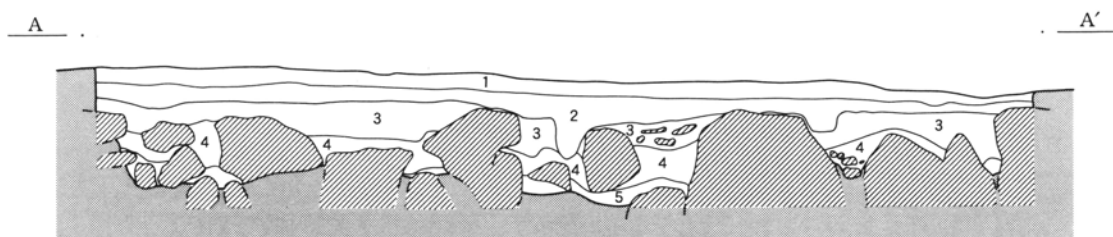
3区トレンチ東壁セクション

- 1. 耕作土層
- 1'. 褐色土層 部分的に見られた層で粘質を帯びている。遺物は全くなし。
- 2. 黒色土層 上部は、黄色の大粒の軽石を含んだか、中部～下部では、小粒の白色軽石となる。同様の軽石は3層に迄含まれる。プライマリーな状態の遺物は、全て白色の軽石層中に含有される。
- 3. 黒褐色土層 2層よりも、幾分褐色を帯びた土層で、この層中より遺物が集中的に出土し、且つピットの覆土ともなる。同層中にピットの落ち込みが判明した。

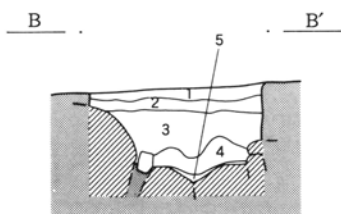
- 3'. 褐色土層 ピット内に部分的に落ち込む層で、褐色が強くなっている。遺物はなし。砂質が極めて強い。
- 4. 茶褐色土層 ピットの基盤となっている。上部には白色の軽石が含まれている。
- 4'. 褐色土層 Eピット中に含まれている覆土で4層よりもやや黒み掛り、遺物を含む。
- 5. 灰褐色土層 多量の礫を含む。無遺物層である。
- 6. 灰色の砂質土層 川床砂か。



レベル不明 第11図 4区



第12図 5区



レベル不明

5区セクション

1. 耕作土層
2. 黒色土層 部分的に茶褐色の色調を強めている。
3. 灰褐色土層
4. 灰褐色土層 茶褐色土をブロック状に混入する。大型の角味を有する河原石を多量に含む。
5. 灰褐色土 多量的大型河原石の間隙を埋めるように入っている。

的には同様の状態である。第2層の黒色土層上半から多量の遺物の出土をみるが、下層、注記の第6層褐色土にいたると遺物の出土は無くなっている。西壁は北側部分の土層が記録されているが、黒色土の上位に褐色の粘質土層や褐色土層の堆積がある。また、地表下約95cmのところに砂利がブロック状に堆積している状況が見受けられる。

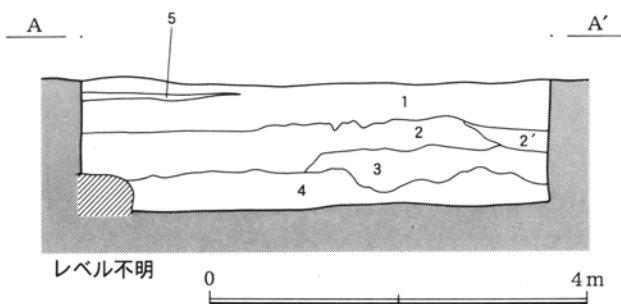
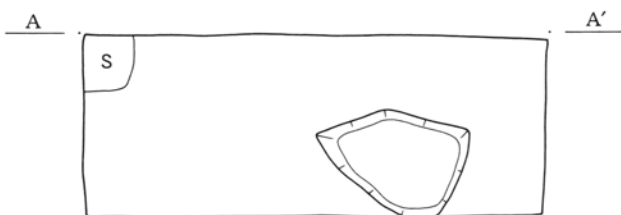
3区

南半部分は後世の耕作により、東西方向に筋状の深掘がなされ、ほとんど土壤が破壊されていた。

北半部分では第2層の上半部から多量の遺物の出土があった。この土層の精査を進めていくと、この土層下、土層注記の第3層、黒褐色土を除去した時点で不整形で不規模なピット（落ち込み）を複数検出している。この為、本調査区は北側部分の東縁を幅2m拡張、6区と呼称して、ピット群の状況を追跡した。これらのピットは、規模、形状とも不統一で、人為的なものとは認定しがたいものである。拡張した6区の南端ではピット（落ち込み）を確認した面で、長さ62cm、幅45cm、厚さ12cm程度の不整正方形の平面形状をした扁平な石や礫との重複で口縁部のつぶされた縄文土器の出土が確認されている。

4区

調査区の北半部分では基本層序の第1層、第2層、第3層が堆積している。第2層は途中から消滅し、南端では認められない。南半部分では注記第4層上面が20cmほど落ち込んでいる。水流により削平を受けた状態との調査所見がある。第3層上位、掘削作業停止面では縦80cm、横70cm、高さ60cm程度の礫が5石、調査区内に点在する状況となった。遺物の出



レベル不明

第13図 イ区

イ区セクション

1. 耕作土層
2. 黒色土層 上層は軽石の混入の度合いが多く、南側のトレンチに比べて柔らかい。
- 2'. 灰褐色土と粘土とのブロック。
3. 暗褐色土層 比較的柔らかく、灰褐色のバックが所々に混入、粒子細かい。粘性あり。全体的に水っぽい。
4. 灰褐色土層 砂質。遺物の出土が見られる。
5. 粘土層 小屋内に井戸があり、井戸を掘った時に盛ったもの。

土量は少なくなる。

5区

調査区全域を角味を有した大形円礫が覆い、あたかも河原のような状態であったとされる。礫の検出面は凹凸が激しく、礫の間隙を基本層序の第3層、灰褐色土が埋めている。これを覆う黒色土層は、基本層序の第2層である黒色土層とはやや内容を異にするという。こちらの黒色土層は、層の上位に白色の小粒子が堆積しているが基本層序の第2層に比して締まりが無く、所々に茶褐色土のブロックを含入するとされる。調査の所見では基本層序の第2層の堆積が4区でなくなっていることから、本層は二次堆積の黒色土と考えている。遺物の出土量は少ない。

イ区

ロ区とともに遺物包含層の範囲を把握するために調査区北方に設定された。基本層序の第1層～第3層の堆積が確認された。耕作土中に物置小屋内に井戸を掘削した際にでた粘土の堆積が認められる。井戸の掘削深度は不明である。調査区の一部に寄って不整形の落ち込みを検出しているが遺構との判断はできない。遺物は出土していない。

ロ区

記録類が散逸している。概報には基本層序の第2層上層から掘り込まれたピットにより第2層、第3層をほとんど失っていること。ピットの埋没土として粘土質のローム層や粘土が複雑な層序をなしているとの記載がある。遺物は出土していない。

7. 出土した遺物

(1) 縄文土器

本遺跡は、1区～6区・イ区・ロ区のトレンチ調査を実施し、遺構らしきものは検出されていない。ここに掲載した土器は、すべてそれらのトレンチの包含層からの出土であり、傾向として、1区・2区・3区の第2層上辺部からの出土が中心である。

各資料の出土区は001～105が1区、106～253が2区、254～385が3・6区、386～418が4区、419～496

が5区である。

〔縄文時代前期〕

3・6区出土の1片(254)及び4区出土の数片(386～393)が該当する。縄文及び竹管を駆使した文様構成を成している。390は条痕文を有し、391は、口唇部下に円形の添付文を配する。これらの文様から、386は黒浜式土器、他は387・388が諸磯a式、254・389・390が諸磯b式、391が諸磯c式と考えられる。

〔縄文時代中期〕

1区出土の2片(001・004)、3・6区出土の11片(255～265)が中期の土器である。ともに縄文地を懸垂及び渦巻状に磨消している加曾利E式土器の範疇に入る土器で、004・255・256・257・259・261・262・264は加曾利EⅢ式に、001・258・260・265は加曾利EⅣ式土器と考える。

〔縄文時代後期〕

前期・中期の土器を除いた他(底部のみの破片や小破片で型式認定が不明な土器片を除く)は、後期の土器である。出土土器の90%を後期の土器が占め、その中でも加曾利B式土器の割合が高く、本遺跡の中心がこの時期であったことを示している。

称名寺式土器—1区出土の002・003、3・6区出土の266・267、4区出土の398・399、5区出土の421～424・428などの土器片が称名寺式時の範疇に入ろう。その他3・6区出土の347の土器は口唇部下に沈線による方形(?)の区画内に一列の刺突文を配する文様を付け、その下に、等間隔に刺突文を配した隆線文を、その下を基線とする左右の斜線で菱形の連続する格子文を描き出している。このような文様構成を持つ土器の類例は無いが、口唇部下の刺突文を方形で囲む文様から、称名寺式土器または称名寺式土器平行の土器の範疇に入れておきたい。

堀之内式土器—1区出土の005～015・059・089、2区出土の106～110・112、3・6区出土の268～282、4区出土の400～409、5区出土の429～441などが堀之内式土器の範疇に入ろう。この中で005・006・106・268・269・400の土器は堀之内Ⅰ式土器に他はⅡ式土器に分類されよう。

加曾利B式土器一本遺跡からの出土土器片中、最も多いのが、加曾利B式土器である。現在、1～3期に細分されている。その特徴は磨消縄文を第一とし、研磨された表面に沈線等で区画した磨消縄文を施した精製土器と、研磨を省略し無文か簡略な条痕文を施した粗製土器が存在する。

加曾利B1式土器—1区出土の016～018、021・034・035、2区出土の111・113、3区・6区出土の283が加曾利B1式土器の範疇に含まれよう。これらの土器は全て精製土器であり、粗製土器が存在するはずであるが、粗製土器のみでの判別は不可能であり、粗製土器は全て加曾利B2土器として計上した。

加曾利B2式土器—1区出土の019・020・022～033・036～058・062・067・069・070・072～074・076・077～086、2区出土の114～234・237・238、3区・6区出土の288・295・296・298～346・348～363・367・370・372～375が加曾利B2式土器の範疇に含まれよう。この中で、3区・6区出土の288・295は新潟地方の影響を受けた加曾利B2式土器並行の土器と考えられる。

加曾利B3式土器—1区出土の087、2区出土の235・242が加曾利B式土器の範疇に含まれよう。

高井東式土器—2区

出土の236・240・241・245、3区・6区出土の366～369・377、5区出土の442が、高井東式土器の範疇に含まれよう。

安行式土器—2区出土の244・247、3区・6区出土の371がその範疇に含まれよう。なお、247は安行I式土器に分類されよう。

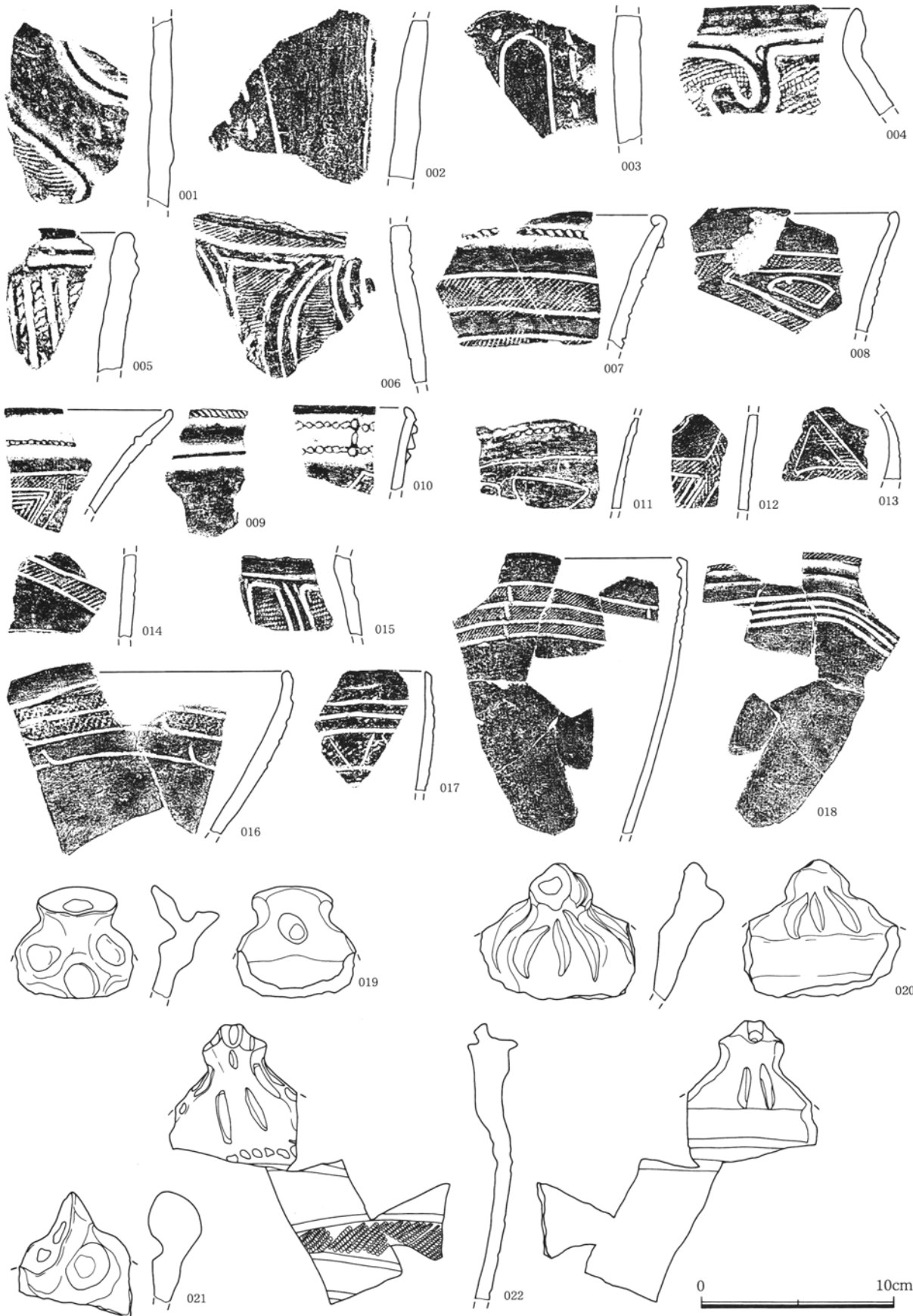
(2) 縄文時代の石器

各区から、石鏃・打製石斧・凹石・多孔石等が第3表のとおり出土している。

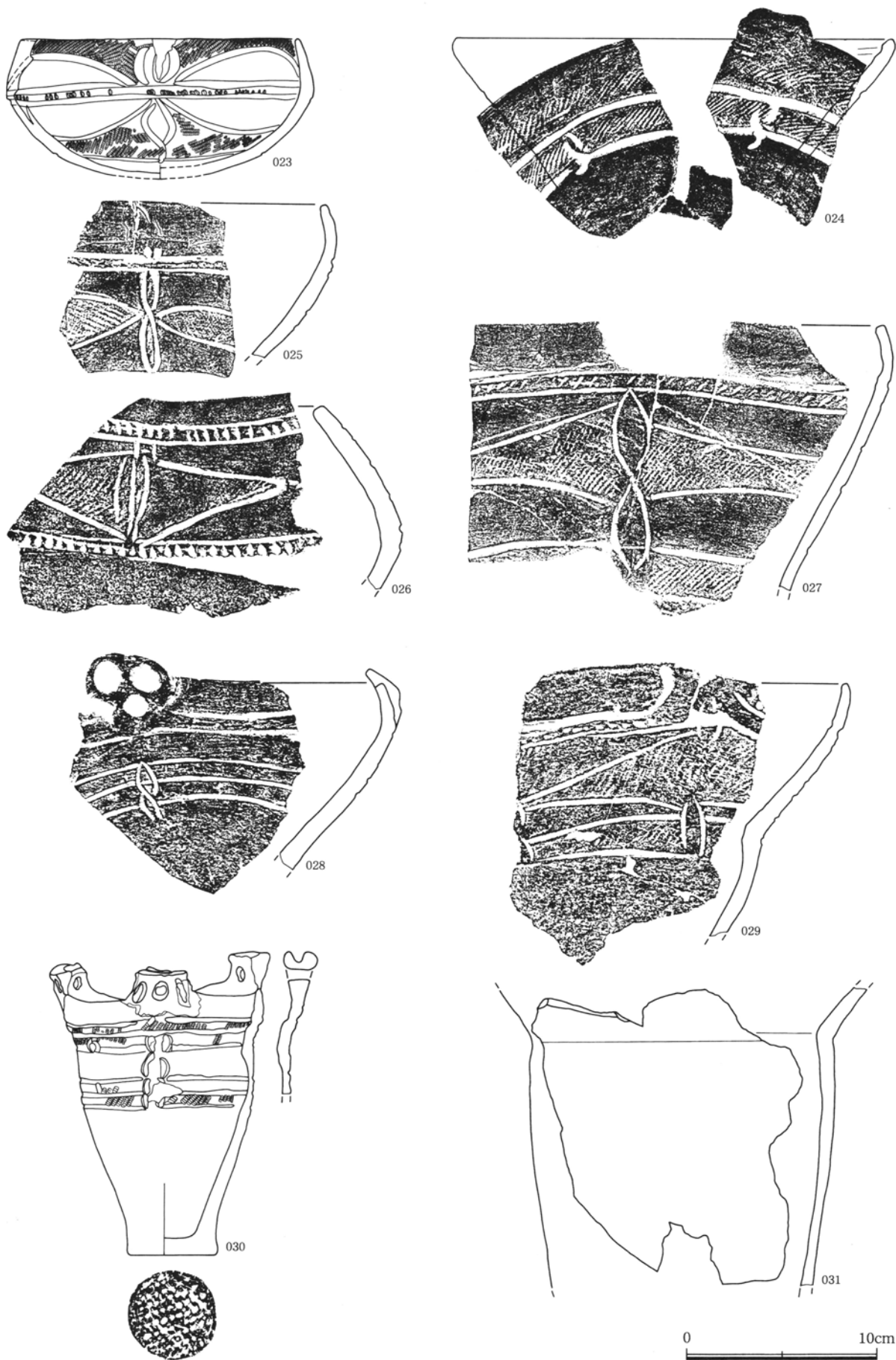
第3表 馬場東矢次II遺跡出土石器一覧

図No	石器名	出土区	大きさcm	厚さcm	重さg	石質	特徴
447	石鏃	2区	24×18	3	0.8	①	
448	石鏃	2区	<24>×19	3	1	②	
449	石鏃	1区	<20>×15	3	<0.8>	③	
450	石鏃	2区	14×14	2	0.3	③	
451	石匙	3・6区	38×45	16	1	①	
452	打製石斧	4区	123×78	20	262	④	分銅型
453	打製石斧	2区	105×76	21	174	①	分銅型
454	打製石斧	2区	<83>×59	<19>	<107>	①	分銅型・半欠
455	打製石斧	2区	<108>×70	<35>	343	④	分銅型・一部欠損
456	打製石斧	3・6区	130×98	29	463	⑤	分銅型
457	打製石斧	2区	102×62	27	194	④	分銅型
458	打製石斧	3・6区	135×74	35	369	①	分銅型
459	打製石斧	1区	152×65	19	215	①	分銅型・一部欠損
460	打製石斧	3・6区	<71>×<58>	<20>	<90>	①	分銅型・半欠
461	打製石斧	3・6区	<93>×<65>	<17>	<74>	④	分銅型・半欠
462	打製石斧	3・6区	97×62	19	113	①	分銅型・一部欠損
463	不定形石器	1区	<84>×51	22	<79>	①	撥型・一部欠損
464	不定形石器	1区	<103>×<59>	<25>	<159>	⑥	短冊形・一部欠損
465	不定形石器	1区	73×61	13	55	①	
466	不定形石器	2区	83×60	16	59	①	
467	磨石	3・6区	91×88	60	673	⑦	
468	凹石	3・6区	105×<68>	58	612	⑧	一部欠損
469	凹石	1区	91×71	50	355	⑧	
470	凹石	1区	80×69	45	318	⑧	
471	凹石	1区	<75>×78	53	<278>	⑧	一部欠損
472	凹石	1区	133×90	50	812	⑧	
473	凹石	3・6区	107×69	34	363	⑧	一部欠損
474	凹石	3・6区	<86>×71	40	383	⑧	半欠
475	凹石	1区	99×79	45	434	⑧	半欠
476	凹石	3・6区	96×64	42	304	⑧	
477	凹石	1区	85×86	49	496	⑧	
478	凹石	5区	92×64	43	239	⑧	
479	凹石	1区	105×83	59	574	⑧	
480	凹石	2区	140×69	42	603	⑧	
481	凹石	1区	140×75	47	484	⑧	
482	凹石	3・6区	90×<75>	<63>	<383>	⑧	
483	多孔石	2区	163×<108>	<63>	<1,433>	⑧	一部欠損
484	多孔石	2区	283×204	86	5,164	⑧	
485	多孔石	2区	220×248	80	3,754	⑧	
486	多孔石	3・6区	<256>×<227>	<50>	<4,393>	⑧	

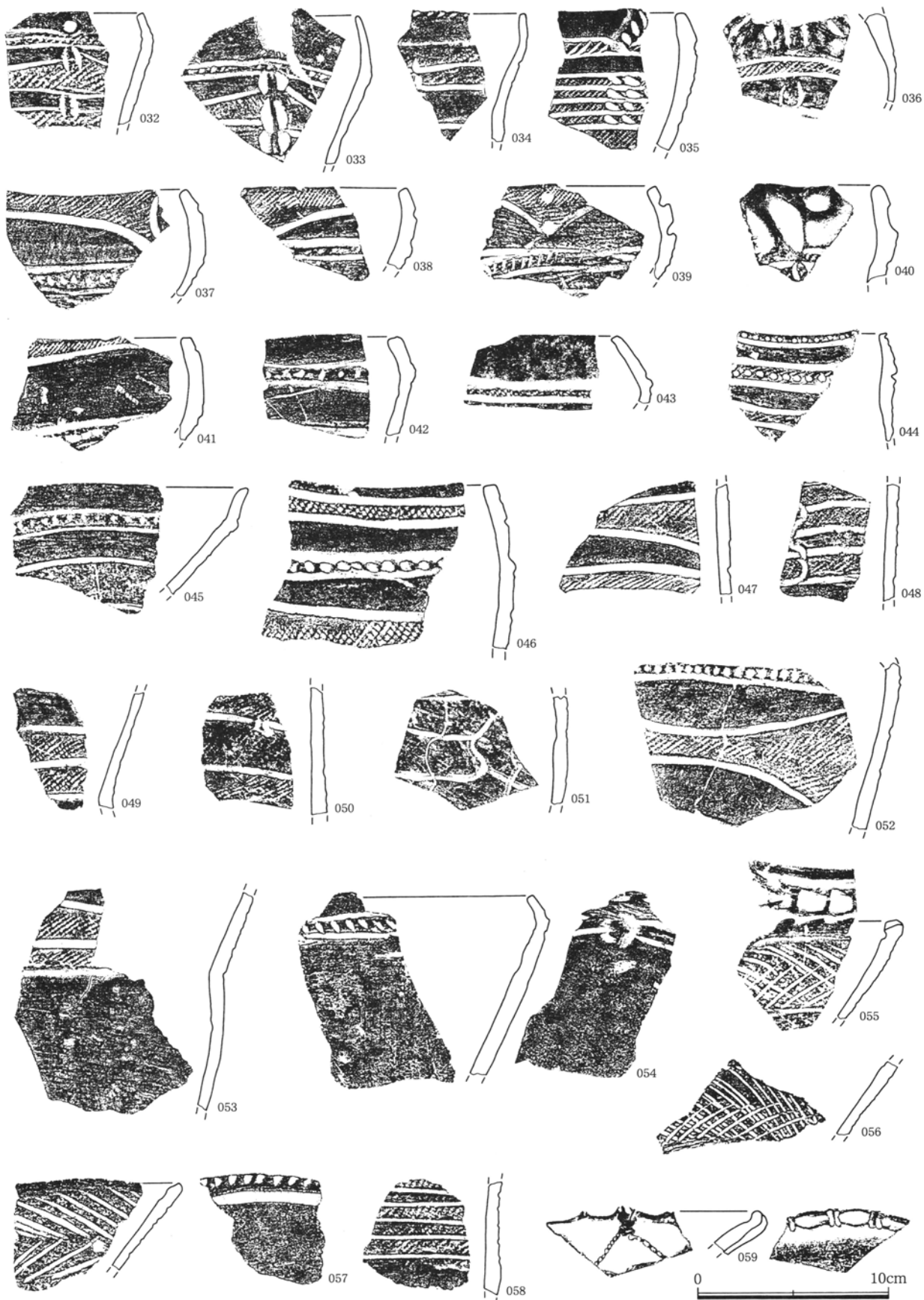
①黒色頁岩 ②チャート ③黒曜石 ④ホルンフェルス
⑤灰色安山岩 ⑥変玄武岩 ⑦花崗岩 ⑧粗粒輝石安山岩



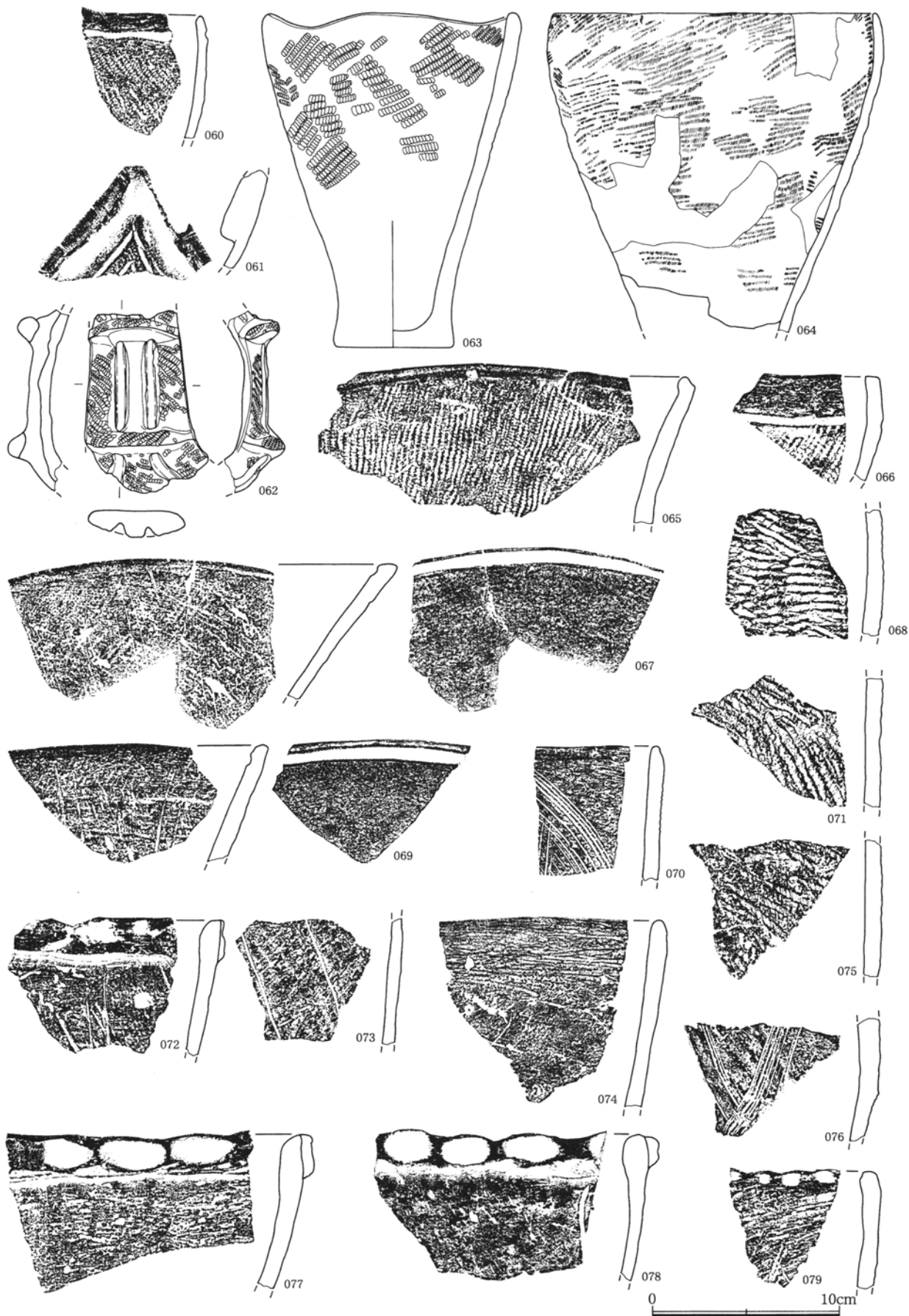
第14図 I区出土の縄文土器(1)



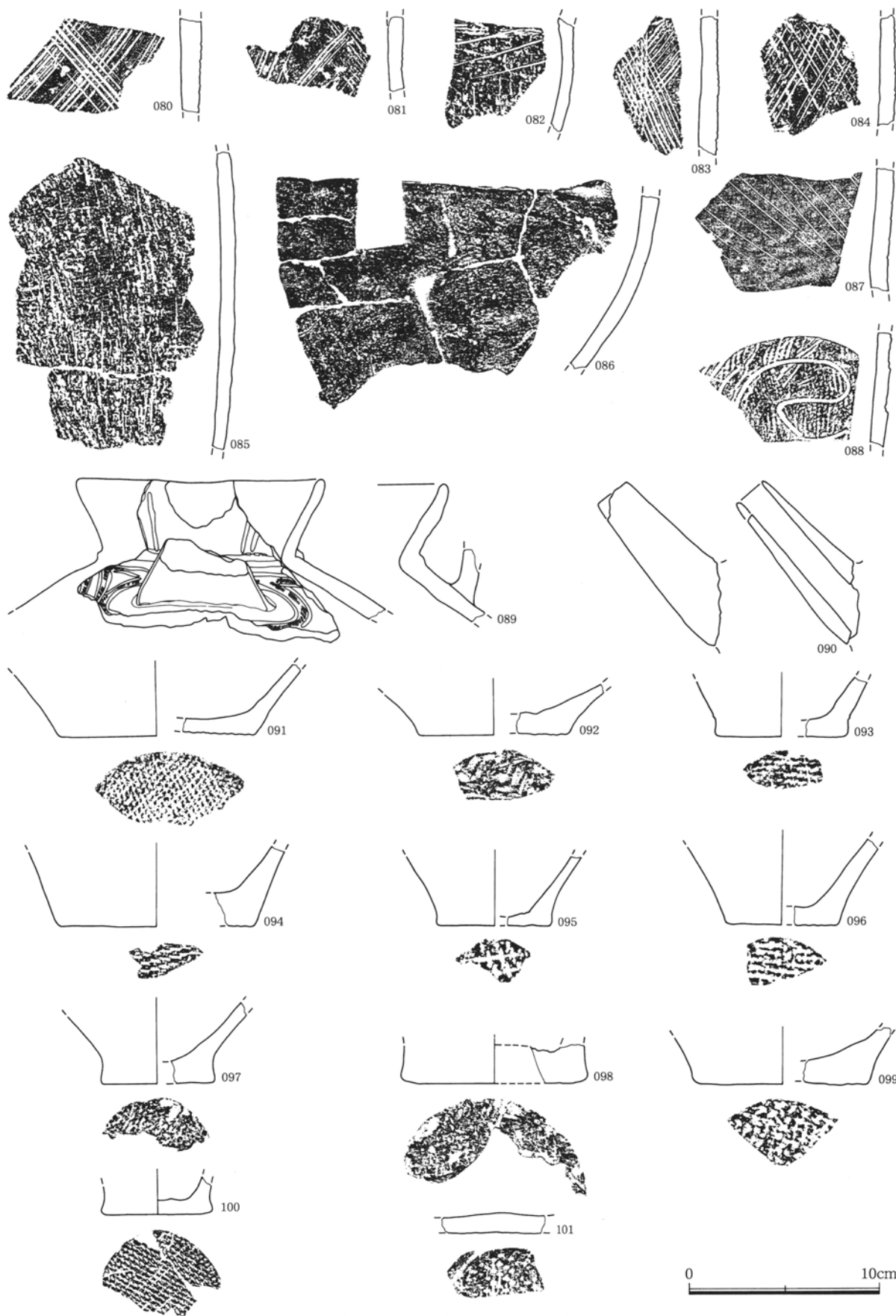
第15図 I区出土の縄文土器(2)



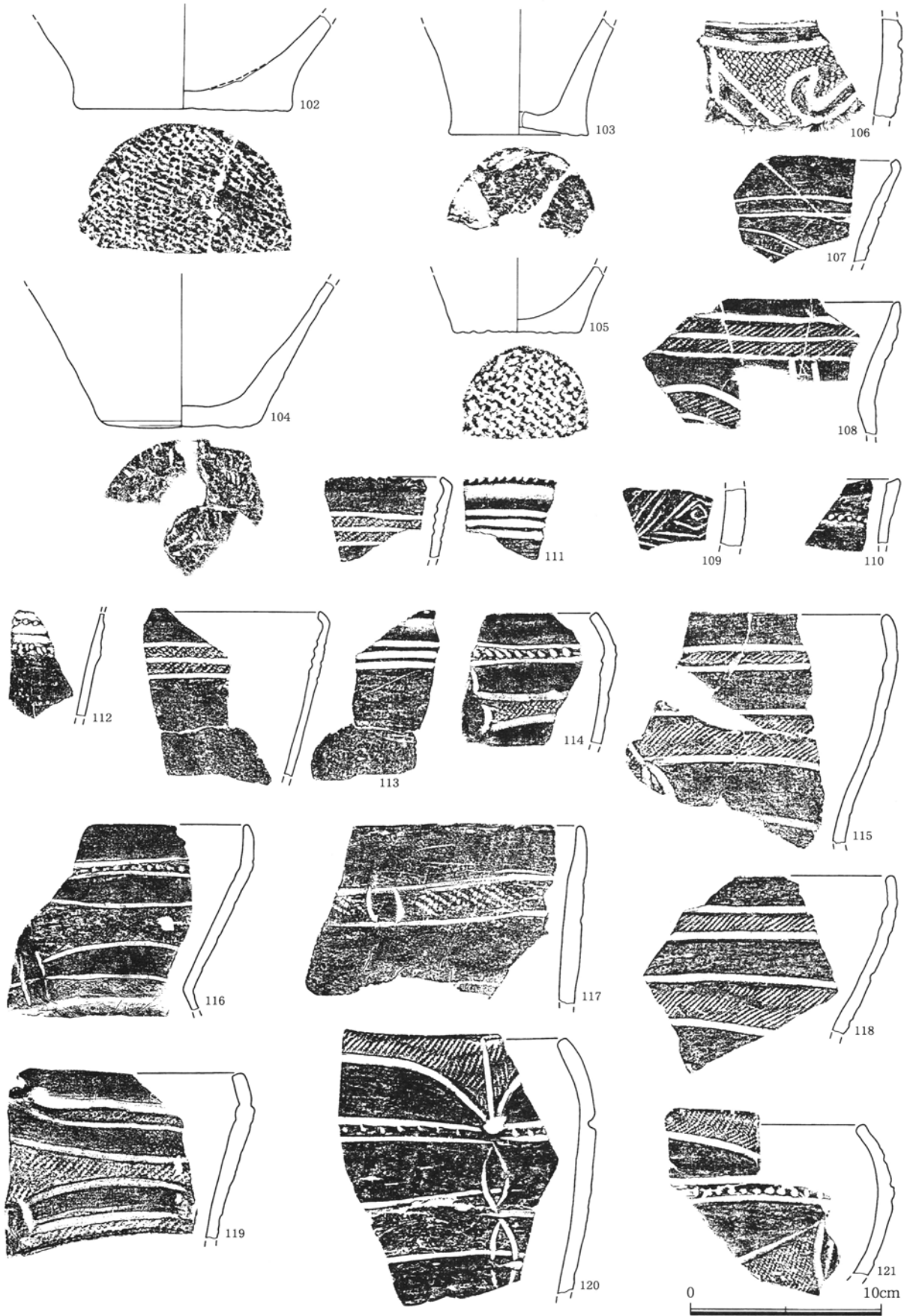
第16図 Ⅰ区出土の縄文土器(3)



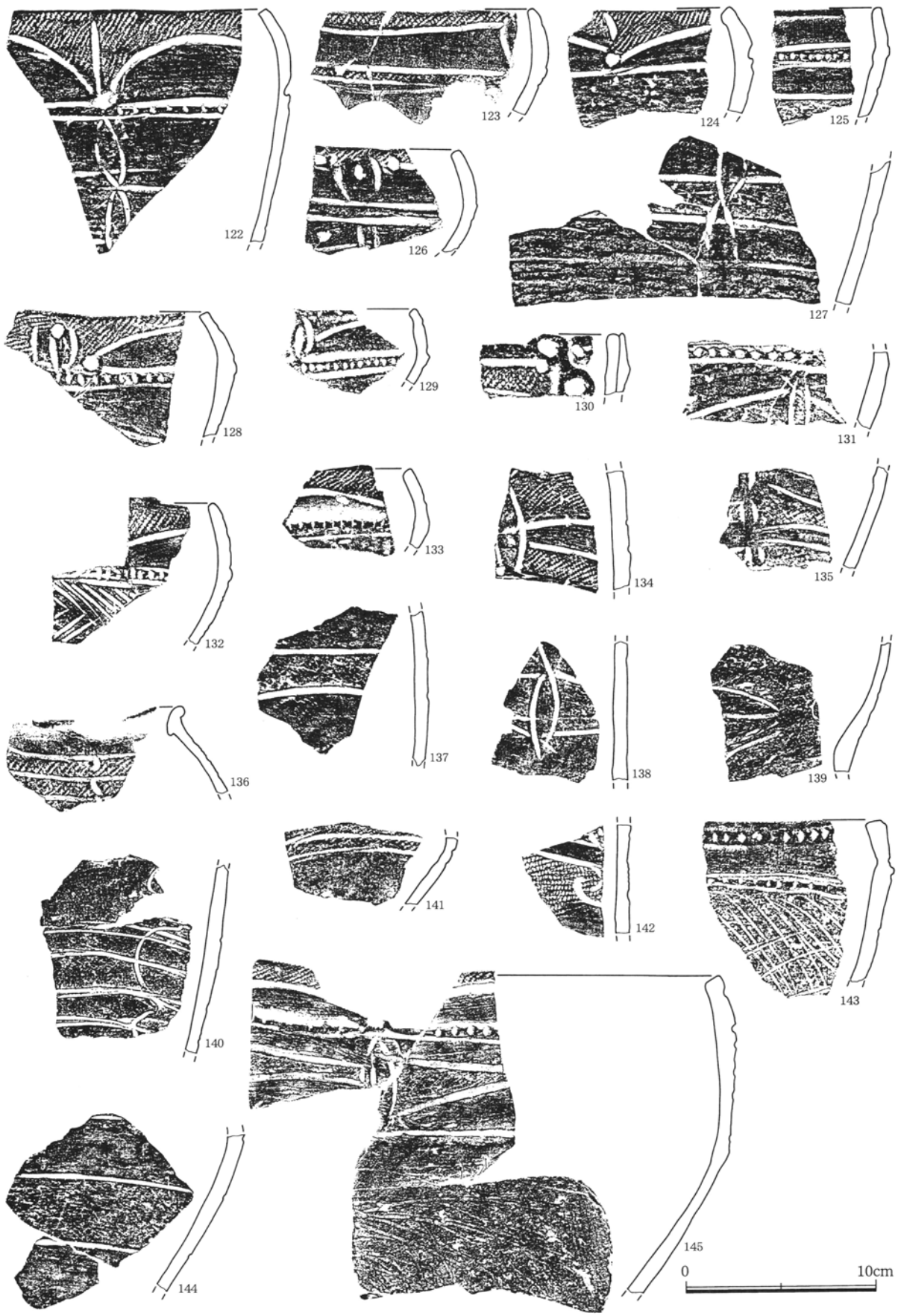
第17図 I区出土の縄文土器(4)



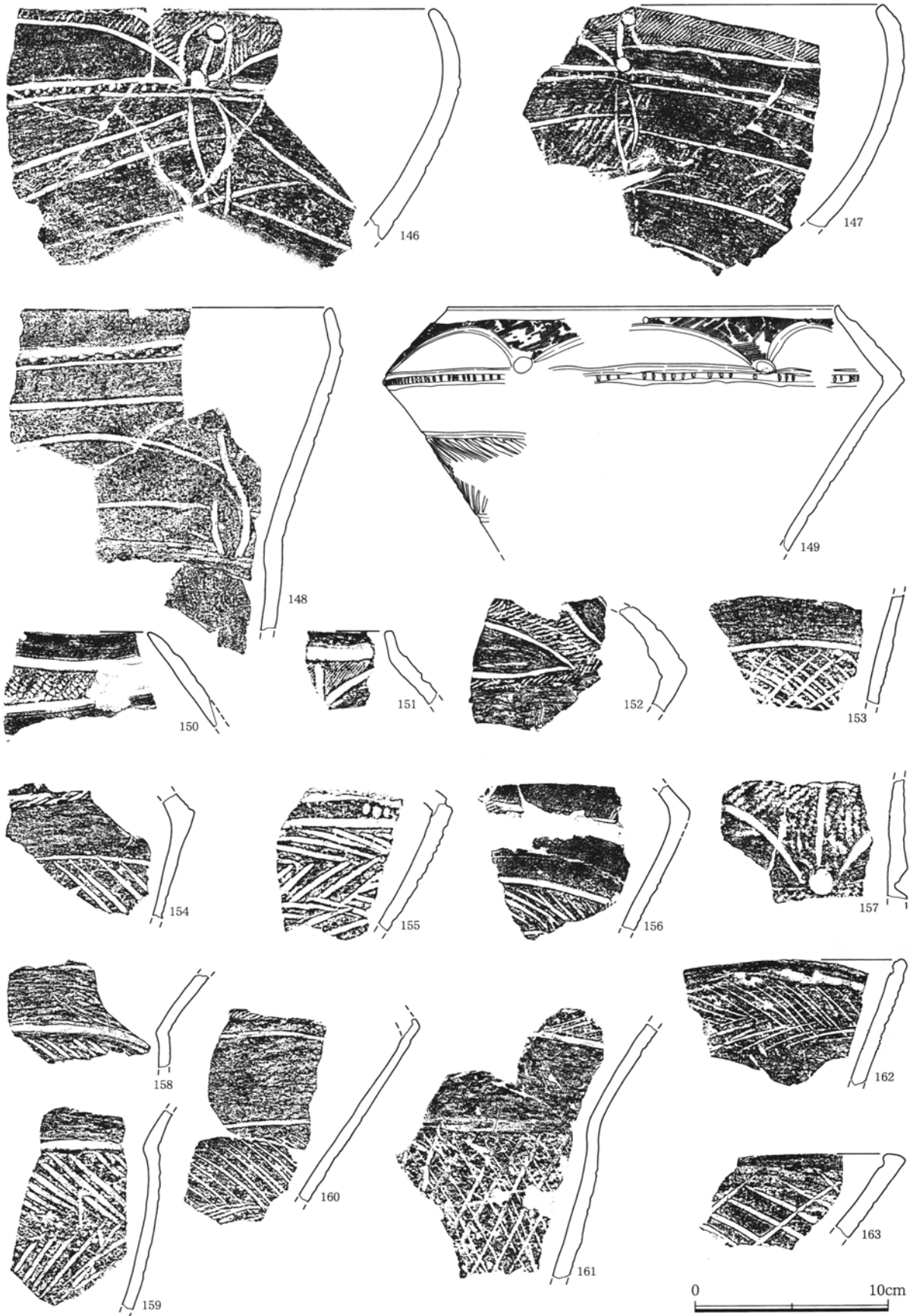
第18図 I区出土の縄文土器(5)



第19図 1区出土の縄文土器(6)、2区出土の縄文土器(1)



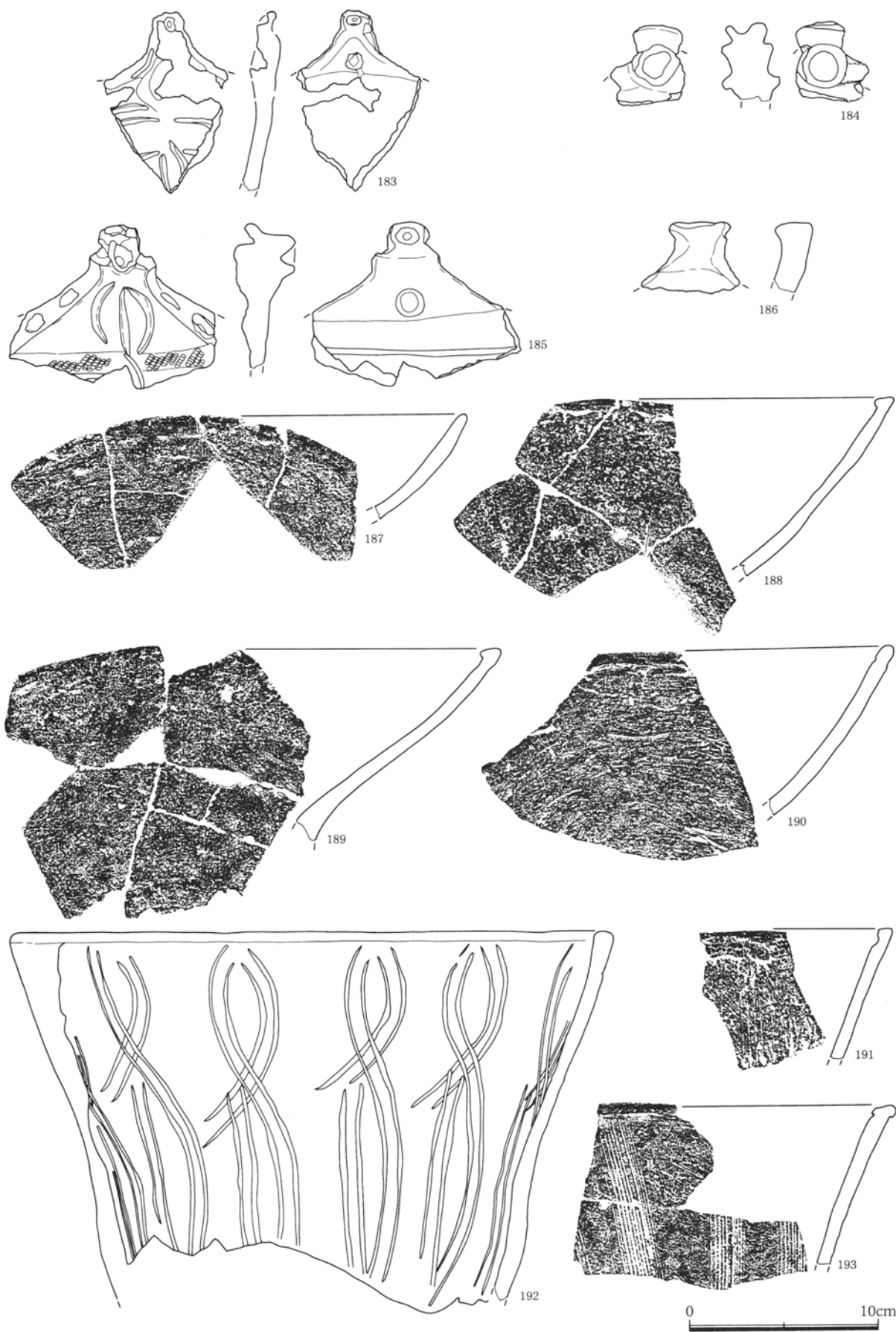
第20図 2区出土の縄文土器(2)



第21図 2区出土の縄文土器(3)



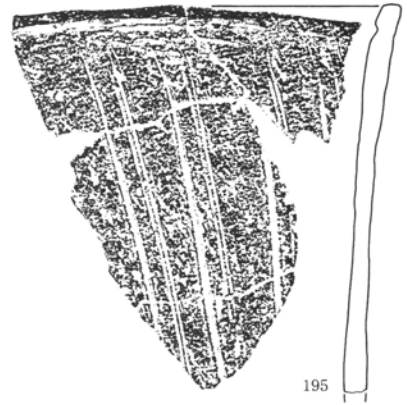
第22図 2区出土の縄文土器(4)



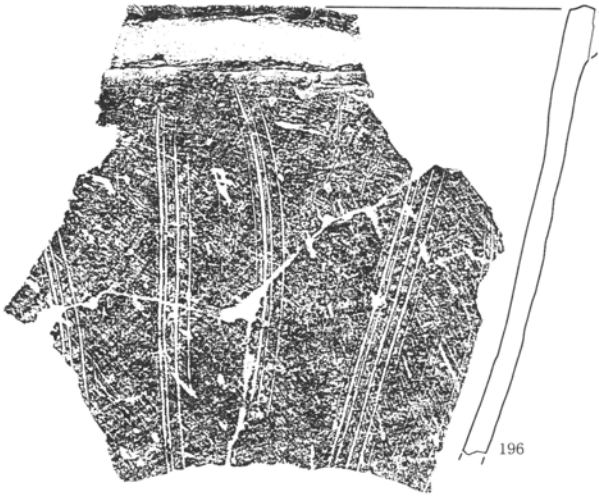
第23図 2区出土の縄文土器(5)



194



195



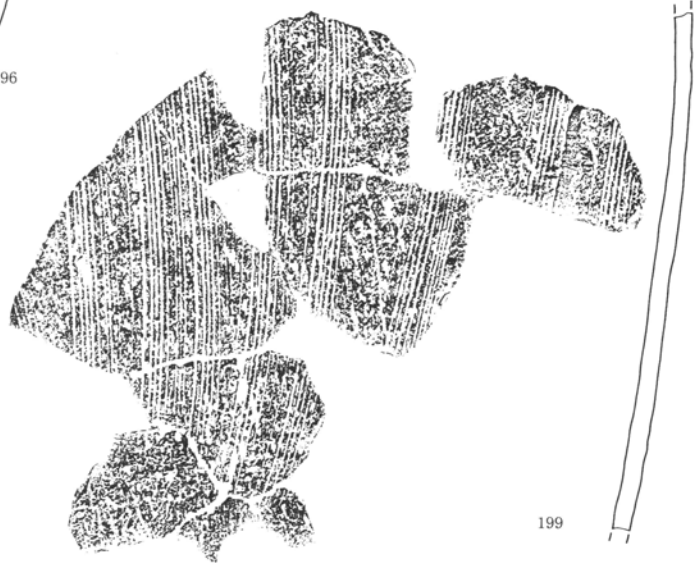
196



197



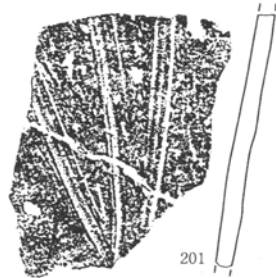
198



199



200



201



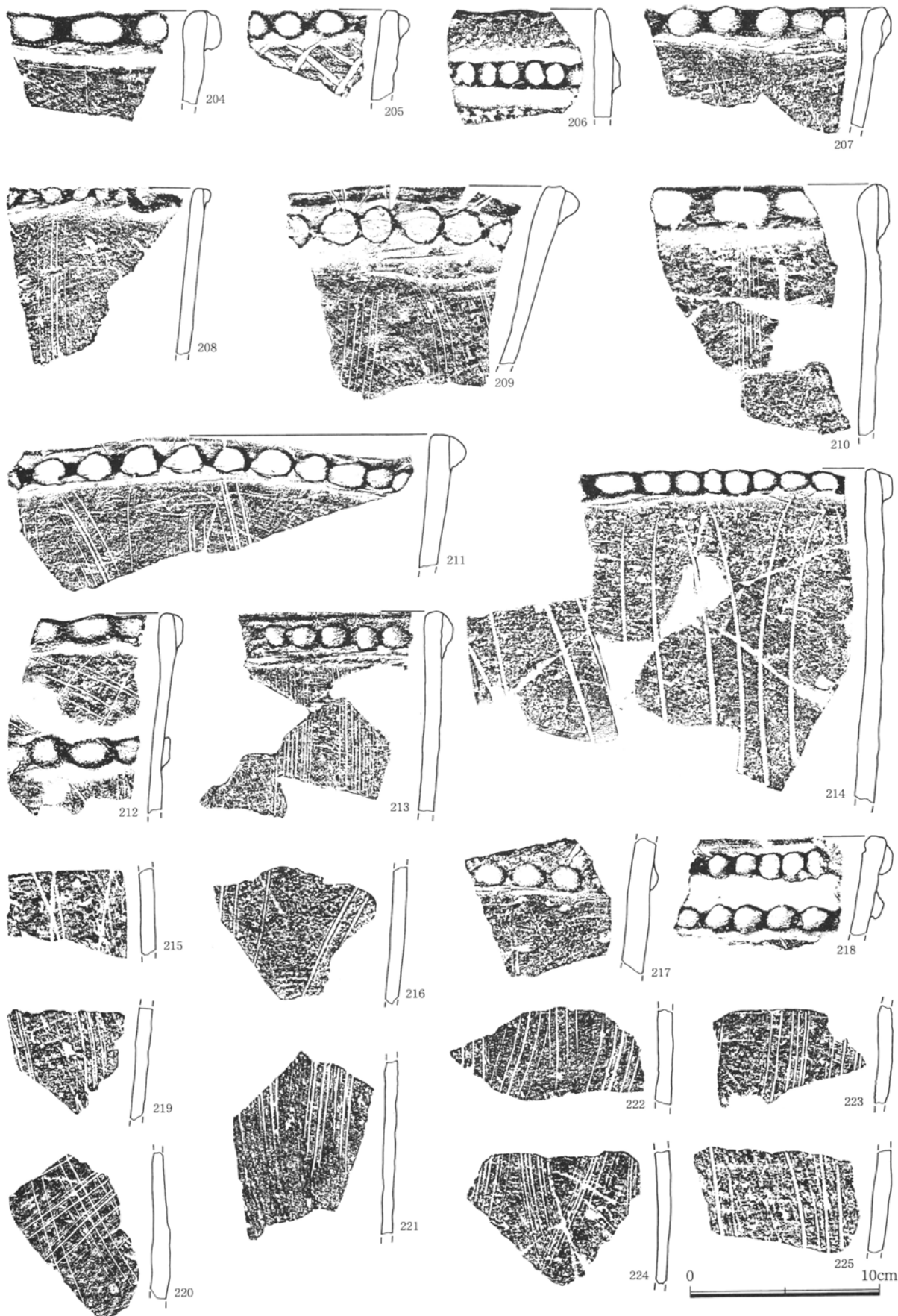
202



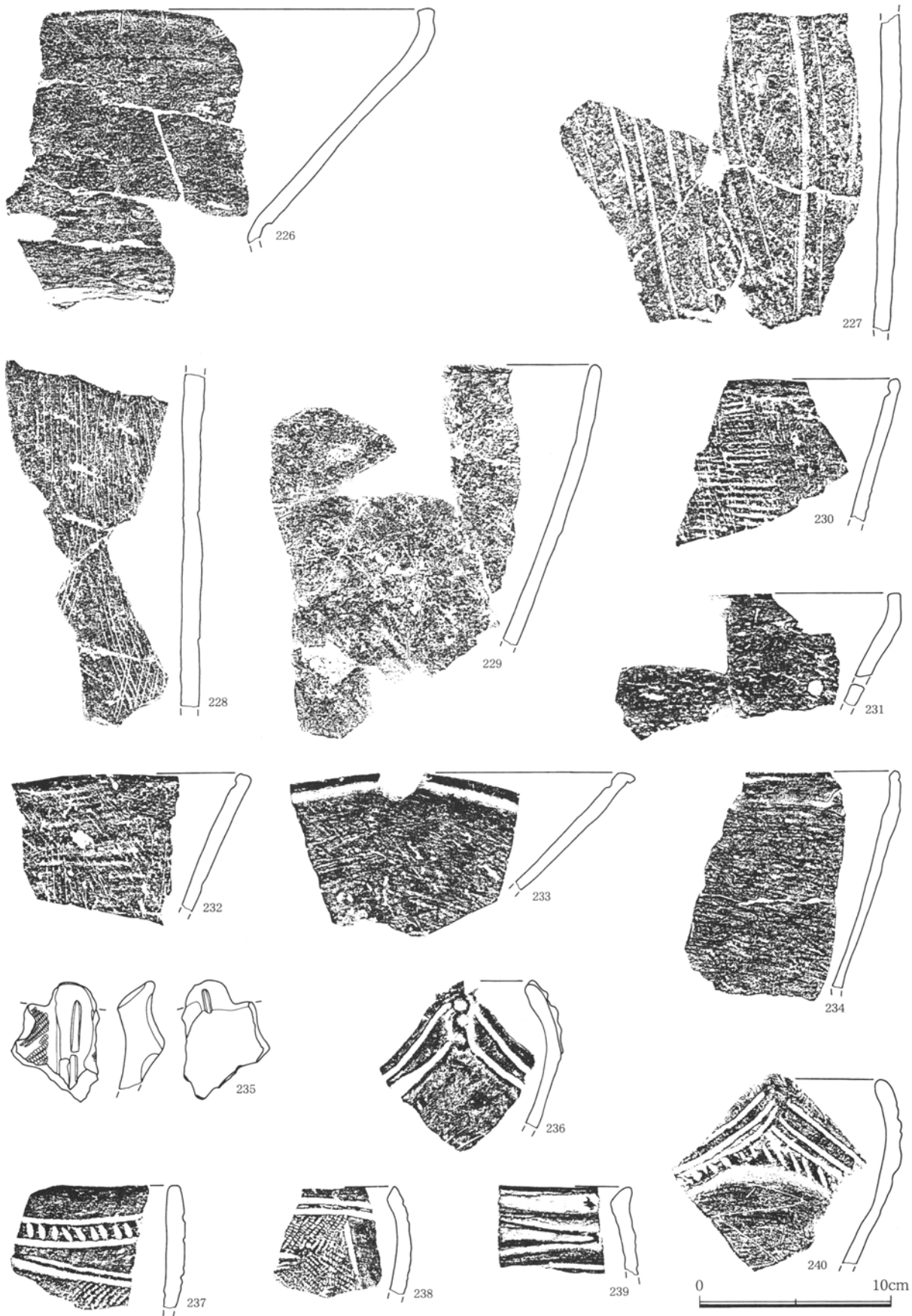
203



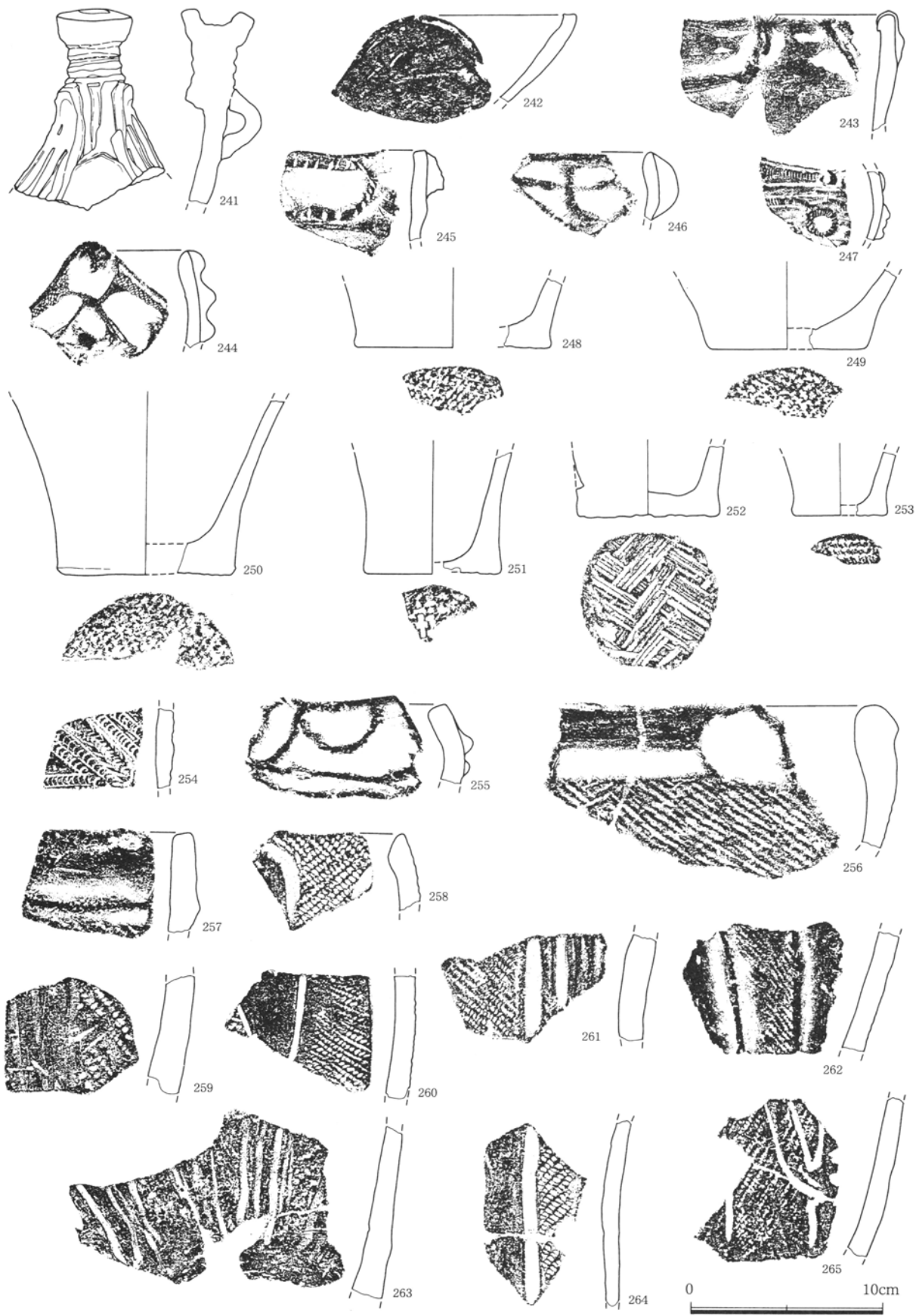
第24図 2区出土の縄文土器(6)



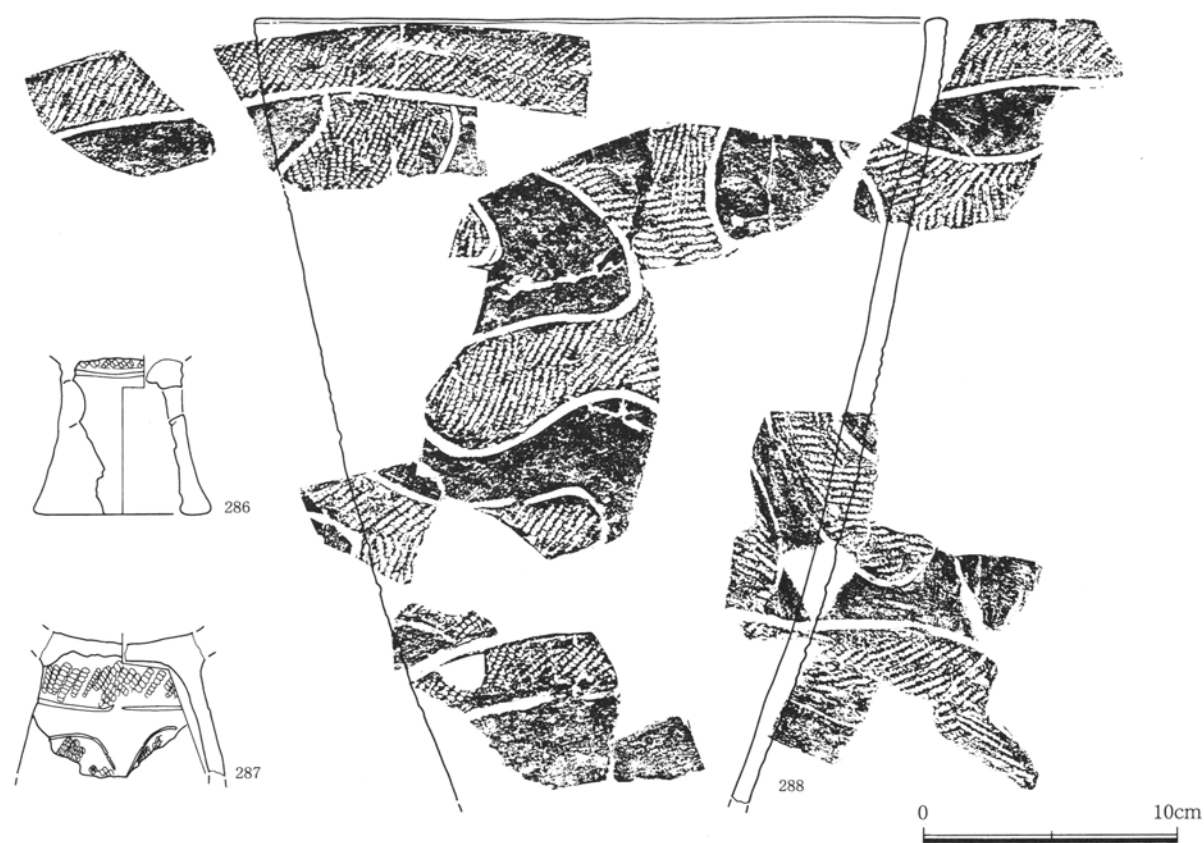
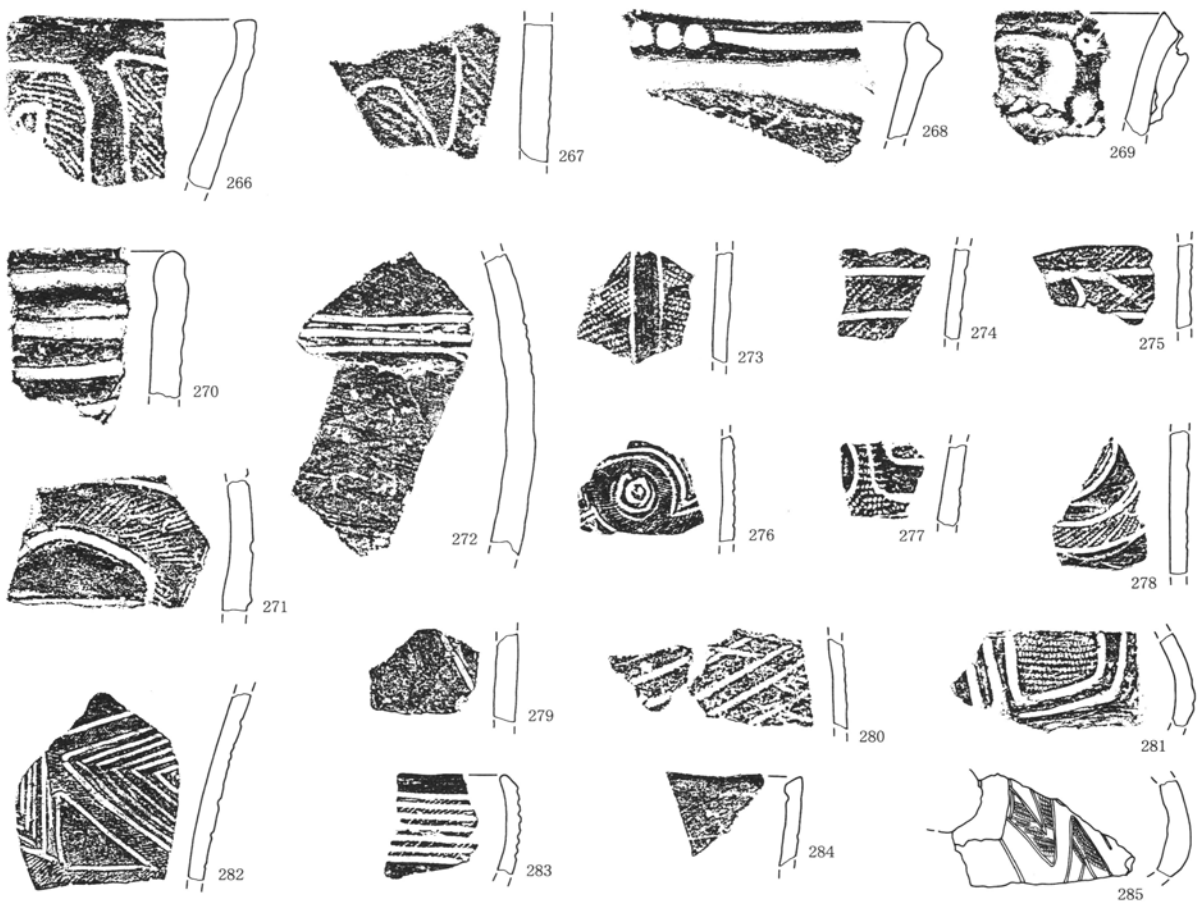
第25図 2区出土の縄文土器(7)



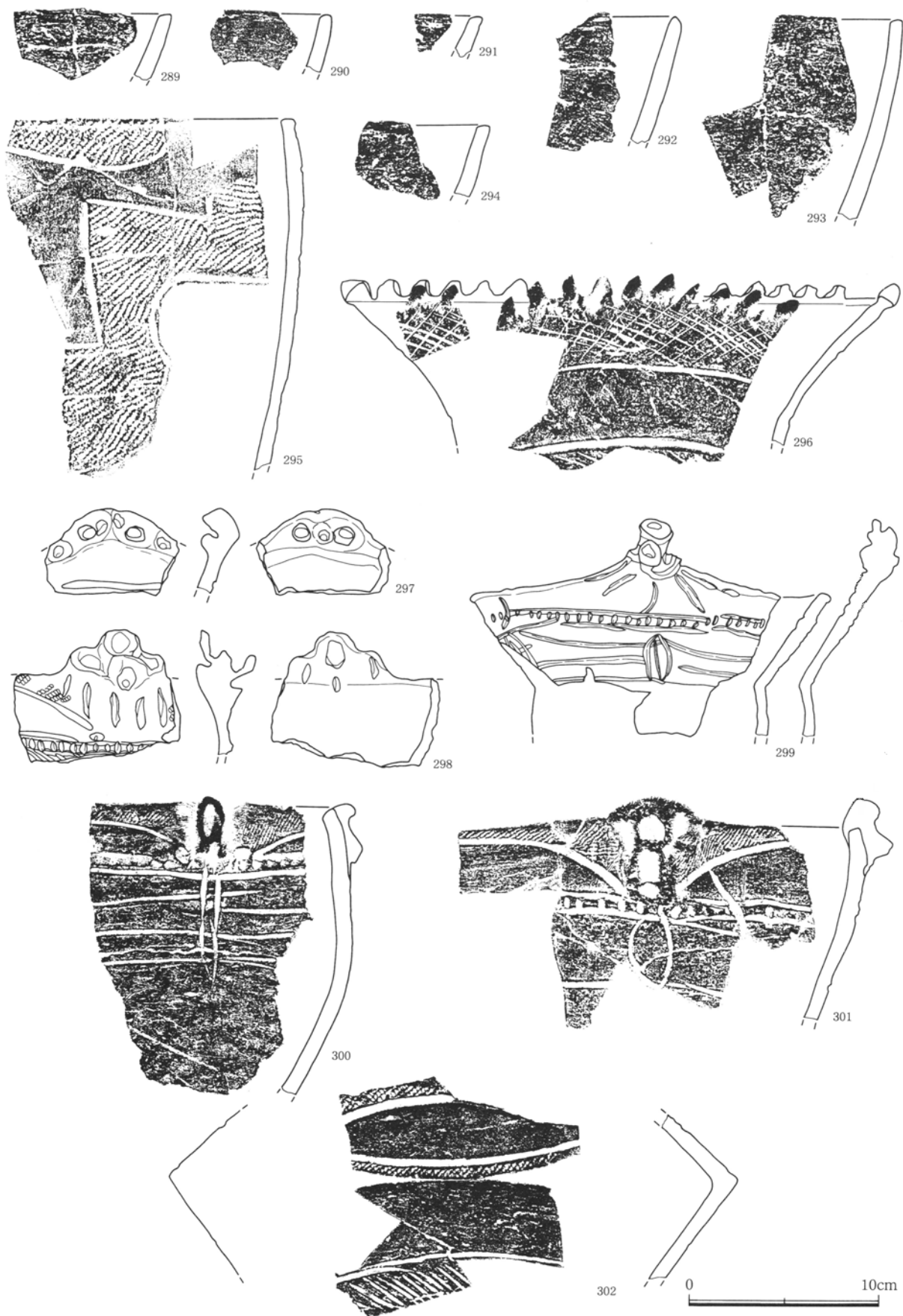
第26図 2区出土の縄文土器(8)



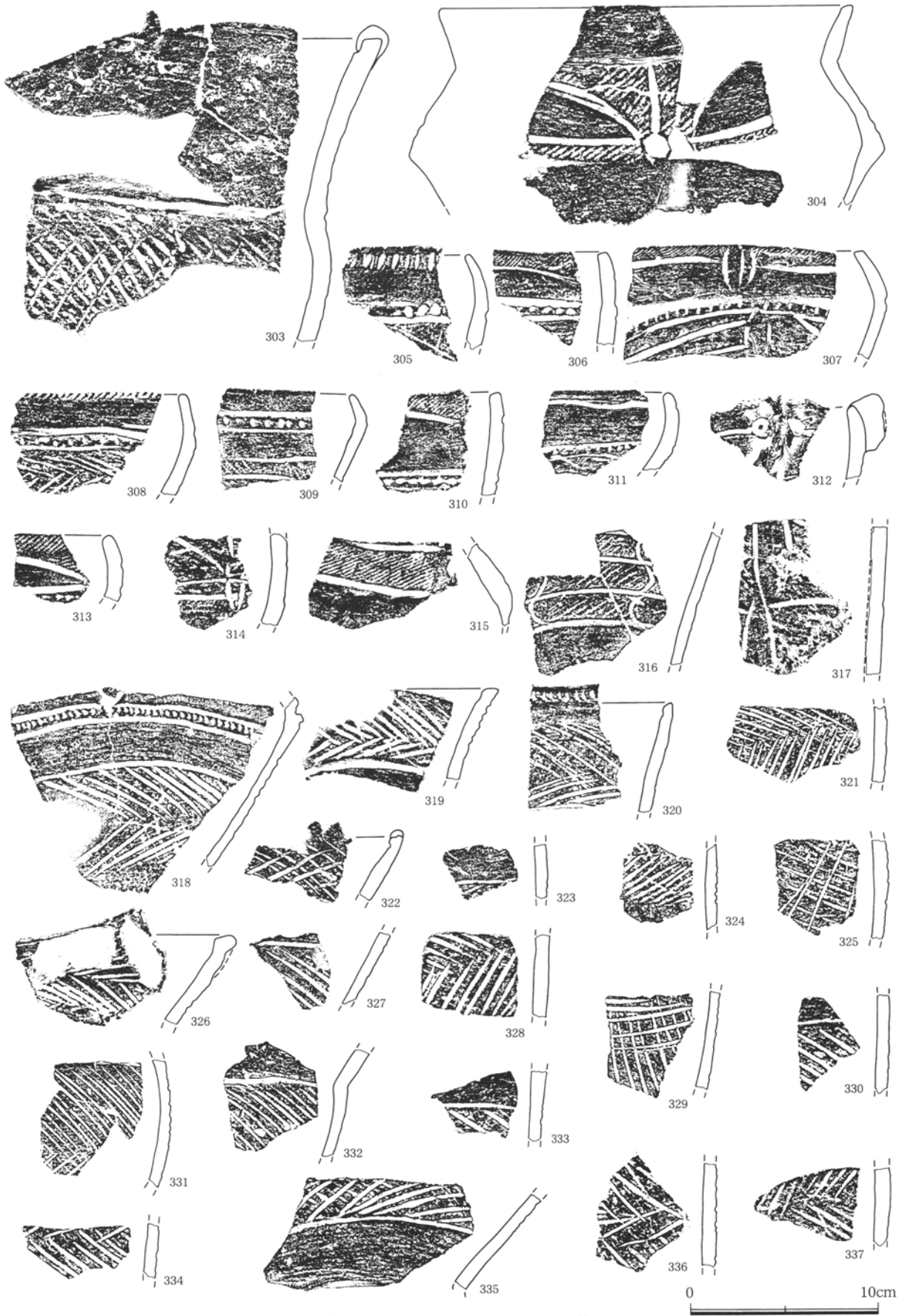
第27図 2区出土の縄文土器(9)、3区・6区出土の縄文土器(1)



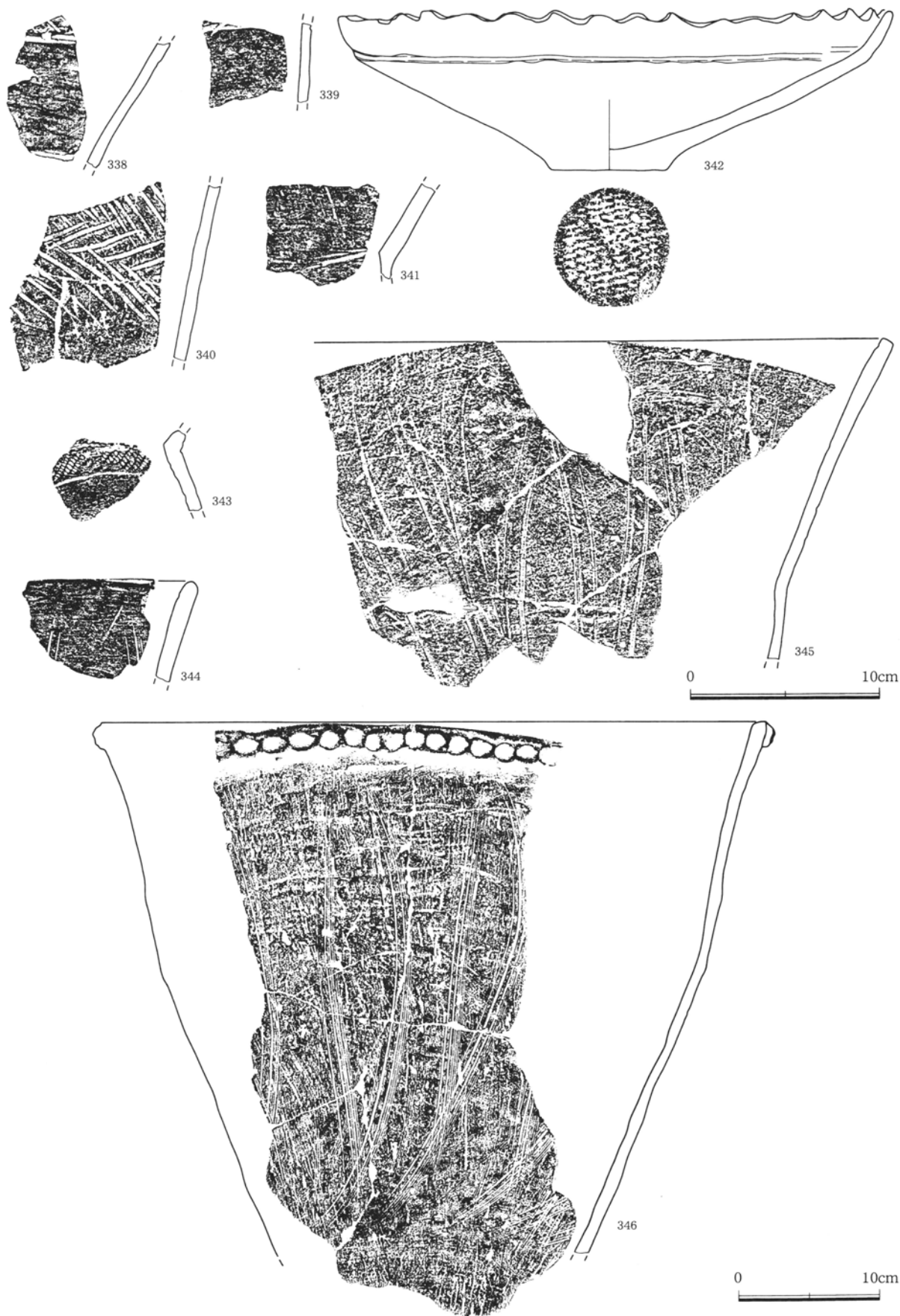
第28図 3区・6区出土の縄文土器(2)



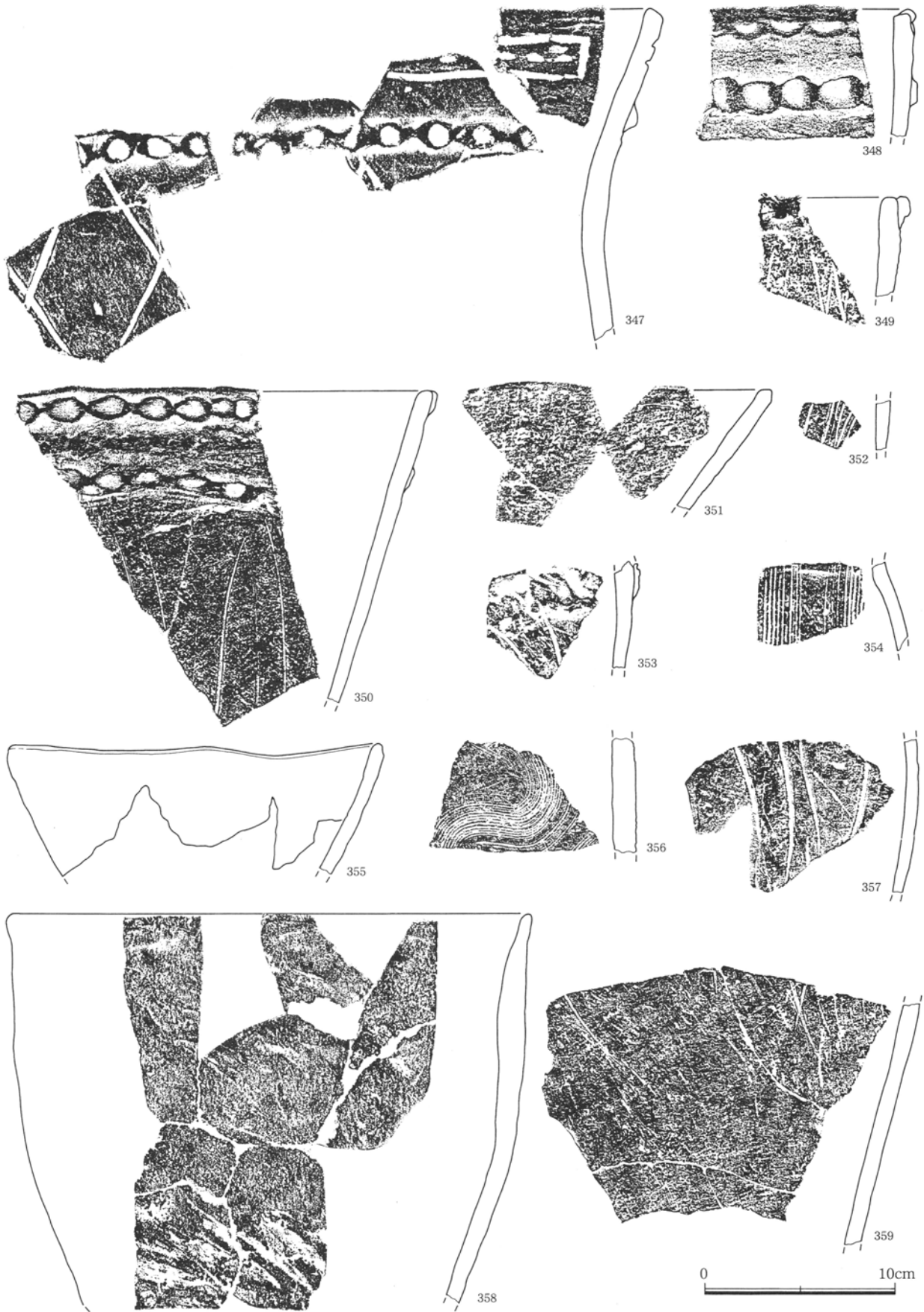
第29図 3区・6区出土の縄文土器(3)



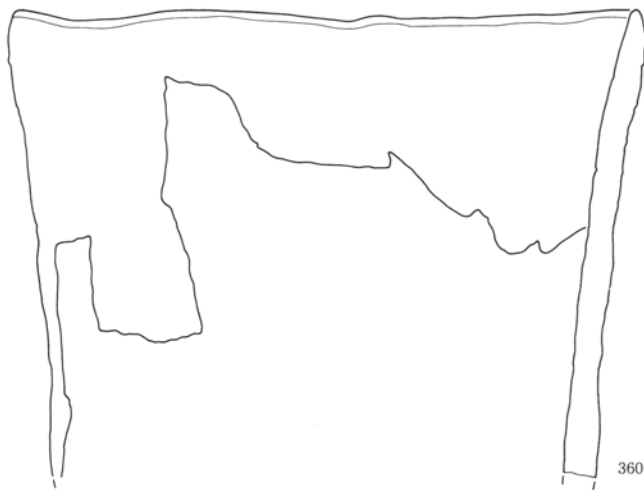
第30図 3区・6区出土の縄文土器(4)



第31図 3区・6区出土の縄文土器(5)



第32図 3区・6区出土の縄文土器(6)



360



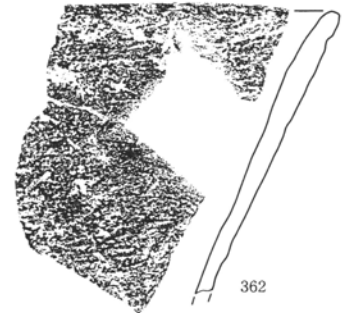
361



363



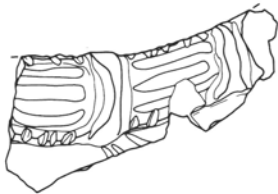
364



362



365



366



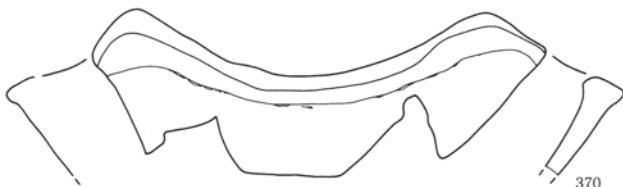
367



368



369



370



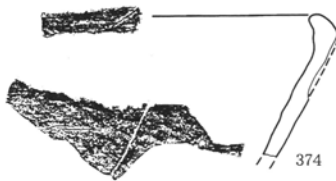
371



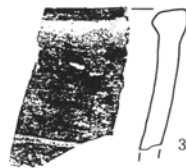
372



373



374



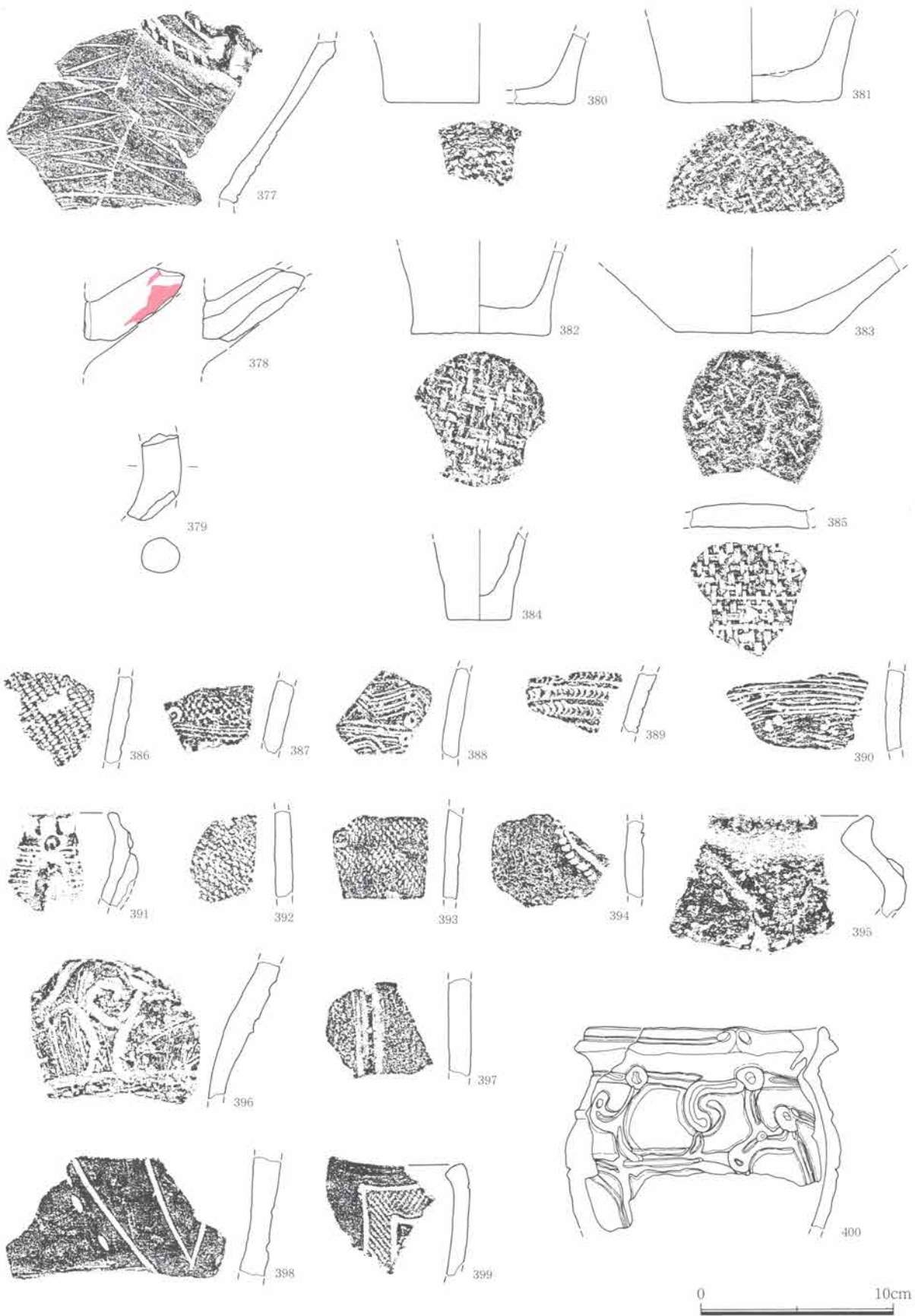
375



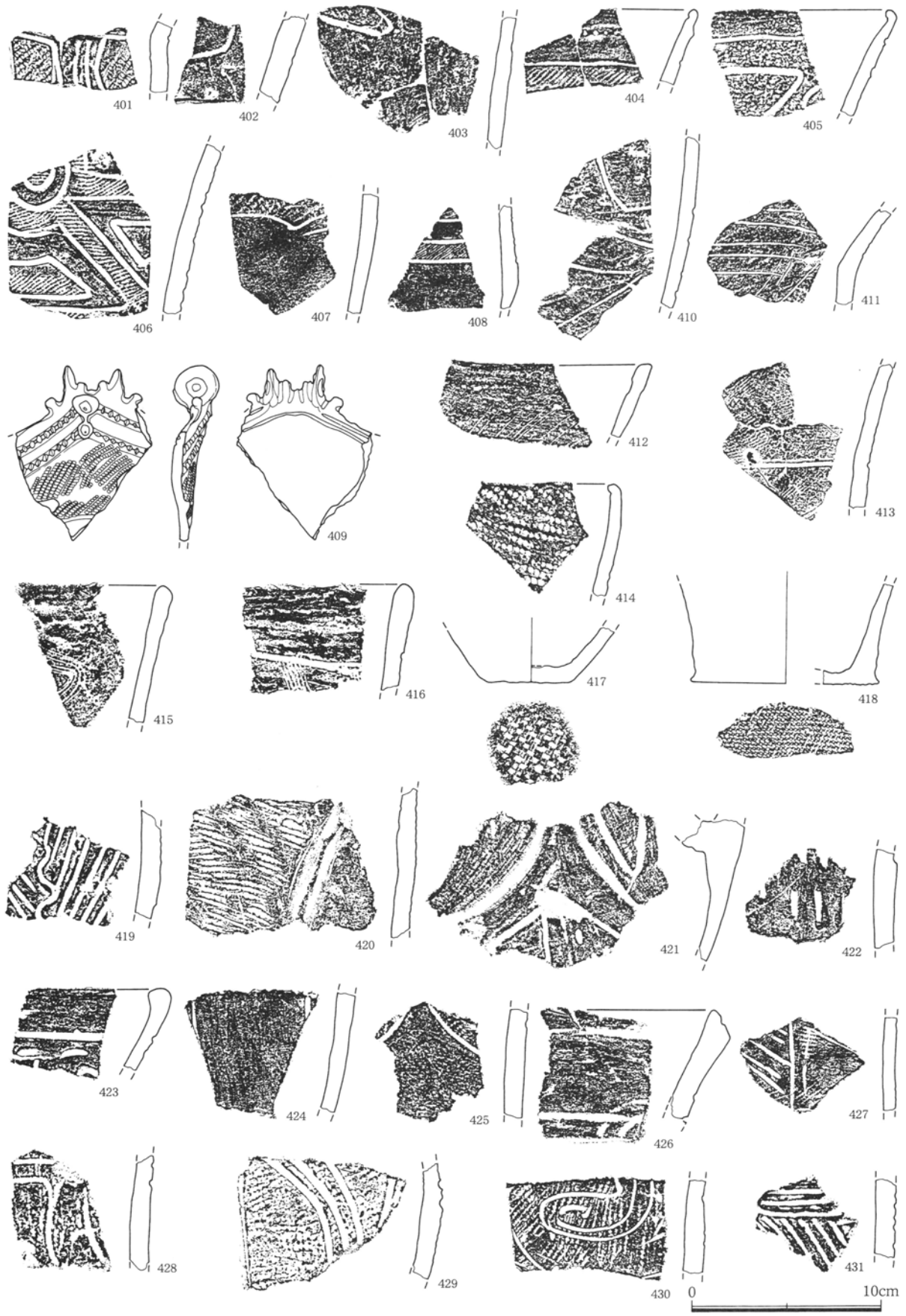
376



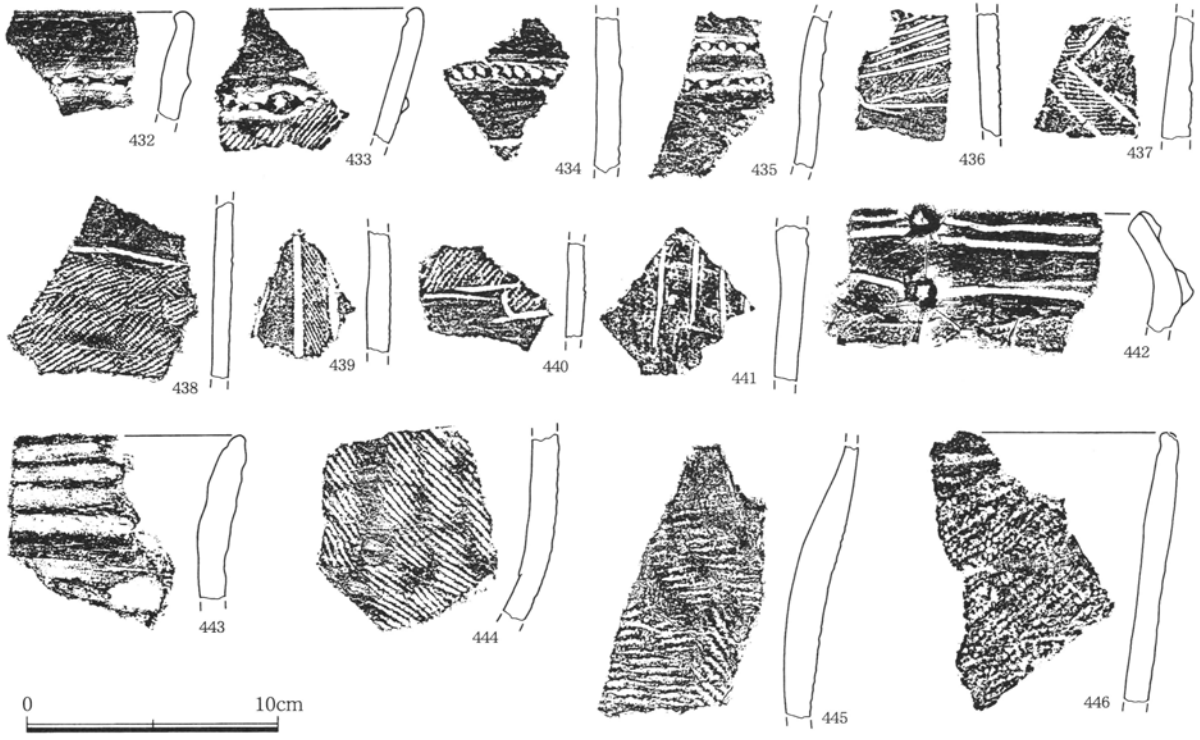
第33図 3区・6区出土の縄文土器(7)



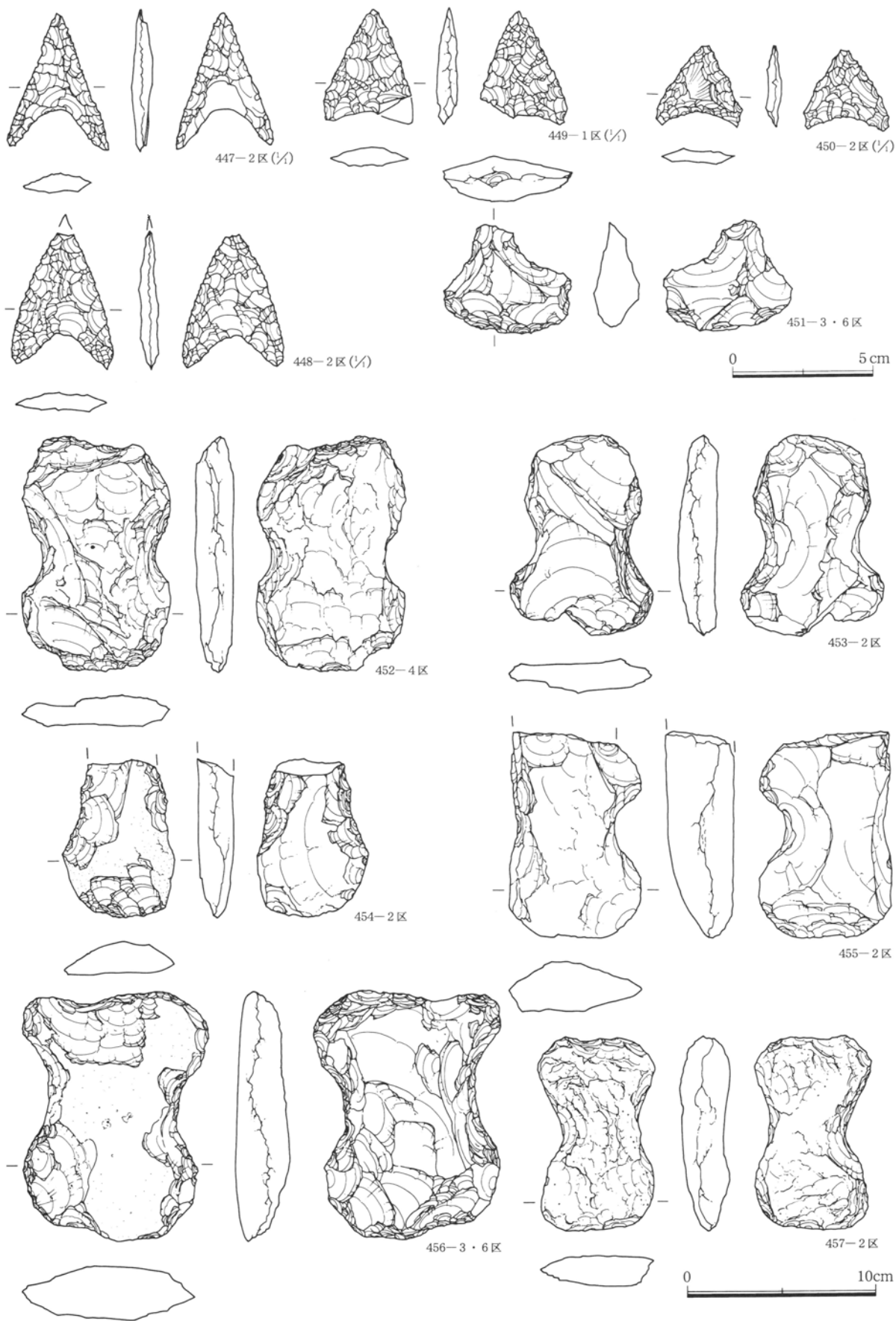
第34図 3区・6区出土の縄文土器(8)、4区出土の縄文土器(1)



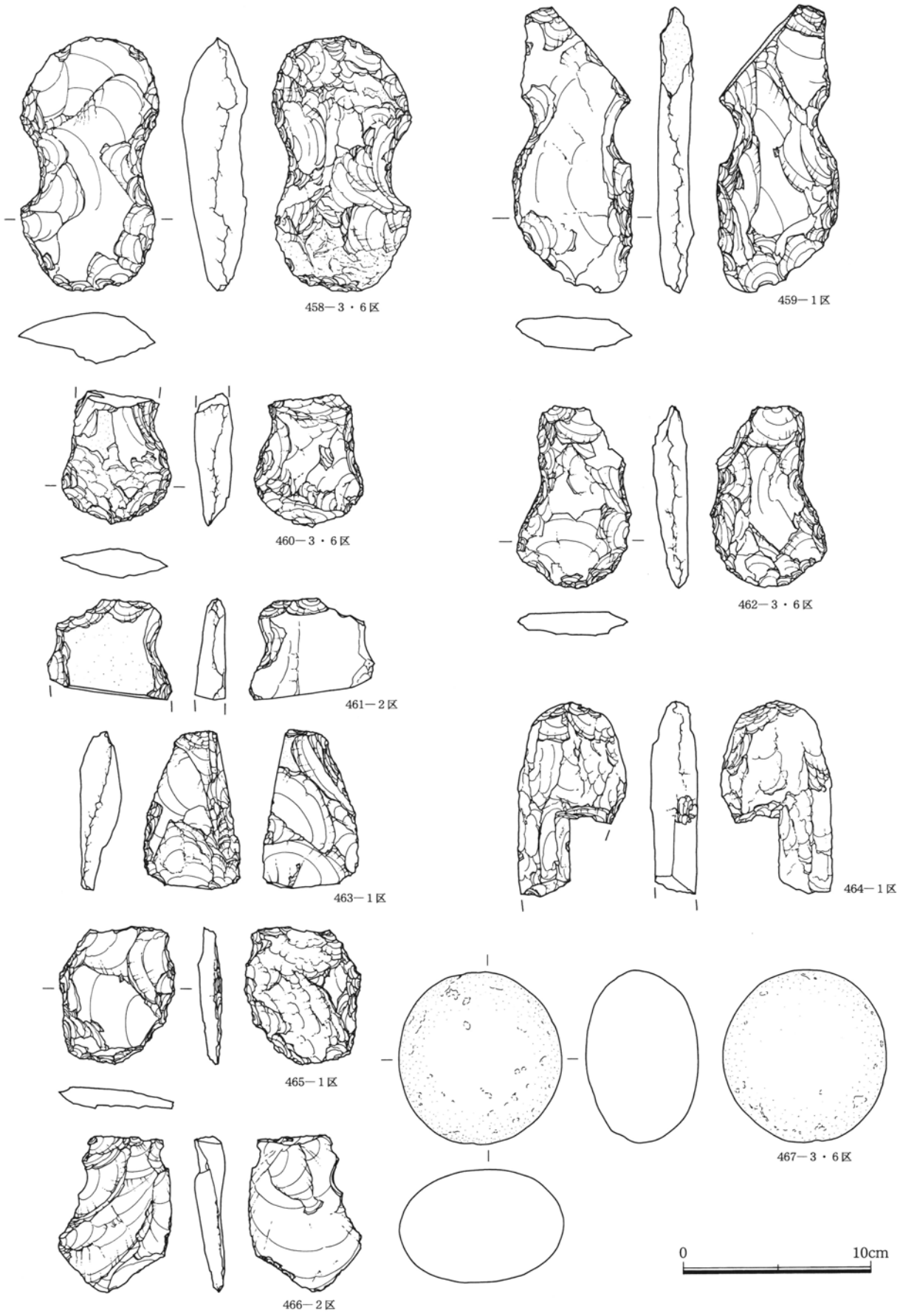
第35図 4区出土の縄文土器(2)、5区出土の縄文土器(1)



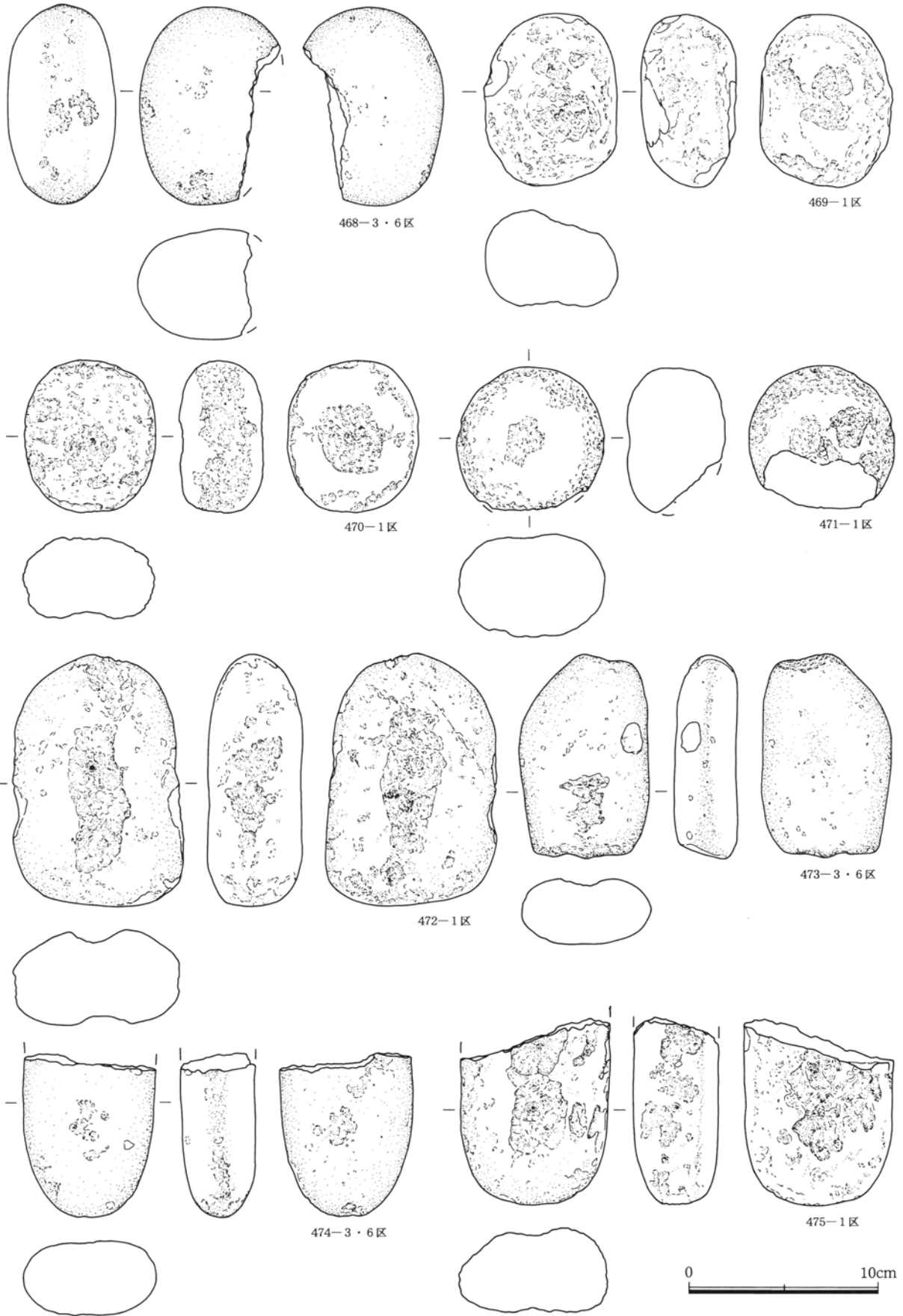
第36図 5区出土の縄文土器(2)



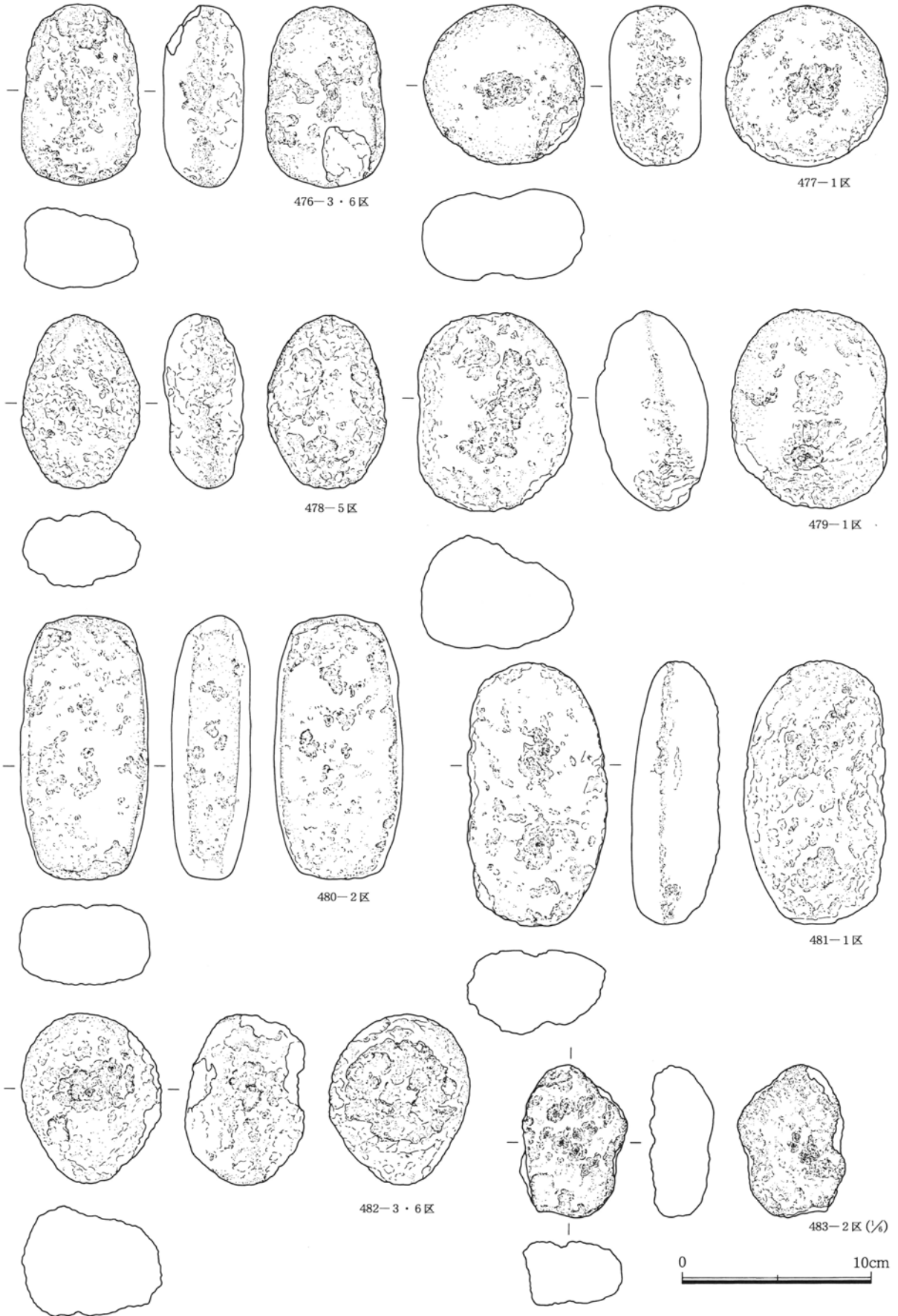
第37図 各区出土の石器(1)



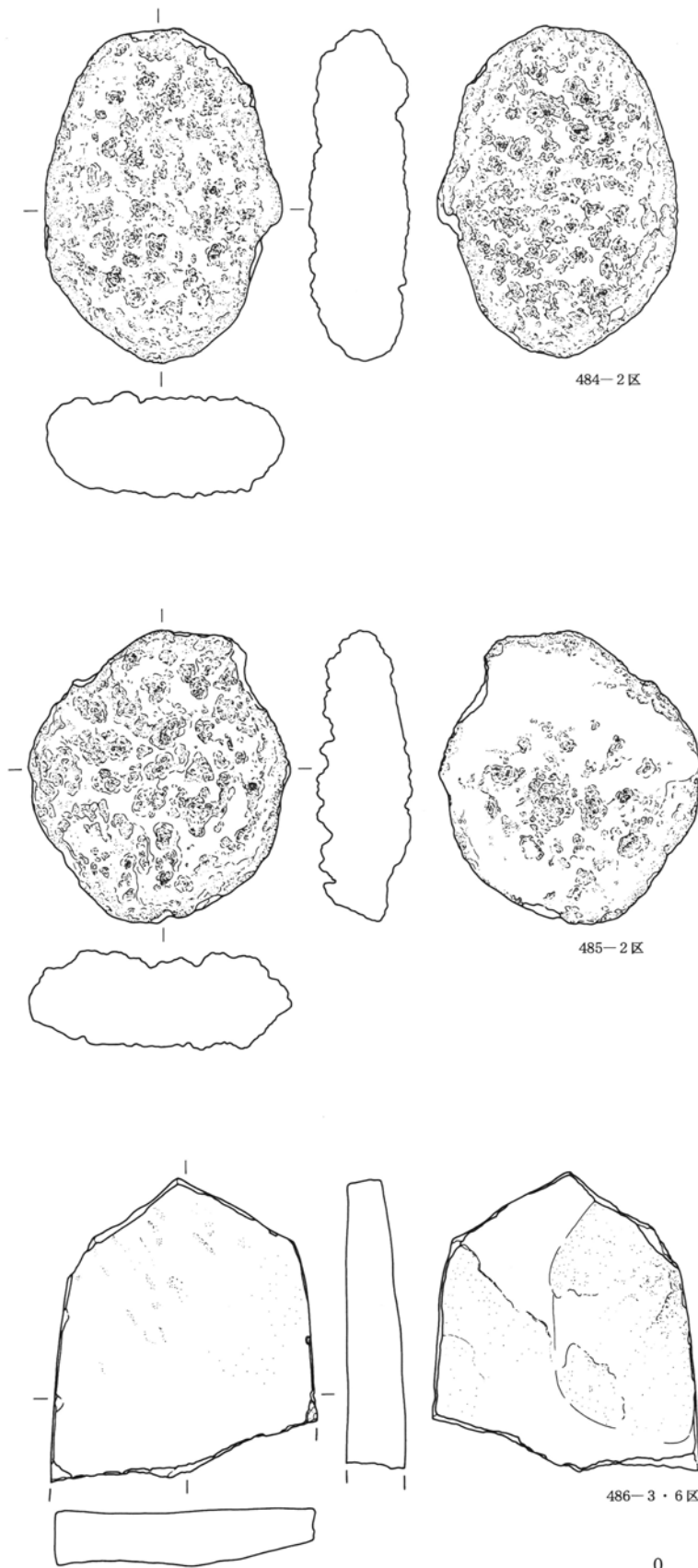
第38図 各区出土の石器(2)



第39図 各区出土の石器(3)

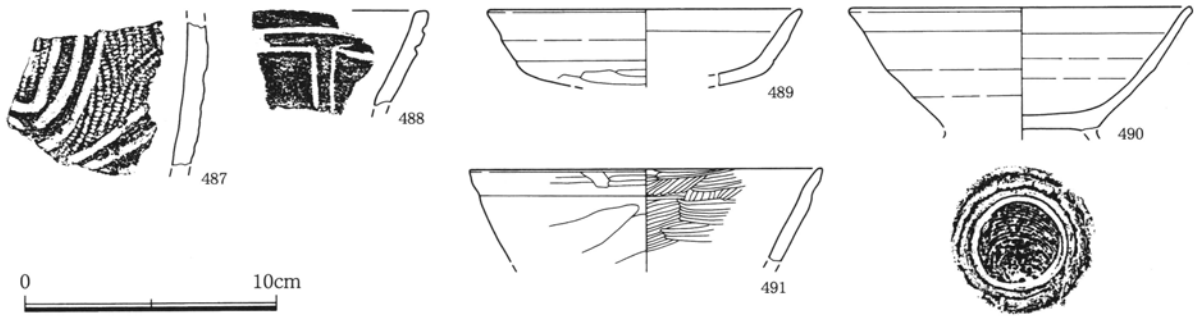


第40図 各区出土の石器(4)



0 20cm

第41図 各区出土の石器(5)



第42図 各区出土のその他の土器

(3) その他の土器

弥生土器

487と488は弥生土器の破片と考えられる。487は、4区の調査区南側部分からの出土である。胴部破片であるが器種の特定には至らない。地文にLRの縄文を横位回転で施文し、3条1単位の沈線による文様が配されている。沈線区画内は無文である。弥生時代中期の所産か。

488は、2区の調査区南側部分からの出土である。口縁部の破片である。器種は甕であろうか。地は無文で、2条1単位の沈線により、口縁部直下を横位に巡る直線と、ここから垂下する文様が描かれている。

土師器

489は杯の破片である。2区からの出土である。口径は12.4cmに復元できる。残存高は3.0cmである。口縁部は外方に向けて立ち上がり、外面の中位に弱い

稜を有している。口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリを施す。色調はにぶい橙5YR6/4である。

491は高台付椀の口縁部破片である。3区・6区からの出土である。口径は14.0cmに復元できる。残存高は3.6cmである。内面には黒色処理が施され、棒状工具によるミガキが加えられている。

須恵器

490は高台付椀であるが高台部分は欠落している。1区からの出土である。口径は13.6cmに復元される。残存高は4.8cmである。右回転のロクロ成形、底部は回転糸切り離し後高台を取り付けている。色調はにぶい黄橙10YR6/3である。

第2章 引用図版出典

第3図 群馬県史編さん委員会『群馬県史』通史編1 付図を修正して使用。

第4図 粕川村教育委員会『粕川村の遺跡』掲載図を一部修正して使用。

第3章 新川鎚木遺跡の調査

1. 調査の経過

調査は、1970（昭和45）年5月2日から5月27日までの13日間にわたって実施された。調査の対象地は群馬用水土地改良事業に伴う道路建設予定地である。

これに先立って1968（昭和43）年には、群馬用水の赤城幹線計画予定地一帯についての分布調査が実施され、「群馬用水赤城幹線地域埋蔵文化財地名表」が作成されている。本遺跡は、新里村No.7の遺跡として記載されている。その内容は、遺跡の種類、包蔵地（縄文）、現況、山林、畑、宅地とあり、概況の項に「本地点は群馬用水完成の折には田畠輪換地域の為包蔵地消滅のおそれあり。」とある。

本遺跡の調査は、上記の内容にそって実施されたものである。

その後、土地改良事業に伴い、道路建設が実施され、周囲は畑地と利用され、長年にわたり、その景観に大きな変化はみられなかった。

次に本遺跡周辺で埋蔵文化財の調査が実施されたのは1991（平成3）年である。本遺跡の南接地が個人住宅の建設に伴うもので、新里村教育委員会により鐮木A遺跡と命名された。その後も周辺域で住宅建設を原因とする開発が行われ、新里村教育委員会による調査、試掘調査がなされている。調査された遺跡とその成果は以下のとおりであるが、その内容は、縄文時代中期の竪穴住居・土坑・ピット、あるいはこれと前後する時期の包含層、平安時代の竪穴住居である。これらと今回報告の新川鐮木遺跡の内容を合わせると台地上一帯に縄文時代、平安時代の遺構の広がりが見られる。

第4表 新川鐮木遺跡周辺の調査遺跡

遺跡名	所在地	調査原因	調査年	遺跡の内容
鐮木A	字鐮木 2245-4	住宅建設	1991.2	縄文中期住居、土坑24基
鐮木B	字鐮木 2267-1	住宅建設	1991.10	縄文中期包含層
鐮木C	字鐮木 2257-18	倉庫建設	1992.5	平安住居、1軒
鐮木D	字鐮木 2254-8	住宅建設 倉庫建設	1997.4	縄文、平安住居各1軒、 土坑7基

2. 遺跡の位置と地形

本章で扱う新川鐮木遺跡は、群馬県勢多郡新里村新川字鐮木に所在する。

本遺跡は新里村の東南部に位置し、前橋市と桐生市を結ぶ上毛電鉄の新川駅から北西に約0.9kmにある。前橋市の市街地からは東方に約18kmである。微細な位置関係を明らかにすると、新里村村内を上毛電鉄の鉄路に北沿して走る県道が早川用水路と交差する地点を北折、新川熊野神社の方向に約60mほど進んだ鐮木集落西側の台地上にある。

遺跡のある新里村は群馬県の県央東部に広大な裾野を形成する赤城山東南麓上に立地している。

赤城山は、黒檜山（標高1,828m）を最高峰に駒ヶ岳や鈴ヶ岳などの外輪山をかかえた第三紀の複合成層火山である。新里村内では標高500m前後に山地帯から丘陵性の台地への変換点がみられ、標高200m以下の地域は比高差の少ない低台地となっており、これより低位には沖積地が広がっている。また、東側には足尾山地、大間々扇状地と接しており、複雑な地形が形づくられている。

本遺跡は標高180m前後の台地上に位置する。この台地は、鐮木川と早川に挟まれた、沖積地に枝別して突出する舌状台地の一つで、南北約1,000m、東西約300m～500mほどの広さを有している。台地上にはロームがのっており、板鼻軽石層（As-YP）、板鼻複合軽石層（As-BPグループ）などのテフラが堆積している。北西側はいくつかの起伏をへて不二山遺跡群の位置する丘陵、台地へと通じている。この台地の東西にも沖積地を挟んで、南北に細長い台地が延びている。東側の台地上には熊野神社が鎮座し、その北東台地上には、熊野、藤生沢遺跡の縄文時代集落が展開していた。また、本遺跡の東側の沖積地は、幅100m前後の規模で、早川に合流する小河川を伴うが、本遺跡から500mほど上流で谷頭となり、台地北側の斜面には湧水が見られたという。この沖積地には1108（天仁元）年降下のAs-Bの堆積は認められるものの水田面の検出はなされていない。

3. 周辺の遺跡

新川鎬木遺跡の所在する新里村では教育委員会による悉皆的な調査が継続して行われている。その結果、現在まで村内で実施された発掘調査の件数は有に200件を越えている。本項では紙数の都合から本遺跡の調査内容に係わりの強い縄文時代と平安時代を中心に周辺遺跡の動向を概括しておきたい。

なお、第4表の遺跡名は複数の調査遺跡を一括して呼称（例えば鎬木遺跡は鎬木A～D遺跡を包括）、第43図の遺跡の範囲もこれに合わせて提示した。

本遺跡では縄文時代前期から中期の所産と考えられる竪穴状遺構と、中期を中心とした遺物包含層の調査が実施されたが、村内には多数の縄文時代の遺跡が分布している。1982・1983（昭和57・58）年に実施された分布調査では227遺跡が確認されている。その時期は、草創期から晩期にいたるまでの全般にわたっているが、数量的に多数を示したのは前期の遺跡である。垂直分布では標高200から300mにおける分布密度が高いとされる。そして、時期が下がるにつれて、標高400m以上の高標高地での遺跡分布は減少する傾向にある。

具体的に遺跡の内容をみてゆくと、本遺跡に隣接する鎬木A遺跡では中期の住居4軒を検出している。鎬木D遺跡でも縄文時代の住居1軒が発見されていることから沖積地を臨む舌状台地上に中期を中心とした集落が展開していたと考えられる。また、沖積地を隔てた東側の台地上に立地する熊野・藤生沢遺跡では数次にわたる調査の結果、前期諸磯式期、中期加曾利E式期の住居30軒以上、土坑、立石などが検出されている。この他に新川地区では大屋B・C・D・F・G・Hの各遺跡、金井遺跡、広間地西遺跡、善田下遺跡、新川八幡遺跡、元宿C遺跡、新川前田遺跡、久保井口遺跡、広間地東遺跡、十三塚E遺跡、大屋元屋敷遺跡、峯の薬師遺跡で各時期の住居、その他の遺構が発見されている。

さらに、新里村村内で、多数の住居等を検出した遺跡としては、十三塚遺跡群（住居前期1、中期17）、

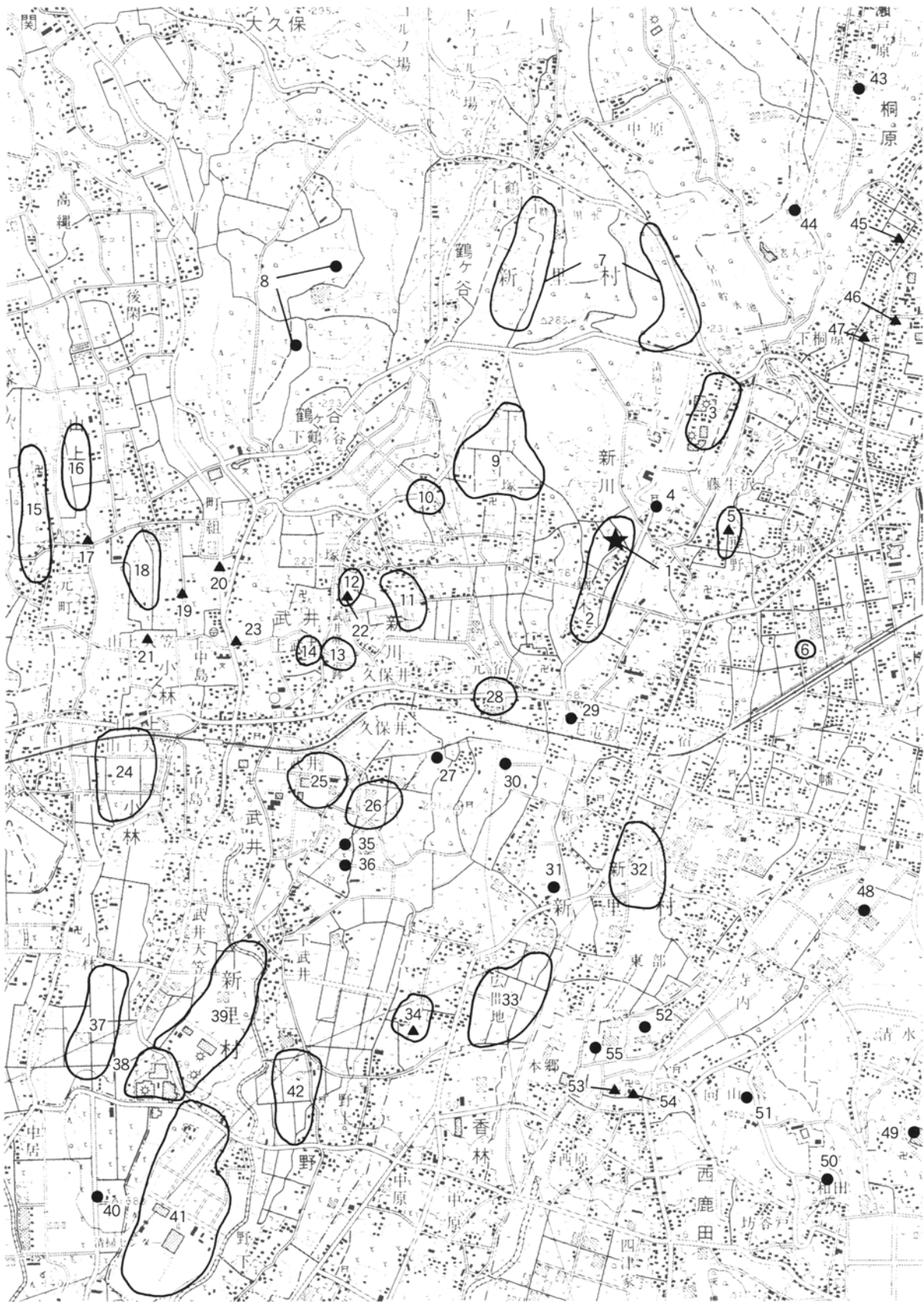
上鶴ヶ谷遺跡（配石遺構後期9）、山上五反田遺跡（住居前期9、中・後期25）、大日遺跡（陥穴81）、十二社遺跡（住居前期9）、大屋H遺跡（住居後期22、後期埋甕24）などがある。新里村に隣接する大間々町瀬戸ヶ原遺跡や、笠懸町稻荷山遺跡、清泉寺裏遺跡も縄文時代の遺跡として著名である。

弥生時代後半から古墳時代前期にかけての集落は、新里村村内の南側にその分布が集中している。幅広く、緩やかな沖積地を水田生産の基盤として成立したものである。その後、これらの集落は古墳時代を通じて、その占地範囲を拡大させ、平安時代まで継続するものが多い。また、こういった集落の動向に対応して古墳の分布が認められる。広間地遺跡で調査された5世紀代の群集墳などを除くと全体には散在傾向にあるが、中塚古墳をはじめとした4基の截石切組積横穴式石室を主体部に有する古墳の存在は、7世紀後半における本遺跡周辺地域の充実ぶりを反映したものであろう。

新里村村内における奈良・平安時代の調査遺跡数は、90遺跡近くにのぼる。調査された遺跡の2件に1件の割合で当該時期の遺構が検出されていることになる。標高200m以下の地域では、遺跡は、幅広く帯状に分布しており、広間地遺跡では400軒に及ぶ住居が検出されている。さらに集落の分布は、弥生時代後半以降、これまで占地の認められなかった高標高地にも進出している。これは水田耕作において峯岸II遺跡の調査で発見されたような「ぬるめ」を目的とした冷堀などの対策が講じられた結果、冷水・過水地帯の沖積地にまで水田適地が拡大したためと考えられる。

以上のような遺跡の動向に加えて、本遺跡周辺では砂田遺跡に代表される818（弘仁9）年に発生した地震災害に関連した遺跡が多数発見されている。

最後に、十三塚遺跡をはじめとした10例を越える遺跡で、平安時代の炭窯が発見されている。上鶴ヶ谷遺跡発見の須恵器窯、村内遺跡発見の小鍛冶遺構など生産関連の遺構が多数確認されていることも本遺跡周辺の遺跡分布として特記される点である。



★ 新川鍬木遺跡 ○ 集落 ▲ 古墳

0 1 km

第43図 周辺の遺跡

第5表 新川鎬木遺跡周辺の遺跡一覧

凡例 ○は住居の存在を、△は古墳の検出を表す。

No.	遺跡名	所在地	縄文					弥生	古墳	奈平	備考	文献
			草	前	中	後	晩					
1	新川鎬木	新里村新川字鎬木							○	本報告の遺跡。縄文土坑包含層。		
2	鎬木	新里村新川字鎬木			○				○	縄文土坑。	1	
3	熊野・藤生沢	新里村新川字熊野・字藤生沢	○	○					○		3	
4	熊野古墳	新里村新川字熊野						△			2	
5	藤生沢	新里村新川字藤生沢							○	縄文包含層。	1	
6	新川天神原	新里村新川字天神原							○		1	
7	不二山遺跡群	新里村鶴ヶ谷字不二山							○	平安製鉄址(東側)。平安炭室(西側)。		
8	上鶴ヶ谷	新里村上鶴ヶ谷							○	縄文後期配石遺構、平安須恵器窯。	1	
9	十三塚	新里村新川字十三塚	○	○						平安炭窯・土坑。	1	
10	外播山	新里村新川字十三塚	○	○						平安炭窯。	1	
11	久保井	新里村新川字久保井	○						○		1	
12	武井庵寺塔跡	新里村武井字松原峯							○	火葬墓。	4	
13	武井・峯	新里村武井字峯							○	旧石器包含層。	1	
14	武井・城	新里村武井字城	○	○					○		1	
15	山上城跡	新里村山上字城山							○		1	
16	山上五反田	新里村山上字五反田	○	○	○		○		○	縄文土坑。	1	
17	山上12号墳	新里村山上							△	5世紀後半。埴輪。		
18	山上堂城古墳	新里村山上字堂城							△			
19	町組古墳	新里村山上字町組							△			
20	町南古墳	新里村山上字町南							△	円墳、横穴式石室。		
21	山上愛宕塚古墳	新里村山上字町南							△	7世紀。截石切組横穴式石室。		
22	中塚古墳	新里村新川字久保井							△	7世紀後半。截石切組横穴式石室。	5	
23	天神山古墳	新里村小林字天神前							△		5	
24	天笠南(石山西)	新里村小林字石山西、山上字天笠南							○	縄文住居1軒、古代井泉祭祀跡。	1	
25	砂田	新里村武井字鎮守							○	平安水路・水田。	6	
26	梨子木	新里村武井字梨子木							○	旧石器ナイフ形石器。	1	
27	小沢	新里村武井							○		1	
28	元宿B他	新里村新川字元宿							○	旧石器剥片、縄文住居1軒。	1	
29	元宿	新里村新川字元宿								旧石器、相沢忠洋氏調査。	1・7	
30	雷電山瓦窯址	新里村新川字元宿								単弁八蓮華文の軒平丸瓦。	1	
31	新宮	新里村新川字新宮							○	旧石器ユニット、縄文住居、平安寺院または瓦集積地炭窯。	1	
32	大屋	新里村新川字大屋			○	○			○	陥穴。	1	
33	広間地	新里村新川字広間地							○	旧石器ブロック・礫群。	1	
34	広間地西	新里村新川字広間地西							△	旧石器ユニット、縄文2軒。平安炭窯。	1	
35	山内出	新里村武井字山内出							○		1	
36	山内出古墳	新里村武井字山内出							△	7世紀後半。截石切組横穴式石室。	5	
37	日横	新里村小林							○		1	
38	峯岸	新里村武井字峯岸							○	旧石器。	1	
39	武井	新里村武井							○	旧石器ブロック・礫群。	1	
40	峯岸山	新里村武井							○		8	
41	十二社	新里村野字十二社	○		○				○	旧石器ブロック、縄文土坑・陥穴。	1	
42	蛭川	新里村野字蛭川	○		○				○		1	
43	瀬戸ヶ原	大間々町桐原字瀬戸ヶ原	○	○					○	平安鍛冶工房。	9	
44	桐原	大間々町桐原								旧石器。	9	
45	国土古墳	大間々町桐原字国土							△	6世紀円墳。埴輪。	9	
46	杉森古墳	大間々町桐原字宿西							△	7世紀円墳。	9	
47	世音寺南西古墳	大間々町桐原							△		9	
48	稲荷山	笠懸町西鹿田字稲荷山	○	○					○	縄文土坑、平安炭窯。	10	
49	清泉寺裏	笠懸町鹿字北口			○	○				縄文早期～後期住居?	11	
50	和田古墳	笠懸町西鹿田字和田	○						○	旧石器・縄文早期集石、平安炭窯。	11	
51	神社裏	笠懸町西鹿田字向山			○				○	旧石器ブロック、縄文土坑。	11	
52	西鹿田中島	笠懸町西鹿田字中島	○							爪形文土器。	11	
53	長昌寺開山塚古墳A号	笠懸町西鹿田字中島							△	形象埴輪。	11	
54	長昌寺開山塚古墳B号	笠懸町西鹿田字中島							△	横穴式石室か。	11	
55	赤井戸	赤堀町香林字赤井戸								赤井土式土器発見地。		

参考文献

- 1 『年報 1～18』 1982～1999 群埋文
- 2 『群馬県遺跡台帳 1』 1971 群馬県教委
- 3 『熊野・藤生沢発掘調査報告』 1974・『熊野遺跡発掘調査報告』 1975 新里村教委
- 4 加部二生「武井庵寺跡」『東日本における奈良・平安時代の基制』 1995
- 5 『新里村誌』 1974 新里村誌編さん委員会
- 6 『赤城山麓の歴史地震』 1989 新里村教委
- 7 相沢忠洋・関矢晃『赤城山麓の旧石器』 1988
- 8 『峯岸山遺跡発掘調査報告(第二次)』 1975 新里村教委
- 9 『大間々町の遺跡』 1996 大間々町誌刊行委員会
- 10 『笠懸村稲荷山遺跡』 1980 笠懸村教委
- 11 『笠懸村誌』 別巻 1 1983 笠懸村

4. 調査の方法

建設予定の道路は台地上の平坦部を幅 4 m の規模で東西方向に横走し、遺跡地のおよそ中心部を切断する形で建設が計画された。その長さは 120 m である。調査区は道路建設予定地のセンターライン南側に、東側起点より 60 m のトレンチで設定された。

このトレンチは A トレンチと呼称され、更に 60 m を 5 m ごとに区分し、長さ 5 m、幅 2 m の連続する調査区を設定した。細分された調査区には東側を I 区とし、順次、西側に向かって XII 区まで名称が付された。各区トレンチ名を先述し、A-I 区、A-II 区と呼称した。

各調査区の調査であるが、表土の除去をはじめとした掘削は全て人力によった。掘削は、基本層序の第 6 層、ローム層上面までを原則として作業を行った。調査区の幅は 2 m を原則としたが、A-VI 区と A-VII 区では竪穴住居を検出したため、調査区の範囲を南北方向に拡張している。調査の進捗にあわせ、調査区の北壁と東壁で土層の堆積状況を把握、層位ごとに遺物の取上げを実施した。土層断面については記録保存をおこなった。記録類は、縮尺 20 分の 1 の土層断面実測と、35 mm 版モノクロフィルムによる写真撮影である。竪穴住居は、縮尺 20 分の 1 の平面図・セクション図・エレベーション図を作成している。

5. 基本層序

本遺跡の基本層序は次のとおりである。

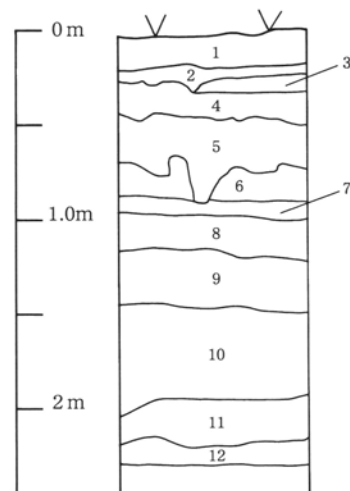
第 1 層 表土、耕作土層 色調は茶褐色で砂粒質である。

第 2 層 黒色土層 固くしまった土層。薄く堆積するため、区によっては寸断された状態もみられる。大粒の堅石を含有する。土師器、須恵器を出土する。

第 3 層 明褐色土層。比較的軟弱な細かい粒子から構成された土質である。A-IV 区の中程から以西の各調査区で堆積が確認できる。土師器、須恵器を出土する。本層中で 2 軒の竪穴住居の掘り込みを確認する。

第 4 層 明褐色土層 3 層に類似するがこれよりも色調に黒味を増し、固い。上層には土師器が混在するが基本的には縄文時代中期の遺物含有層である。

第 5 層 茶褐色土層 固くしまっている。下位で様相を異にする部分もあるが明確に分層することは困難であった。上部は縄文時代中期の遺物含有層であるが、調査区に



第44図 基本層序

より前期後葉の遺物も出土する。下部、ローム層に近い層は前期後葉の遺物出土層である。この層位中から掘り込まれた竪穴状遺構が検出された。

- 第6層 ローム層
- 第7層 板鼻黄色軽石層 (As-YP)
- 第8層 ローム層
- 第9層 板鼻褐色軽石層 (As-BP グループ)
- 第10層 ローム層
- 第11層 暗褐帯
- 第12層 ローム層

6. 調査された遺構

(1) 各区の調査

前述のように本調査においては、東西方向約60mの調査対象区を5mごとに細分、12の調査が設定された。検出された遺構は後述のとおりであるが、対象区全域が縄文時代の遺物包含層であったことから各区の調査状況について、その概要を記しておく。記述は東側のA-I区から西方向に向かって順次進める。

A-I区

遺構の検出は無かった。2層より土師器の破片を、4層より縄文時代中期の土器片を少量出土した。石器は凹石1点が出土した。

A-II区

5層下部より掘り込まれた1号竪穴状遺構を検出した。2層から土師器破片を、4・5層から縄文時代中期の土器片を少量出土した。

A-III区

遺構の検出は無かった。1層からの攪乱が部分的に入り、層位に乱れが生じている。土師器、縄文土器片を少量出土する。ローム層中からの遺物の出土もない。

A-IV区

遺構の検出は無い。3層から土師器片を出土する。他に縄文時代前期・中期の土器片が出土している。

A-V区

2号・3号竪穴状遺構を検出した。2号竪穴は全掘したが、3号竪穴は調査区南壁に半分かかった状態である。2基の竪穴に接して、小ピットを検出したが、遺構として認識するには不整形であった。縄文時代中期の土器片を一定量出土した。

A-VI区

1号住居を検出したため、南・北両側の調査区を拡張し、竪穴住居全体の調査に及んだ。住居は3層上面からローム層中まで掘り込まれた。本調査区については、4層以下は未調査のまま終了した。住居の埋没土中からは土師器・須恵器と混在して、縄文土器・打製石斧などが出土している。

A-VII区

2号住居を検出したが、南側の3分の1程が調査区域外に及んだため全体を調査することはできなかった。この調査区においても住居を3層上面で確認したため、4層以下の様相については未調査である。住居の埋没土中から縄文土器が出土している。

A-VIII区

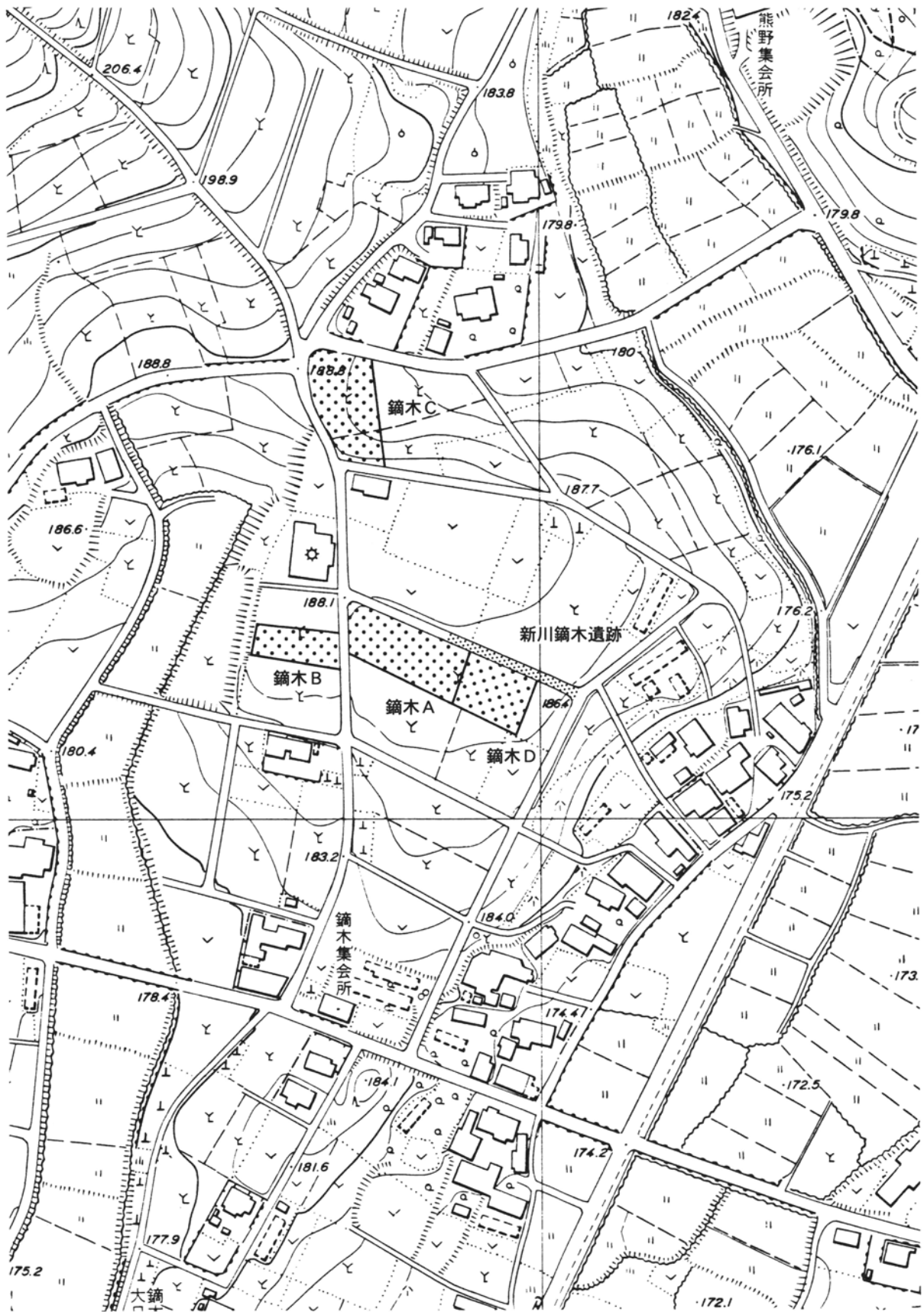
3層・4層に各々上面からの落込みが北壁セクションで認められたが、遺構としての判定はできなかった。また、ローム層上面で調査区西壁沿いに僅かに落込みらしい状態がみられたが、これも遺構として認識するに至らなかった。縄文土器、大量の石片を出土した。

竪穴状遺構

12区の調査から7基の竪穴状遺構を検出した。検出面はいずれも5層下部である。以下、調査区ごとにその概要を記す。

(2) 1号竪穴状遺構

A-II区中央やや北寄りで見出した。平面形は円形を呈し、直径約60cmである。掘り込みは深さ約20cmを測り、やや袋状の断面形状である。出土遺物はないが、掘り込みの層位から縄文時代前期の所産と推定される。



第45図 遺跡の位置

0 250m

2号竖穴状遺構

A-V区、調査区北西隅で検出した。平面形は円形を呈し、直径約75cmである。掘り込みは、深さ30cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土中から扁平な河原石とともに石皿・磨石各1点を出土した。黒浜式・諸磯a式の土器が出土することから、縄文時代前期後葉の所産と考えられる。

3号竖穴状遺構

A-V区、2号竖穴の南側で検出した。南側は未調査である。平面形は円形を呈すると考えられ、直径は約80cmが推定される。掘り込みの深さは約30cm、やや袋状の断面形状である。出土遺物はないことから時期の確定は困難であるが、掘り込みの層序から縄文時代前期の所産と推定される。

4号竖穴状遺構

A-X区、調査区北西隅で検出した。平面形は円形を呈し、直径約80cmを測る。掘り込みの深さは約50cm、断面袋状をなす。黒浜式土器の出土があることから、縄文時代前期後葉の所産と考えられる。

5号竖穴状遺構

A-X区、4号竖穴の南側で検出した。南側の一部は未調査である。平面形は円形を呈する。直径は約80cmが推定される。掘り込みの深さは約50cmである。黒浜式・諸磯a式土器を出土することから縄文時代前期の所産と考えられる。

6号竖穴状遺構

A-XI区、調査区北西隅で検出した。平面形は円形を呈し、直径約100cmを測る。掘り込みの断面形は垂直で、深さ55cmを測る。埋没土の上～中層には炭化物、焼土が多く混在していた。底面から加曾利1式土器の破片を出土したことから、縄文時代中期中葉の所産と考えられる。

7号竖穴状遺構

A-XII区、調査区の南壁に接して検出したため、大半が未調査である。平面形は円形が想定され、直径約80cmが復元される。掘り込みの断面形は垂直で、深さは20cmである。縄文時代前期土器片が出土することから縄文時代前期の所産と推定される。

(3) 住居

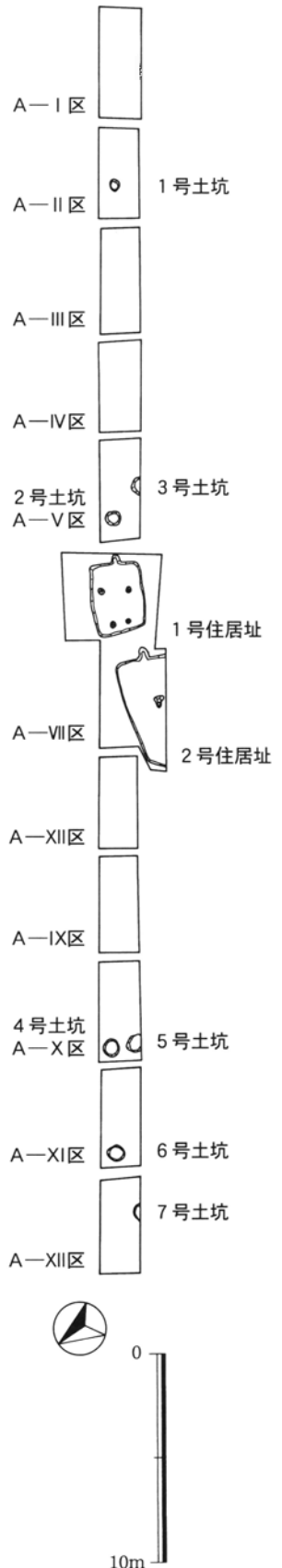
1号住居

A-VI区で検出した。平面形状は、東西方向に長辺を有する長方形を呈し、長辺(東西)3.73m、短辺(南北)2.61mを測る。長軸の方向は、ほぼ、S-25°-Eである。壁面は、斜め上方に向かって立ち上がる。その残存は、良好な南壁で約60cmである。床面の面積は、6.81m²である。

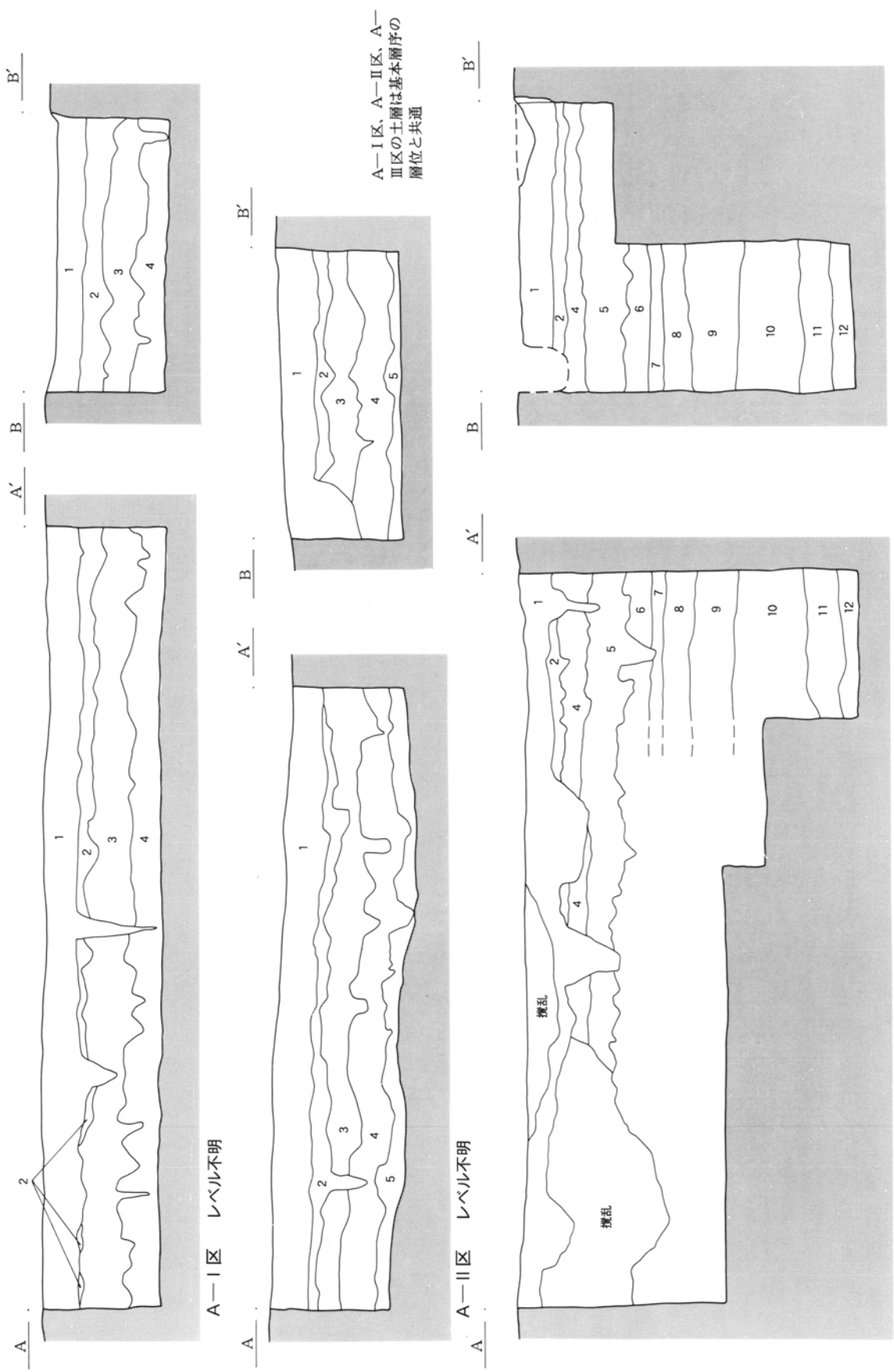
柱穴は四隅の壁面寄りに4本検出されたが、いずれも直径20cmと小規模で、掘り込みも10cm前後と極めて浅いものであった。

床面直上から出土した遺物は少量で、大半が埋没土中からの出土である。カマドの燃焼部内から土師器甕や杯、高台付椀の破片が出土している。

カマドは東壁の中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は壁面を掘り込んで設けられている。焚口部の両側は礫を据え、補強されている。煙道は削平されている。燃焼部の残存長は107cm、焚口部の幅は54cmである。燃焼部には大量の焼土が認められるとともに、焚



第46図 調査区の位置



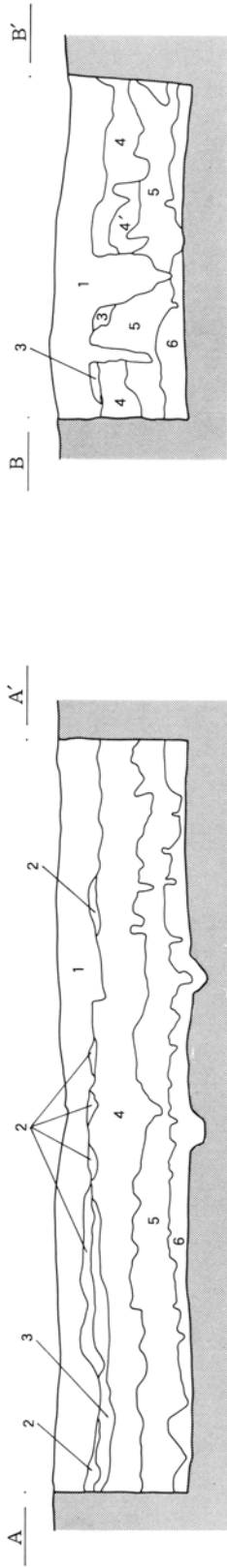
A-I区、A-II区、A-III区の土層は基本層序の層位と共通

A-I区 レベル不明

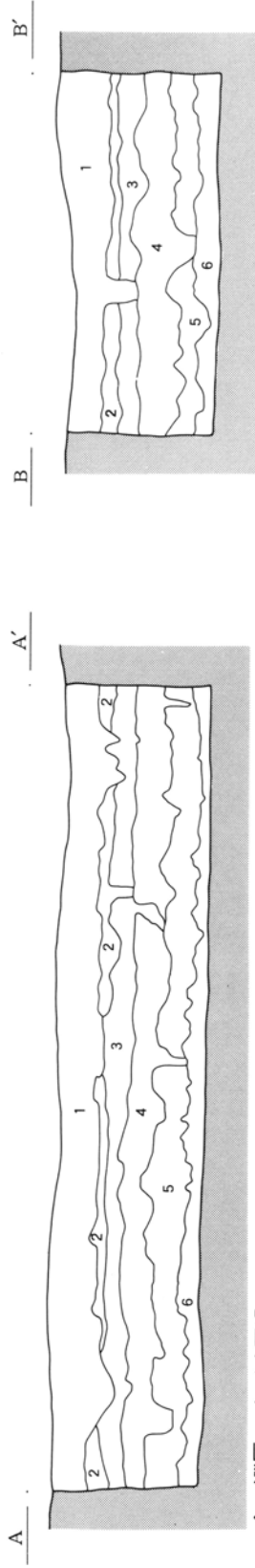
A-II区 レベル不明

A-III区 レベル不明

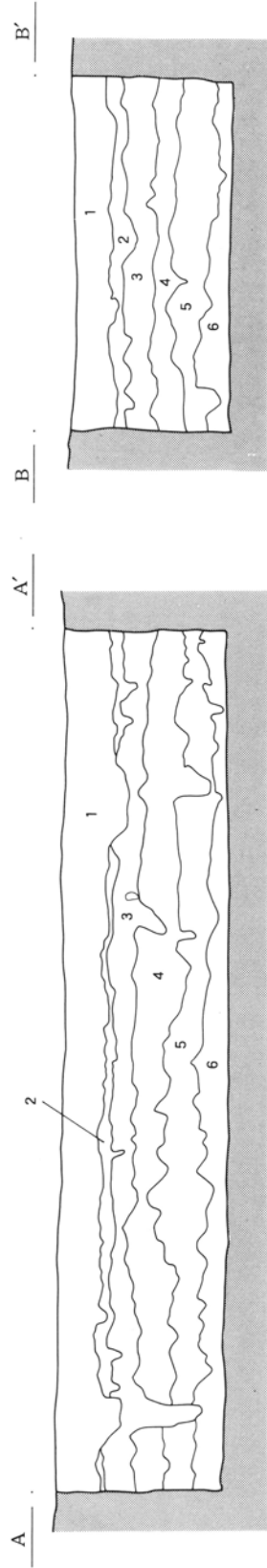
第47図 A-I区・A-II区・A-III区



A—IV区 レベル不明 各土層は基本層序の層位と共通

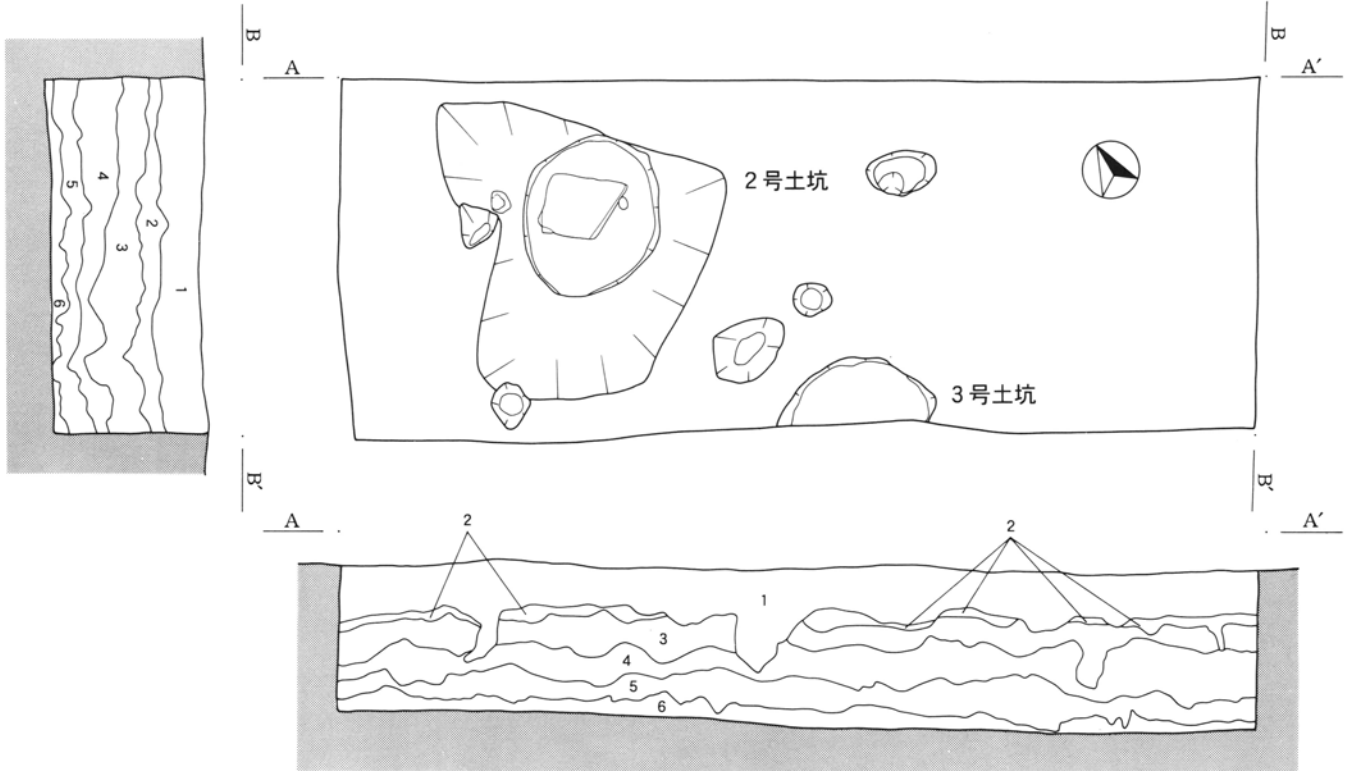


A—VIII区 レベル不明 各土層は基本層序の層位と共通

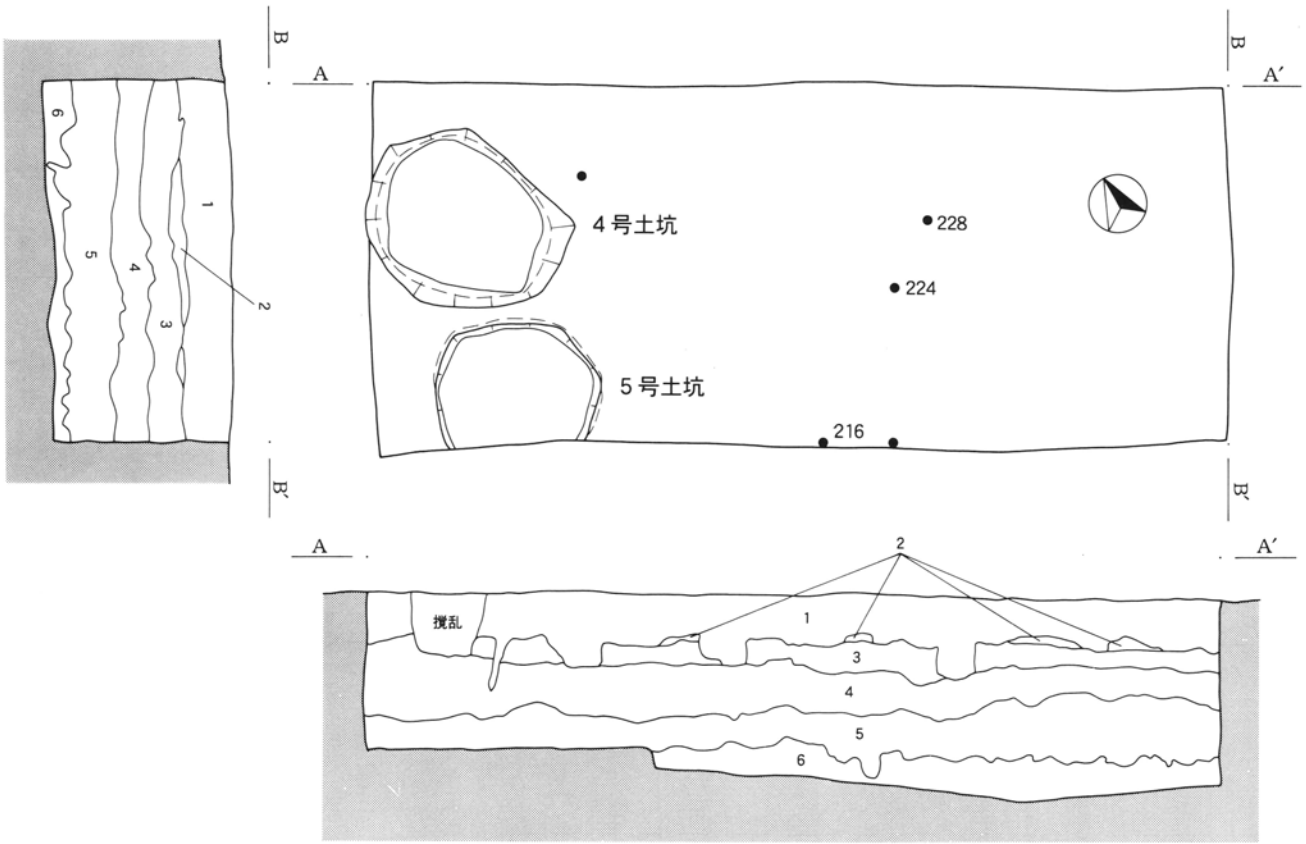


A—IX区 レベル不明 各土層は基本層序の層位と共通

第48図 A—IV区・A—VIII区・A—IX区



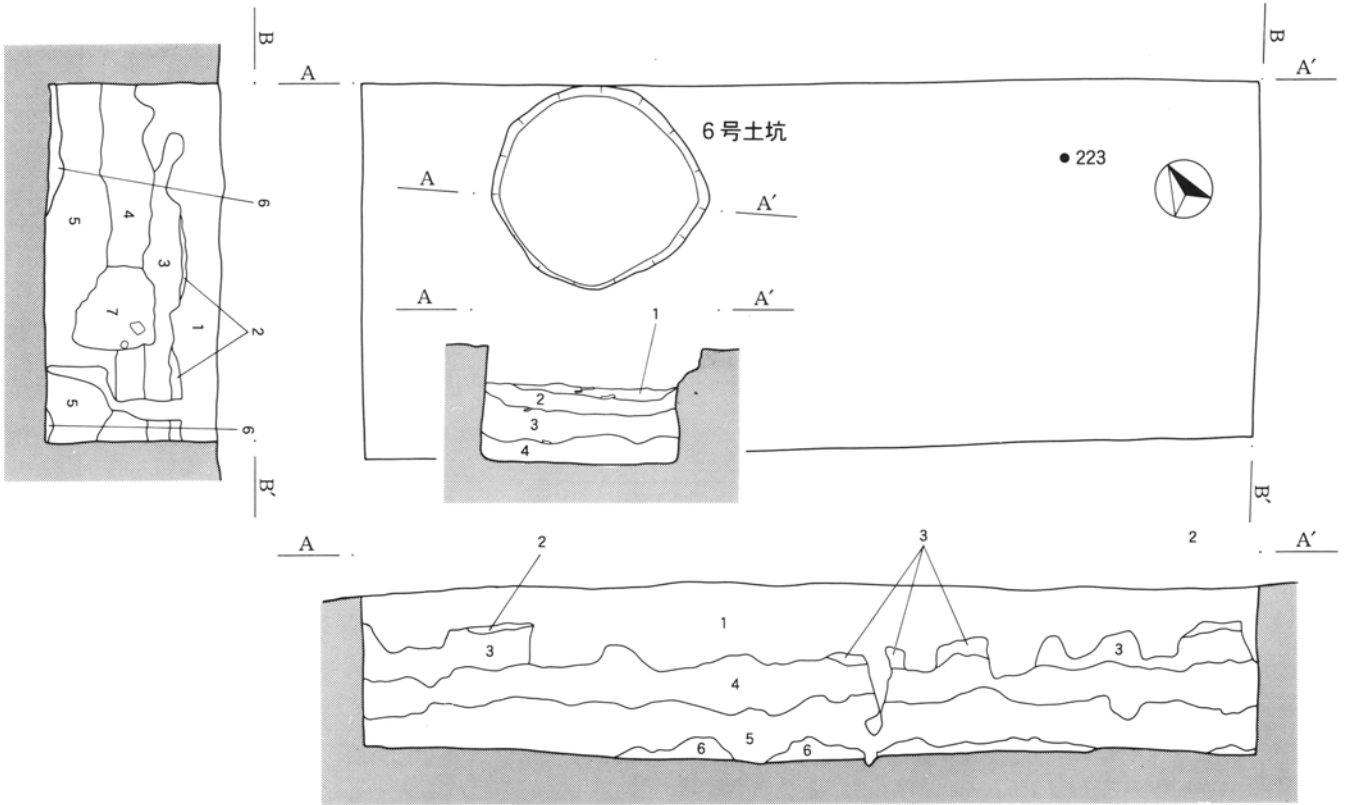
A-V区 レベル不明 各土層は基本層序の層位と共通



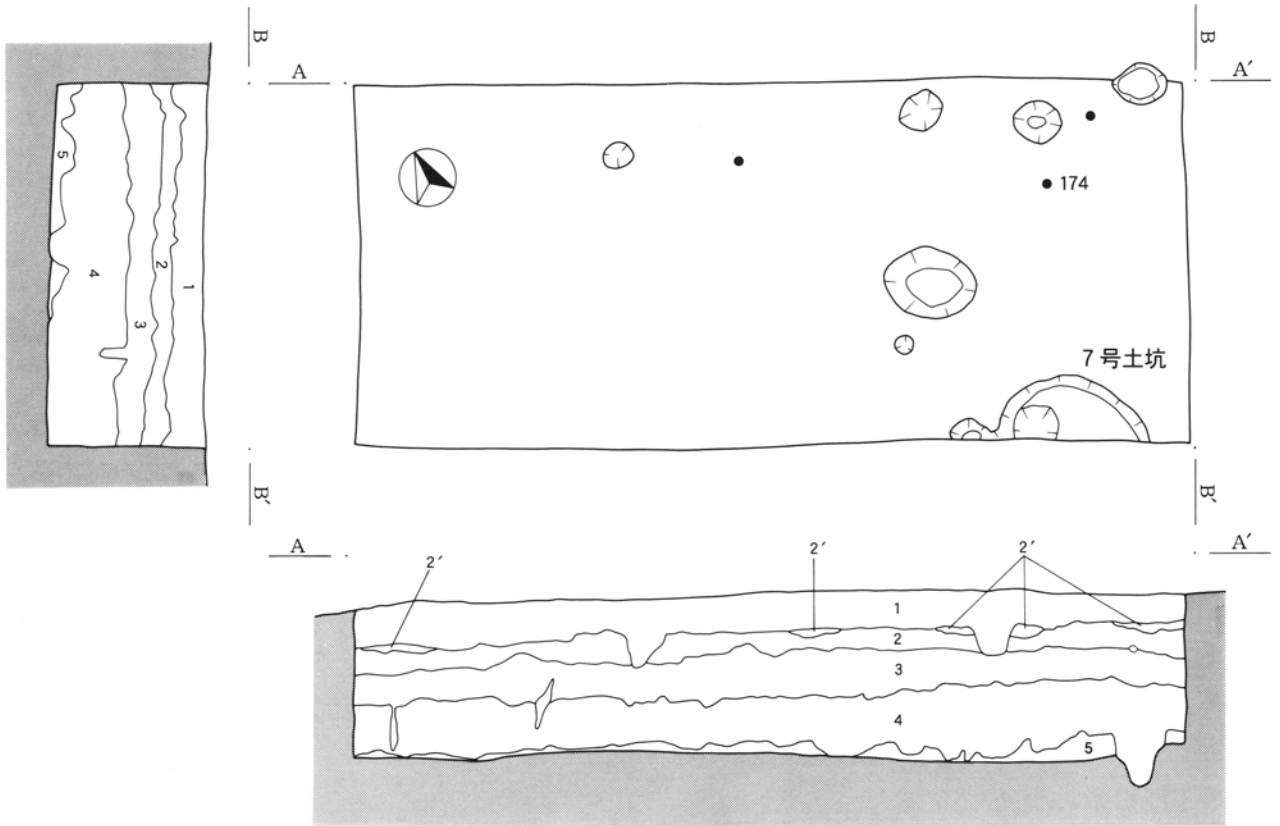
A-X区 レベル不明 各土層は基本層序の層位と共通

0 2m

第49図 A-V区・A-X区



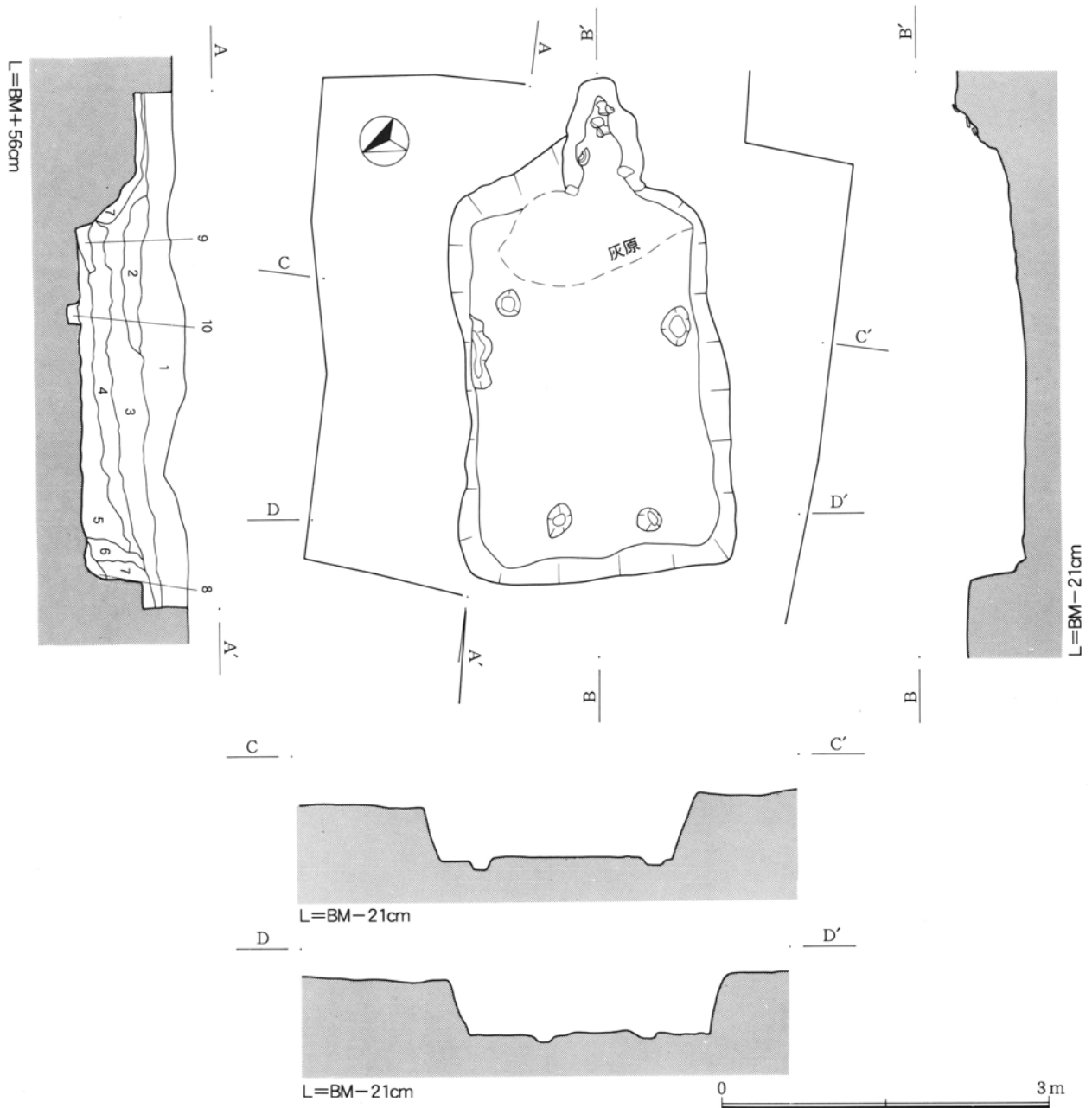
A—XI区 レベル不明 各土層は基本層序の層位と共通



A—XII区 レベル不明 各土層は基本層序の層位と共通

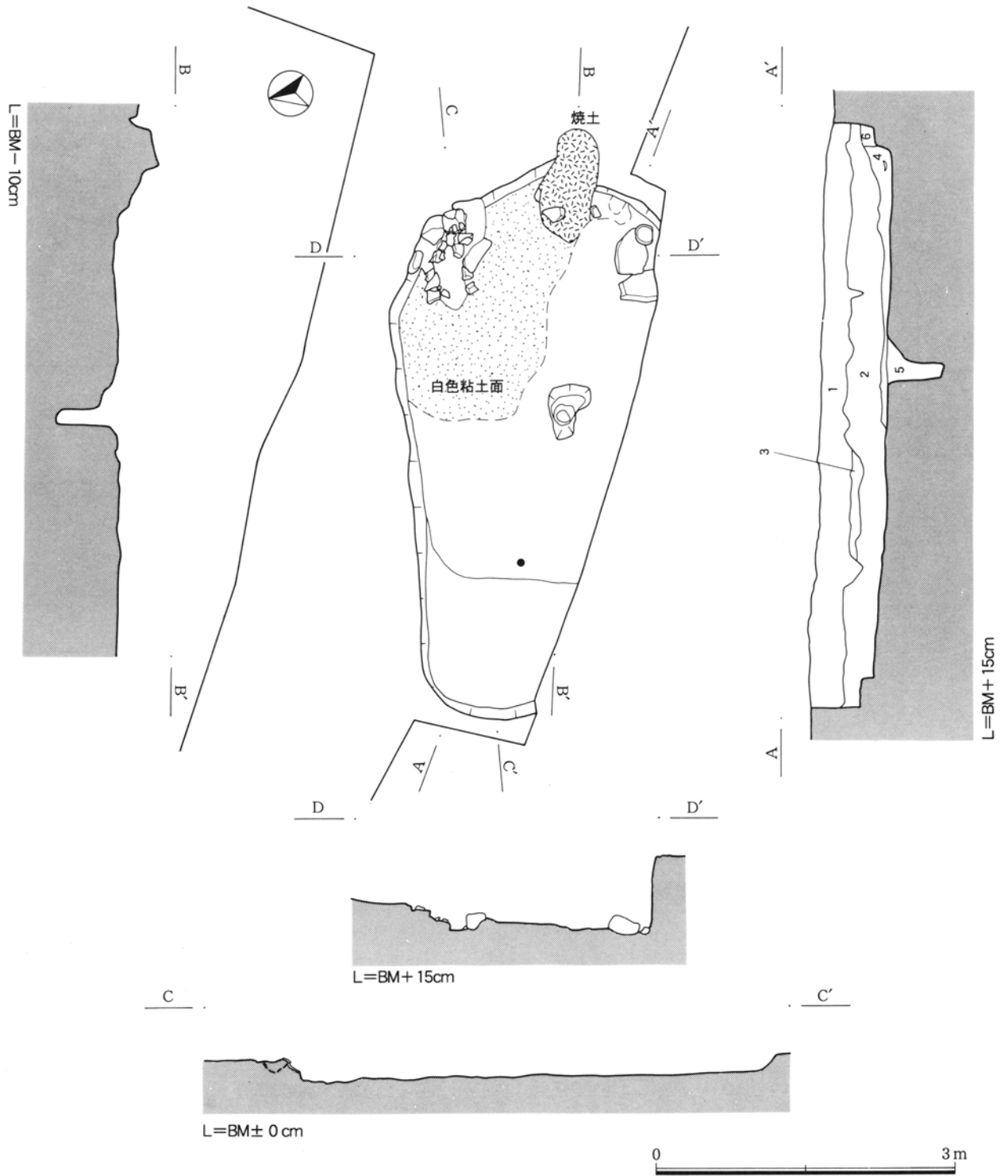
0 2m

第50図 A—XI区・A—XII区



第51図 1号住居

- | | |
|--|--|
| <p>1. 表土、耕作土層（基本層序の第1層）</p> <p>2. 黒色土層 3層よりも黒みが強い。ロームブロックの混入はほとんど無くなる。</p> <p>3. 黒褐色土層（基本層序の第2層）ロームブロックが霜降り状に混入する。住居埋没後に堆積した土層である。</p> <p>4. 黒褐色土層 3層よりも黒みがやや強く、ロームブロックが多く混在する。堆積状態は、西側壁より流れ込んだものである。</p> <p>5. 黒色土層 床面に最初に堆積した土層で、黒みが他層に比較して最も強い。ローム粒が霜降り状に混在する。4層同様、西側壁より流れ込んだものである。</p> | <p>6. 明褐色土層 明褐色土に3層、4層、5層の黒色土、黒褐色土が混在して形成されている。周壁際の土層である。</p> <p>7. 明褐色土層（基本層序の第3層）本住居築造当時の地表面と考えられ、住居破棄後、最初に住居内に堆積した土層となる。周壁が崩壊して堆積した土層である。</p> <p>8. 茶褐色土層 図面部分にのみ認められる。カマド崩壊に伴う土層で、5層より早く、4層より後に堆積したものである。</p> <p>9. 明褐色土層 ビット内にもみ堆積する土層で、7層と酷似する。貼床を造る際の埋設土であろう。</p> <p>10. ローム層（基本層序の第6層）地山</p> |
|--|--|



第52図 2号住居

1. 表土層 耕作土 (基本層序の第1層)。
2. 黒色土層 (基本層序の第2層)
3. 茶褐色土層 (1層を基本としているが、わずかに黒色土の粒子を含む)。
4. 明褐色土層 6層を基本とし、これに、焼土と白色の粘土を含み、床面に直接堆積する。この土層下の床面は堅固である。住居の壁面に近い方の床面は、加熱を受けている。
5. 柱穴埋没土
6. 明褐色土層 (基本層序の第3層—地山)

口前にも広範囲にわたり灰層が広がっていた。

本住居の廃棄の時期は、出土した土器の特徴から、10世紀前半と考えられる。

2号住居

A—Ⅶ区で検出した。平面形状は東西方向に長方形を呈すると思われるが、調査が道路建設予定地のみ限定されたため、南側の約3分の1は未調査である。長辺（東西）は3.63m、短辺（南北）の残存は2.60mである。壁面の残存高は、42cmである。調査部分の面積は、9.95㎡である。カマドは、東壁の北東隅に寄った位置にあり、長軸は東壁と直交している。燃焼部は住居内にあり、煙道部分は大半が削平されている。袖部分には礫が多様され、これに粘土を貼って構築されていた。燃焼部の残存長は100cm、焚口部の幅は30cmである。また、カマドの右側（南側）からは焼土ブロックが壁面にかぶさって検出されている。

床面はカマド寄りで白色粘土が密着状態で検出され、加熱を受けていた。中央部分は堅緻であり、北西隅寄りには軟弱であった。柱穴は、床面中央に直径26cm、深さ60cmのものが1本だけ検出された。南東隅寄りの床面からは扁平な河原石が複数個組まれたようにして検出された。

遺物はカマド燃焼部内から土師器の甕や高台付椀が出土した他、埋没土中から須恵器・土師器が出土している。

第6表 新川鍋木遺跡出土土器一覧

図No	石器名	出土区	大きさcm	厚さcm	重さg	石質	特徴
213	打製石斧	Ⅷ・Ⅸ	126×39	18	90	①	短冊型
214	打製石斧	Ⅷ・Ⅸ	86×44	15	73	②	短冊型
215	打製石斧	X	<117>×<50>	<21>	<120>	②	短冊型・一部欠損
216	打製石斧	X	<48>×<32>	<14>	<30>	③	短冊型・半欠
217	打製石斧		<89>×<54>	<18>	<97>	②	短冊型・半欠
218	打製石斧		<53>×<56>	<22>	<77>	②	分銅型?・半欠
219	打製石斧		96×84	31	213	④	分銅型・一部欠損
220	打製石斧	X	116×60	27	182	④	分銅型・一部欠損
221	凹石	I	112×84	40	527	⑤	
222	凹石	XI	100×77	48	423	⑤	
223	凹石	X	108×69	46	515	⑤	
224	磨石	V	87×75	60	587	⑤	
225	磨石		74×66	38	284	⑤	
226	多孔石	Ⅸ	<109>×<157>	<95>	<1,734>	⑤	石皿転用・半欠
227	多孔石	X	<84>×<129>	<40>	<546>	⑤	
228	多孔石		<147>×<158>	<78>	2,022	⑤	石皿転用・半欠

①珪質頁岩 ②黒色頁岩 ③雲母石英片岩 ④ホルンフェルス ⑤粗粒輝石安山岩

本住居の廃棄された時期は、出土土器の特徴から10世紀前半と考えられる。

7. 出土した遺物

(1) 縄文土器

本遺跡は、A—Ⅰ区～Ⅺ区までのトレンチ調査を実施し、縄文時代の土坑数基が確認されたのみである。しかし、トレンチの表土等から多くの縄文土器が出土している。その土器は縄文時代前期から中期にかけての土器が殆どである。各資料の出土区は001～006がⅠ区、007～015がⅡ区、016～020がⅣ区、021・022がⅥ区、023～036がⅦ区、037～047がⅧ・Ⅸ区、048～071がⅨ区、072～134がⅩ区、135～171がⅪ区、172～178がⅪ区、他は詳細不明である。

〔縄文時代前期〕

A—Ⅰ区出土の001～004、Ⅱ区出土の007、Ⅵ・Ⅶ区出土の022、Ⅶ区出土の023～027、Ⅷ・Ⅸ区出土の037・038、Ⅸ区出土の048、Ⅹ区出土の072～095、Ⅺ区出土の136～142、及び表採の196・197等が土器に該当しよう。その殆どが竹管文を多用しており、諸磯式土器の範疇に入ろう。

〔縄文時代中期〕

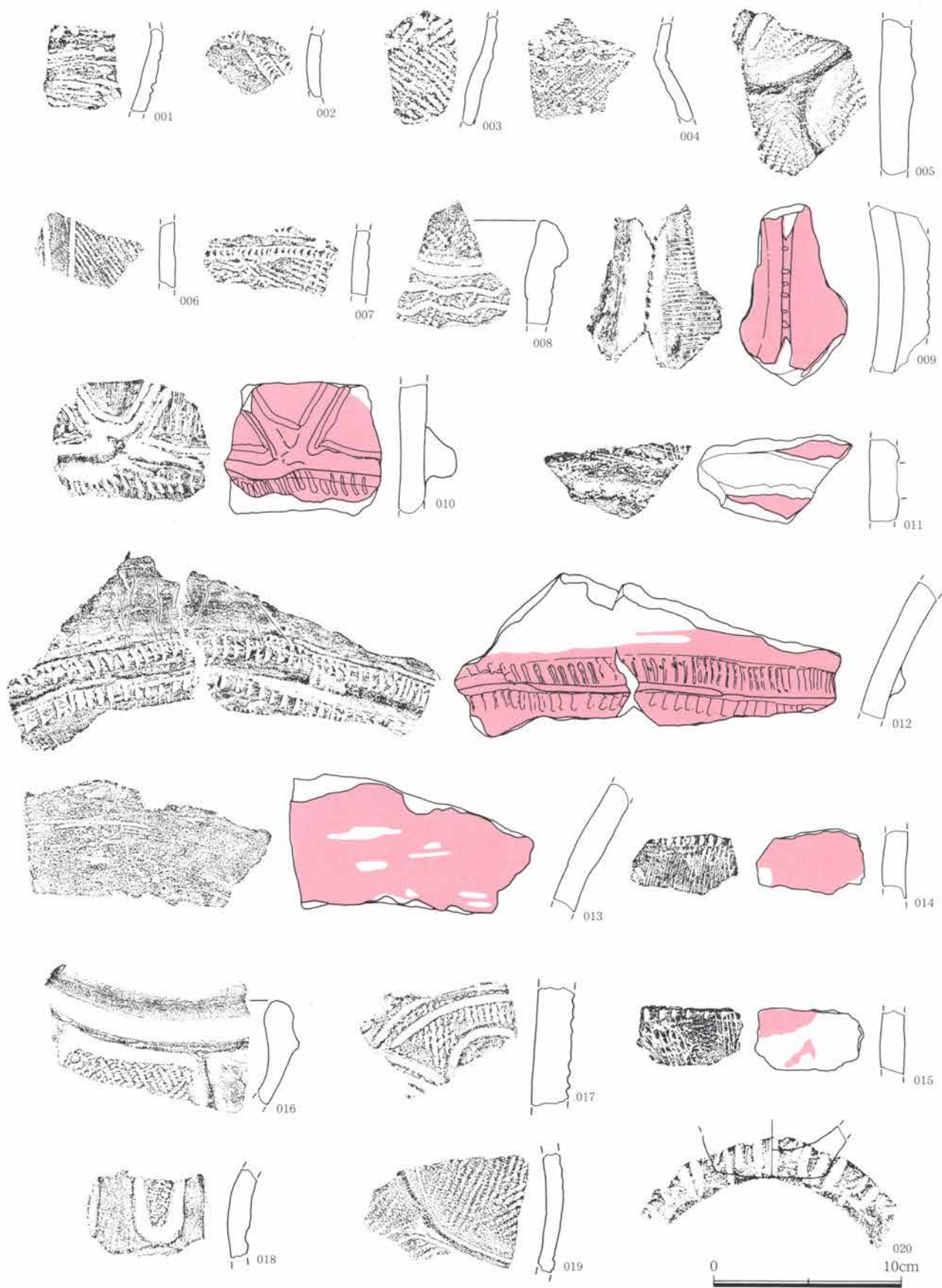
出土した中期の土器は大きく阿玉台式土器と加曽利E式土器に分類できる。Ⅱ区出土の010～013、Ⅶ区出土の028、Ⅸ区出土の052～056、Ⅹ区出土の

101～103、Ⅺ区出土の149～152、表採の199・205などが阿玉台式土器の範疇に入ろう。

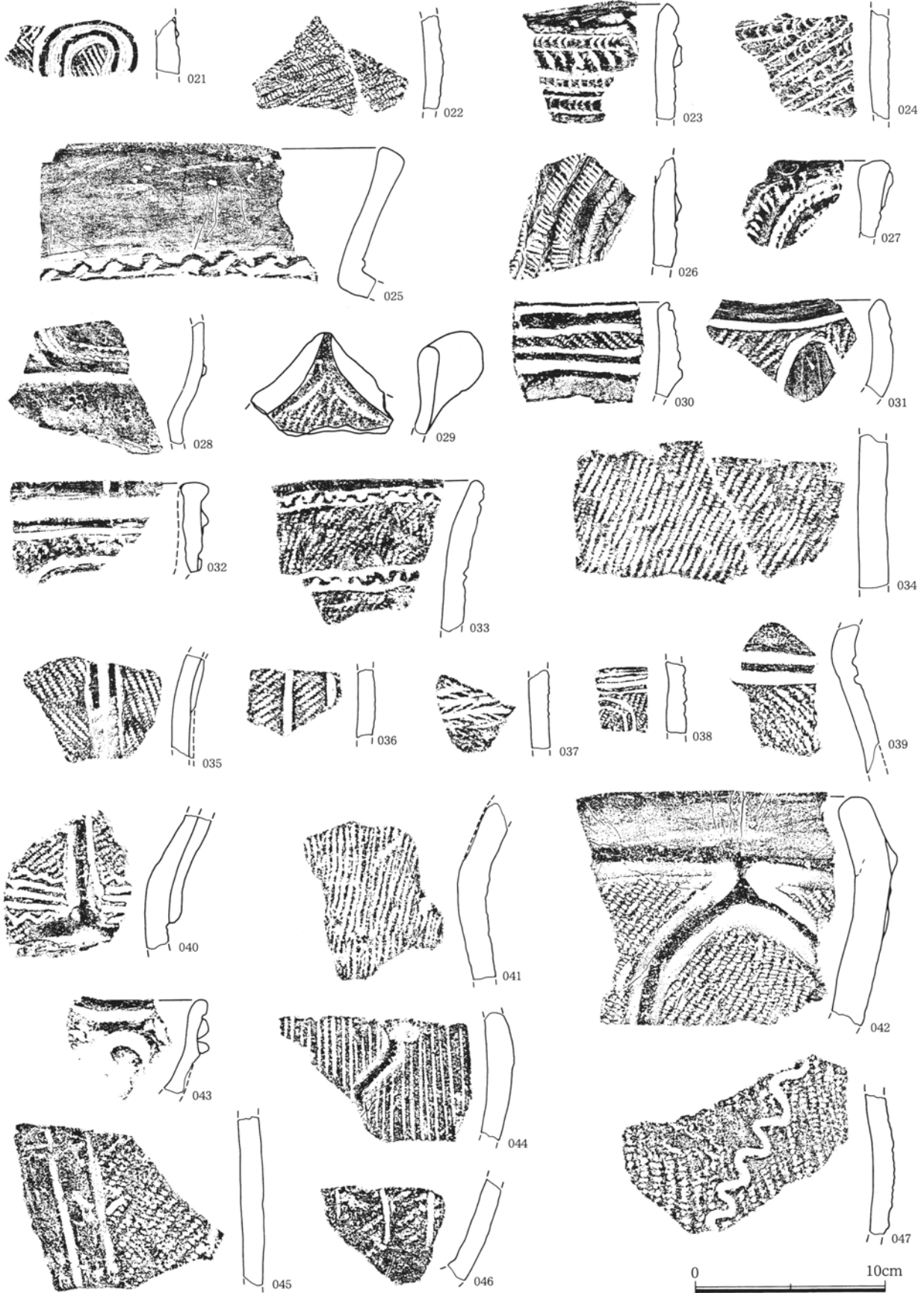
その他は加曽利E式土器に該当し、その殆どは加曽利E2～E3式土器の範疇に含まれる。

(2) 縄文時代の石器

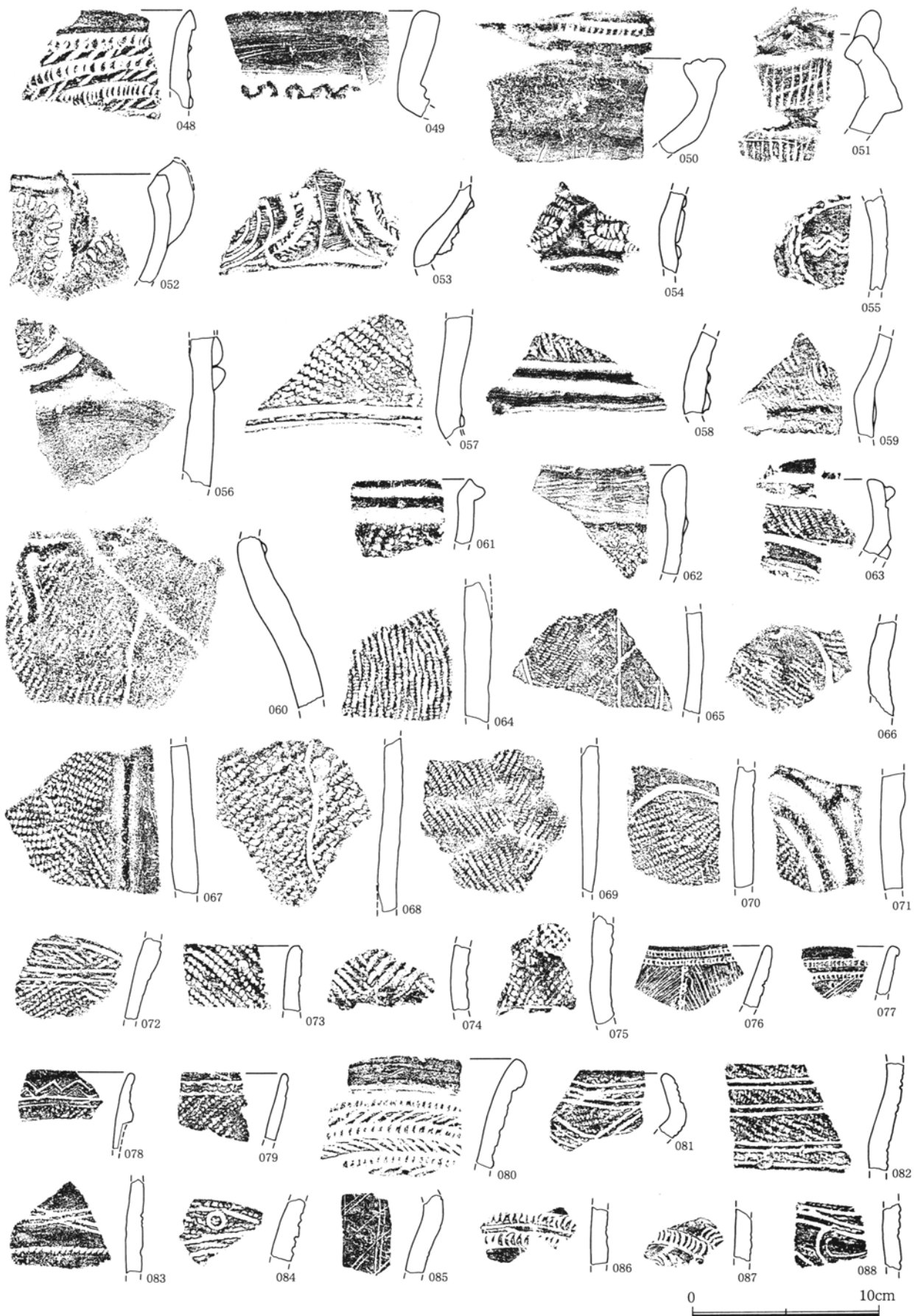
各区から、打製石斧、凹石・多孔石等が第6表のとおり出土している。



第53図 A-I・II区・IV区出土の縄文土器



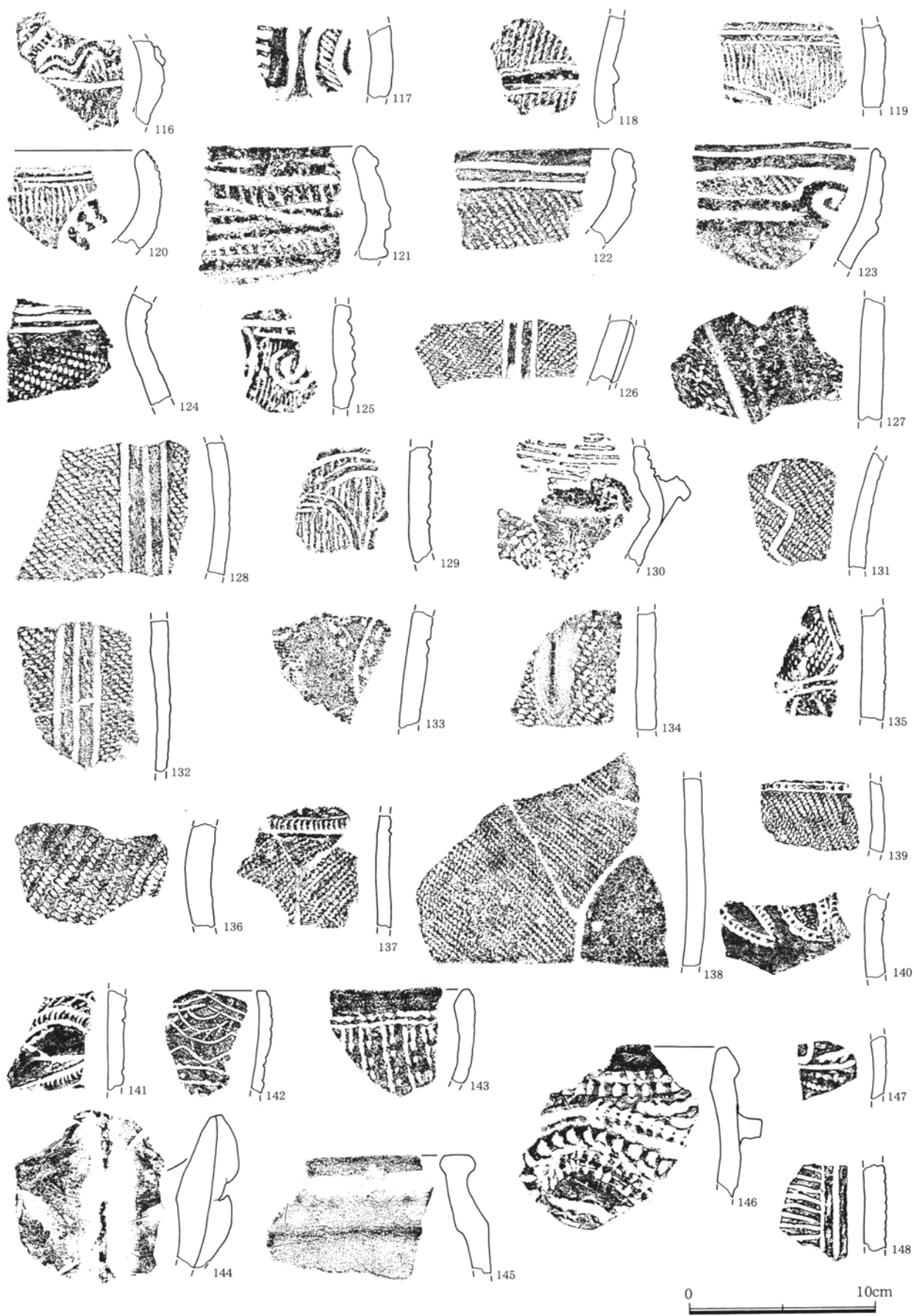
第54図 A-VI区~VIII区・IX区出土の縄文土器



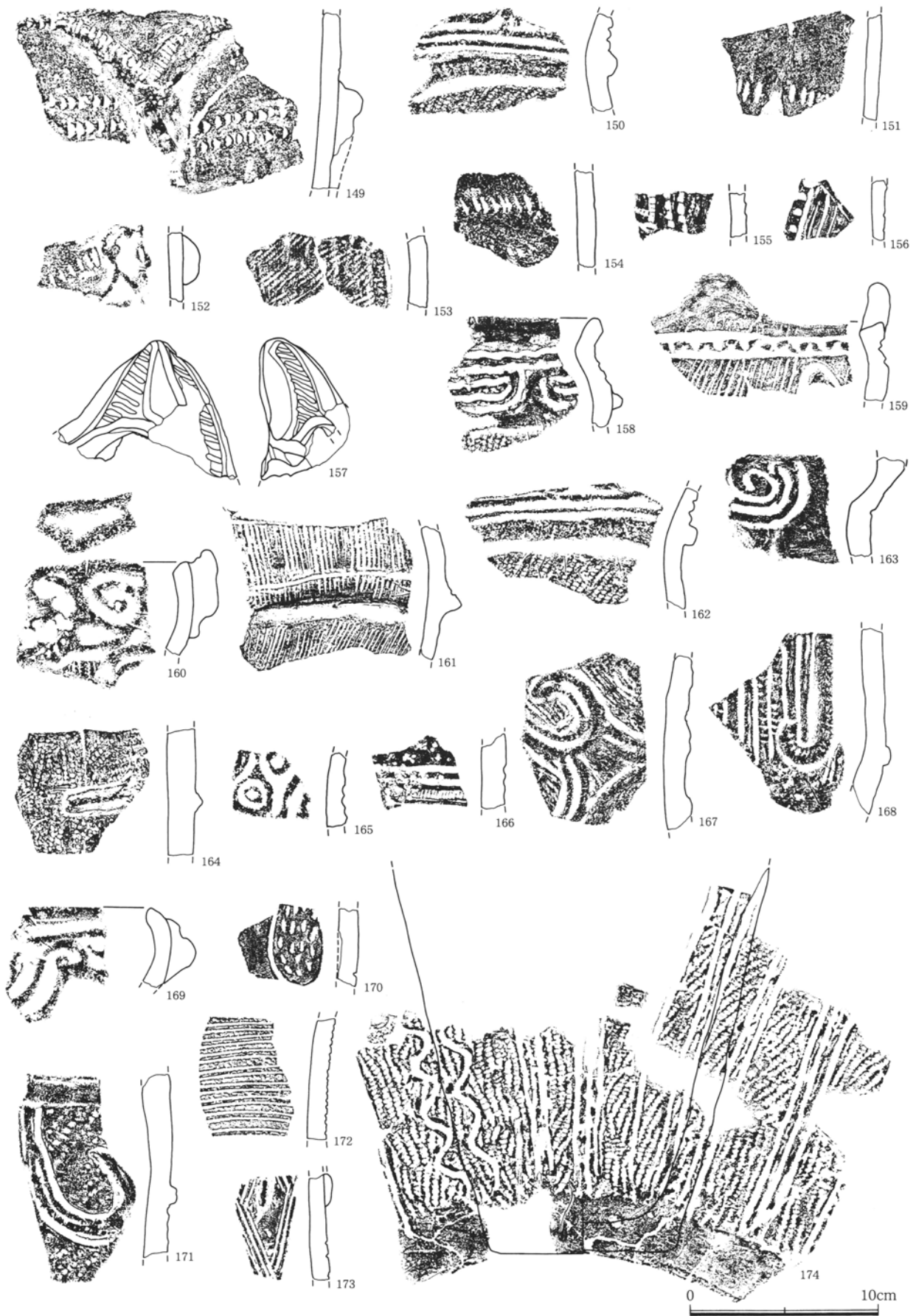
第55図 A-IX区出土の縄文土器、A-X区出土の縄文土器(I)



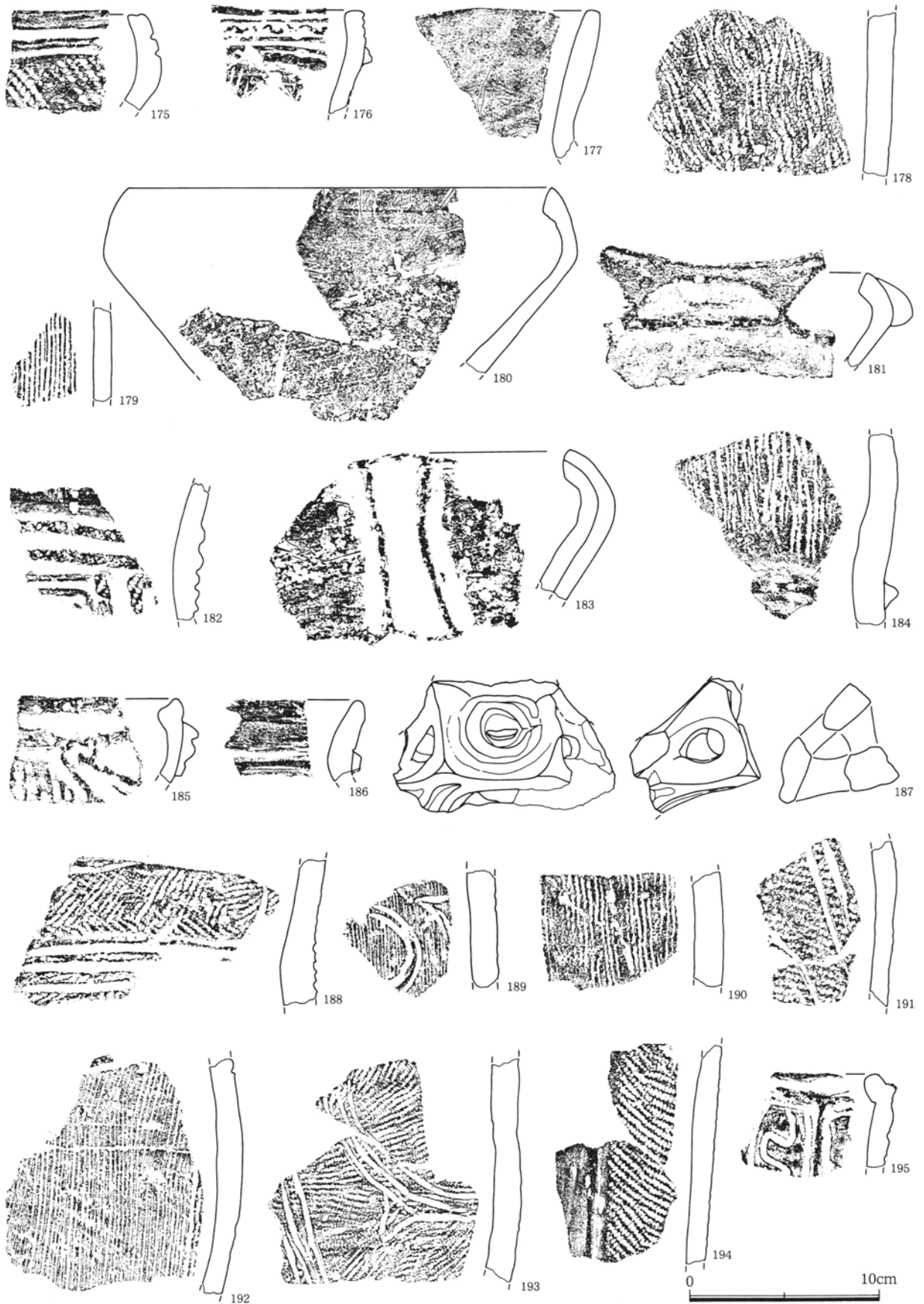
第56図 A-X区出土の縄文土器(2)



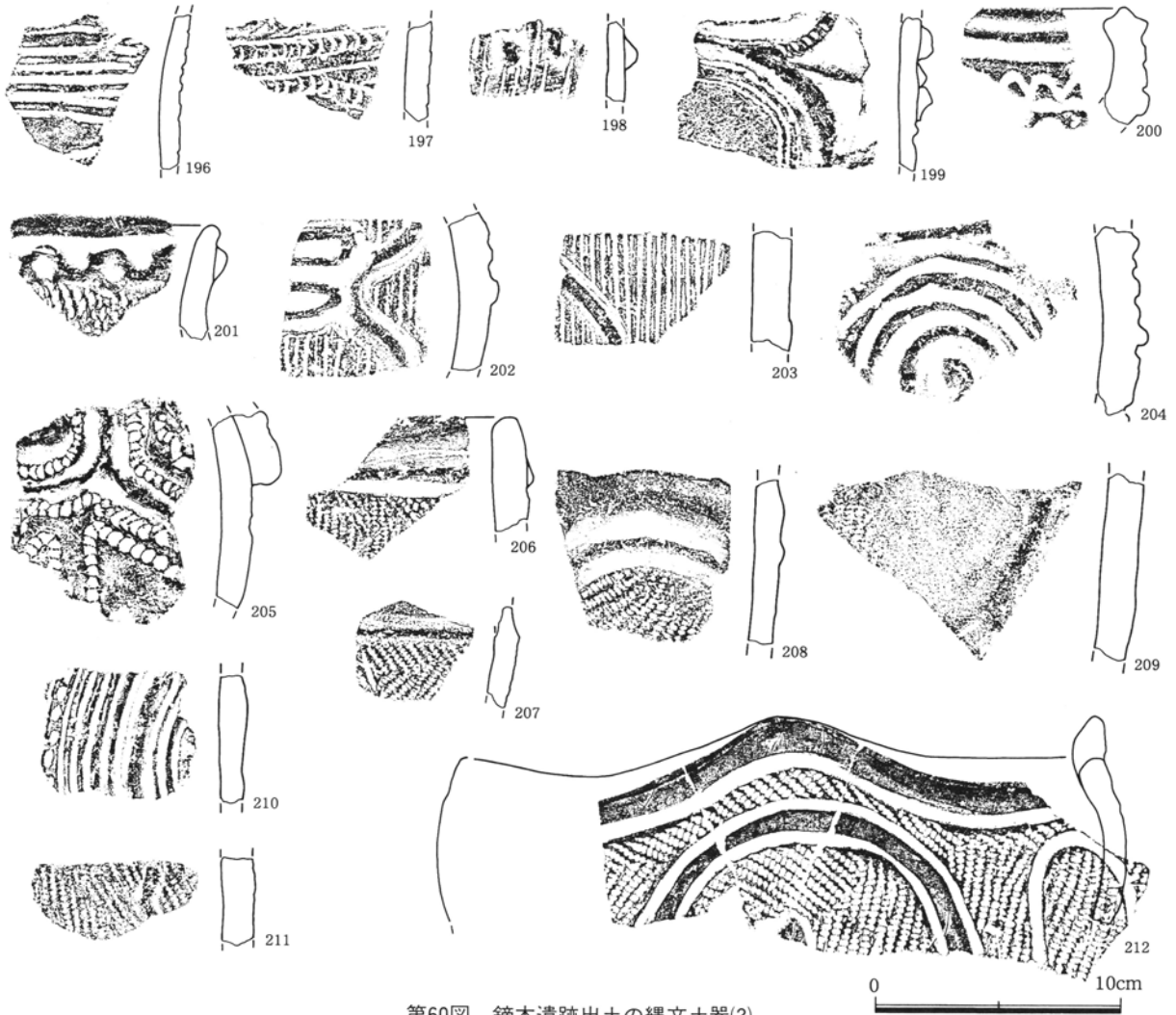
第57図 A-X区出土の縄文土器(3)、A-XI区出土の縄文土器(1)



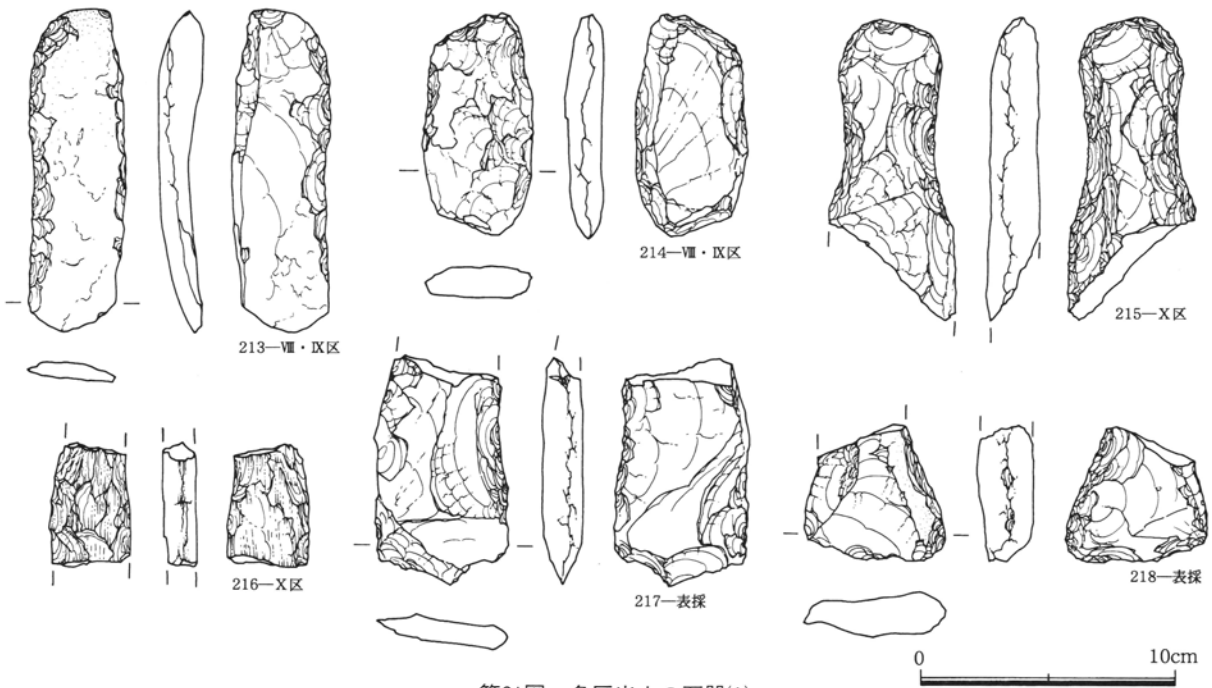
第58図 A-XI区出土の縄文土器(2)、A-XII区出土の縄文土器(1)



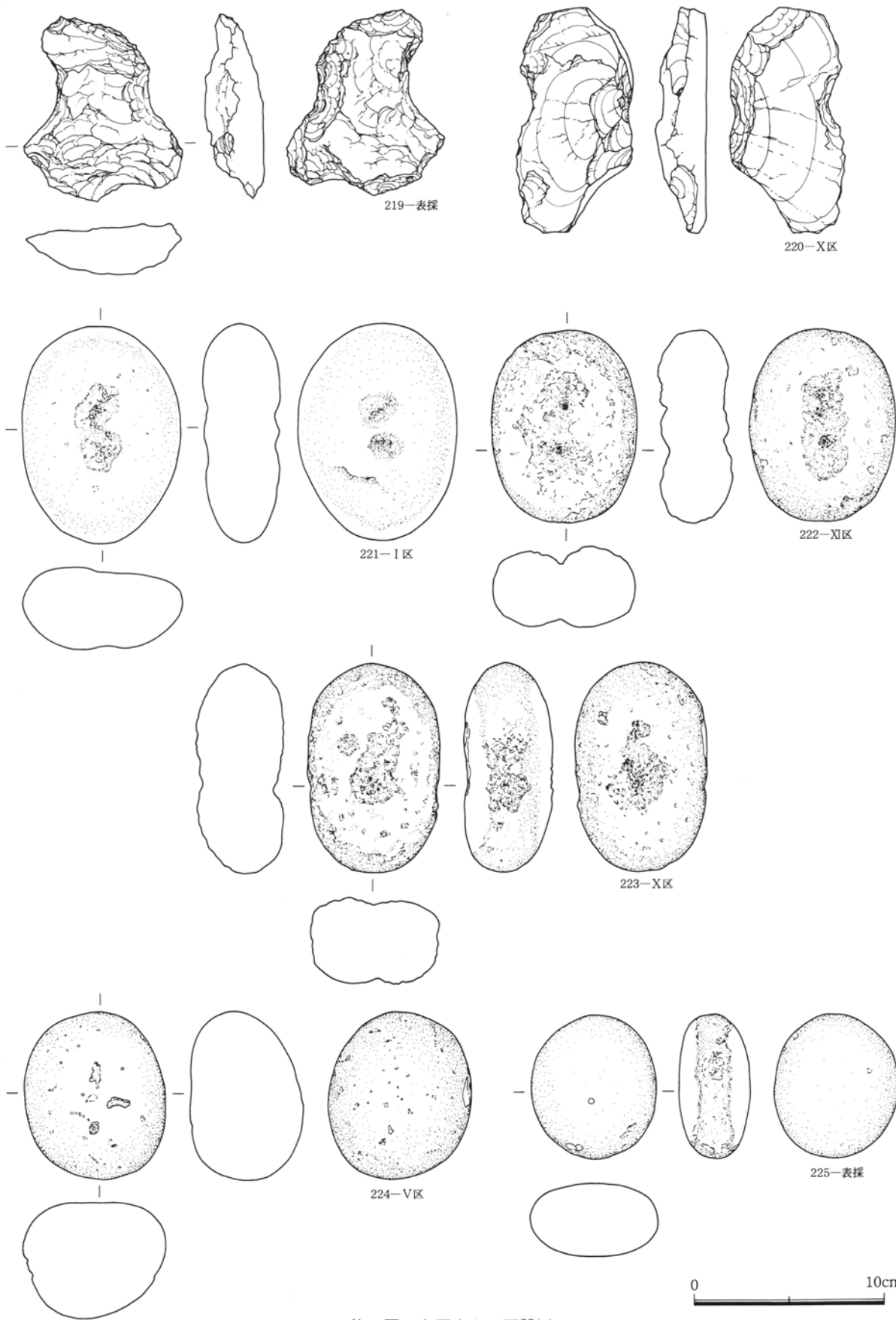
第59図 A—Ⅱ区出土の縄文土器(2)、鍋木遺跡出土の縄文土器(1)



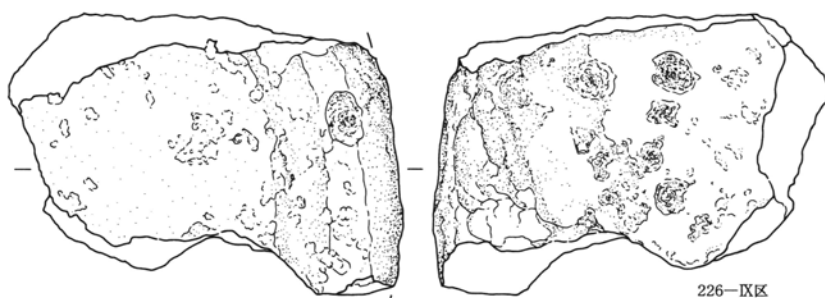
第60図 鍋木遺跡出土の縄文土器(2)



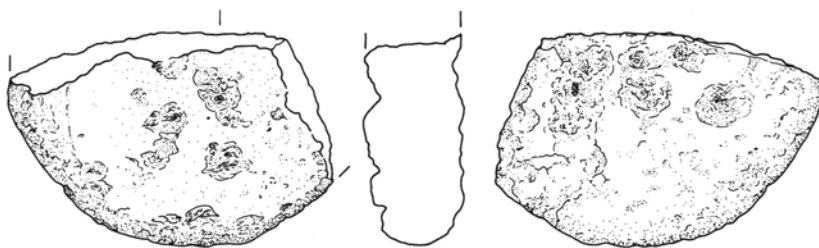
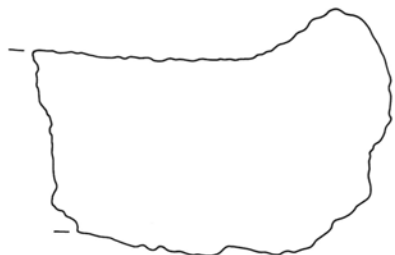
第61図 各区出土の石器(1)



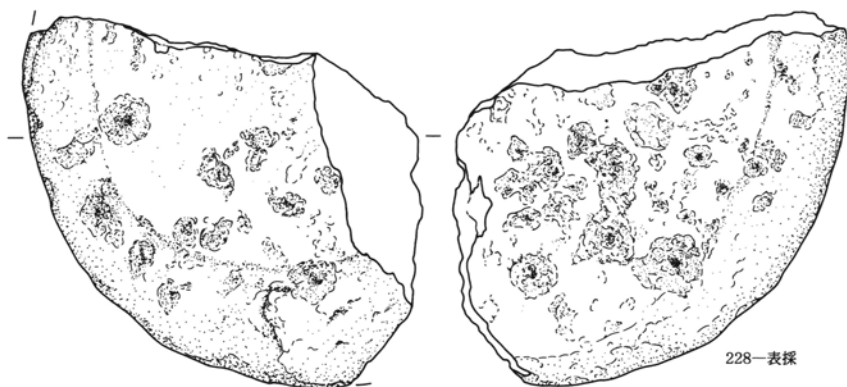
第62図 各区出土の石器(2)



226-IX区



227-X区

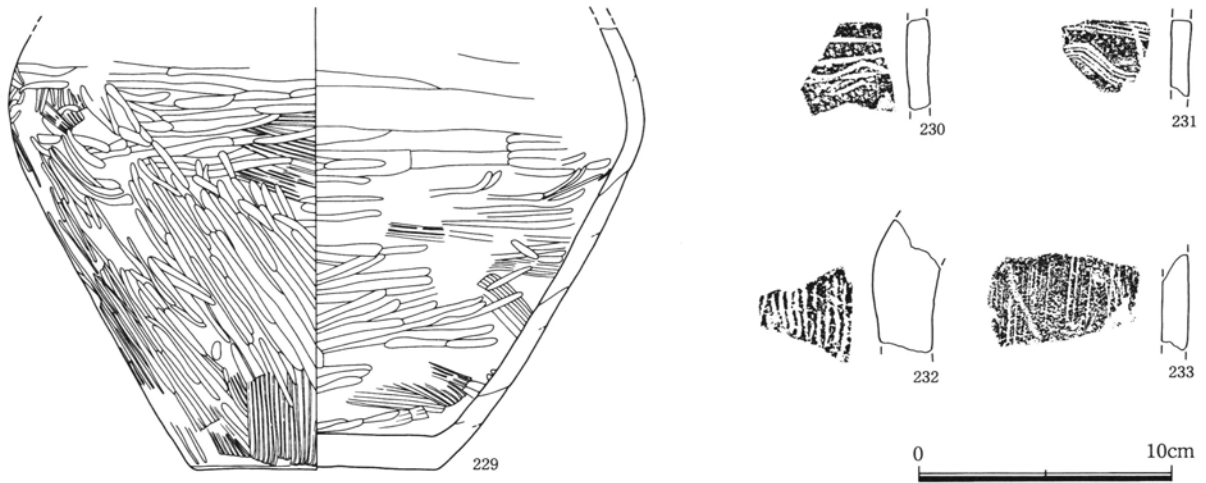


228-表採



0 10cm

第63図 各区出土の石器(3)



第64図 各区出土のその他の土器

(3) その他の土器

229から233は縄文土器・石器以外の出土遺物の一部である。掲載した資料の他に土師器・須恵器の小破片が若干出土している。229から231は弥生土器と考えられる。229は注記がなく詳細な出土位置は不明である。胴部下半の残存であるため、形状、内外面の調整の特徴から弥生時代の所産と推定される以上

の内容は、導き出せない。231の文様は波状文であることから弥生時代後半以降に位置づけられよう。230は231よりもやや太い工具による施文である。232・233は円筒埴輪であろうか。小破片のため判然としない。周辺、同一大地上には周知の古墳は存在しない。

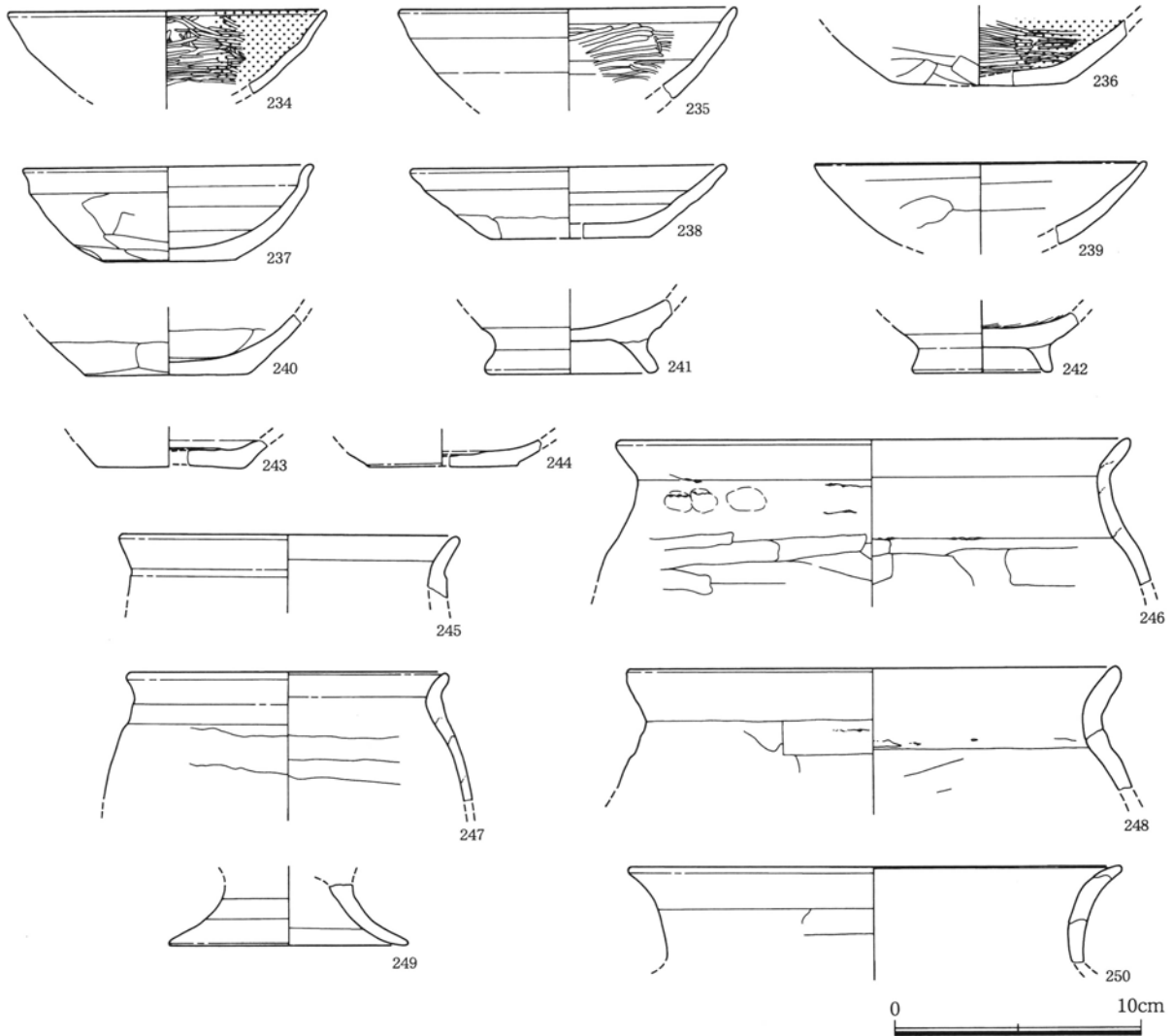
第7表 新川竊木遺跡出土遺物観察表

土器

No	挿図写真	器種	量目	出土位置(注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	特徴	備考
229	第64図 PL 38	弥生 不明	残 胴部破片	不明	①輝石・長石②に ぶい赤褐2.5YR3/ 5③酸化、普通・普通	壺か。胴部は上半を欠損するが、そろばん玉形を呈し、中位に最大径を有していたと考えられる。平底。外面はハケメを施した上に棒状工具によるミガキを重ねている。下位はタテ方向、中位はヨコ方向である。内面はヨコ方向にミガキを充填している。	
230	第64図 PL 38	弥生 不明	残 破片 高 < 3.0>	A-X区 2層	①輝石②浅黄橙10 YR8/4③酸化、普通・普通	櫛描の文様と波状文が施文されている。	
231	第64図 PL 38	弥生? 不明	残 破片 高 < 3.6>	A-X区 2層	①黒色・白色鉱物 粒②にぶい黄橙10 YR7/4③酸化、普通・普通	無節の縄文を地に、横位の沈線を施文、部分的に区画内に波状文を組み入れている。	

埴輪

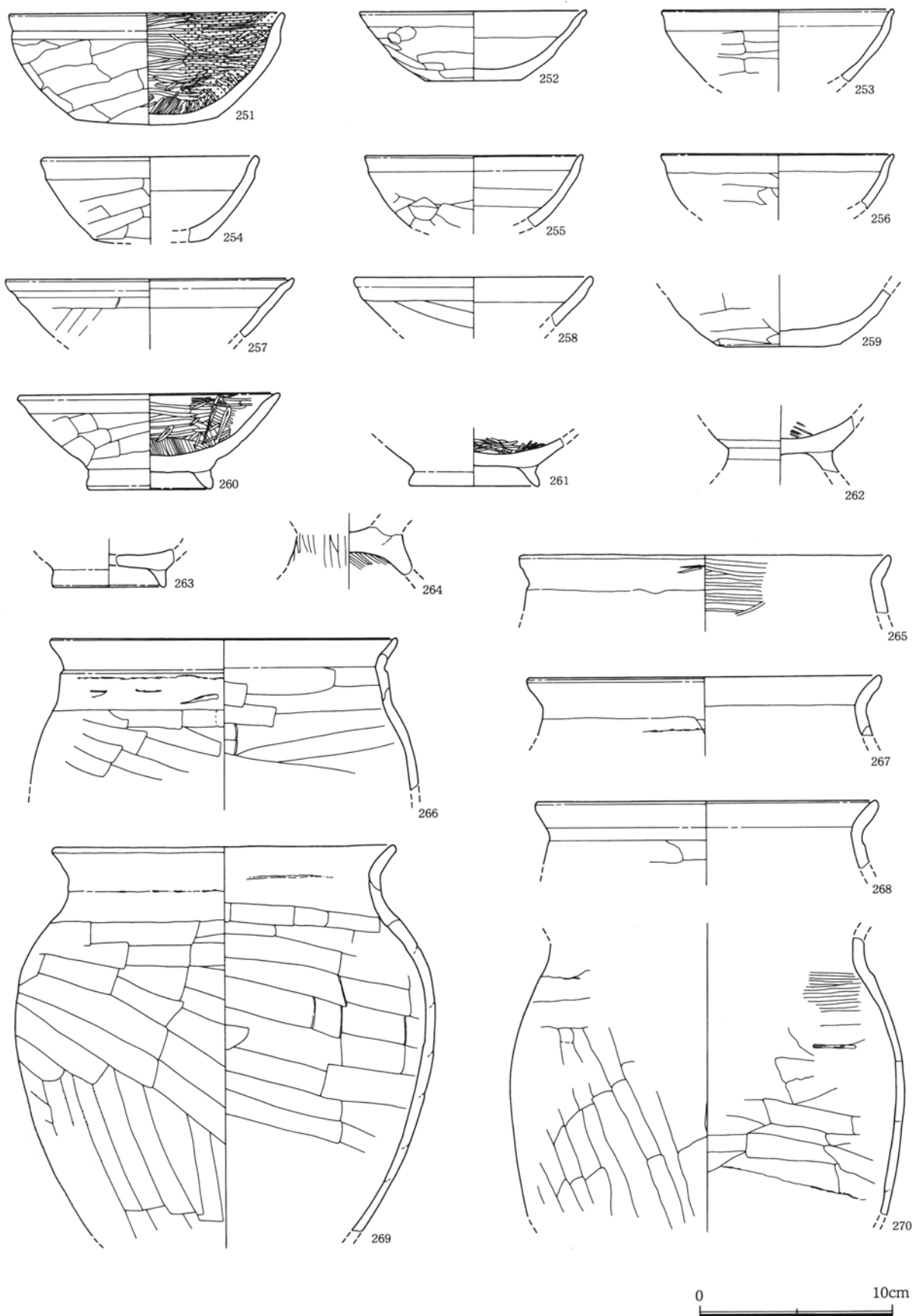
No	挿図写真	器種 量目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	口 縁	突 帯		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備 考
						形状	間 隔				
232	第64図 PL 38	円筒埴輪か 残 基底部破片 高 < 5.0>	A-X区 3 層	①粗砂②にぶい黄 橙10YR7/4③普通・普通					8	外面タテハケ。ナデ。	
233	第64図 PL 38	円筒埴輪か 残 胴部破片 高 < 3.7>	A-VIII・IX区	①黒色鉱物粒②明 黄褐10YR7/6③普通、やや軟質					12	外面、タテハケ。内面ナデ。	



第65図 1号住居出土の土器

第8表 新川鍋木遺跡1号住居出土土器観察表

No	挿図写真	器種	量目	出土位置(注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	特徴	備考
234	第65図 PL 38	土師器杯	残 口縁部破片 口 (13.0)	埋没土	①粗砂②にぶい黄橙10YR7/3③酸化、普通・普通	小破片の為、形の確定が困難、口径、器高とも検討の余地あり。	
235	第65図 PL 38	土師器杯	残 口縁部破片 口 (14.0) 高 < 3.7>	埋没土	①粗砂②浅黄橙10YR8/3(表)、にぶい黄橙10YR6/4(裏)③酸化、普通・普通	斜め上方に向けて立ち上がる。口縁部先端、ヨコナデ。内面、棒状工具によるミガキ。	外面、荒れている。
236	第65図 PL 39	土師器杯	残 底部破片 底 (7.0) 高 < 2.6>	埋没土	①粗砂②にぶい黄橙10YR6/3③酸化、普通・普通	口縁部は斜め上方に立ち上がる。外面は口縁部、底部ともヘラケズリ。内面、棒状工具によるミガキ。	



第66図 2号住居出土の土器

No	挿図 写真	器 種	量 目	出土位置 (注記)	①胎土調成 ②色 ③焼	特 徴	備 考
237	第65図 PL 39	土師器 杯	残 1/4 口 (11.9) 底 (5.3) 高 3.8	埋没土	①粗砂、雲母②に ぶい黄橙10YR7/ 3③酸化、普通・普 通	口縁部は彎曲しながら斜め上方に立ち上がる。先端は強い ヨコナデのため弱い稜が形成される。口縁部の上半には成 形時の面を残し、下半にはヘラケズリが施される。底部外 面もヘラケズリ。内面にはナデが施される。	
238	第65図 PL 38	土師器 杯	残 1/4 口 (13.0) 底 (6.5) 高 2.9	埋没土	①粗砂、白色鉱物 粒②にぶい黄橙10 YR7/3③酸化、普 通・普通	口縁部は斜め上方に向けて、外傾する。口縁部外面は先端 をヨコナデ。上半にナデの面を残し、下半にヘラケズリ。 底部外面もヘラケズリ。内面はヨコナデ。	
239	第65図 PL 38	土師器 杯	残 口縁部 破片 口 (13.6) 高 < 3.3>	埋没土	①粗砂少量②灰黄 2.5Y6/2③酸化、 普通・普通	斜め上方に向かって立ち上がる。外面、口縁部の先端、ヨ コナデ。上半にナデを残し、下半にヘラケズリ。内面はヨ コナデ。	
240	第65図 PL 39	土師器 杯	残 1/4 底 (6.6) 高 < 2.4>	埋没土	①粗砂②にぶい黄 橙10YR7/3③酸 化、普通・普通	平底。外面ヘラケズリ。内面、ナデ。	器肉が厚 いため別 器種の可 能性もあ り。
241	第65図 PL 39	土師器 高台付椀	残 台部破 片 底 (7.1) 高 < 3.0>	埋没土	①細砂②浅黄橙10 YR8/3③酸化、普 通・やや軟質	高台部はハの字状に大きく外反する。口縁部周縁はヨコナ デ。	
242	第65図 PL 39	土師器 高台付椀	残 底部 底 5.8 高 < 2.4>	埋没土	①粗砂②にぶい黄 橙10YR7/3③酸 化、普通・普通	高台部は外傾弱く延びる。口縁部外面はヘラケズリ。高台 周辺はヨコナデ。内面は棒状工具によるミガキ。	内面黒色 処理。
243	第65図	須恵器 杯	残 底部破 片 底 (6.0) 高 < 1.1>	埋没土	①粗砂少量②暗灰 黄2.5Y5/2③還 元、普通・普通	平底。左回転ロクロ成形。底部糸切り離し後無調整。	
244	第65図	須恵器 杯	残 底部破 片 底 (6.0) 高 < 1.0>	埋没土	①粗砂、白色鉱物 粒 ② 暗 灰 黄 2.5 Y5/2③ 還 元、普 通・普通	平底。左回転ロクロ成形。底部糸切り離し後無調整。	
245	第65図	土師器 甕	残 口縁部 破片 口 (14.0) 高 < 2.5>	埋没土	①細砂②にぶい黄 橙10YR6/4③酸 化、普通・普通	口縁部は短く、外傾弱く立ち上がる。ヨコナデ。	
246	第65図 PL 39	土師器 甕	残 口縁部 破片 口 (20.6) 高 < 6.7>	埋没土	①粗砂少量②灰黄 2.5Y6/2③酸化、 普通・普通	口縁部は内傾して立ち上がる。中位で屈曲、短く外傾して 立ち上がる。口縁部、ヨコナデ。胴部外面、ヨコ方向のヘ ラケズリ。内面、ヨコナデ。	外面、炭 素吸着。
247	第65図 PL 39	土師器 甕	残 口縁部 破片 口 (13.2) 高 < 5.2>	埋没土	①粗砂、白色鉱物 粒②灰黄2.5Y6/2 ③酸化、普通・普 通	口縁部は胴部から内傾ぎみに立ち上がり、上半が短く外反 する。胴部は弱く張る。口縁部ヨコナデ。胴部外面、ヨコ 方向のヘラケズリ。内面、ナデ。	
248	第65図 PL 39	土師器 甕	残 口縁部 破片 口 (22.0) 高 < 5.0>	埋没土	①粗砂②にぶい黄 橙10YR7/3③酸 化、普通・普通	口縁部は中位で屈曲、短く外傾して立ち上がる。口縁部、 ヨコナデ。胴部外面、ヘラケズリ。内面ヨコ方向のヘラナ デ。	口径が少 なくなる 可能性あ り。
249	第65図	土師器 甕	残 台部破 片 台径(9.6) 高 < 2.5>	埋没土	①細砂②にぶい黄 橙10YR7/3③酸 化、良好・良好	台部は低く、ハの字状に大きく開く。内外面ともヨコナデ。	

No	挿図 写真	器種	量目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	特徴	備考
250	第65図	土師器 甕	残 口縁部 破片 口 (20.1) 高 < 3.9>	埋没土	①粗砂②灰黄褐10YR4/2(表)、にぶい黄橙10YR7/3(裏)③酸化、普通・普通	外反し、立ち上がる。内外面ともヨコナデ。	外面、炭素吸着。

第9表 新川竊木遺跡2号住居出土土器観察表

No	挿図 写真	器種	量目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	特徴	備考
251	第66図 PL 39	土師器 杯	残 2/3 口 14.2 底 7.4 高 5.7	埋没土	①粗砂②にぶい黄橙10YR7/4③酸化、普通・普通	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。先端は強いヨコナデのため外面に稜をなす。外面は先端をヨコナデ。以下はヘラケズリ。底部外面もヘラケズリ。内面は棒状工具によるミガキ。	内面、黒色処理。
252	第66図 PL 39	土師器 杯	残 2/3 口 11.8 高 3.6	埋没土	①粗砂②浅黄橙7.5YR8/4③酸化、普通・普通	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。先端はヨコナデのため外面に弱い稜をもつ。以下は上位にナデの面を残すが他はヘラケズリを施す。内面はヨコナデ。	
253	第66図 PL 40	土師器 杯	残 口縁部 破片 口 (12.2) 高 < 4.8>	カマド内	①粗砂少量②にぶい黄橙10YR7/4③酸化、普通・普通	口縁部は斜め上方に立ち上がると思われる。口縁部先端、ヨコナデ。以下はヘラケズリ。内面はヨコナデ。	
254	第66図 PL 40	土師器 杯	残 口縁部 破片 口 (11.4) 底 (6.1) 高 < 4.4>	埋没土	①粗砂②にぶい橙7.5YR6/4③酸化、普通・普通	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。先端は強いヨコナデのため外面に弱い稜をなす。外面は一部にナデの面を残すが中位から下位にはヘラケズリが施される。内面はヨコナデ。	
255	第66図 PL 40	土師器 杯	残 口縁部 破片 口 (11.4) 高 < 3.7>	埋没土	①粗砂②暗灰黄2.5Y5/2③酸化、普通・普通	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。外面の調整は先端にヨコナデが施され、中位にナデの面を残し、ヘラケズリを施す。内面はヨコナデ。	
256	第66図	土師器 杯	残 口縁部 破片 口 (12.1) 高 < 2.9>	カマド内	①粗砂少量②浅黄2.5Y7/3③酸化、普通・普通	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。口縁部先端はヨコナデ。以下はヘラケズリ。内面はヨコナデ。	
257	第66図 PL 40	土師器 杯	残 口縁部 破片 口 (15.2) 高 < 3.0>	埋没土	①粗砂、白色鉱物粒②浅黄橙10YR8/3③酸化、普通・普通	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。先端、外面は強いヨコナデのため沈線状を呈す。先端以下の外面はヘラケズリ。内面はヨコナデ。	器面は磨滅している。
258	第66図 PL 40	土師器 杯	残 口縁部 破片 口 (12.5) 高 < 2.6>	埋没土	①粗砂②浅黄橙10YR8/3③酸化、普通・やや軟質	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。口縁部は先端がヨコナデ。以下はヘラケズリ。内面はヨコナデ。	器面は磨滅している。
259	第66図 PL 40	土師器 杯	残 口縁部 ~底部破片 底 (6.4) 高 < 3.0>	カマド内	①粗砂、白色鉱物粒②にぶい橙7.5YR6/4③酸化、普通・普通	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。外面は口縁部・底部ともヘラケズリ。内面はヨコナデ。	
260	第66図 PL 39	土師器 高台付椀	残 高台残 存 口縁部 1/4 口 (13.7) 底 (6.6) 高 4.9	埋没土	①粗砂②にぶい橙7.5YR7/4③酸化、普通・普通	口縁部は彎曲しながら斜め上方に向けて浅く立ち上がる。外面は口縁部先端にヨコナデ。以下、ヘラケズリ。内面には棒状工具によるミガキを充填する。	先端に炭素吸着。器面は荒れている。
261	第66図 PL 39	土師器 高台付椀	残 底部高 台部破片 底 (6.8) 高 < 2.5>	埋没土	①粗砂②にぶい黄橙10YR7/4③酸化、普通・普通	高台部は平底の底部からハの字状に外反する。口縁部下半から底部の外面はヘラケズリ。内面には棒状工具によるミガキ。高台周辺は貼り付け後ヨコナデが加えられる。	

No	挿図 写真	器種	量目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	特 徴	備 考
262	第66図	土師器 台付甕か	残 脚部破 片 高 < 3.0>	埋没土	①粗砂②浅黄橙10YR8/4③酸化、普通・普通	台部は低く、外反著しく延びるものと思われる。脚部内面はナデ。台部内外面にはヨコナデが施される。	
263	第66図	土師器 高台付椀	残 底部～ 高台部破片 底 (6.0) 高 < 1.9>	埋没土	①粗砂②褐灰10YR4/1③酸化、普通・普通	高台部は低く、外傾する。先端は尖る。	器面に炭素吸着。
264	第66図	土師器 台付甕	残 台部破 片 高 < 2.5>	埋没土	①粗砂②にぶい橙7.5YR7/4③酸化、普通・やや軟質	台部は低く、ハの字状に外反するものと考えられる。台部外面はタテ方向のヘラナデ。内面もナデ。	台部内面、炭素吸着。
265	第66図 PL 40	土師器 甕	残 口縁部 破片 口 (19.4) 高 < 3.0>	埋没土	①粗砂②にぶい黄橙10YR6/3③酸化、普通・普通	口縁部は短く、外傾して立ち上がる。口縁部、ヨコナデ。脚部、ヘラケズリ。内面は棒状工具によりヨコ方向のミガキを施す。	内面黒色処理。外面にも一部炭素吸着。
266	第66図 PL 40	土師器 甕	残 口縁部 破片 口 (18.2) 高 < 7.6>	埋没土	①粗砂、白色鉱物粒②明赤褐5YR5/6③酸化、普通・普通	口縁部は胴部からやや内彎ぎみに立ち上がったものが中位で屈曲、上半は外傾して斜め上方に延びる。口縁部は二度に分けて強いヨコナデ。胴部は外面がヘラケズリ。内面がヨコ方向のナデ。	
267	第66図 PL 40	土師器 甕	残 口縁部 破片 口 (18.5) 高 < 3.1>	埋没土	①粗砂②にぶい黄橙10YR7/4③酸化、普通・普通	口縁部は中位で屈曲、上半は外傾して立ち上がる。内外面ともヨコナデ。	
268	第66図 PL 40	土師器 杯	残 口縁部 破片 口 (18.0) 高 < 3.5>	カマド内 と埋没土	①粗砂多量、チャート②浅黄橙10YR8/4③酸化、普通・普通	口縁部は中位に変換点を有し、それ以上は短く外傾する。内外面ともヨコナデ。	
269	第66図 PL 40	土師器 甕	残 口縁部 ～胴部1/4 口 (18.0) 高 < 19.8>	カマド内 と埋没土 接合	①粗砂、白色鉱物粒②明赤褐5YR5/6③酸化、普通・普通	口縁部は上半が緩やかに外反して立ち上がる。胴部は緩やかに張り、上位に最大径を有する。口縁部はヨコナデ。胴部外面は上位がヨコ、中位がナメヨコ、下位がタテ方向のヘラケズリ。内面はヨコ方向のナデを施す。	
270	第66図 PL 40	土師器 甕	残 胴部破 片 高 < 15.8>	埋没土	①粗砂多量②橙7.5YR7/6③酸化、普通・普通	胴部上半の破片である。外面はヘラケズリ。内面はヨコ方向のヘラナデ。	

8. 成果と問題点

平安時代の住居について

新川鍋木遺跡では、平安時代の竪穴住居を2軒調査し、その内容は、6(3)、7項に報告した。

2軒の住居は、出土した土器の様相から、両者とも10世紀前半に属すると考えられる。ともに、平面形が縦長長方形を呈し、軸線もほぼ同一方向を向いていた。

本調査が、台地上の一部分を対象とした調査であったため、当該時期の遺構のあり方について、その全容を把握するには遠く及ばない、しかし、鍋木D遺跡で平安時代の竪穴住居を検出していることと考えあわせると、住居の分布は、散在的ながら、台地上一帯に集落が形成されていたものと想定される。台地の中央部分にまで、その分布が進出してい

ることは、注目される点である。

平安時代の集落は、その生産基盤を農耕においていたと考えられ、とりわけ水田耕作にその重心があったと思われる。新里村村内においても、集落遺跡の動向は、沖積地を水田耕作地へと転換して行く過程と極めて密接な関係にあることが知られている。しかしながら、本遺跡の占地する台地の東側の沖積地では、水田の存在が確認されていないことは周辺の遺跡の項で記したとおりである。あわせて、新里村内では、平安時代の炭窯を検出する遺跡が多数発見されていることも述べた。須恵器生産や瓦生産、製鉄に関連する遺跡の存在も知られている。今後は、本遺跡周辺における調査内容の充実を待ち、水田耕作以外の生産遺跡のあり方をも視野に入れたところから、本遺跡の立地に関する検討を行う機会を得たいと考える。

第4章 井出二子山古墳の調査

1. 調査の経過

調査は、1971（昭和46）年11月15日から12月8日にわたって実施された。

群馬町井出地区伊勢廻および、保渡田地区では、群馬用水の整備に伴い、畑地灌漑整備を目的とした圃場整備事業が計画された。

井出二子山古墳にかかわる調査対象地は、古墳の後円部東側の周堀部分にあたり、土地改良事業に伴う新設の道路建設予定地、3箇所である。

本古墳は、周堀部分は既に埋没し、平坦な面をなしていたが、全長100m級の前方後円墳として、群馬県西部地域、いわゆる西毛を代表する古墳の一つであり、調査当時も良好な墳丘形状が維持されていた。

調査は、記録保存を前提としたが、その注目された点に、1930（昭和5）年に後藤守一らを中心に調査された時にその存在が確認された周堀内の中島を今回も確認できるかということがあった。また、墳丘、あるいは、これを圍繞する周堀、その他外部施設の検出が目的とされ、その成果が大いに期待された調査であった。

調査区は、3本の道路予定地に沿って、それぞれ、幅2mのトレンチが配置された。

調査成果については、以下各項で記述するが、墳丘裾部、二重の周堀、後円部北側の中島の一部が検出された。その概要は、『群馬用土地改良地域埋蔵文化財発掘調査（概報）』昭和46年度として、その実績が報告されている。この中では、群馬町伊勢廻井出遺跡として、保渡田八幡塚古墳周辺の調査と合わせて、その記載が行われている。今回、報告するにあたっては、井出二子山古墳、保渡田八幡塚古墳にかかわる調査として、概報記載の遺跡名を改めた。なお、本古墳および、保渡田八幡塚古墳にかかわる調査が実施された1971（昭和46）年度は、群馬用水土地改良事業関連の調査が実施された4年目であり、本調査に先立つ1971（昭和46）年7月26日から8月3日までは、勢多郡富士見村小暮所在の十王駄遺跡で調査が実施されている。また、1972（昭和47）

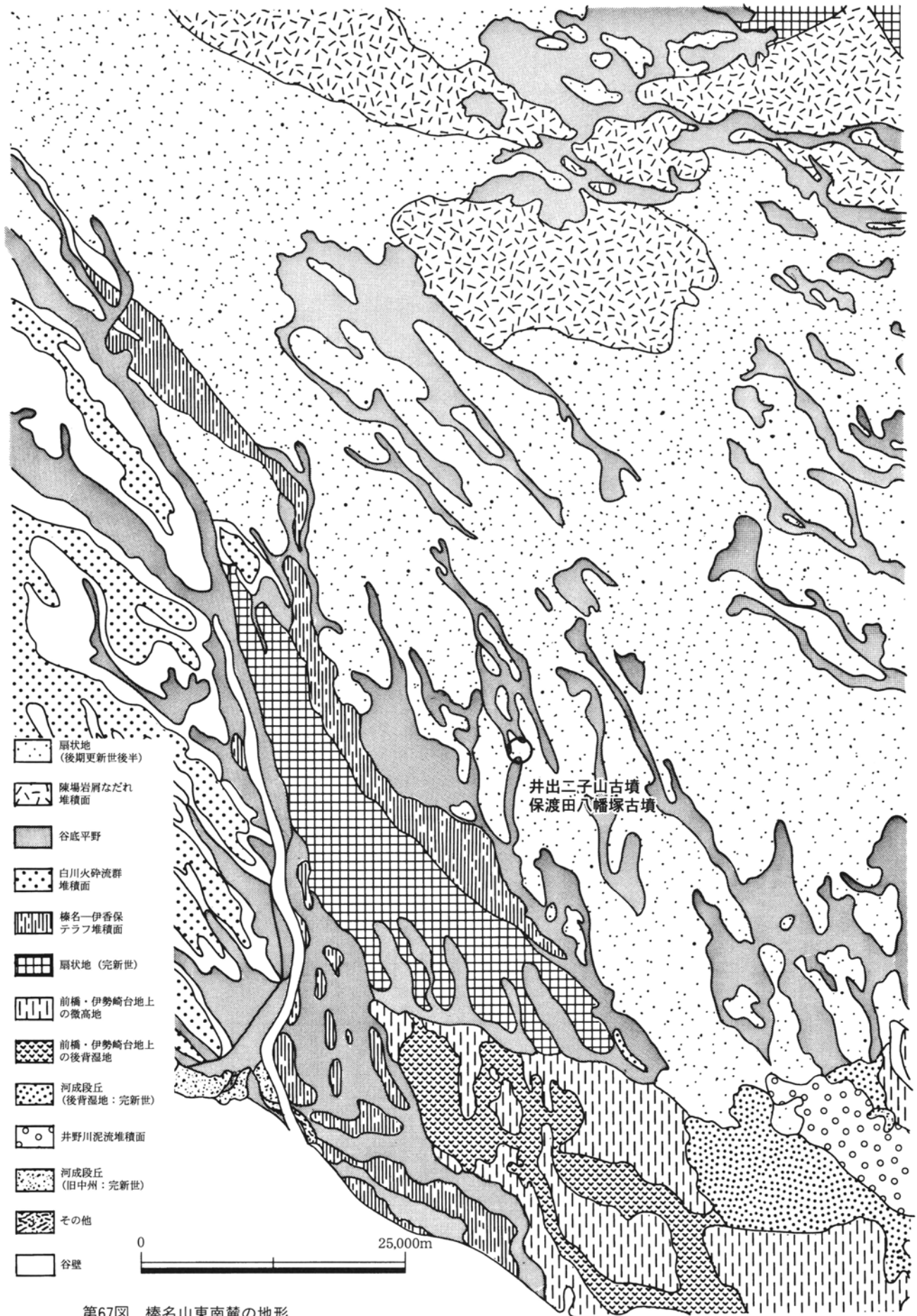
年1月16日から2月12日には勢多郡北橘村箱田所在の八幡山遺跡の調査が行われている。

2. 古墳の位置と地形

本章で報告する井出二子山古墳は、群馬郡群馬町大字井出字二子山1403—1番地を中心に、また、第5章で報告する保渡田八幡塚古墳は、群馬町大字保渡田字八幡塚1956番地を中心として所在する前方後円墳で、近接して築造された保渡田薬師塚古墳とともに保渡田古墳群を形成する。これらの古墳は、県道前橋・安中線と県道柏木沢線が交差する井出十字路から北西約1kmの方向にある。

保渡田古墳群の所在する群馬町は、群馬県の中央西部に位置する榛名山の東南麓に位置する。榛名山（最高峰掃部ヶ岳、標高1,448m）は、第三紀世の複合成層火山で、その山体は、東南麓一帯に火山山麓性扇状地が発達している。この扇状地は、相馬ヶ原と呼称され、扇端部には高燥な台地地形が形成されている。標高110mから120mで傾斜変換点をなし、上部ロームを堆積する洪積台地である前橋台地と接している。傾斜変換点よりも以南、低標高域では、扇状地内にその源を持つ、井野川、唐沢川、天王川などの中小規模の河川や、扇端部からの湧水などにより開析された沖積地が発達し、変化に富んだ微地形や崖線が形成されている。

井出二子山古墳は、井野川左岸の台地上、標高130m前後に位置する。古墳の西側を南東流する井野川の現河床との比高差は約6mである。同一台地上の北東方向、約350mの位置に保渡田八幡塚古墳が占地する。また、北方向、約480mには、「ヒドロッタ」と通称される小規模な沖積地を挟んで保渡田薬師塚古墳が築造されている。さらに、5世紀後半の豪族居館である三ッ寺I遺跡との距離は、約1.2kmである。



第67図 榛名山東南麓の地形

3. 周辺の遺跡

保渡田古墳群とその周辺の遺跡の分布については、第68・69図及び第10表に示したとおりである。ここでは古墳を中心にその概要を記したい。

保渡田古墳群を構成する三基の前方後円墳は、井出二子山古墳、保渡田八幡塚古墳、保渡田薬師塚古墳の順番に築造されたという点については、研究の現状ではほぼ衆目の一致する見解である。井出二子山古墳と保渡田八幡塚古墳については、各章でこれまでの調査成果についてふれているので、最初に、保渡田薬師塚について記述する。

保渡田薬師塚古墳は、群馬町教育委員会の調査によりその兆域の内容が明らかにされている。これによると、全長105m、後円部径66m、前方部前端幅約70mの前方後円墳である。墳丘の周囲には内外二重の盾形を呈する周堀が圍繞するものの、兆域の主軸方向の総長は165mに止まっている(井出二子山古墳の場合は215m、保渡田八幡塚古墳は190mである)。外堀の埋没土中には Hr-FA の堆積が認められたが、内堀にはこれが無かった。

墳丘は、三段築成で、旧地表を生かした上幅8mの基壇面が検出され、そこには約60cmの間隔を開けて樹立された円筒埴輪列が検出された。

主体部の舟形石棺は、凝灰岩製で、棺身の側面に2個ずつ、小口面に1個ずつ縄掛突起が付く形状で、基本的には八幡塚古墳の石棺の形状と共通している。江戸時代に石棺が掘り出された時棺内から出土したと伝承される内行花文鏡、勾玉、管玉、ガラス小玉、鋳銅製の馬具などが古墳の隣接する西光寺に保管されている。

兆域の縮小、外堀の幅が狭く、部分的に切れていること。中島が存在しないこと。基壇傾斜面に葺石が施されていないこと。円筒埴輪の樹立数の減少などの諸要素は、薬師塚古墳に先行して築造されたとする井出二子山古墳や保渡田八幡塚古墳と比較して、古墳築造に対する退化・簡略化の傾向がうかがえるものである。薬師塚古墳の築造は、5世紀末か

ら6世紀初頭の時期が当てられている。

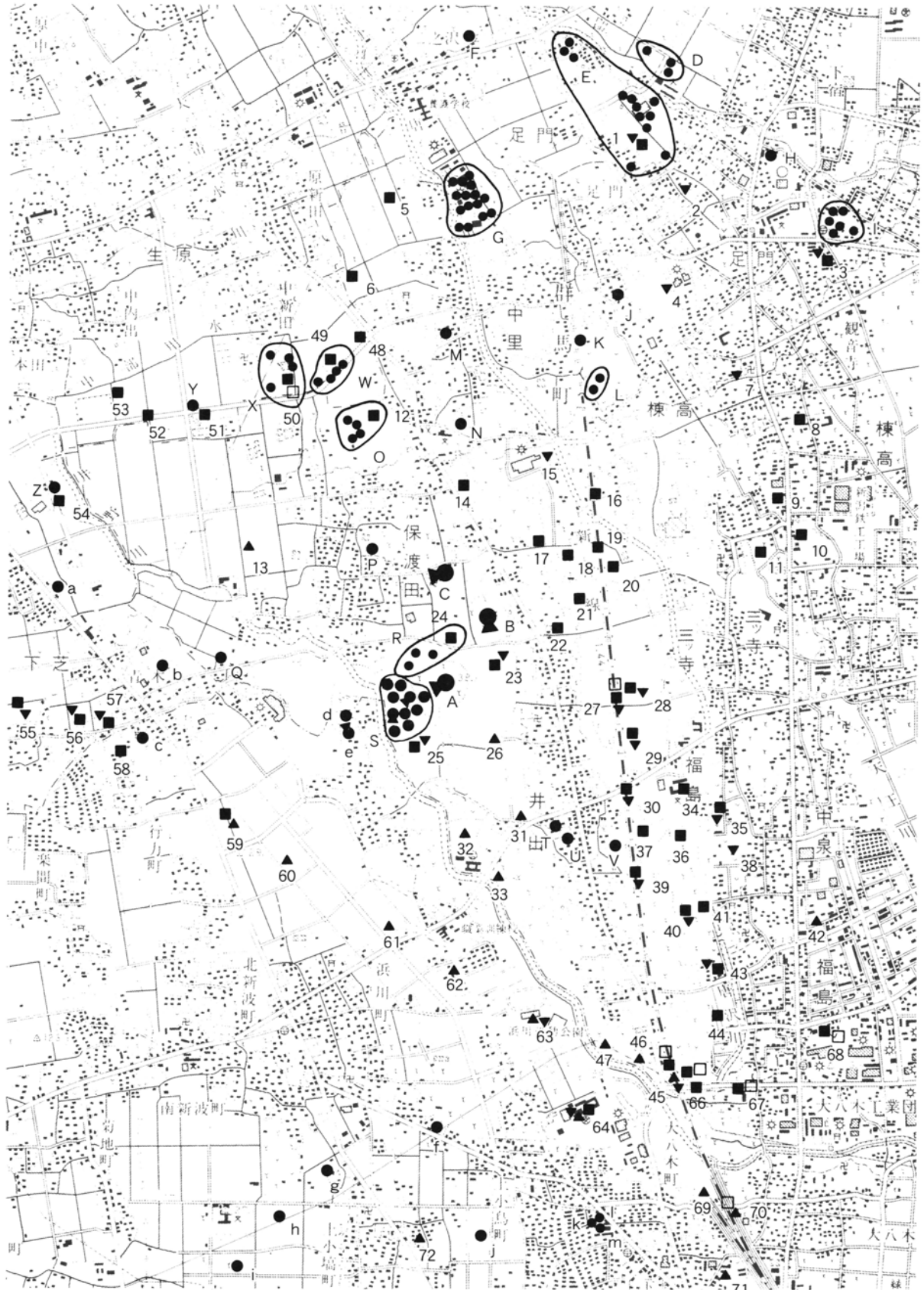
保渡田古墳群では、近年の調査により、三基の前方後円墳の周囲に帆立貝式古墳や円墳が築造されていたことが明らかになってきた。保渡田VII遺跡の調査では、井出二子山古墳の北側の調査区から二子山古墳に関連すると考えられている「突出遺構」が検出され、人物埴輪36体、動物埴輪6体、器財埴輪7体など総数56体の形象埴輪が出土している。さらにその北側の調査区からも小円墳3基が検出されている。また、井出二子山古墳の西側には数基の古墳の存在が指摘されていたところであるが、北畑古墳群として、帆立貝式古墳2基を含む10基の古墳が群在していたことが調査、確認されている。以上の古墳はいずれも三基の前方後円墳とほぼ同じ時間幅の中で築造されたものであり、三古墳に対し、従属的な関係に位置づけられるものであろう。

この他に、箕郷町下芝谷ツ古墳、高崎市浜川谷津遺跡検出の古墳が近接する調査事例として上げられる。下芝谷ツ古墳は、保渡田古墳群から西方1.2kmに位置する一辺20mの二段築成の方墳で、竪穴式石室から金銅製飾履をはじめ馬具、甲冑、装飾品等が出土している。周堀を含む墳丘の大半が Hr-FA、Hr-FP 関連の土石流、洪水層で埋没しており、このことと出土品の内容から、谷ツ古墳は、5世紀後半に渡来系集団の有力者により築造されたものと考えられている。

浜川谷津遺跡は、保渡田古墳群とは、井野川を挟んだ対岸に位置する遺跡で、全長11mの小型帆立貝式古墳と直径18mの円墳1基が検出された。これらの古墳は、Hr-FA で直接埋没していた。

保渡田薬師塚古墳以後、当該周辺地域には大型の前方後円墳の築造は知られていない。6世紀前半に築造された古墳としては、保渡田古墳群から約2.5km南南西の位置にある直径45mの大型円墳である上小埜稲荷山古墳の存在が注目される。

参考文献
群馬町誌編纂委員会『群馬町誌』資料編1 1998



● ○ 古墳・古墳群 ■ □ 集落 ▲ 水田 ▼ 畠



第68図 周辺の遺跡(I)



第69図 周辺の遺跡(2)

第10表 保渡田古墳群周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	備考	文献
A	井出二子山古墳	群馬町井出字二子山	本報告の古墳。前方後円墳(全長108m)。	1・2 3
B	保渡田八幡塚古墳	群馬町保渡田字八幡塚	本報告の古墳。前方後円墳(全長102m)。	2・3
C	保渡田薬師塚古墳	群馬町保渡田字薬師前	前方後円墳(全長105m)。5世紀末。	3・4
D	如来古墳群	群馬町金子字如来	4基程残存。	5
E	寺屋敷・蓋・鶴巻古墳群	群馬町足門字寺屋敷・字蓋・字鶴巻	円墳10基を調査。横穴式石室。7世紀。	6・7
F	お春名古墳	群馬町足門字金井沢	円墳(径約22m)。6世紀前半。変形の横穴式石室。	3
G	足門村西古墳群	群馬町足門字村西	円墳15基を調査。横穴式石室。7世紀後半。	3・8
H	東久保古墳群	群馬町足門字東久保	円墳1基を調査。7世紀前半。	3
I	北寝保窪古墳群	群馬町棟高字北寝保窪	庚申塚古墳をはじめ10基前後が存在。	3・9
J	薬師堂古墳	群馬町足門字稻荷台	円墳(径16m)。	5
K	中里天神塚古墳	群馬町中里字中道	円墳。横穴式石室。7世紀。	3・10
L	毘沙門古墳群	群馬町中里字毘沙門	円墳2基を調査。横穴式石室。7世紀。	3・5
M	屋舗古墳群	群馬町中里字屋舗	円墳が散在。	5
N	大塚山古墳	群馬町中里字押出	円墳。横穴式石室。	5
O	保渡田荒神前古墳群	群馬町保渡田字荒神前 他	円墳4基。横穴式石室。	11
P	天子塚古墳	群馬町保渡田字屋敷廻	円墳。	12
Q	愛宕塚古墳	群馬町保渡田字阿弥陀	横穴式石室。	5
R	保渡田Ⅶ	群馬町保渡田字八幡塚	形象埴輪配列の溝区画遺構。円墳3基。5世紀後半。	4・13
S	北畑	群馬町井出字北畑	帆立貝式古墳2基を含む10基の古墳。10基の竪穴系小石棺。埴輪棺。	14
T	賢海坊古墳	群馬町井出字下布留	円墳。	15
U	御庫山古墳	群馬町井出字下布留・字中原	円墳。	15
V	化城寺山	群馬町井出字村内	円墳。	5
W	海行A	箕郷町生原字海行	円墳5基を調査。6世紀後半～7世紀初。(調査センゲンツカを含む。)	16
X	善龍寺前	箕郷町生原字善龍寺前	円墳4基を調査。7世紀。	17
Y	飯盛	箕郷町生原字飯盛	円墳1基を調査。7世紀前半。	16・17
Z	東金沢	箕郷町上芝字東金沢	FP洪水層下の古墳。	17
a	四ッ谷古墳	箕郷町上芝字四ッ谷	埴輪・鏡・直刀・玉類・馬具類出土。	18
b	下芝・谷ツ古墳	箕郷町下芝字谷ツ	方墳(一辺約20m)。5世紀後半築造。	19
c	榛名社神社古墳	高崎市行力町字榛名社	円墳(径25mか)。7世紀。	20
d	浜川谷津遺跡1号墳	高崎市浜川町字谷津	前方後円墳(全長10m)。5世紀後半。	21
e	浜川谷津遺跡2号墳	高崎市浜川町字谷津	円墳か。	21
f	綜覧六郷村11号墳	高崎市上小塙町字二ノ宮	綜は「上毛古墳綜覧」の略。	22
g	上小塙稻荷山古墳	高崎市上小塙町字稻荷前	円墳(径45m)。横穴式石室。6世紀前半。	23
h	綜覧六郷村13号墳	高崎市上小塙町字冷田		22
i	綜覧六郷村14号墳	高崎市上小塙町字十一坊		22
j	綜覧六郷村8号墳	高崎市上小島町字森上		22
k	綜覧六郷村10号墳	高崎市上小島町字石塚		22
l	綜覧六郷村7号墳	高崎市上小島町字石塚		22
m	綜覧六郷村9号墳	高崎市上小島町字石塚		22

No	遺跡名	所在地	古墳			奈良・平安			備考	文献
			集落	水田	畠	集落	水田	畠		
1	寺屋敷・蓋・鶴巻	群馬町足門字寺屋敷・字蓋・字鶴巻	○		C					6・7
2	足門東原	群馬町足門字東原			A					24
3	南寝保窪	群馬町棟高字南寝保窪	○		A					25
4	足門森下	群馬町足門字森下			A					25
5	保渡田II	群馬町中里字芝	○			○	○			26
6	西芝	群馬町中里字西芝	○			○				27
7	棟高平石	群馬町棟高字平石			A					25
8	西新堀II	群馬町棟高字西新堀	○							24
9	西新堀III	群馬町棟高字西新堀	○							28
10	棟高八幡街道	群馬町棟高字八幡街道	○					古墳祭祀跡。		28
11	三ツ寺玄中II	群馬町三ツ寺字玄中	○							24

No	遺 跡 名	所 在 地	古 墳			奈良・平安			備 考	文 献
			集 落	水 田	畠	集 落	水 田	畠		
12	保渡田荒神前	群馬町保渡田字荒神前	○			○			弥生後期集落。	11
13	保渡田III	群馬町保渡田字地藏前		P			○			29
14	徳昌寺前	群馬町保渡田字徳昌寺前	○			○				5
15	保渡田中里前	群馬町保渡田字中里前			P	○				30・31
16	保渡田	群馬町保渡田字鍛冶街道	○			○				10
17	押出II	群馬町保渡田字押出	○							24
18	保渡田裸薬師II	群馬町保渡田字裸薬師	○							32
19	三ツ寺III	群馬町三ツ寺字鍛冶街道	○			○				10
20	裸薬師	群馬町保渡田字裸薬師	○			○				31
21	橋場・谷頭・裸薬師II	群馬町保渡田字橋場・字裸薬師、井出字谷頭	○			○				33
22	上井出	群馬町井出字上井出	○						古墳祭祀跡。	34
23	明光寺I・II	群馬町井出字明光寺	○		P	○	○			30
24	保渡田VII	群馬町保渡田字八幡塚・字三島・字薬師前・字田宿、井出字二子山・字北畑	○							4・13
25	北畑	群馬町井出字北畑	○		○				古墳祭祀跡、道。	14
26	井出地区遺跡群(A区)	群馬町井出字伊勢巡・字北畑・字下川久保・字元井出・字同道・字中堀・字熊野・字下布留・字上井出		C A			○			33
27	三ツ寺II	群馬町三ツ寺字桁街道 他	○		A	○	○		縄文集落。	35
28	八幡街道	群馬町三ツ寺字八幡街道	○		P					31
29	桁街道II	群馬町三ツ寺字桁街道	○		P	○				31
30	三ツ寺I	群馬町三ツ寺字藤塚道上	○		○		○		豪族居館。5世紀後半。	2
31	井出下布留	群馬町井出字下布留	○							28・33
32	同道	群馬町井出字同道		C A P			○			36
33	井出中島	群馬町井出字中島	○							28
34	中林	群馬町三ツ寺字福島	○			○	○			26・37 38
35	権現原I	群馬町中泉字権現原	○		A	○				9・39
36	三ツ寺大下III	群馬町三ツ寺字大下	○							24
37	村東II	群馬町井出字村東	○							31
38	権現原II	群馬町中泉字権現原、三ツ寺字下三ツ寺	○		A	○				39
39	井出村東	群馬町井出字村東	○		A P	○	○		弥生集落。	40
40	西浦北	群馬町福島字西浦北	○		A	○				41
41	西浦北III	群馬町福島字西浦北	○							39
42	中泉村合	群馬町中泉字村合		○						24・32
43	西浦北II	群馬町福島字西浦北	○		C	○				9・39
44	西浦南	群馬町福島字西浦南	○			○				42
45	熊野堂	群馬町井出字東下井出、福島字熊野堂、高崎市大八木町字熊野堂	○	A	C	○	○		古墳周溝墓、縄文・弥生集落。	43・44 45・46
46	西下井出II	群馬町井出字西下井出		C A C A						25・31
47	西下井出	群馬町井出字西下井出								47
48	海行B	箕郷町生原字海行	○			○				16
49	海行A	箕郷町生原字海行	○			○				16
50	善龍寺前	箕郷町生原字善龍寺前	○						縄文集落。	17
51	飯盛	箕郷町生原字飯盛	○			○	○			16・17
52	佐藤	箕郷町生原字佐藤	○			○				16
53	堀ノ内	箕郷町生原字堀ノ内	○			○				16
54	東金沢	箕郷町上芝字東金沢	○			○				17
55	下芝天神	箕郷町下芝字天神 他	○		A	○	○		FA 泥流下畠。古墳祭祀跡。	48
56	下芝五反田 (群埋文・箕郷町)	箕郷町下芝字五反田 他	○		A	○	○		古墳祭祀跡。	49・50

No	遺跡名	所在地	古墳		奈良・平安		備考	文献
			集落	水田	集落	水田		
57	下芝五反田 (箕郷町)	箕郷町下芝字五反田	○	A				51
58	行力春名社	高崎市行力町字榛名社西・字榛名社	○			○	古墳中期、滑石製模造品工房。	52
59	浜川長町	高崎市行力町字長町 他	○	C		○		53
60	浜川高田	高崎市浜川町字高田 他		A C C		○		53
61	浜川館	高崎市浜川町字館 他		A C C		○		53
62	餅井貝戸	高崎市浜川町字餅井貝戸		A P C		○		47
63	御布呂	高崎市浜川町字御布呂・字殿木		A C A P	A	○		47・54 55・56
64	芦田貝戸	高崎市浜川町字芦田貝戸	○	C A P	A	○	C上水田。古墳上幅10mの大溝、祭祀跡。	47・57 58・59
65	大八木熊野堂II	高崎市大八木町字熊野堂	○				弥生集落。	60
66	大八木熊野堂	高崎市大八木町字熊野堂	○			○		61
67	雨壺	高崎市大八木町字雨壺・字伊勢廻、群馬町福島字東浦	○			○	縄文・弥生集落。	43
68	大八木箱田池	高崎市大八木町字箱田池	○			○	縄文集落。	62・63
69	大八木屋敷	高崎市大八木町字融通寺		A P		○	平安掘立柱建物。	64
70	融通寺	高崎市大八木町字融通寺、下小鳥町字神戸	○			○	弥生集落。	65
71	下小鳥町頭II	高崎市下小鳥町字町頭		A		○		66
72	上小嶋村東I・II	高崎市上小嶋町字村東		C A				67
73	棟高平石II	群馬町棟高				○		25
74	堤上	群馬町三ツ寺					○	68
75	保渡田東	群馬町保渡田字中里前・字押出				○		69
76	八幡塚II	群馬町保渡田字八幡塚				○		30
77	保渡田IV	群馬町保渡田				○		70
78	保渡田皿掛	群馬町保渡田字皿掛				○		11
79	嵯峨	群馬町井出字伊勢巡				○		33
80	中泉	群馬町中泉				○		71
81	中泉村合II	群馬町中泉字村合				○		32
82	福島	群馬町福島				○		72
83	東下井出II	群馬町井出字東下井出				○		31
84	八反畠	箕郷町生原字八反畠				○	縄文集落。	16
85	中新田	箕郷町生原字中新田				○		16
86	諏訪	箕郷町生原字諏訪				○		16
87	薬師	箕郷町生原字薬師				○		16
88	下芝・谷ツ	箕郷町下芝字谷ツ				○		19
89	下芝・原	箕郷町下芝字原				○		73
90	浜川北(西区)	高崎市浜川町字道場・字踏分				○		74
91	浜川北(東区)	高崎市浜川町字道場・字谷乙				○		74
92	谷津・道場	高崎市浜川町字谷津・字道場				○		21
93	長町・踏分	高崎市浜川町字長町・字踏分				○		21
94	高田・館	高崎市浜川町字高田・字館				○		21・75
95	榛名社	高崎市行力町字榛名社				○		76
96	一丁田・榛名社西	高崎市行力町字一丁田・字榛名社・字榛名社西・字石田				○		77
97	中屋敷(II)	高崎市行力町字中屋敷				○		78
98	江原(I)・中屋敷西(II)・上屋敷(I)・中屋敷(I)	高崎市行力町字江原・字中屋敷、北新波町字関端				○		79・80

No	遺 跡 名	所 在 地	古 墳			奈良・平安			備 考	文 献
			集 落	水 田	畠	集 落	水 田	畠		
99	六反田	高崎市北新波町字六反田					○		78	
100	中屋敷西(I)・殿田・清水(I)・舞台(I)	高崎市楽間町字中屋敷西・字殿田・字清水・字舞台					○	○	81	
101	舞台(II)・清水(II)	高崎市楽間町字舞台・字清水					○	○	82	
102	舞台(III)	高崎市楽間町字舞台					○	○	80	
103	水口替戸・石田	高崎市楽間町字水口替戸					○	○	83	
104	石神・五反田(II)	高崎市楽間町字石神・字五反田					○	○	84	
105	上野前(II)・大明神(II)・五反田(I)	高崎市菊地町字上野前・字大明神・楽間町字五反田						○	85	
106	上野前(I)・大明神(I)	高崎市菊地町字上野前・字大明神						○	86	
107	菊地遺跡群(II)	高崎市菊地町字六反田						○	87	
108	菊地遺跡群(I)	高崎市菊地町字前田・字薬師前						○	88	
109	北新波	高崎市北新波町字古城・字石神・字関前						○	89	
110	南新波大道上	高崎市南新波町字大道上						○	90・91	
111	浜川天神久保	高崎市浜川町字天神久保						○	92	
112	寺ノ内	高崎市浜川町字町東・字殿木						○	75	
113	大八木伊勢廻	高崎市大八木町字伊勢廻						○	93	
114	東山道駅路跡								94	

凡例 時代区分中の○はそれぞれの遺構の検出を表す。古墳水田・畠のCはAs-C下、AはFA下、PはFP下の水田・畠、奈良平安の○はAs-B下の水田・畠の検出を表す。

参考文献

- | | |
|--|-----------------------------------|
| 1 『井出二子山古墳』1985 群馬町教委 | 35 『三ツ寺II遺跡』1991 群埋文 |
| 2 『三ツ寺I遺跡』1988 群埋文 | 36 『同道遺跡』1983 群埋文 |
| 3 『群馬町誌』1998 群馬町教委 | 37 『中林遺跡調査概報』1983 群馬町教委 |
| 4 『保渡田VII遺跡』1990 群馬町教委 | 38 『中林遺跡』1985 群馬町教委 |
| 5 『群馬町の遺跡』1986 群馬町教委 | 39 『南部遺跡群』1994 群馬町教委 |
| 6 『寺屋敷I・蓋・鶴巻遺跡』1991 群馬町教委 | 40 『井出村東遺跡』1983 遺跡調査会 |
| 7 『寺屋敷II遺跡』1991 群馬町教委 | 41 『西浦北遺跡』1989 群馬町教委 |
| 8 『足門村西古墳群』1996 群馬町教委 | 42 『西浦南遺跡』1988 群馬町教委 |
| 9 『町内遺跡I』1993 群馬町教委 | 43 『熊野堂第三地区・雨壺遺跡』1984 群埋文 |
| 10 『三ツ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』1985 群埋文 | 44 『熊野堂遺跡(1)』1984 群埋文 |
| 11 『保渡田荒神前・皿掛遺跡』1988 群馬町教委 | 45 『熊野堂遺跡(2)』1990 群埋文 |
| 12 『群馬都市計画区域図10』1990 群馬町教委 | 46 『熊野堂遺跡(I)』1991 群埋文 |
| 13 『保渡田遺跡群VII次(1)』1989 群馬町教委 | 47 『芦田貝戸・御布呂・餅井貝戸・西下井出遺跡』1998 群埋文 |
| 14 『井出地区遺跡発掘調査現地説明会資料』1998 群馬町教委 | 48 『下芝天神遺跡・上田屋遺跡』1998 群埋文 |
| 15 『熊野道遺跡(2)』1990 群馬町教委 | 49 『下芝五反田遺跡』—古墳時代編— 1998 群埋文 |
| 16 『海行A・B遺跡』1988 箕郷町教委 | 50 『下芝五反田遺跡』—奈良・平安時代以降編— 1999 群埋文 |
| 17 『生原・善龍寺前遺跡』1986 箕郷町教委 | 51 『下芝五反田遺跡 現地説明会資料』1992 箕郷町教委 |
| 18 『箕郷町誌』1975 箕郷町教委 | 52 『行力春名社遺跡』1994 群埋文 |
| 19 『日本考古学年報39』1988 | 53 『浜川遺跡群』1998 群埋文 |
| 20 『高崎の散歩道 第7集』1978 高崎市教委 | 54 『矢島・御布呂遺跡』1979 高崎市教委 |
| 21 『道場遺跡群』1989 高崎市教委 | 55 『御布呂遺跡』1980 高崎市教委 |
| 22 『上毛古墳綜覧』1938 | 56 『御布呂II遺跡』1980 高崎市教委 |
| 23 『高崎市史研究 第2号』1992 高崎市教委 | 57 『芦田貝戸I遺跡』1979 高崎市教委 |
| 24 『町内遺跡V』1997 群馬町教委 | 58 『芦田貝戸II遺跡』1980 高崎市教委 |
| 25 『町内遺跡II』1994 群馬町教委 | 59 『芦田貝戸III遺跡』1994 高崎市教委 |
| 26 『保渡田II・中林遺跡』1982 群馬町教委 | 60 『大八木熊野堂II遺跡』1995 遺跡調査会 |
| 27 『中里遺跡群 西芝・中道・押出・薬師遺跡・毘沙門遺跡(1)』1991 群馬町教委 | 61 『大八木熊野堂遺跡』1986 遺跡調査会 |
| 28 『町内遺跡VI』1998 群馬町教委 | 62 『大八木箱田池遺跡』1983 高崎市教委 |
| 29 『保渡田III遺跡』1983 群馬町教委 | 63 『大八木箱田池II遺跡』1984 高崎市教委 |
| 30 『町内遺跡IV』1996 群馬町教委 | 64 『大八木屋敷遺跡』1995 群埋文 |
| 31 『井出西下井出II・東下井出IIIII・村東II・三ツ寺桁街道II・八幡街道・西原道南・保渡田裸薬師・中里前遺跡』1997 群馬町教委 | 65 『融通寺遺跡』1991 群埋文 |
| 32 『町内遺跡VII』1999 群馬町教委 | 66 『下小鳥町頭II遺跡』1996 遺跡調査会 |
| 33 『井出地区遺跡群』1999 群馬町教委 | 67 『上小埸村東I・II遺跡』1997 高崎市教委 |
| 34 『群馬考古学手帳 vol.3』1992 | 68 『堤上遺跡』1994 群馬町教委 |
| | 69 『保渡田東遺跡』1986 群馬町教委 |

- 70 『保渡田IV遺跡』1984 群馬町教委
 71 『中泉遺跡発掘調査報告』1983 群馬町教委
 72 『福島遺跡』1985 群馬町教委
 73 『下芝・原遺跡』1983 箕郷町教委
 74 『浜川北遺跡』1989.1997 高崎市教委
 75 『寺ノ内遺跡』1979 高崎市教委
 76 『行力遺跡群 榛名社遺跡』1990 高崎市教委
 77 『一丁田・榛名社西遺跡』1988 高崎市教委
 78 『六反田・中屋敷(II)遺跡』1986 高崎市教委
 79 『江原(I)・中屋敷西(II)・上屋敷(I)遺跡』
 1984 高崎市教委
 80 『中屋敷(I)・舞台(III)遺跡』1985 高崎市教委
 81 『中屋敷西(I)・殿田・清水(I)・舞台(I)遺跡』
 1983 高崎市教委
 82 『舞台(II)・清水(II)遺跡』1984 高崎市教委

- 83 『水口替戸・石田遺跡』1988 高崎市教委
 84 『菊地遺跡群(VI) 石神・五反田(II)遺跡』1986 高崎市教委
 85 『菊地遺跡群(V) 上野前(II)・大明神(II)・五
 反田(I)遺跡』1985 高崎市教委
 86 『菊地遺跡群(IV) 上野前(I)・大明神(I)遺跡』
 1984 高崎市教委
 87 『菊地遺跡群(II)』1982 高崎市教委
 88 『菊地遺跡群(I)』1981 高崎市教委
 89 『北新波遺跡』1982 高崎市教委
 90 『上佐野船橋II・高崎城VIII・引間III・島野神明・
 東町II・南新波大道上遺跡』1992 高崎市教委
 91 『高崎市内遺跡』1992 高崎市教委
 92 『浜川天神久保遺跡』1995 高崎市教委
 93 『大八木伊勢廻遺跡』1989 高崎市教委
 94 『推定東山道』1987 群馬町教委

4. 調査の方法

井出二子山古墳後円部東側における外部施設の検出を目的に、新設される3本の道路予定地内に、幅2mのトレンチを列状に設定した。北側の調査区列は、Nトレンチと呼称され、南側、墳丘寄りのN-1からN-4までの4区からなる。調査区列の両端の距離は、79mである。N-1トレンチは、長さ10mで、その南端は、古墳の主軸線からやや北側に寄った位置にあたる。N-2トレンチは26mの長さで設定された。N-1トレンチとの間隔は18mである。これから5m北側に、N-3トレンチが5mの長さで、さらに5mの間隔を保って長さ10mのN-4トレンチが配置された。なお、その後、事業計画に変更が生じたためであろうか、現状では、Nトレンチの東側に南北道路が設置されている。

東側の調査区列は、Eトレンチである。調査区列の西側、墳丘寄りをE-1として、E-2、E-3のトレンチが設定された。E-1トレンチは長さ10mである。次に、19mの間隔を開けて、長さ10mのE-2トレンチ、さらに3mの間隔を開けて、長さ19mのE-3トレンチが設定された。調査区列の両端の距離は60mである。

最後に、南側の調査区列Sトレンチは、E-1トレンチの南側3mの位置に最北のS-1トレンチを設定、全体の距離62mの中に、S-4までの4区を配置している。S-1トレンチの長さは、10m、これから10m隔たって長さ10mのS-2トレンチを設

定した。次に5m置いて、長さ13mのS-3トレンチ、再度5m置いて、長さ2.5mのS-4トレンチが掘削された。

調査における表土、遺構の埋没土の掘削・除去は、全て人力によって行われた。出土した埴輪は、その全てが原位置を止どめていなかったため、各調査区ごとにその出土位置を確認、一括して取り上げた。

記録類では、3本の調査区列の位置については、縮尺200分の1の平面図上に記録した。各区の土層の堆積状況については、20分の1の実測図を、周堀・葺石の状況については、20分の1の平面図を作成した。

写真には、6×9版カメラによるモノクロブローニーフィルムと、35mmリバーサルフィルムを使用し撮影した。

5. 基本層序

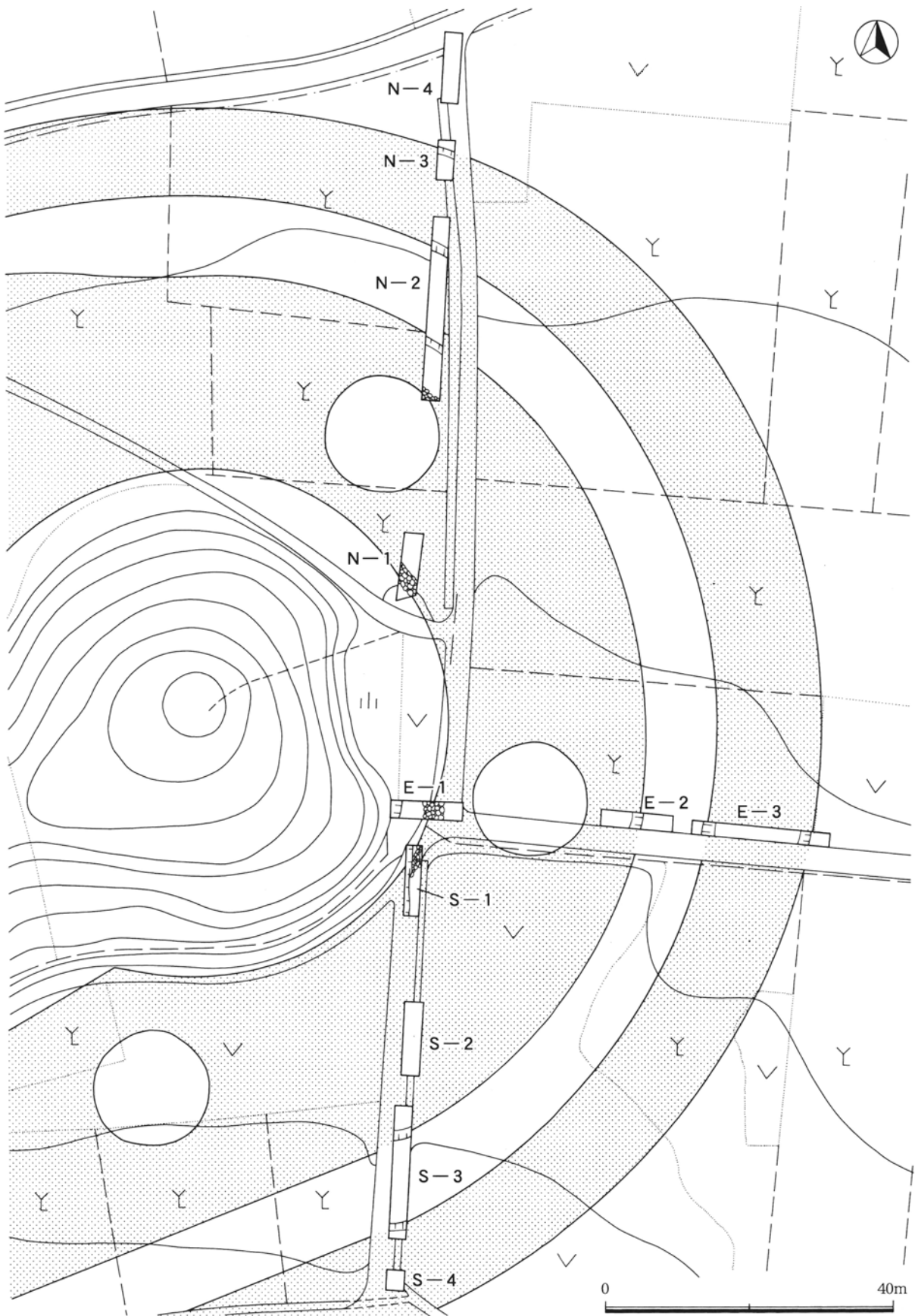
各調査トレンチにおける基本層序は、以下のとおりである。

第1層 表土・耕作土層である。明褐色土で、As-A、As-Bを含む砂質土である。約50cmの厚さで堆積している。

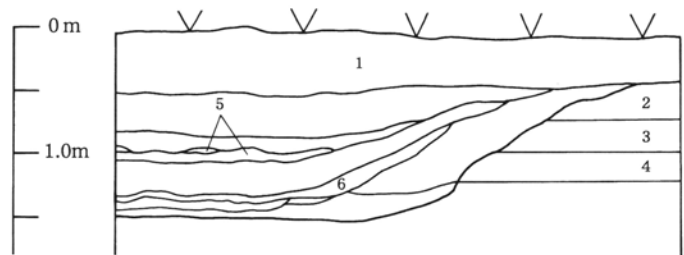
第2層 黒色土層である。As-Cを含む。本古墳築造時の地表面を形成していた。

第3層 暗褐色土層である。ローム層への漸次層である。

第4層 ローム層



第70図 調査区の位置



第71図 基本層序

古墳の内堀、外堀は、第2層を掘り込み、第4層に達し、この層中に基底面を設けている。次に周堀内の埋没土、堆積物であるが、これは、各地点により、その様相をやや異にしている。また、今回報告の1971(昭和46)年の時点では、As-BやHr-FAといった降下テフラについての認識が充分でなかったため、土層の観察にこれらの注記は無い。

第71図は、E-3トレンチ、中堤外縁から外堀にいたる地点の層序である。第1層耕作土の下位には、厚さ30cm前後で、黒色土が堆積している。その下は、浮石質黒色土の層となる。さらに、その下位に灰色灰層、赤色灰層と注記のある層が続く。この二層は、As-B(第5層)である。次に、褐色土が20から30cm堆積する。次の黄白色土がHr-FA(第6層)である。周堀の基底面からは薄い間層を挟んで、約10cmほどの厚さで堆積している。外堀の立ち上がり寄りには茶褐色土が三角形状に堆積している。

6. これまでの調査成果

本章で報告する井出二子山古墳は、1930(昭和5)年、1971(昭和46)年、1984(昭和59)年の3回にわたり調査が実施されている。本項では、それぞれの調査における成果について、その概要を記しておきたい。

(1) 1930(昭和5)年の調査

最初に行われた1930(昭和5)年の調査は、後藤守一を中心とした東京帝室博物館と群馬県による合同の^(註1)学術調査である。周堤上に樹立が想定される形象埴輪群の検出、周堀内に存在が予想される中島の

検出が目的とされた。これは、その前年、1929(昭和4)年に実施された保渡田八幡塚古墳の調査とその成果に触発されたものであろう。

調査は、墳丘および、その周辺、兆域内にAからZにいたる調査区を設定して実施された。当初期待された形象埴輪群の検出はかなわなかったものの、外部施設の各所について多大な調査成果が得られた。その内容は、1953(昭和28)年に後藤により、「上野国愛宕塚」として報告されている。これに拠れば、井出二子山古墳は、二重の周堀を有する前方後円墳で、全長92.4m、後円部径56m、前方部前端幅45.6m、後円部・前方部高6mの規模を有することが把握された。

墳丘上の調査では、墳丘二段目の平坦面上に密着状態で樹立された円筒埴輪列を検出している。埴輪は、後円部墳頂にも散布を確認、その樹立が在ったことを想定している。墳丘第1段、基壇面上では確認されていない。

墳丘を圍繞する周堀は、内堀の外に幅の狭い外堀の存在を確認、中堤、外堤が巡るとし、その規模を内堀幅36m、中堤幅13m、外堀幅7mと記録している。中堤には土盛りは無いが、傾斜面に葦石の存在していたことが図示されており、外堀外縁も同様の表現になっている。

内堀内には、両くびれ部の左右と後円部後方主軸線寄りに合計4基の中島が存在することが確認された。規模は、直径約16m前後である。周縁の傾斜面には葦石が施されていた。中島IIでは円筒埴輪の樹立が確認されている。また、周辺の内堀底面からは、円筒埴輪、多くの須恵器杯・高杯・大甕の破片、少

数の土師器の破片が出土している。後藤は、中島を祭祀が行われた場所と想定した。なお、中島の名称は、この調査時、後藤により仮称されたものが、その後、定着したものである。

中堤上の調査では、前方部北側の調査区O区で、当初想定したような人物埴輪群の検出は無かったものの、人物・動物埴輪の存在が確認され、保渡田八幡塚古墳と同様の埴輪樹立がなされていたことを知ることができた。また、W区とした前方部南西部分では、埴輪円筒棺2基を検出している。埴輪棺2で使用されていた埴輪は、器高77cm、直径41cmの5条6段構成で、口縁部に人面の表現がなされていたとされる。

また、前方部西北部分には、2基の小円墳の存在が指摘された。主体部、副葬品などは発見されなかったが、後藤は、これらを陪塚とした。

埋葬主体部は、後円部墳頂の中心にあり、長さ5mほどの竪穴式石室状の石積に囲まれた家形石棺であると報告された。石棺は、調査時、既に、蓋石を欠失、棺身も3分の1以上が欠損していたが、全長2.3から2.4mの箱形に復元され、残存した両側部に一対、縄掛突起を有していることが観察されている。副葬品はほとんど残存せず、尖根系の鉄鏃の出土したことが記録されている。

(2) 1971 (昭和46) 年の調査

本章で報告する調査である。井出二子山古墳に対して行われた2度目の調査で、小規模ではあったが、前回、あまり調査の及ばなかった後円部の兆域が調査の対象となった点は意義のあるものであった。

(3) 1984 (昭和59) 年の調査

群馬町教育委員会によって行われた調査^(註2)で、兆域の範囲確認を目的として実施された。

墳丘の周囲9箇所^(註2)に調査区が設定され、墳丘基壇縁辺、内堀、中堤、外堀など各施設についての確認作業が行われた。

調査の結果、古墳の主軸方向は、前方部をN-111°-Wに振り、各部位の規模は、全長111m、後円部径74m、前方部幅71m (いずれも墳丘傾斜面の基底で

計測)、内堀幅25m、中堤幅12~17m、外堤幅推定16mとされる。

葺石については、前方部前面中央部分の調査区で、精美に礫を積み上げた状況が検出された。基底から1・2段にやや大型の礫が据えられていた。前方部南西隅は、崩落が進行していたが、側方部に縦方向の目地がとおる石積が見られた。1930 (昭和5) 年の調査で検出された中堤・外堤にかかわる石積施設は検出されていない。

内堀・外堀の埋没土中には、底面直上に、間層を挟まず、Hr-FAの堆積が確認されている。

このことから、本古墳の築造が、Hr-FA降下前であることが確定的となった。

また、外堀外側部分の調査では、As-Cの純層が堆積することが一部で確認されたことにより、外堤施設の存在が指摘された。

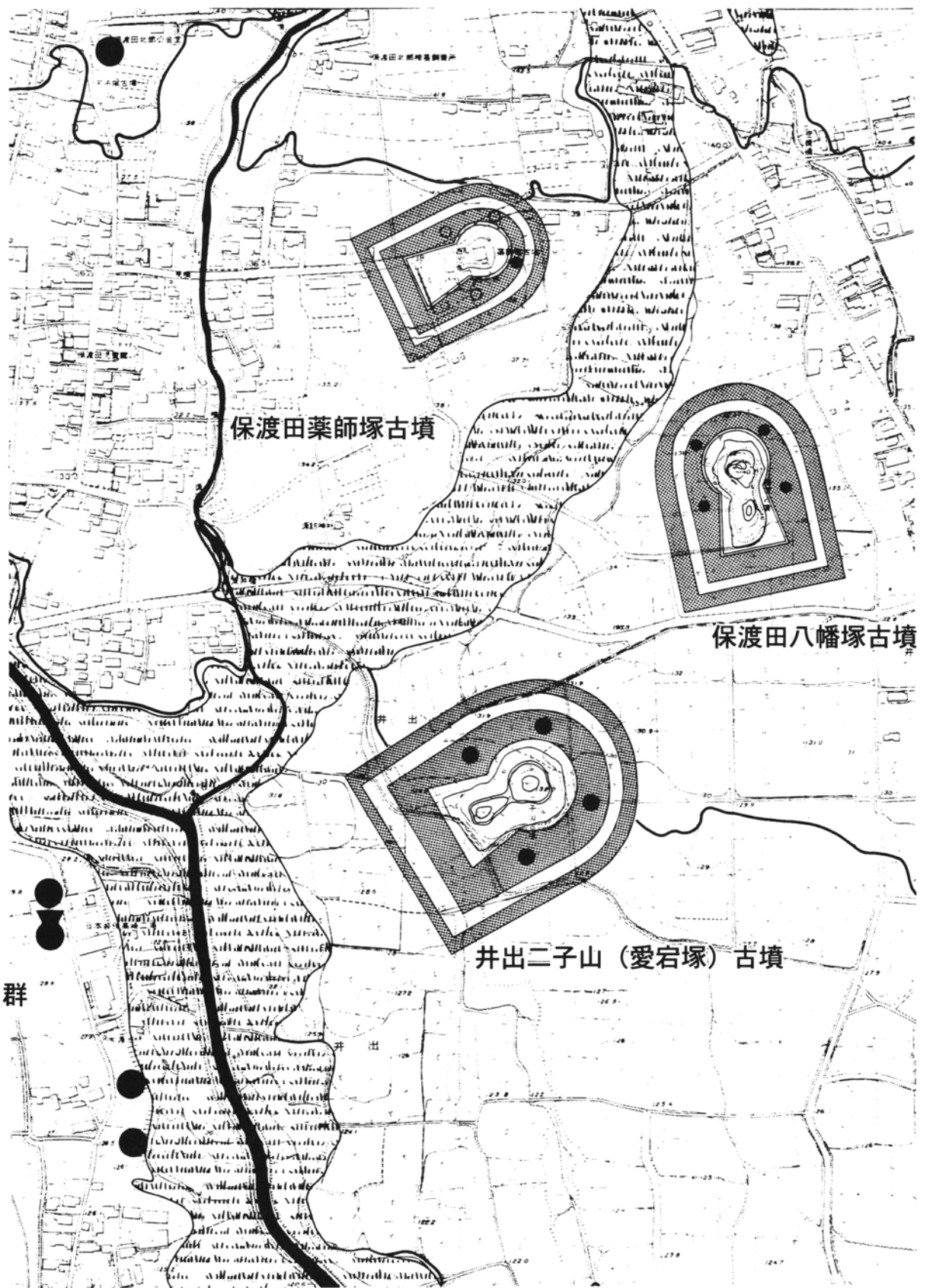
(4) これまでの成果のまとめ

調査は、上記の3回であるが、この他に、井出二子山古墳について論及したものに、右島和夫の「保渡田古墳群の研究」^(註3)や南雲芳昭・若狭徹「保渡田3古墳の埴輪」^(註4)、『群馬町誌』資料編1^(註5)などがある。これらの成果をも踏まえ、現状における本古墳に対する研究状況をまとめておきたい。

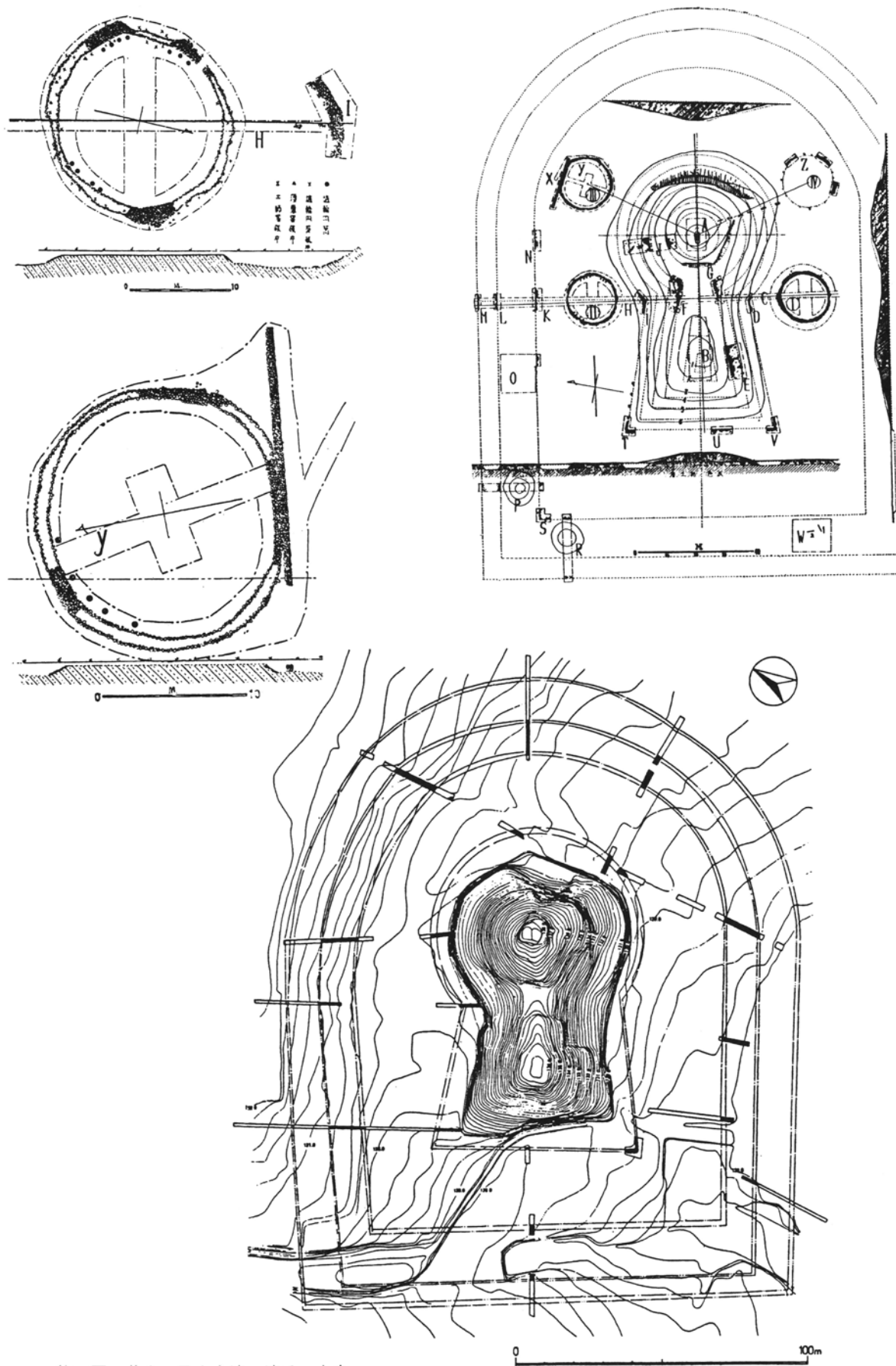
これまでの調査成果により、井出二子山古墳は、二重の周堀を有する前方後円墳で、墳丘長は、108m (計測値は右島氏の見解による。以下、同じ)、後円部径70m、前方部幅70m、外堀外縁間の兆域全長215m、兆域幅175mであることが確認された。墳丘の主軸方向は、N-63°-Eである。前方部、後円部とも三段築成であるが、第1段、基壇面には盛土が成されず、旧地表を削り出したと見られている。段築成の傾斜面と、墳丘縁辺から内堀底面にいたる傾斜面に葺石が施されている。

内堀内に4箇所、直径16mの中島を有しており、円筒埴輪の樹立が確認され、土器類の出土があった。

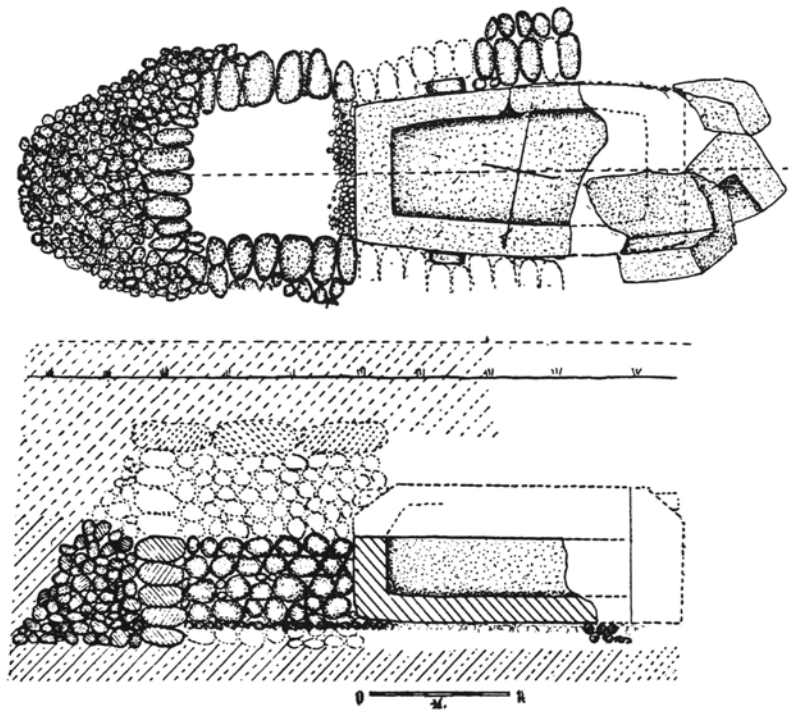
主体部については、現状では地表下にあり、詳細な観察ができない。後藤が家形石棺と報告した石棺は、形式的には舟形石棺と考えられる。また、石棺



第72図 保渡田古墳群の位置



第73図 井出二子山古墳の墳丘・中島



第74図 井出二子山古墳の舟形石棺

を埋置したとする竪穴式石室状の施設は、最近、調査された保渡田八幡塚古墳の舟形石棺が、周囲を礫で被覆される構造であったことと同様であったと考えられ、小口部分に副室的な空間を造り出す状況も共通している。

副葬品には、後藤の報告した鉄鏃の他に、馬具の出土が知られ、馬鐸の出土も伝承される。

円筒埴輪は、群馬町教育委員会調査時に出土した資料についての分析がある。これによれば、突帯が3段以上の多条で、大型品となるようである。透孔は、半円形、円形がある。器面の調整にはB種ヨコハケ、ナナメハケ、タテハケが認められるが、タテハケが圧倒的に多く、ヨコハケの存在は、極めて客体的である。口縁部、突帯ともにバリエーション豊富であることなどが特徴として上げられている。口縁部の先端外面が、突帯状に肥厚する事例の存在が注目される。焼成が須恵器質の事例の存在は、本古墳の埴輪の生産が、窖窯導入期の所産であるとされた。

形象埴輪は、後藤が調査した際に、前方部北側中

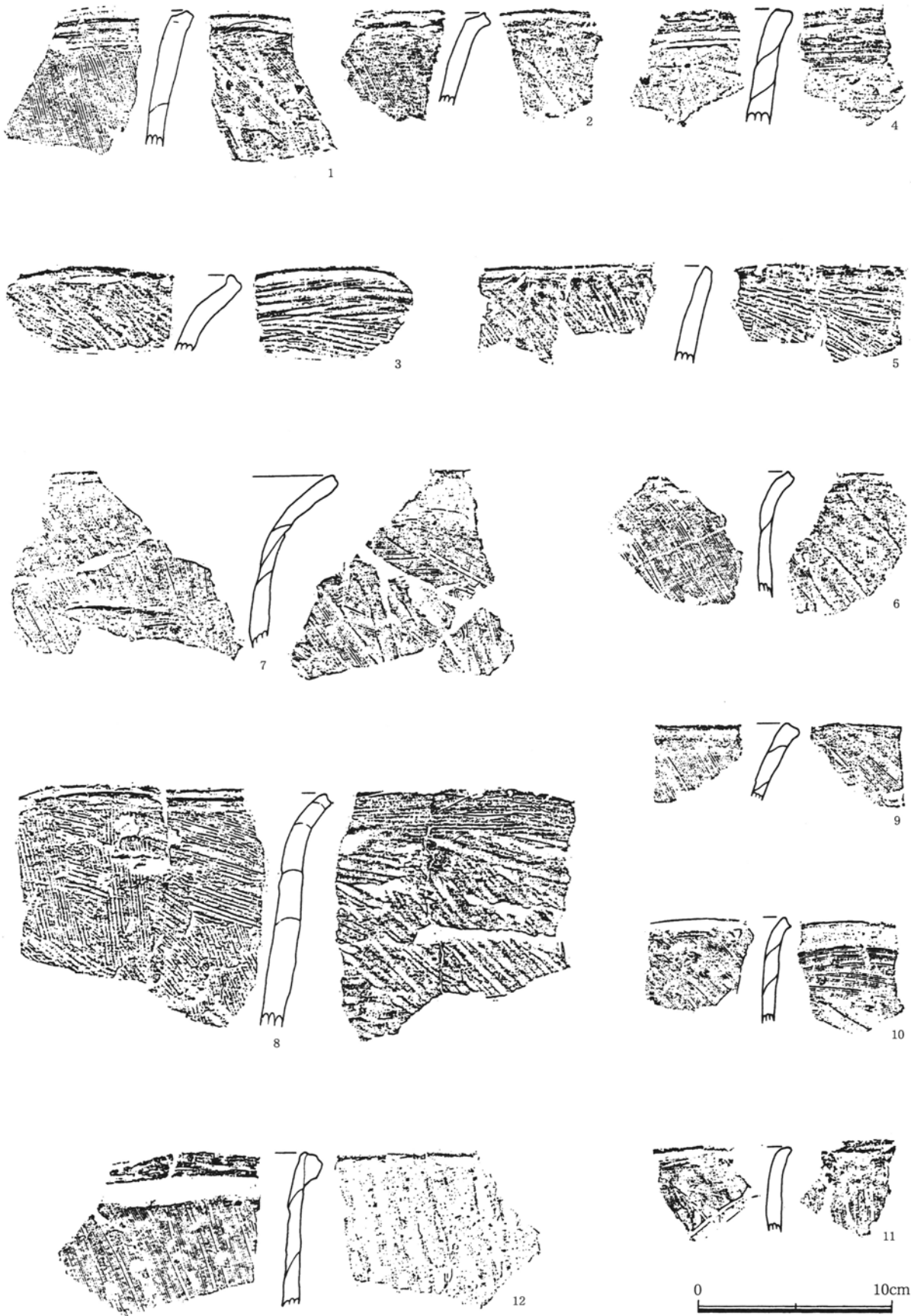
堤上の調査区O区から、椅座人物の足を置く板部分、男子人物の頭部、女子人物の髻、鳥を止ませた人物の腕、人物に付属する猪、小型の人物などが出土している。これに馬形埴輪が表採されている。

この他に、群馬町教育委員会調査時には、後円部から北方向に向けて設定されたトレンチの中堤寄りの内堀から蓋が出土している。

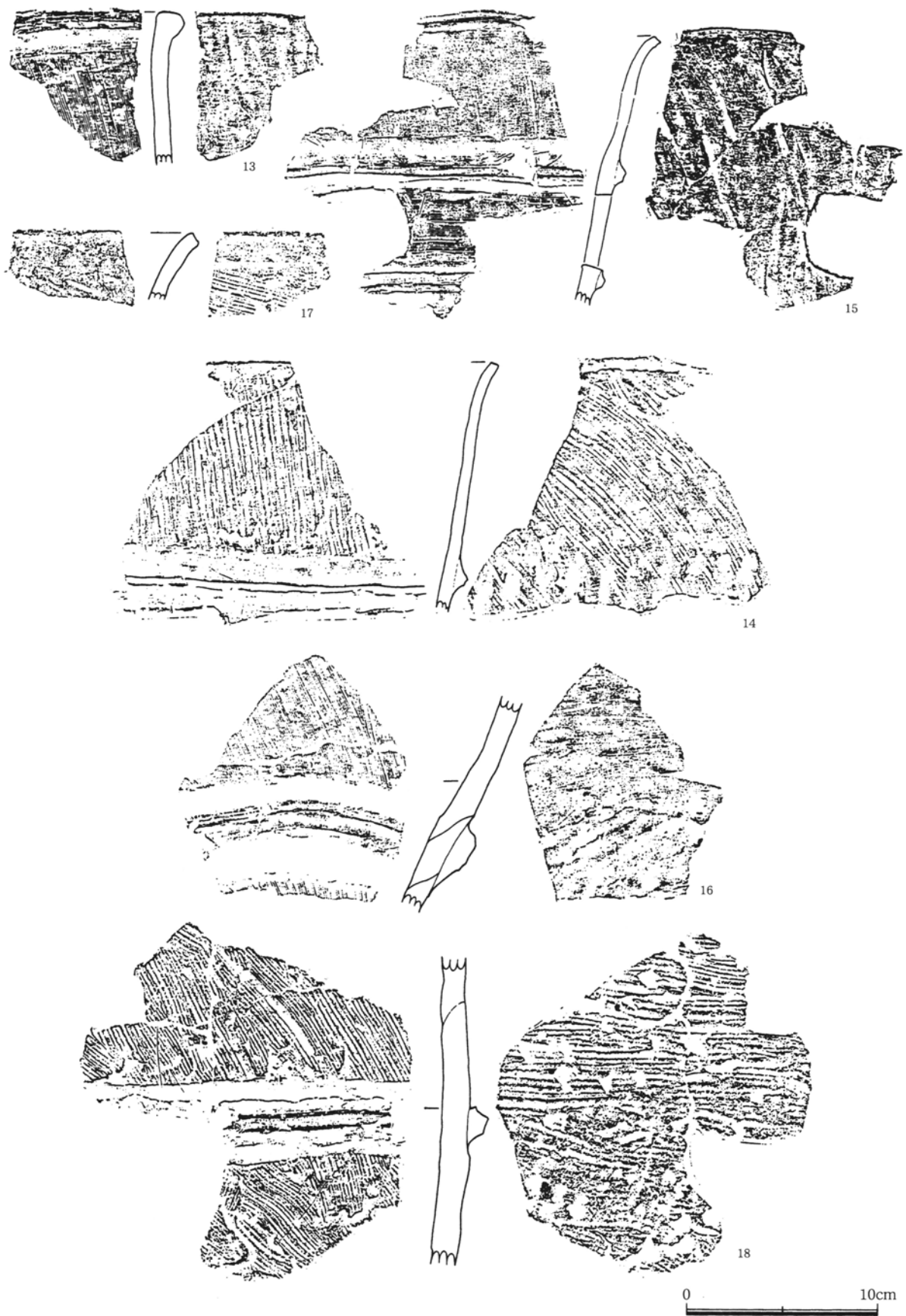
これまでの調査によって得られた墳丘各所の状況、あるいは埴輪に対する分析によると、井出二子山古墳の築造年代は、5世紀の第3四半期とされ、保渡田古墳群の中では、保渡田八幡塚古墳、保渡田薬師塚古墳に先行するものと考えられている。

註

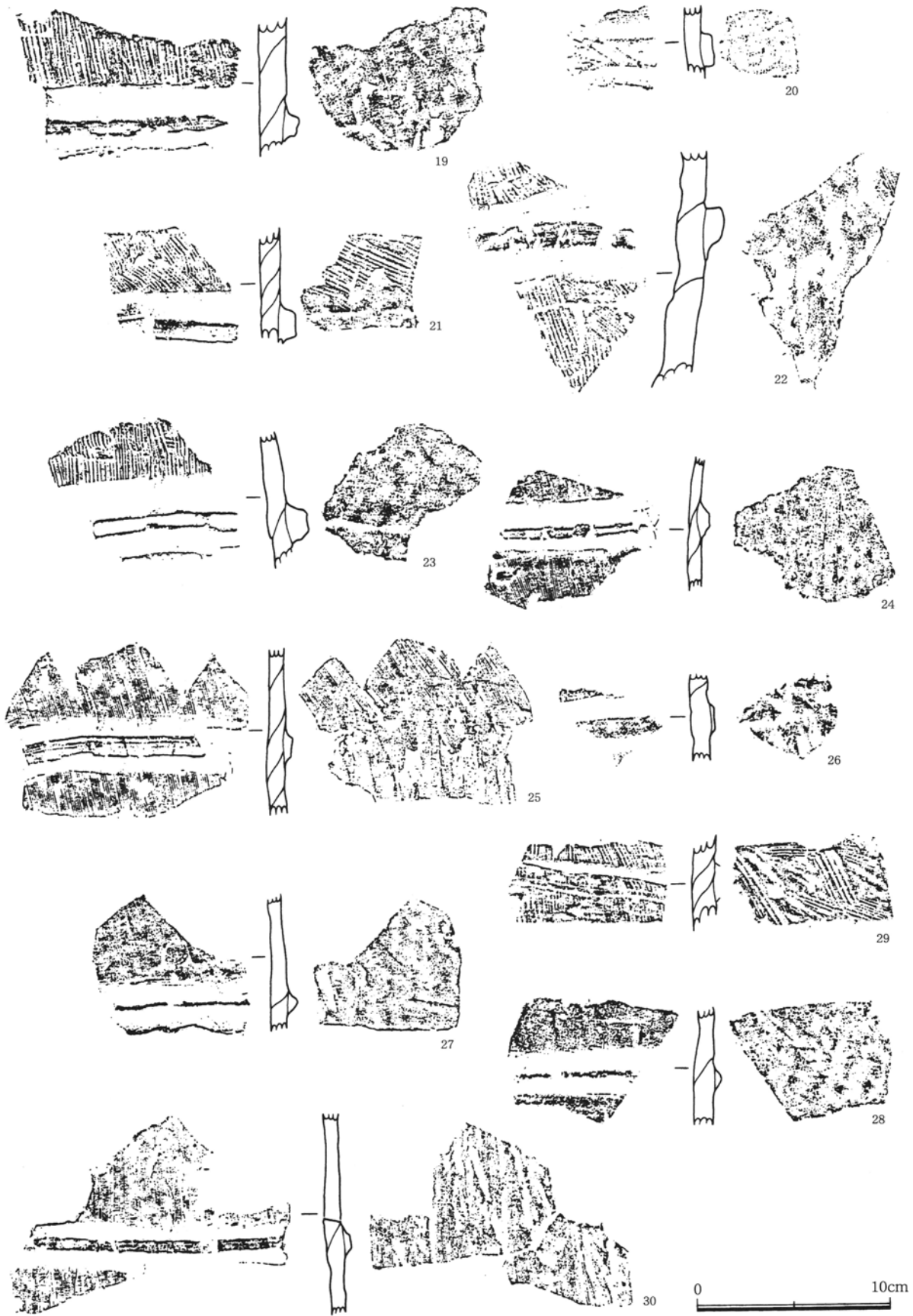
- 1 後藤守一「上野国愛宕塚」『考古学雑誌』39-1 1953
この報文で後藤は、「井出二子山古墳」の名称を「愛宕塚古墳」として発表しているが、群馬町教育委員会では、地元における古墳の呼称にかかわる経過を踏まえ「井出二子山古墳」と呼んでいる。今回は、群馬町教育委員会の呼称に従った。
- 2 群馬町教育委員会「二子山古墳」1985
- 3 右島和夫「保渡田古墳群の研究」『東国古墳時代の研究』1994
- 4 南雲芳昭・若狭 徹「保渡田3古墳の埴輪」『埴輪の変遷』1985
- 5 「群馬町誌」資料編1 1998



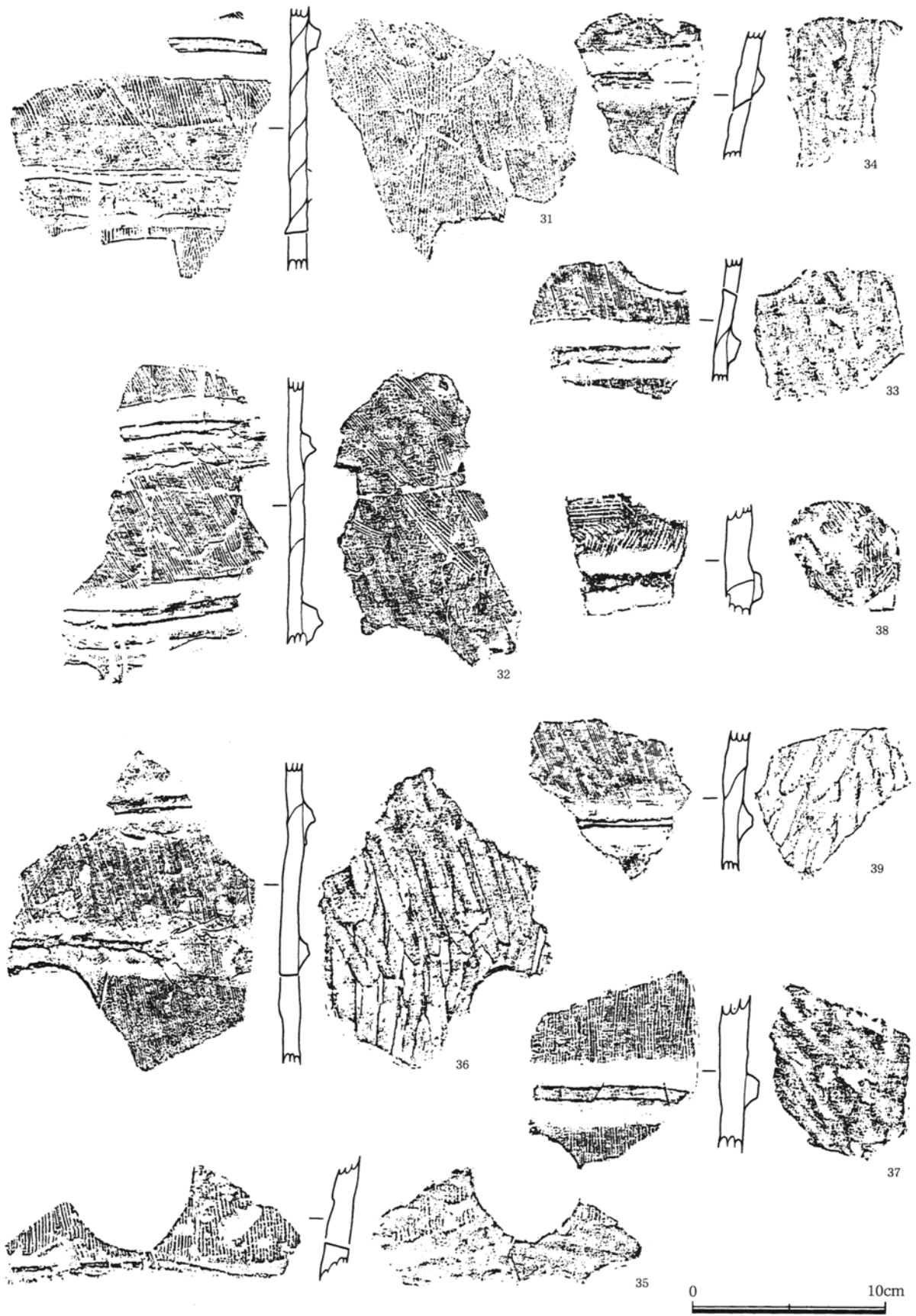
第75図 井出二子山古墳の埴輪(I)



第76図 井出二子山古墳の埴輪(2)



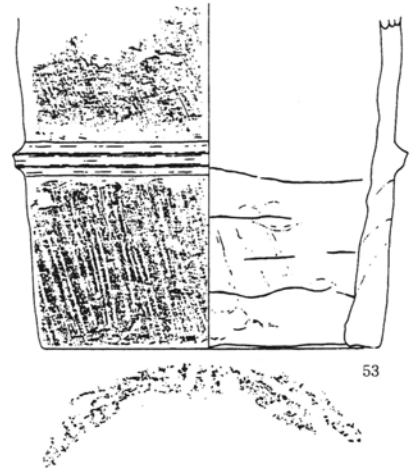
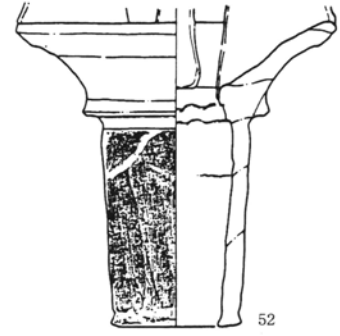
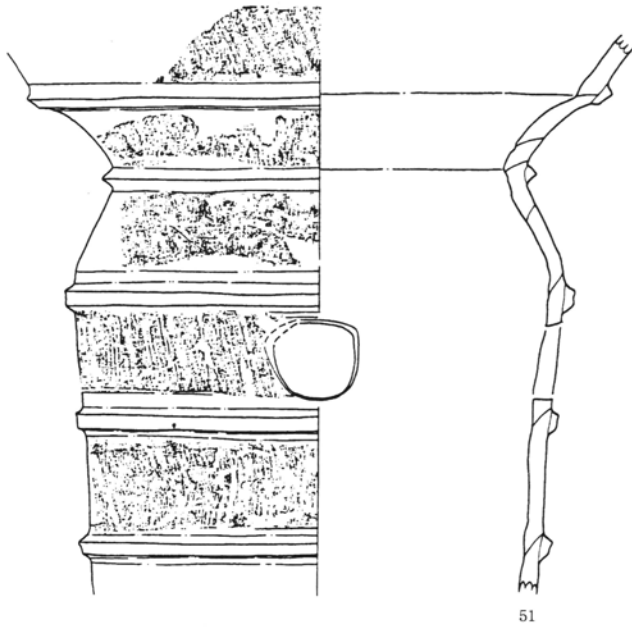
第77図 井出二子山古墳の埴輪(3)



第78図 井出二子山古墳の埴輪(4)



第79図 井出二子山古墳の埴輪(5)



0 20cm



第80図 井出二子山古墳の埴輪(6)

7. 調査された遺構

調査の経過、調査の方法の項でものべたよう、今回の調査においては、後円部東側の兆域部分を中心に3方向にトレンチが設定され、調査が実施された。

調査の目的は、1930(昭和5)年の調査時において、ほとんど調査の手が及ばなかった後円部周辺の調査を実施することにより、墳丘をはじめとした外部の諸施設についての状況把握が可能になるという

ことにあった。また、先回の調査において、内堀内の4箇所にもその存在が確認された中島が、調査区内で確認できるかという点が注目された。

以下、それぞれの調査区の状況を記する。

Nトレンチ

後円部北側に予定される南北道路に沿ったトレンチで、後円部後方から兆域を貫く形で、のべ79mの長さの中に、断続的に4箇所の調査区が設定された。墳丘の第1段となる基壇、内堀、中堤、外堀を検出した。

N-1トレンチでは、墳丘の第1段、基壇から内堀への傾斜面を検出した。トレンチの南端は、墳丘主軸線上からわずかに北側にまわった位置に当たる。

井出二子山古墳の墳丘第1段は、墳裾から幅4mほどが築造当時の地表面を整形して造り出されており、この部分に盛土がなされていないことは、その後の群馬町教育委員会の調査で判明しているところ

である。本調査においては、既に地表下30~50cmまでが耕作土となり、盛土の有無を確認できる状況には無かったが、群馬町教育委員会の所見と齟齬をきたすような状況には無かったものと考えられる。

内堀底面にいたるまでの傾斜面には、葦石が施されていた。それは、幅2mの調査区内に長さ2.2mにわたり、弧状に検出された。石積の長さは1.1m、高さは約0.7mで、その傾斜のなす勾配比(長さ：高さ)は、約1.57：1である。葦石に用いられた礫は、長さ10~20cmほどの大きさで、これを6から10段ほど横積している。この地点における積み方は、若干、乱雑であったが、縦方向に目地の通りを意識した部分が見受けられた。ただし、E-1トレンチ、S-1トレンチの状態と比較すると精美さに欠けるものであった。調査区の西壁際には他よりやや大振りの礫が使用されているが、これが葦石の天場であろうか。内堀の底面は、その掘り方が、地表下1.4m、ローム層に達し、ほぼ平坦な面を形成している。埋没土は、基本層序の項に記したとおり、耕作土の下に、黒色土層、As-B(灰色灰層、赤色灰層と注記)黒色土、Hr-FAが堆積していた。下層からは、崩落した葦石と考えられる礫や埴輪片が出土している。

N-2トレンチは、長さ26mのトレンチで、内堀外縁寄りから、中堤、外堀の内縁寄りが調査の対象となった。

調査区の南西隅で葦石を検出した。これは、1930(昭和5)年の調査でその存在が確認された「中島III」の周縁を形成する葦石の一部と考えられる。検出された葦石の長さは、下端で約1.7mである。中島の規模は、直径約16m前後と把握されていることから、その周縁の長さは、50mを超えることとなる。

葦石の残存部上位と、下端、内堀底面との比高差は、約80cmである。葦石には10cm前後の全体に小振りの礫が使用されている。調査区の西壁寄りでは、葦石の施される幅がやや広がっている。

中島の葦石下端から北方に約5.6mの地点で、中堤内縁の立ち上がりを確認した。ここにいたる内堀底面は、地表下1.25mにほぼ平坦な面をなしていた。

中堤内縁の立ち上がりは、斜め上方に向かって傾斜しており、その角度は、35度、比高差は、69cmである。また、調査区南端から北方22mの地点で、断面U字形の浅い掘り込みが検出された。深さは、54cmである。ここが中堤の外縁(外堀の内縁)となり、この二つの立ち上がりの間が中堤であったと考えられる。中堤は、直接耕作土に覆われており、原形面は既に削平されていると考えられる。残存部分の上面の幅は、12.45m、両掘り込みの下端を結んだ幅は、15.3mとなる。中央からやや外縁寄りでは、耕作が地山深くにまでおよび耕作土の堆積が厚みを増している。

外堀は、約4.5mの長さにわたり検出された。外堀の底面は、内堀の底面よりも約60cm浅い位置にある。

次に、N-3トレンチでは、調査区の南端から北方約2.4mの地点で、断面U字状の浅い掘り込みが立ち上がっている。深さは、約40cmである。この変換点は、N-2トレンチの北側で検出した外堀内縁に対応する外堀外縁の立ち上がりと考えられる。

N-4トレンチは、外堀の存在を確認する目的で設定された調査区である。N-3トレンチの外堀外縁から北方に16mの地点まで調査したが、特段、遺構の検出は無かった。地表下には耕作土、赤褐色土の2層があわせて約50cmの厚さで堆積しており、それ以下には地山の各層が累重している。

Sトレンチ

後円部南側に計画された南北道路に沿ったトレンチで、後円部の南側を貫く形で、のべ62mの長さの中に、断続的に3区の調査区が設定された。墳丘基壇、内堀、中堤、外堀を検出した。

S-1トレンチでは、墳丘第1段、基壇面から内堀底面にいたる傾斜面を検出した。トレンチの北端は、墳丘主軸線から後円部南側方に約25度回り込んだ位置にある。幅2mの調査区の西壁際には、南北方向に走行する溝の掘削により攪乱されている。

葦石は、上端で長さ4.2mにわたって弧状に検出された。残存部上位と内堀底面との比高差は68cm、勾

配比は1.43：1である。構造は、長さ15～50cmの礫を積上げたもので、6から8段ほどが残存していた。約50～70cm置きに縦方向の目地がとおり、整然と横積している列が認められ、その間は小口積を基本としながらもやや雑然とした石積となっている。この部分は礫の大きさもやや小振りである。基底に用いられる礫の規模は、他の部位の礫との差異は認められない。

内堀は、長さ8mにわたり検出された。地表下1.15mまでの土層の堆積状況を確認したが、出水のため、底面の状況は把握できなかった。

S-2トレンチは、長さ10mにわたり、内堀内に設定した調査区で、地表下1mまでほぼ水平に延びる土層状況を観察した。

S-3トレンチでは中堤の内外両縁の立ち上がりを確認した。内縁の立ち上がりは、調査区の北端から4.1mの地点で検出された。断面形は上方に向かって大きく開くものである。これより北側は、内堀の埋没土である。地表下0.95mまで掘削したが出水のため、内堀底面は確認できなかった。埋没土中にAs-Bが堆積している。

中堤外縁の立ち上がりの形状は、内縁のそれと類似していた。地表下1mまで土層の堆積状況を調査したが、出水のため、底面は確認できなかった。調査区内における中堤の確認面の幅は、約11mである。厚さ30cmの耕作土で直接覆われており、埴輪樹立や樹立のための掘り方痕は確認されていない。ただし、外縁寄りの土層の観察によると古墳築造に先行して掘削された溝状の落ち込みの存在が確認された。

E トレンチ

後円部西側、墳丘裾部に接して東西方向に新設される道路予定地に沿って設定された。長さ5.4mの範囲内に断続的に3箇所、調査区が配置された。墳丘基壇、内堀、中堤、外堀の一部を検出した。

E-1トレンチは、S-1トレンチの調査区北端から北方3.6mの位置をT字状に横切っている。個々では、墳丘基壇面から内堀底面にいたる傾斜面に葺

石を検出した。基壇面上も墳丘縁辺から西方に5.4mの間を調査対象としたが、墳丘第2段、盛土などは全く検出されていない。これは、1930（昭和5）年の調査時に既に指摘されているとおり後円部後方の改変が著しいことによるものである。土層の観察から、耕作土下に上幅3.7m、下幅1.9m、深さ0.6mの溝が確認された。この南北方向の溝は、S-1トレンチの西壁際で検出された溝と同一である。

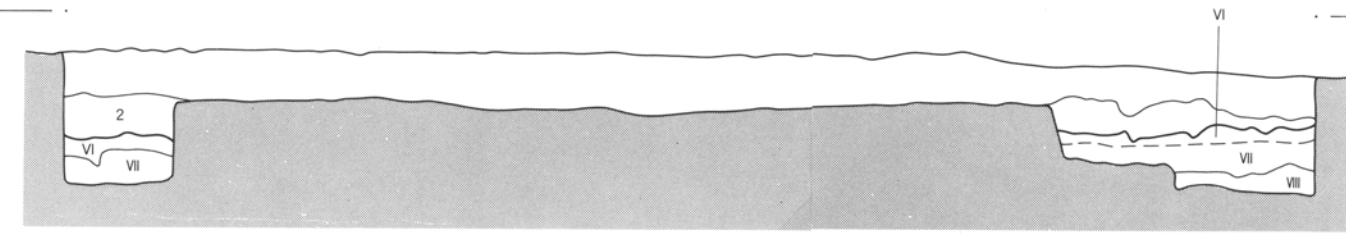
葺石は、他トレンチと同様の大きさの礫を積上げている。残存部上位と内堀底面との比高差は、80cmである。勾配比は、1.27：1である。調査区南壁際では、やや大型の礫による石積が見られる。これより60cm置いて、縦方向に目地のとおる石積が見られ、この間にはやや小振りの礫が積み上げられている。

内堀は、地表下1.05mまで土層の堆積を確認した。底面は水平に延びていくと考えられる。埋没土中にAs-Bが堆積している。

E-2トレンチでは内堀の外縁寄り部分から中堤部分を検出した。中堤内縁（内堀外縁）は、緩やかに立ち上がり、調査区西端から3.2mの地点に変換点を有している。

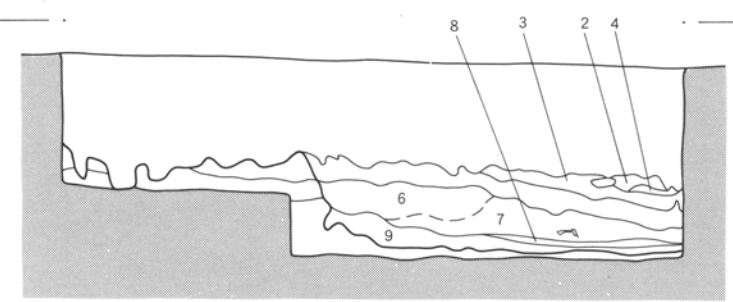
中堤は、約5mを確認したが、耕作のため、埴輪の樹立などの諸施設の確認はできなかった。

E-3トレンチでは、外堀における内外両縁の立ち上がりを検出した。両縁とも大きく開き、斜め上方に向かって立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。確認面における上幅は、幅12.8m、下幅は、9.8mを測る。深さは、内縁で約1m、外縁で約0.85mである。埋没土中にAs-B、Hr-FAが堆積している。



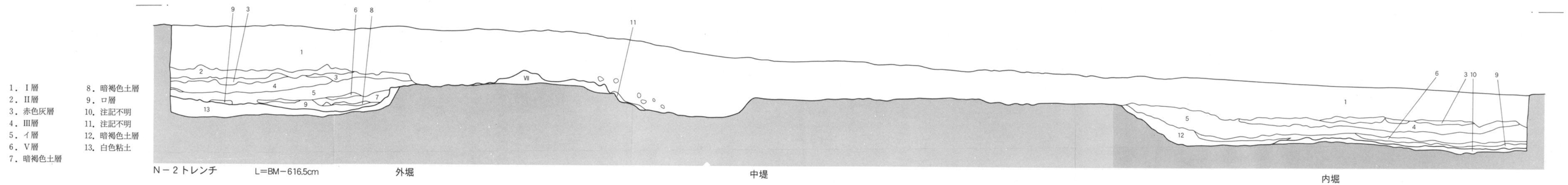
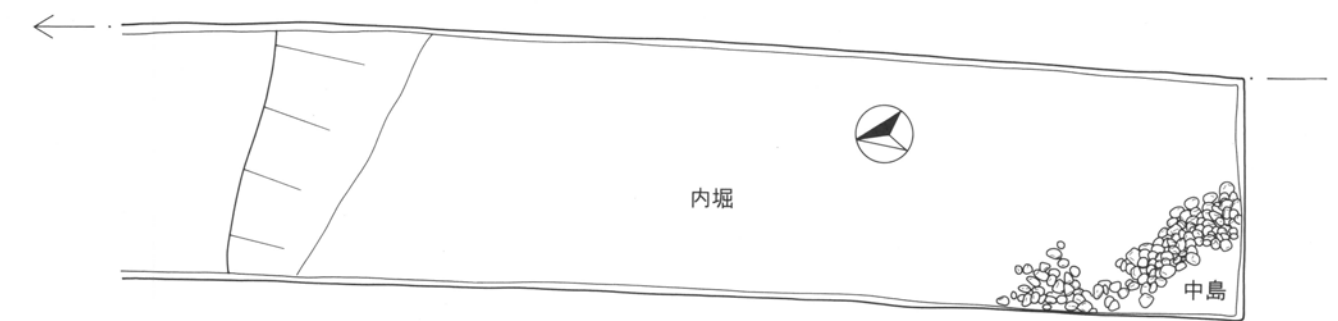
N-4 トレンチ L=BM-617.5cm

- 1. I層
- 2. ハ層



N-3 トレンチ L=BM-594.5cm 外堀

- 1. I層
- 2. 黒色土層
- 3. 灰色灰層
- 4. 赤色灰層
- 5. イ層
- 6. 注記不明
- 7. 暗褐色土層 締め有り。鉄分凝集。
- 8. V層
- 9. ロ層



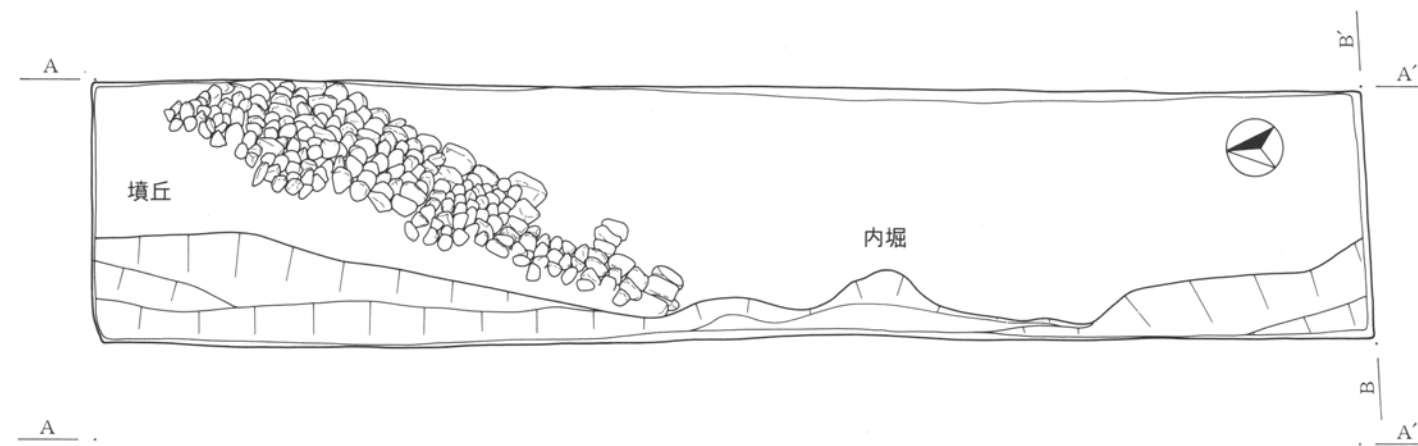
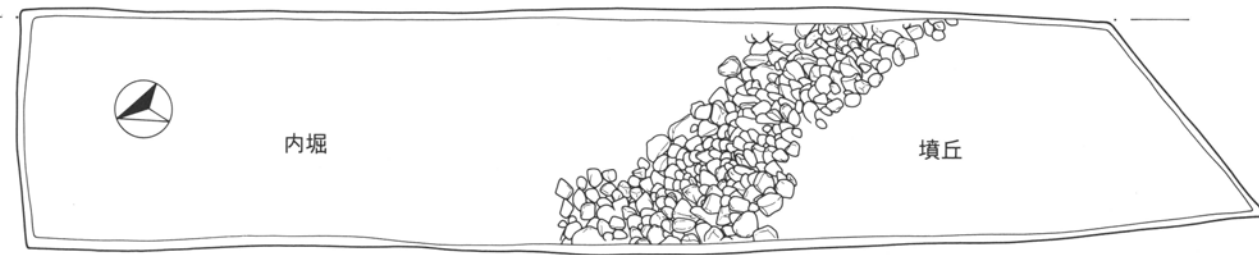
- 1. I層
- 2. II層
- 3. 赤色灰層
- 4. III層
- 5. イ層
- 6. V層
- 7. 暗褐色土層
- 8. 暗褐色土層
- 9. ロ層
- 10. 注記不明
- 11. 注記不明
- 12. 暗褐色土層
- 13. 白色粘土

N-2 トレンチ L=BM-616.5cm

外堀

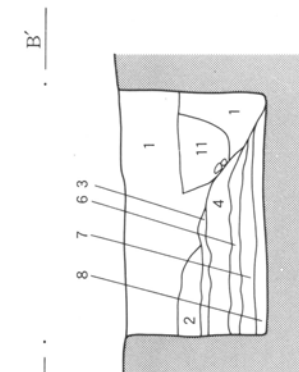
中堤

内堀

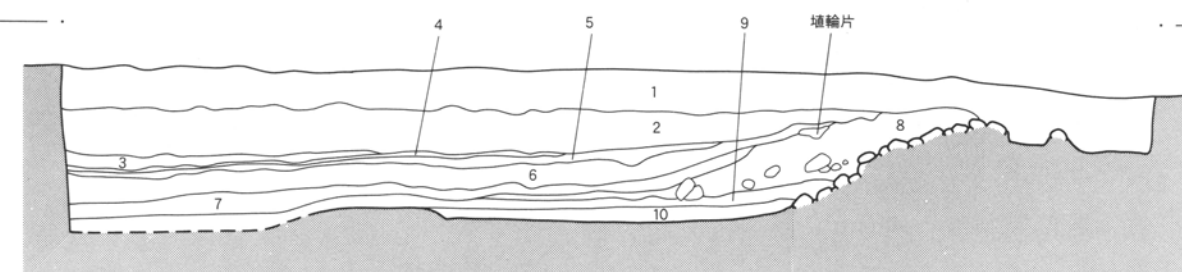


S-1 トレンチ L=BM-838.5cm

- 1. I層
- 2. II層
- 3. II層の漸移層
- 4. 灰色灰層
- 5. 赤色灰層
- 6. III層
- 7. イ層
- 8. 茶褐色土層 軽石を多量に混入。墳輪片・礫も混入。
- 9. V層
- 10. ロ層



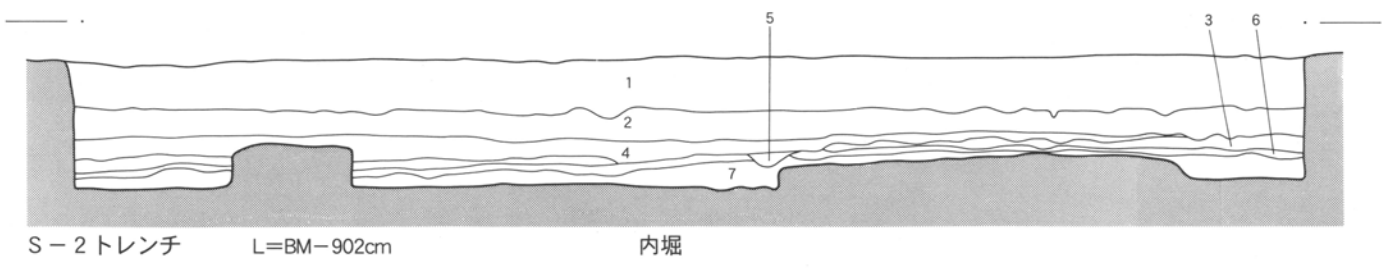
- 1. I層
- 2. II層
- 3. 赤色灰層
- 4. III層
- 5. 注記不明
- 6. イ層
- 7. V層
- 8. ロ層
- 9. 注記不明
- 10. 粘質土層 砂粒を混入。
- 11. 茶褐色土層 砂岩小粒子のブロックを含む。



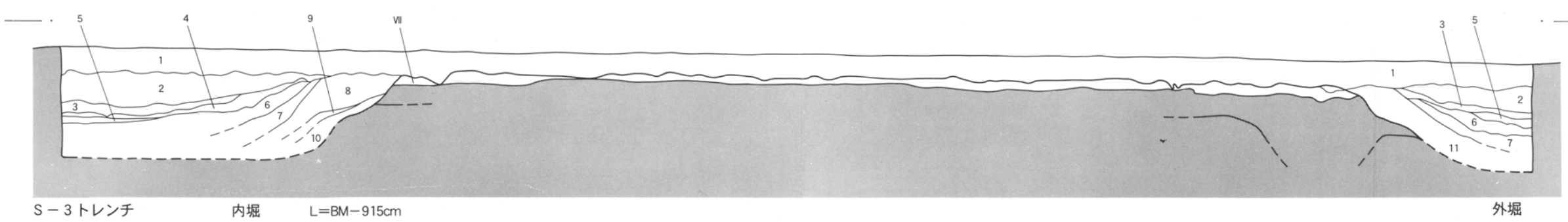
N-1 トレンチ L=BM-771.0cm



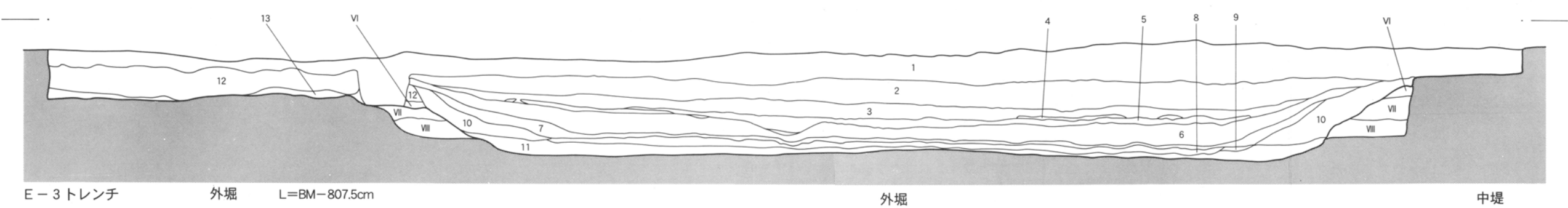
第81図 N-1・2・3・4トレンチ、S-1トレンチ



- 1. I層
- 2. II層
- 3. II'層
- 4. 注記不明
- 5. 注記不明
- 6. 赤色灰層
- 7. III層



- 1. I層
- 2. II層
- 3. II'層
- 4. 注記不明
- 5. 赤色灰層
- 6. III層
- 7. I層
- 8. 茶褐色土層
- 9. V層
- 10. 口層
- 11. 注記不明



井出=子山古墳

E-3 トレンチ

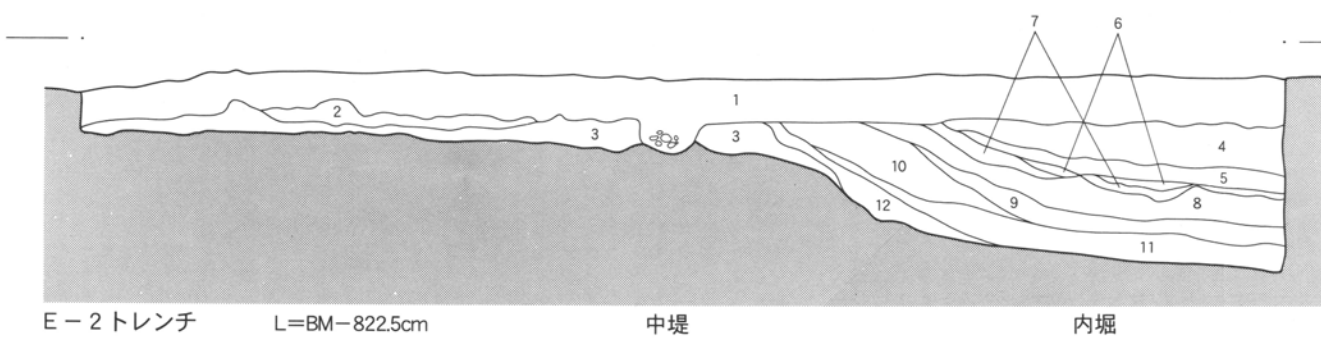
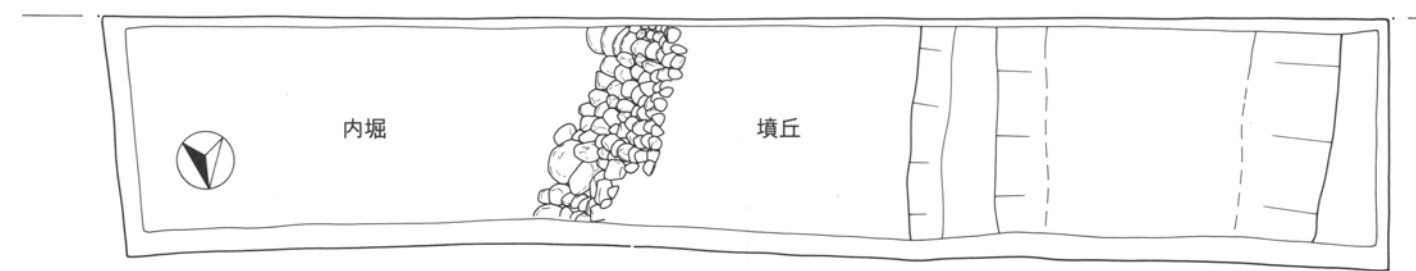
- 1. I層
- 2. II層
- 3. 黒色土層 軽石質。
- 4. 灰色灰層
- 5. 赤色灰層
- 6. III層
- 7. I層
- 8. 注記不明
- 9. 注記不明
- 10. 茶褐色土層
- 11. 口層
- 12. ハ層

E-2 トレンチ

- 1. I層
- 2. II層
- 3. 注記不明
- 4. 注記不明
- 5. II層
- 6. 灰色灰層
- 7. 赤色灰層
- 8. III層
- 9. 注記不明
- 10. 注記不明
- 11. V層
- 12. 口層

E-1 トレンチ

- 1. I層
- 2. II層
- 3. 灰色灰層
- 4. 赤色灰層
- 5. 注記不明
- 6. I層
- 7. 暗褐色土層 軽石を多く混入するが縮まり有り。鉄分凝集。
- 8. V
- 9. 口
- 10. 黒色土と砂石のブロックとの混土層
- 11. 黄褐色土層 1層と類似した粒子の構成
- 12. 白色粘質土層

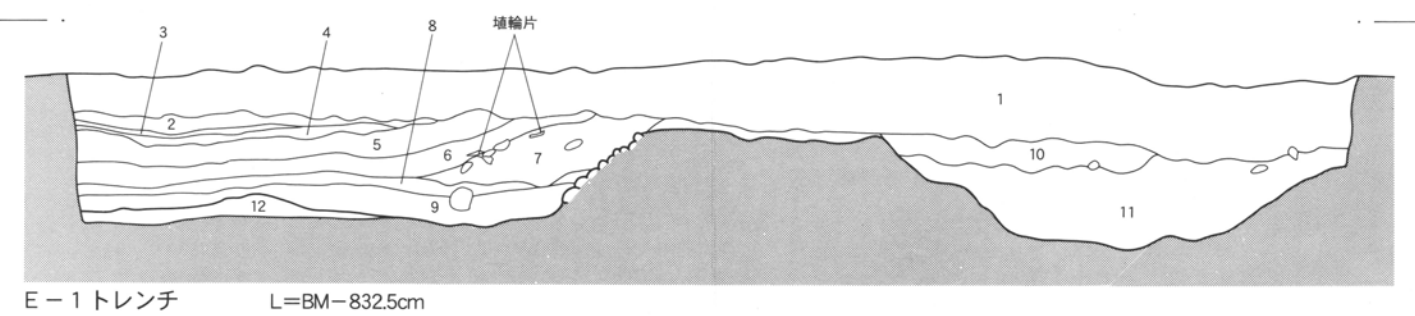


E-2 トレンチ

L=BM-822.5cm

中堤

内堀



E-1 トレンチ

L=BM-832.5cm



第82図 S-2・3トレンチ、E-1・2・3トレンチ

8. 出土した遺物

(1) 埴輪

今回の調査において各トレンチ、調査区から出土した埴輪は、遺物収納箱（縦60cm、横37cm、厚さ13cm）に8箱で、その大半が円筒埴輪である。

出土状況において、原位置をとどめる資料は皆無である。一部、中堤部分の調査区からの出土があったが、ほとんどが内外両周堀の埋没土からの出土である。これらの埴輪は、各調査区ごとに一括して取り上げられている。ただし、遺物番号の160以降の円筒埴輪については、「アタゴ塚」の注記が記されただけで、調査区以外の一括出土であり、詳細な出土位置については不明確である。

円筒埴輪には普通円筒と朝顔形円筒の存在が確認できる。普通円筒については、口縁部・突帯の形状、胎土、焼成の各点について、以下のように分類した。なお、以下の分類の内容は、第11表の観察表の記述にも反映されている。

口縁部の形状は、細かな点で多様なバリエーションを有している。その中で、直線的に立ち上がり、先端が外屈、内面に稜をもつものをA類（004・027）とする。直線的に立ち上がるものをB類（040・073）、強く外反するものをC類（001・029）、弱く外反するものをD類（017・019）、先端が弱く肥厚するものをE類（204）、内彎気味に立ち上がるものをF類（189）と分類した。この中で、E類とF類は各1点のみの出土である。また、群馬町教育委員会調査時に出土した資料中で確認された先端が内側に屈する形状の資料や口縁部の先端、外面側に粘土紐を貼付して肥厚させた形状の資料は認められなかった。

突帯は、断面台形を有するもの、上辺の中央がへこんで、断面M字形を呈するもの、断面三角形のものがある。断面台形と断面M字形のものには、上稜と下稜の突出状況の相違から、上稜が強く突出するものを台1、M1、両者が拮抗するものを台2、M2、下稜が上稜を上回って突出するものを台3、M3と細分することが可能である。

量比をみると断面台形を呈するものが多く、その中でも台2が大勢を占めている状況である。ただし、その中でも突出の度合いの異なるものが併存している。033は突出度の高い、発達した断面方形に近い事例である。これに対し、058は、扁平に近い事例である。上辺と下辺の幅の比率にもバラエティーがある。118は、上辺が狭小な事例である。

「アタゴ塚」の注記のある資料は、概して、突帯の発達が弱く、今回報告する二子山古墳出土埴輪で、断面三角形の事例の大半にこの注記が記されている。

胎土は、特別に、緻密な状況は認められない。混入物としては、直径1から3mmほどのチャート・石英・長石、細砂状の白色鉱物と細砂、粗砂が主体である。赤色粘土粒や輝石、あるいは角閃石と考えられる黒色鉱物の混入も少量認められる。胎土は、これらの混入物の度合いの違いから、多く含まれる（A）、やや多く含まれる（B）、少量含まれる（C）に分類できる。肉眼観察で円筒埴輪ではA、Bが多く、形象埴輪は資料B、Cが多かった。

色調の点では各トレンチ出土の資料には橙色系が多く、「アタゴ塚」注記の資料にはにぶい橙の系統の色調で、焼成がやや軟質の資料が多かった。

焼成は、窖窯焼成である。おおむね良好であったが、少量、色調が灰色味をおび、還元焰状態を呈する不良な状態の資料もみられた。053・066に代表されるものである。

次に、各部位についてまとめておく。文頭、あるいは色調の分類のところでも記したが、各トレンチ出土の資料と「アタゴ塚」注記資料では、法量、成形、器面の調整の特徴などで異なる点が多数あるようであるので、これらを分けて記述してみたい。

まず、各トレンチ出土の資料であるが、今回報告の資料中には全体形状を知り得るものは無かった。

146は、基底部から胴部第2段までの残存である。胴部第2段にも透孔が配置されていることから、本資料が3条4段以上の構成であることが理解できる。各段の器高は約12cmであるので、4段構成の場

合、全体の器高は50cm前後となる。

全体の形状、構成が不明の中で、出土位置別の相違について言及する材料は無いが、残存資料から比較すれば、Nトレンチで、N-1トレンチ（内堀）出土の001、N-2トレンチ（内堀から中堤）出土の016、同じくN-2トレンチ（中堤から外堀）出土の026、N-2トレンチ（外堀）出土の038・039の分量に大差が認められない事を指摘しておきたい。

口縁部の直径が復元可能な事例は、001の31.0cmと038の31.3cmである。高さは、001が12.6cm、038で13.3cm、045で12.6cm以上、103で14.4cmである。器面の調整には内外面ともハケメが使用されており、017のようにナデが施される事例は少数である。口縁部の先端は、その幅に相違があるもののヨコ方向のナデが重ねられている。

基底部の直径は、146で19.4cmを測る。他に、002が22.4cm、003が20.0cm、039が19.6cmにそれぞれ復元できる。基底部の成形は、基部粘土板を作成、これを基礎に粘土紐を積み上げている。基部の高さは、6cm前後である。基底部全体の割合の3分の1から2分の1である。粘土板は、一枚からなると思われ、その重ねには左右両者が認められる。器肉はほぼ一定のものと、015や082のように最下端が内面側に肥厚、形状を乱している事例がある。底面には工作台の痕跡や、植物と思われる棒状の圧痕、礫の圧痕がみられる。

外面の調整は、下端までタテハケを施しているものが大半であるが、003や013のように、下端間近に、基部粘土板製作の際に使用した工作台のものと思われる木目痕が、残存する事例がある。内面の調整は、ナナメタテ方向あるいは、タテ方向の指ナデ、ハケメが施される例が大半である。下端に粘土板製作時のひら、あるいは指頭による押圧痕、ナデを残す例もある。

突帯は、前述の分類のとおりであるが、必ずしも全ての突出度が高いとは言えない。その中で、033、145は、精美的な形状をなす。また、突帯貼付に際し、胴部器面上に工具による線刻を施した事例として、

032、120、130がある。

透孔は、半円形と円形の二者が認められる。残存する資料からみれば両者の比率は五分五分である。穿孔は、比較的丁寧に行われ、切開した面にナデ調整を加えた例も認められる。146の観察からは、透孔の配置は、対向する一対の孔を、各段ごとに90度ずつずらして穿孔していることが知られるが、半円形と円形の配置関係については、残存資料からは言及できない。

器面の調整は、基底部、口縁部のところでも記したよう外面には一次調整のタテハケを施している。ハケメの工具は多種多様である。034や073のよう2cm幅内に20本のハケメが数えられる例や、008や018のように2cm幅内に5本のハケメが残るものがある。052や120はナナメ方向を意識した調整であろうか。

076から081は同一個体と考えられる資料で、E-1トレンチの内堀埋没土中から出土している。普通円筒とするにはやや検討を要しよう。外面の調整に特徴がある。タテハケ後ナナメヨコ方向のハケを施し、さらにその上に振幅の大きい波状のハケを重ねている。突帯近くに配されているが、突帯貼付との前後関係は不明瞭である。

内面の調整は、ハケメ、指頭によるナデが多用されている。ハケメの様相は、通例、内外面ではほぼ同一であるが、019は、外面が2cm幅内に8本であるのに対し、内面は14本である。これは、内外面の調整に際し、異なった工具が使用された結果と考えられる。この他にも同様な事例があったので観察表にその状況を記述しておいた。

器面にヘラ状工具による線刻が施された事例は、「アタゴ塚」資料も含め15例が認められた。部位は、口縁部、胴部の外面に施された例が主で、基底部外面は、082の1点である。109は胴部の内外面に一条ずつ横方向に施されている。内面に施された4点、016、029、030、096のうち、016が胴部である他は口縁部である。線刻は、大半が一条の沈線である。044は強く弧を描いている。160、183は、円形の透孔の

周縁から放射状に直線が延びている。160は3本、183では2本確認できる。

赤色塗彩が施された例は、13例が認められる。顔料の塗布された部位は、口縁部、胴部であるが、いずれも外面である。131や154では突帯部分にも施されている。

朝顔形と認識できる資料は、口縁部破片の018、口縁部から頸部破片の093である。その他に、010、070、071、122もその可能性がある。

以上が各トレンチ出土資料における各様相についての概要である。次に、160以下の「アタゴ塚」注記資料についてまとめておく。

完全に識別し得たとは言いがたいが、161から171、172から185、186から200にはそれぞれ類似した特徴が認められる。186から200は、朝顔形の資料となるうか。いずれにしても、160から211は、159までのトレンチ出土の資料と比べるといくつかの異なる様相がみられる。胴部、基底部の直径をはじめとして各部位の法量が小型であること。突帯の形状が、断面方形であっても扁平であること。あるいは、断面三角形である点。透孔の直径が、小径であること。色調がにぶい橙色であること。焼成がやや軟質であることなどである。

法量は、161の基底部で、直径15.2cmである。しかしながら、160と161が同一個体であれば、原形は、3条4段構成であったと想定される。

形象埴輪は、212以下の27点が出土した。円筒埴輪同様、原位置出土の資料は皆無である。いずれも小破片となっており器種の確認は困難である。

212から220は、蓋形埴輪の破片である。いずれもN-2トレンチの外堀に掘られた落ち込み内から出土しており、同一個体を形成していた可能性が高い。212から216は、立ち飾りの破片である。厚さ1.4から2.1cmの板状を呈している。214の残長は、19.1cmを測る。217は、飾り板と受け部口縁の残存部分である。口縁はラップ状に外反して立ち上がる。立ち飾りの取り付け数はこの資料からは判断しがたいが、既出の事例からは4枚の可能性が高い。

この他では、222が馬形埴輪の鞍の一部と考えられる。228は、人物の破片と考えられ、腰に帯びた大刀とこれを握る手の一部となろうか。235は、人物埴輪の腕の残片であろうか。

(2) その他の土器

第107図は、埴輪以外の出土遺物である。241・246がS-2トレンチ、242がN-2トレンチの中堤から外堀にかけての地点からの出土である。他は、出土地不詳である。240は、須恵器模倣の土師器杯の破片である。241は、須恵器甕の破片と考えられる。242の須恵器は、底部を糸切り離した後、周縁部にのみヘラケズリを加えている。243から245は、内面に黒色処理を施した土師器杯である。246は、板状の土製品の一部で、器種不明である。

(3) 鉄鏃

第108図掲載の鉄鏃は、1978(昭和53)年8月10日保渡田愛宕塚古墳後円部墳頂出土の荷札を伴って、当事業団保存処理室に収納・保管されていたものである。採集時の状況は、判然としないが、井出二子山古墳出土品と考えられることから、参考資料として、本章の末尾に掲載した。

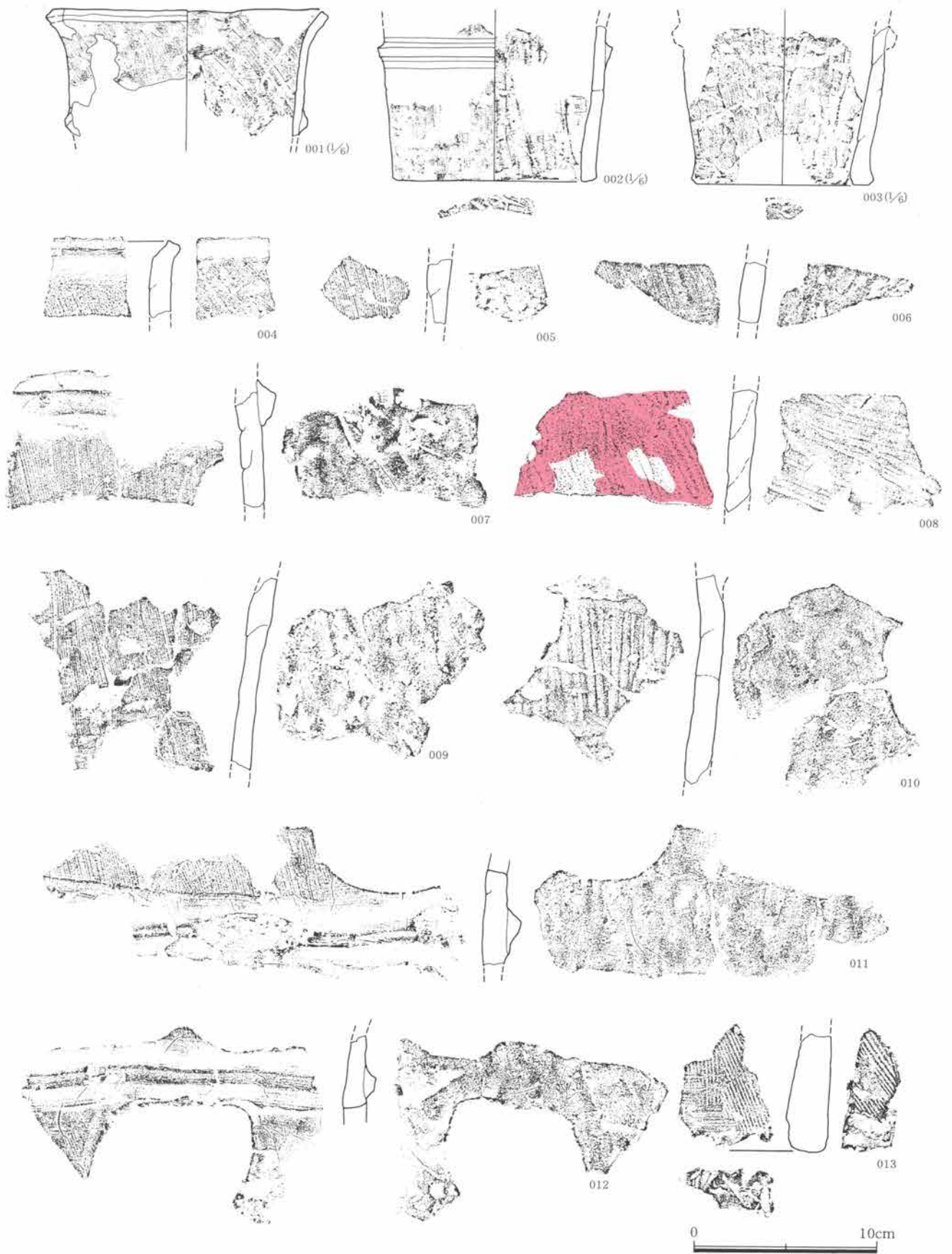
資料数は17点を数えるが、253・254は極一部分のみの残存である。残存状態は、不良で、247から255は現状で単体となっているが、256から260、261から264は、錆着して一塊りになっている。完存する資料は無いが、いずれも長頸の片刃鏃である。

鏃身部の残存する資料は、10点を数える。247は、刃部長35mm、幅10mm、252が刃部長33mm、幅9mm、257が刃部長39mm、幅9mm、263が刃部長31mm、幅9mmである。刃部下幅は、弱い逆刺を有している。

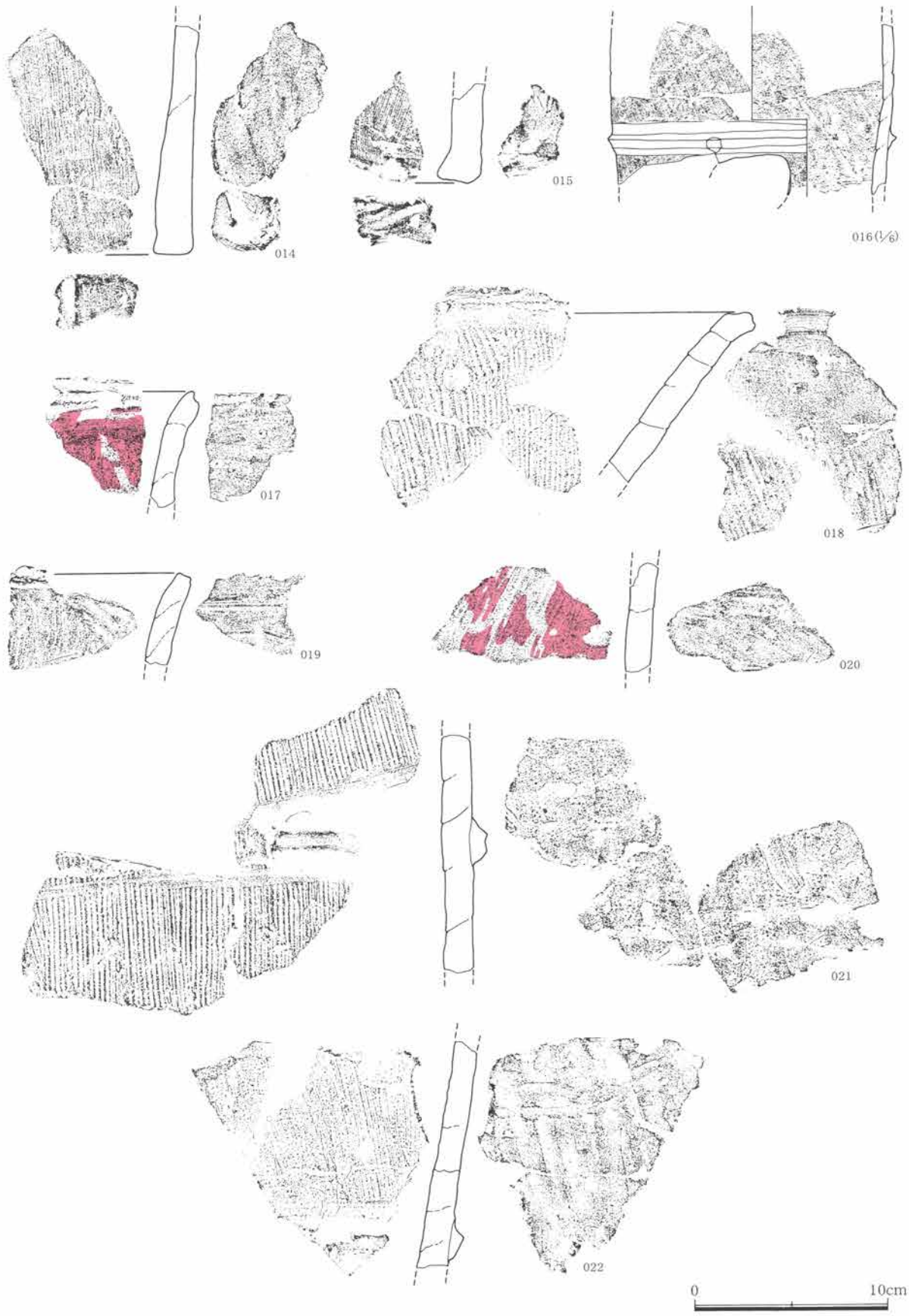
頸部はいずれも幅6mm、厚さ4mm前後の断面長方形を呈している。長さは、短い252で73mm、249・250・251は87mmである。関部は錆膨れのため判然としないが台形状を呈していると考えられる。

茎部は、端部に向かって徐々に細くなっている。断面形は長方形である。

残存重量は、247で13g、250・251で15gを測る。



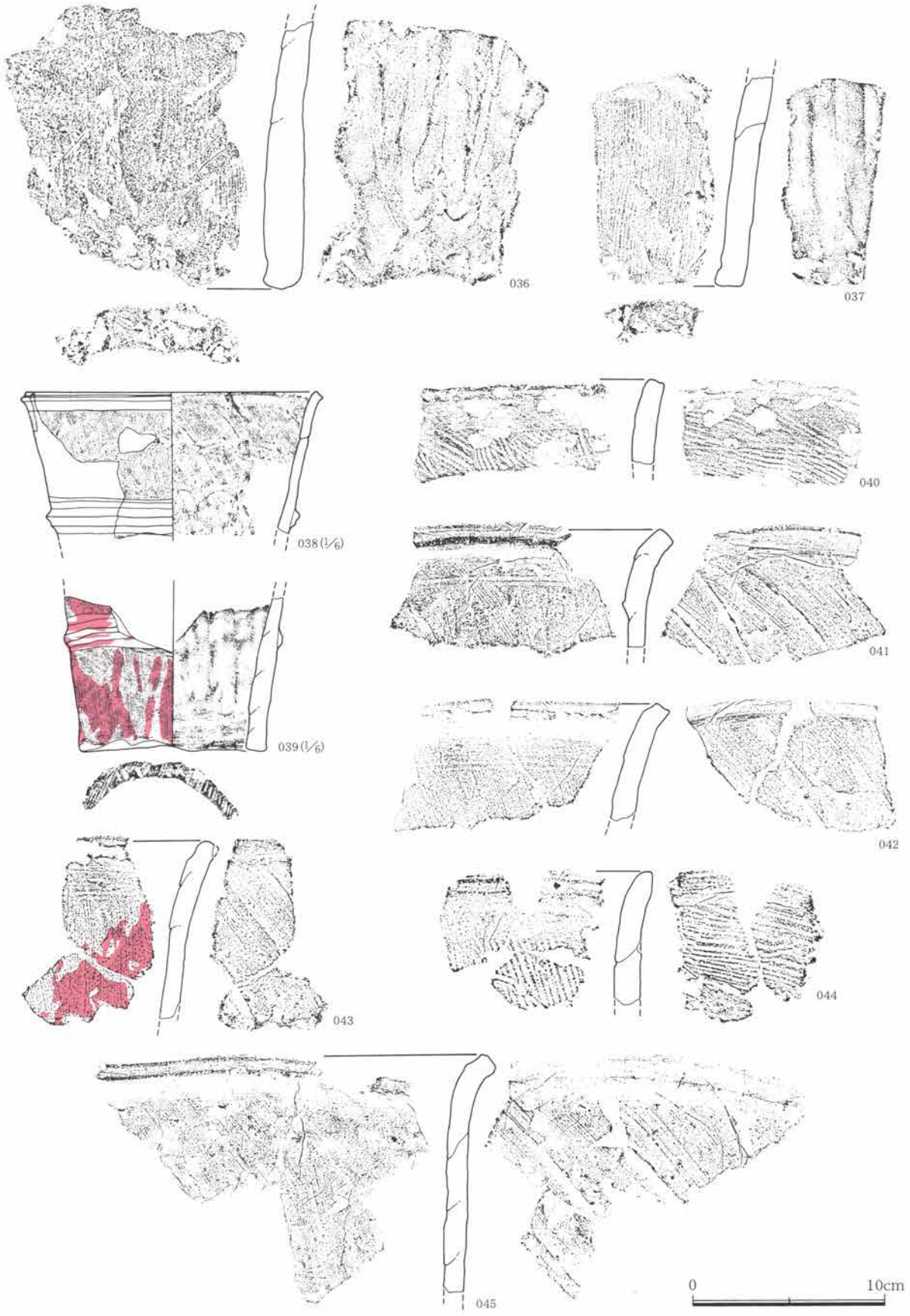
第83図 円筒埴輪(I)



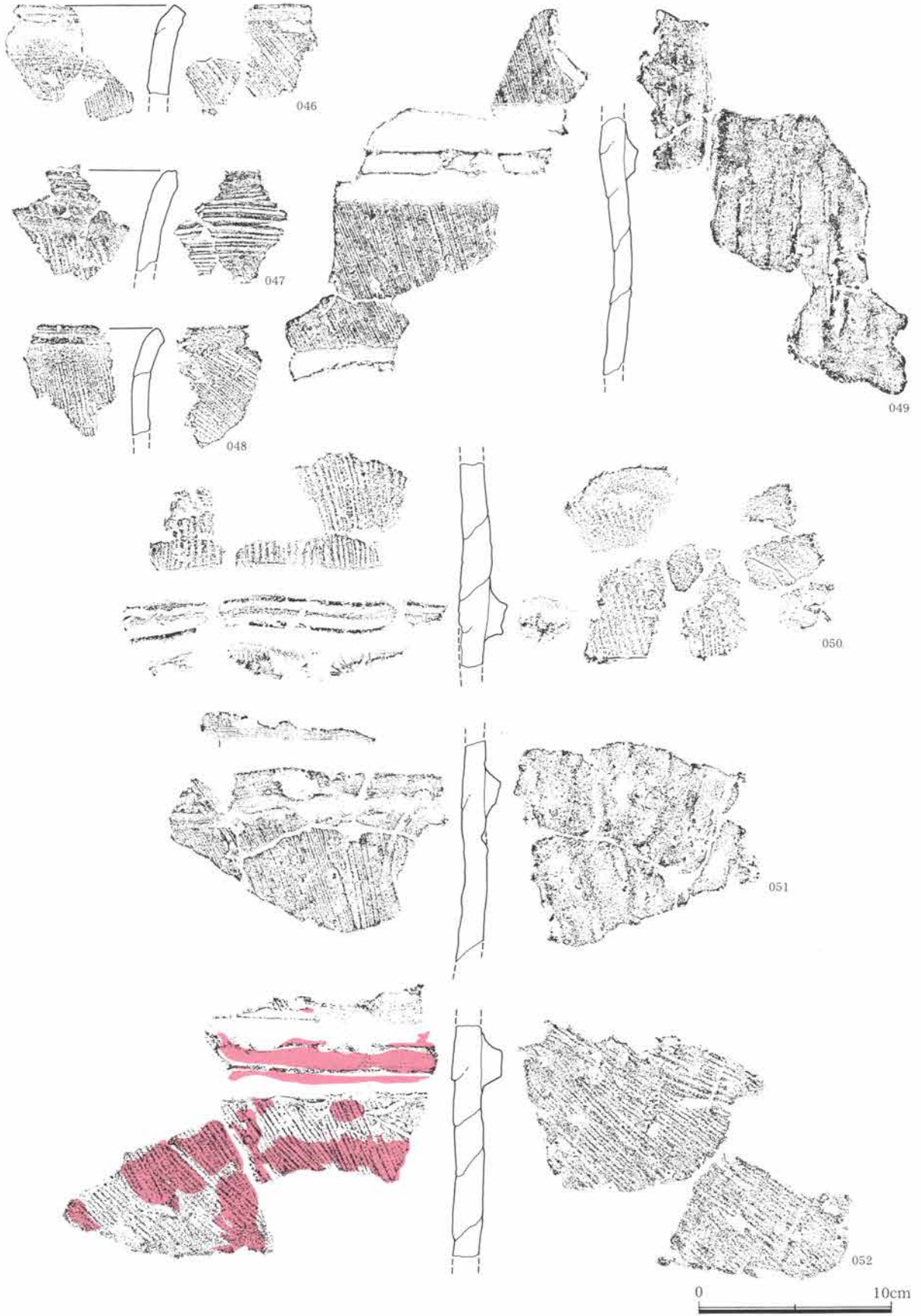
第84図 円筒埴輪(2)



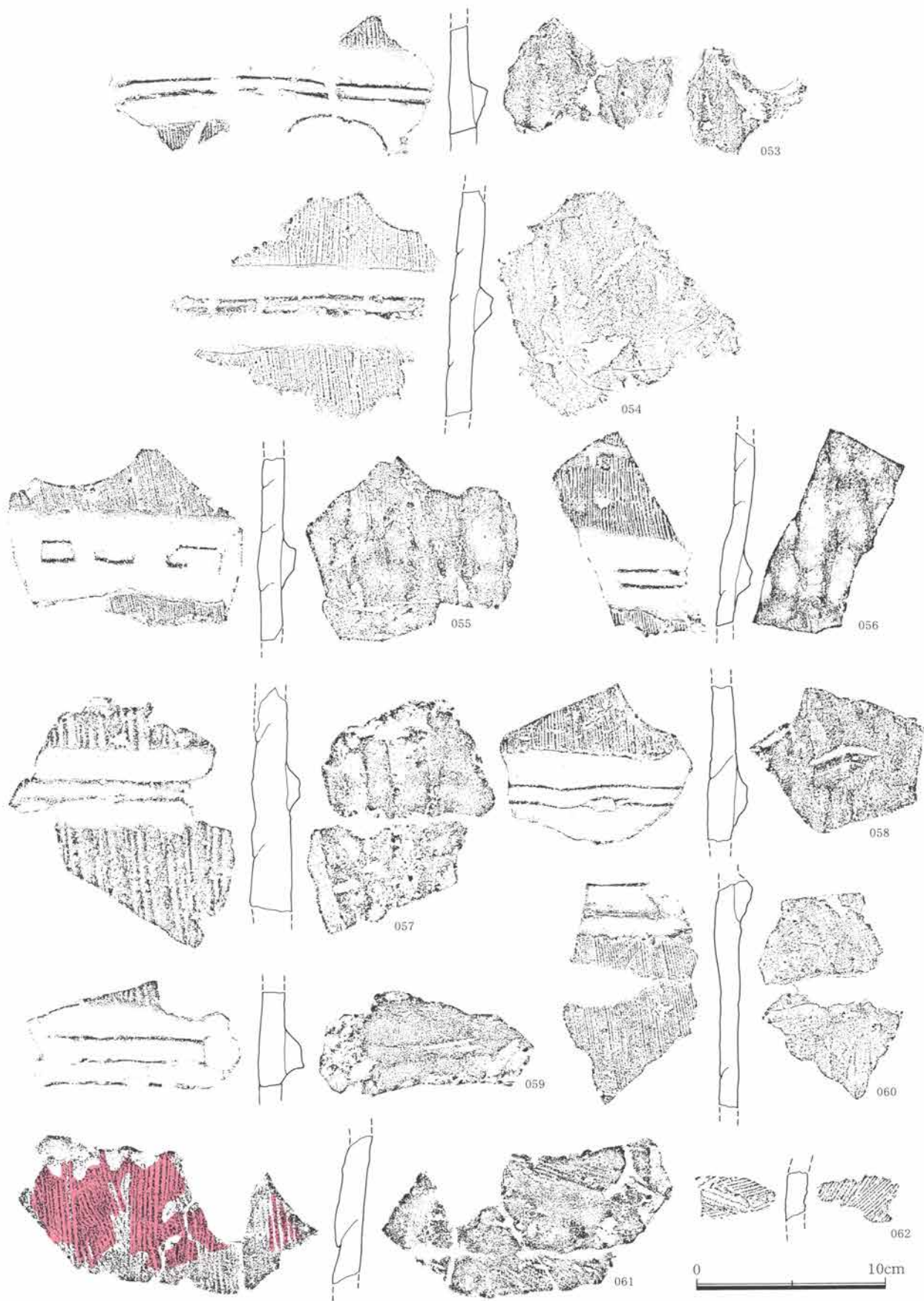
第85図 円筒埴輪(3)



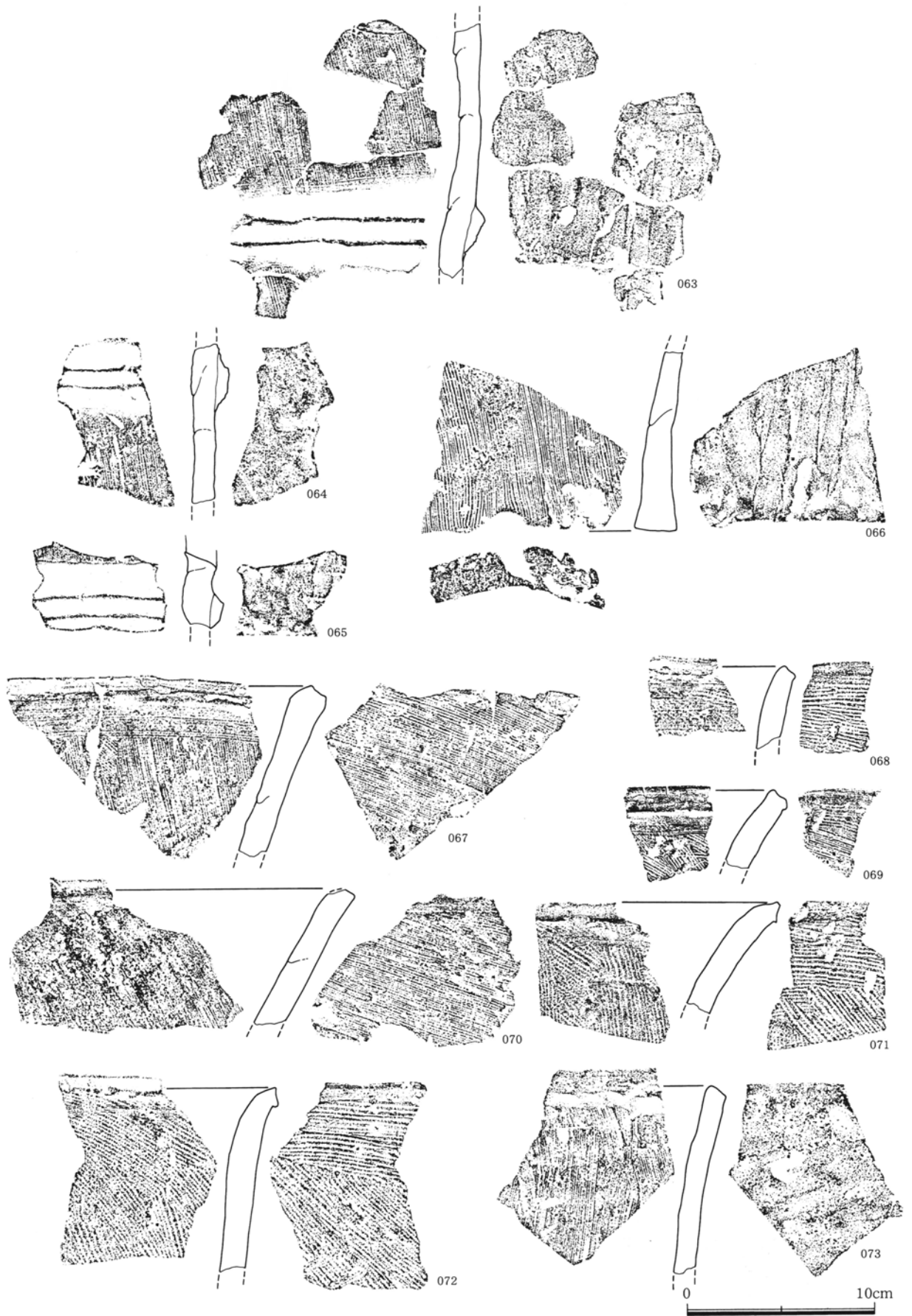
第86図 円筒埴輪(4)



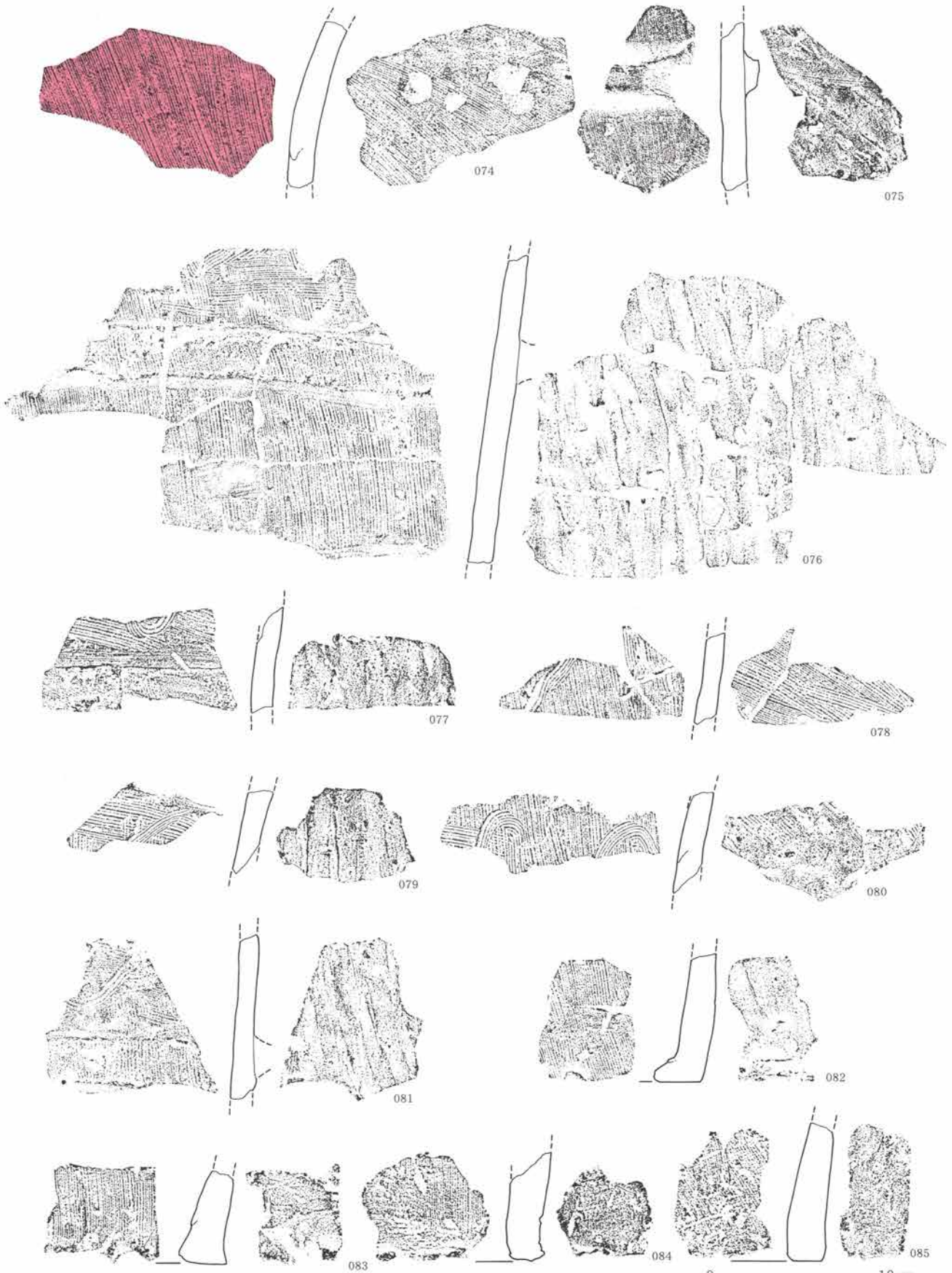
第87図 円筒埴輪(5)



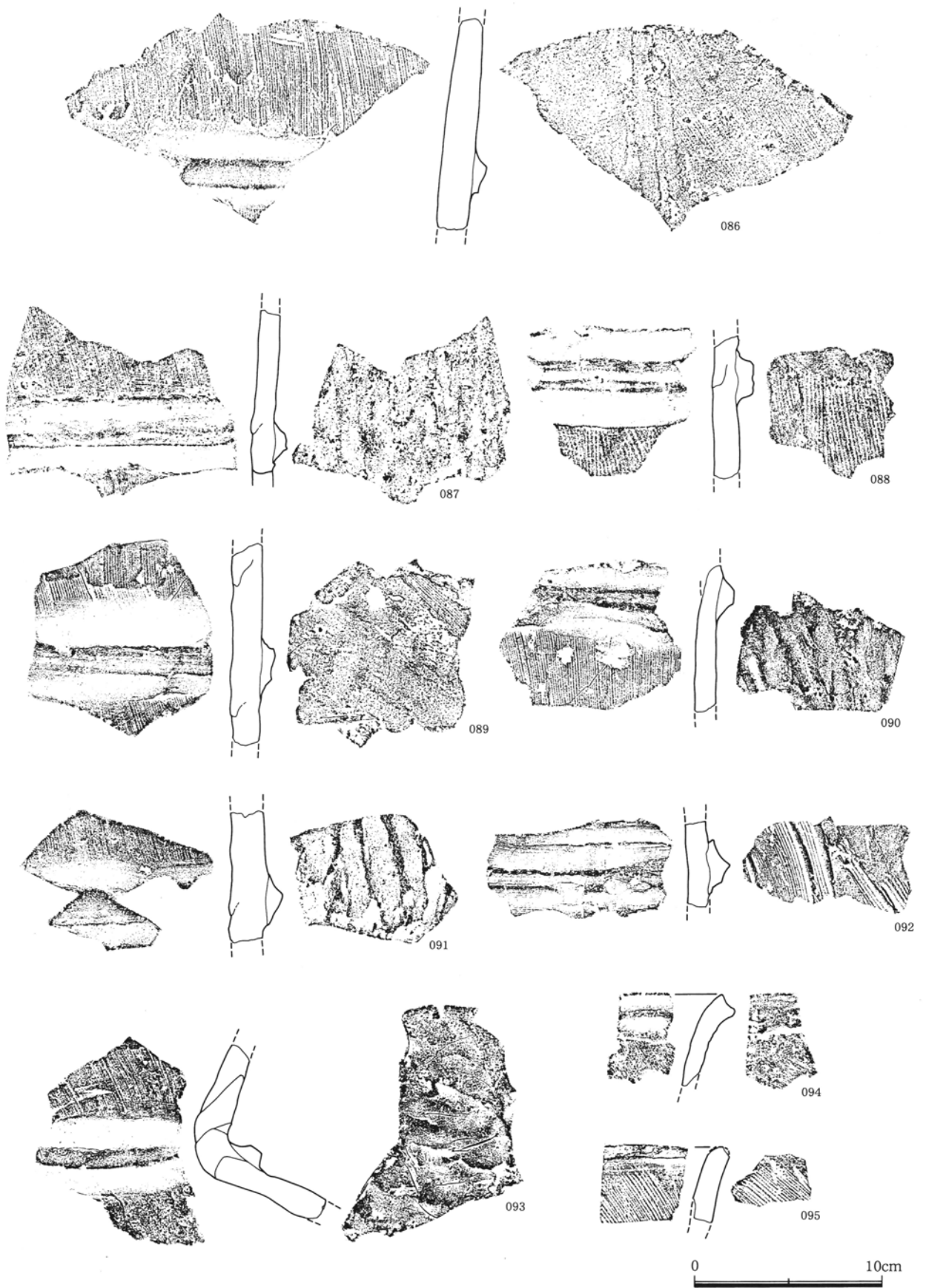
第88図 円筒埴輪(6)



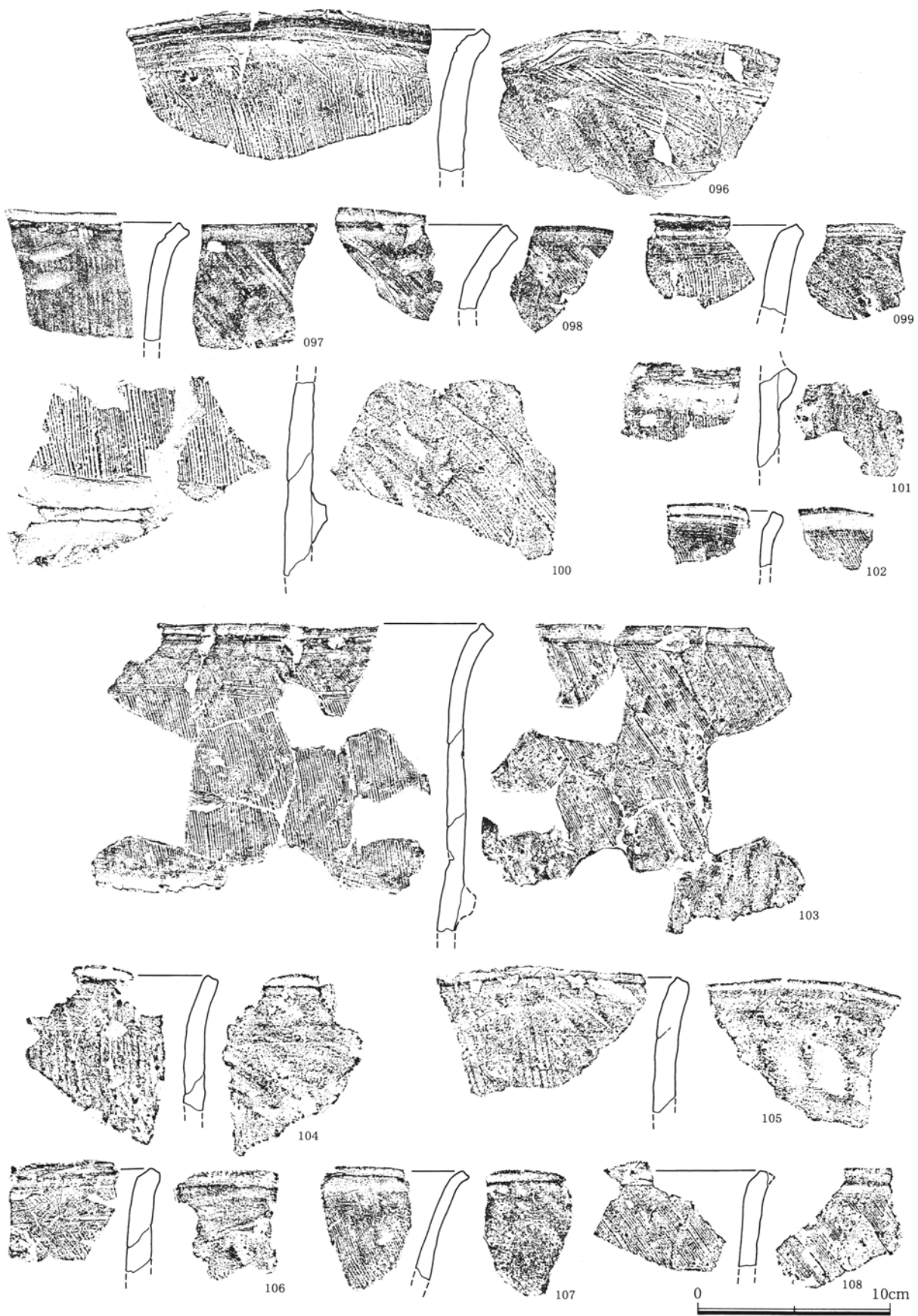
第89図 円筒埴輪(7)



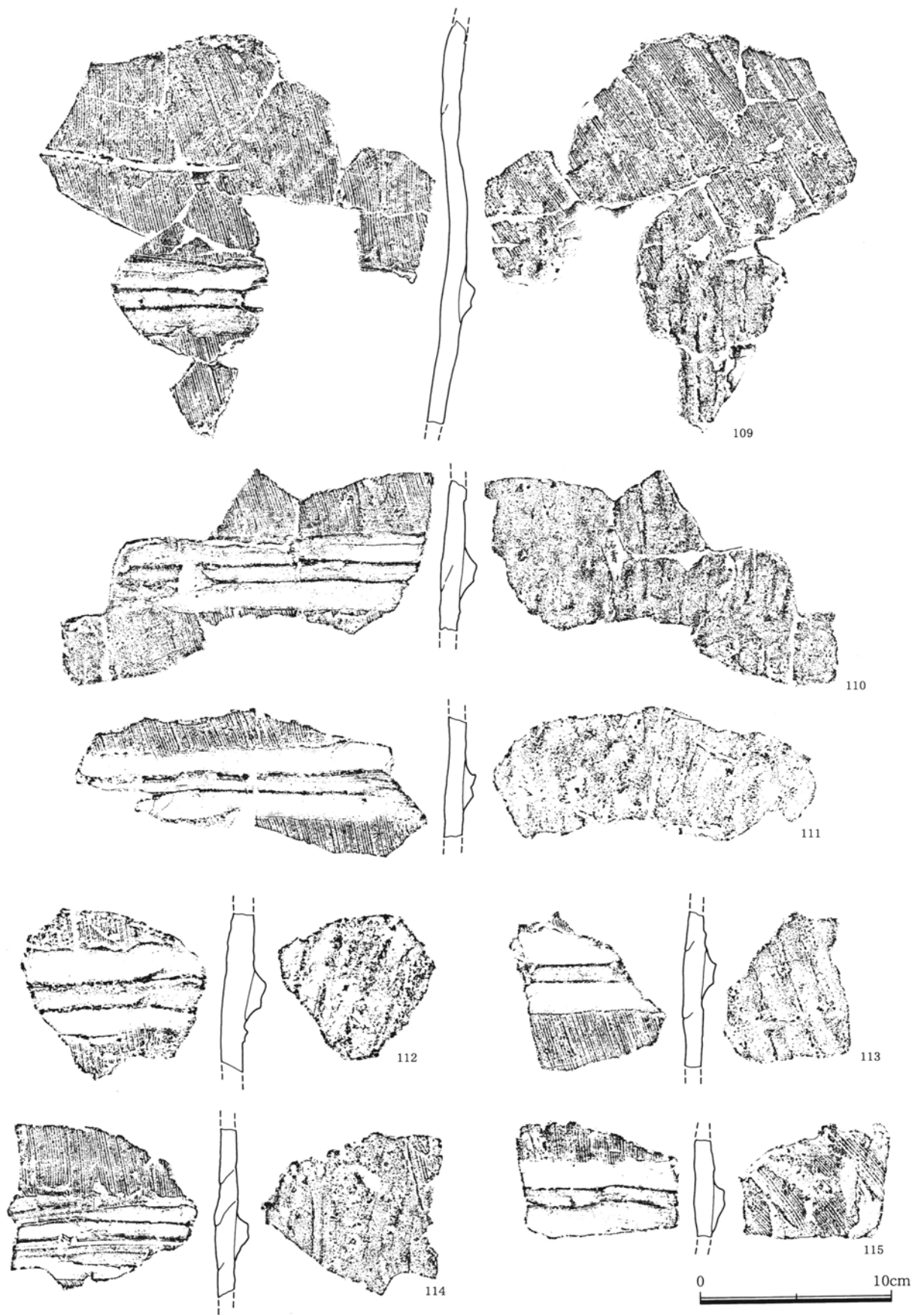
第90図 丸筒埴輪(8)



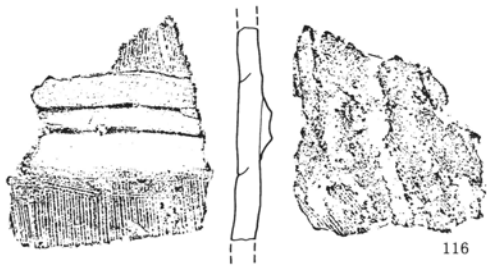
第91図 円筒埴輪(9)



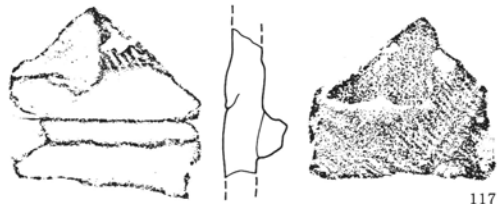
第92図 円筒埴輪(10)



第93図 円筒埴輪(II)



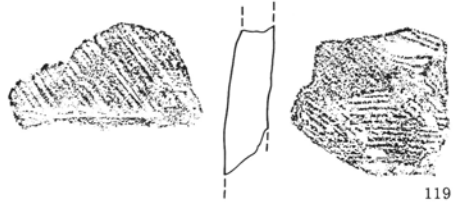
116



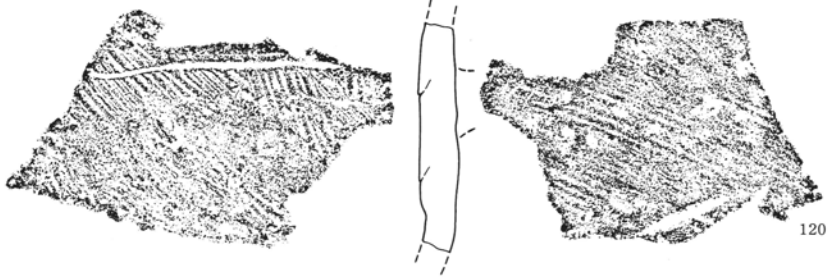
117



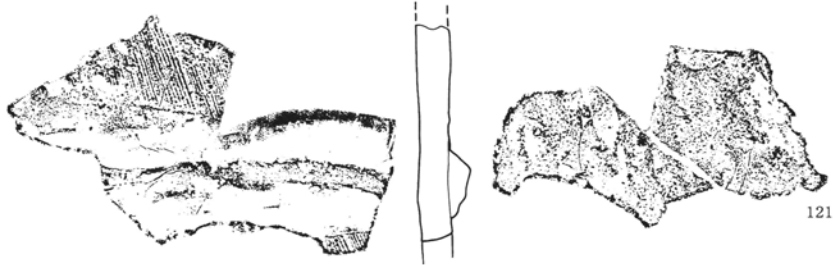
118



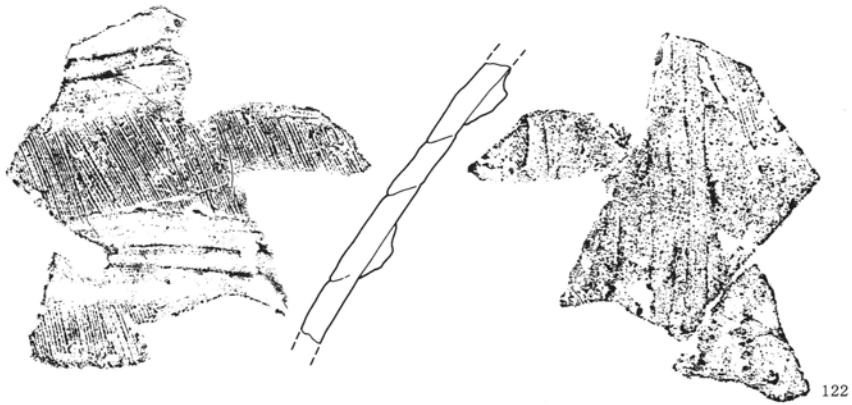
119



120



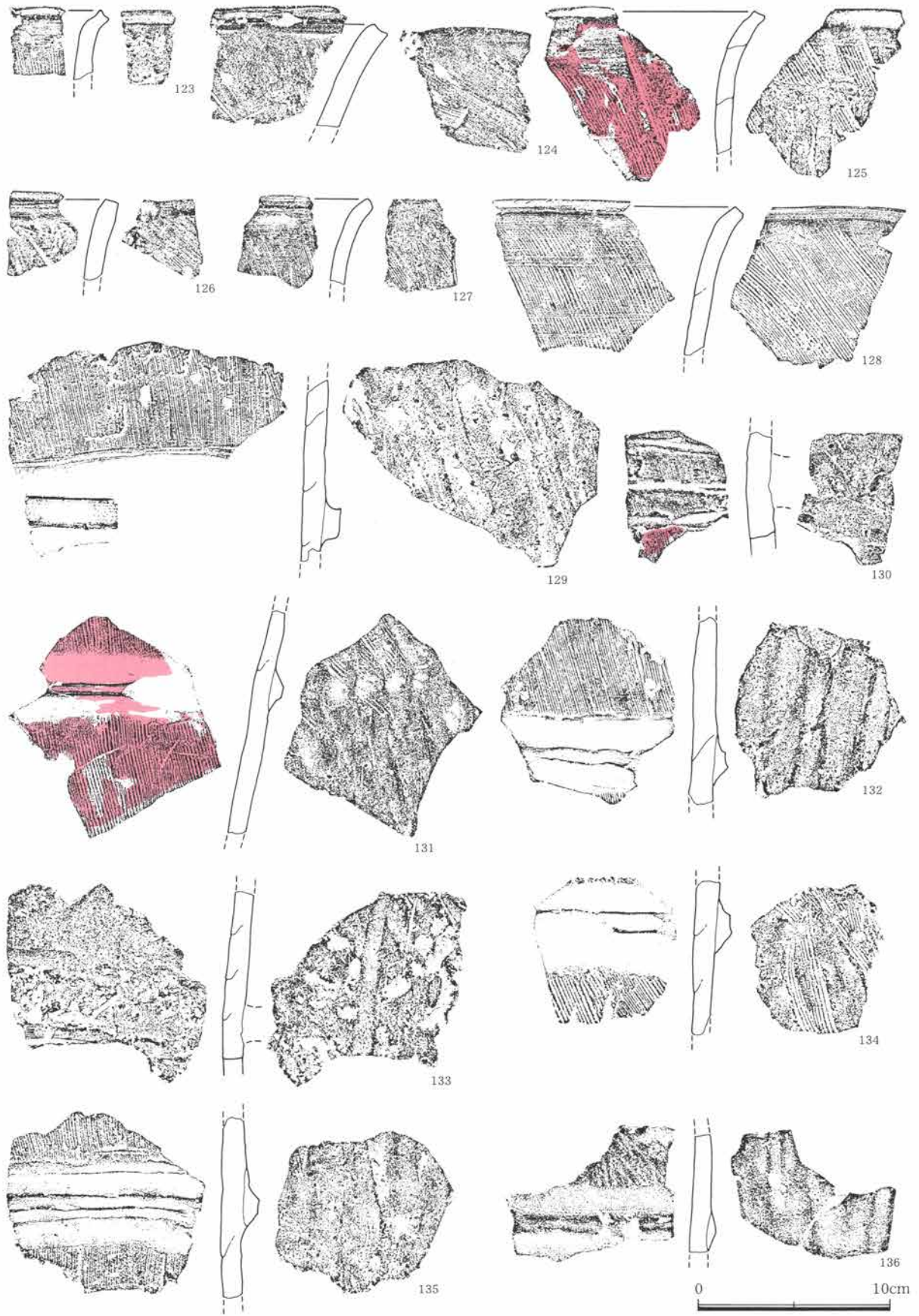
121



122



第94図 円筒埴輪(12)

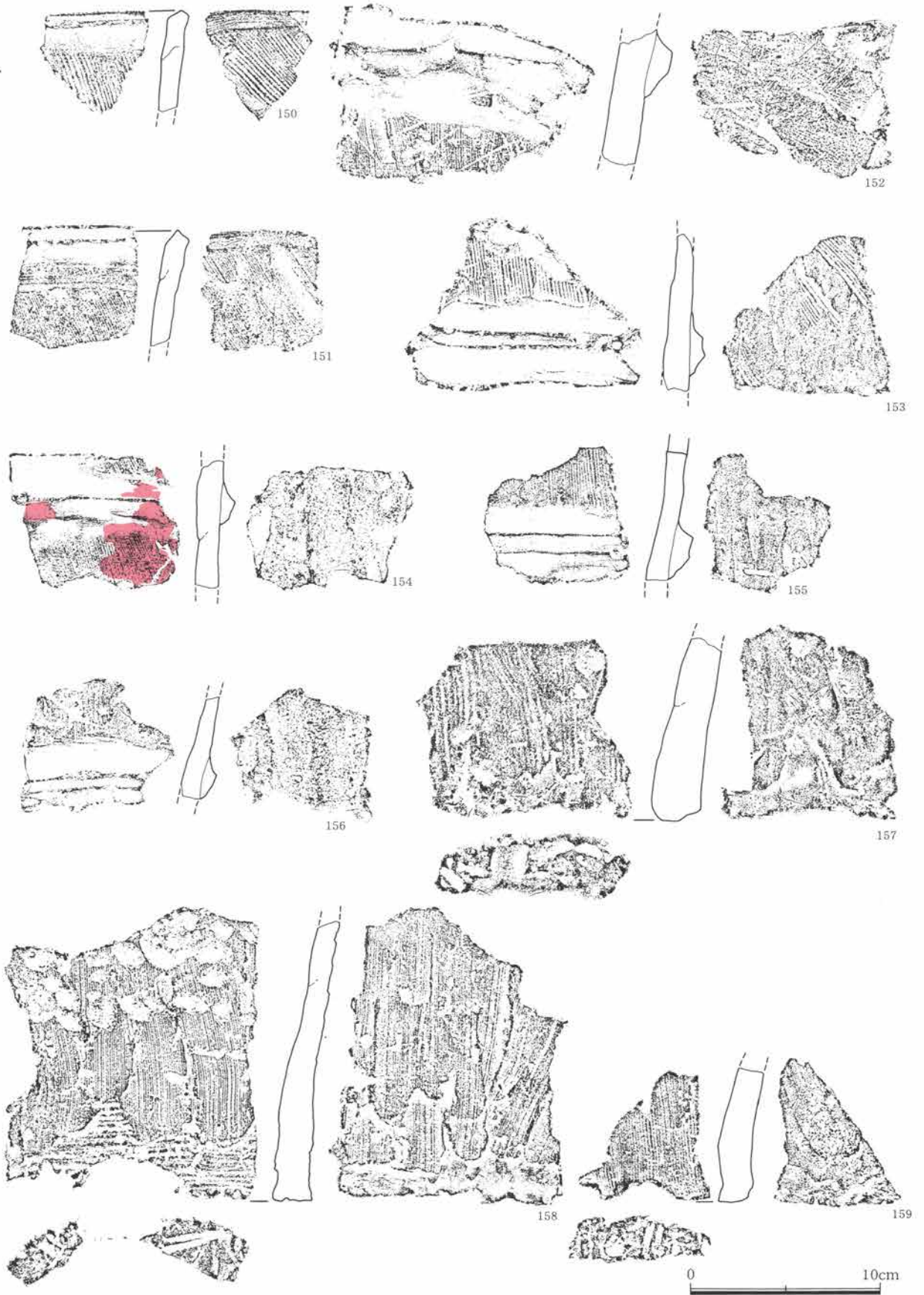


第95図 円筒埴輪(13)

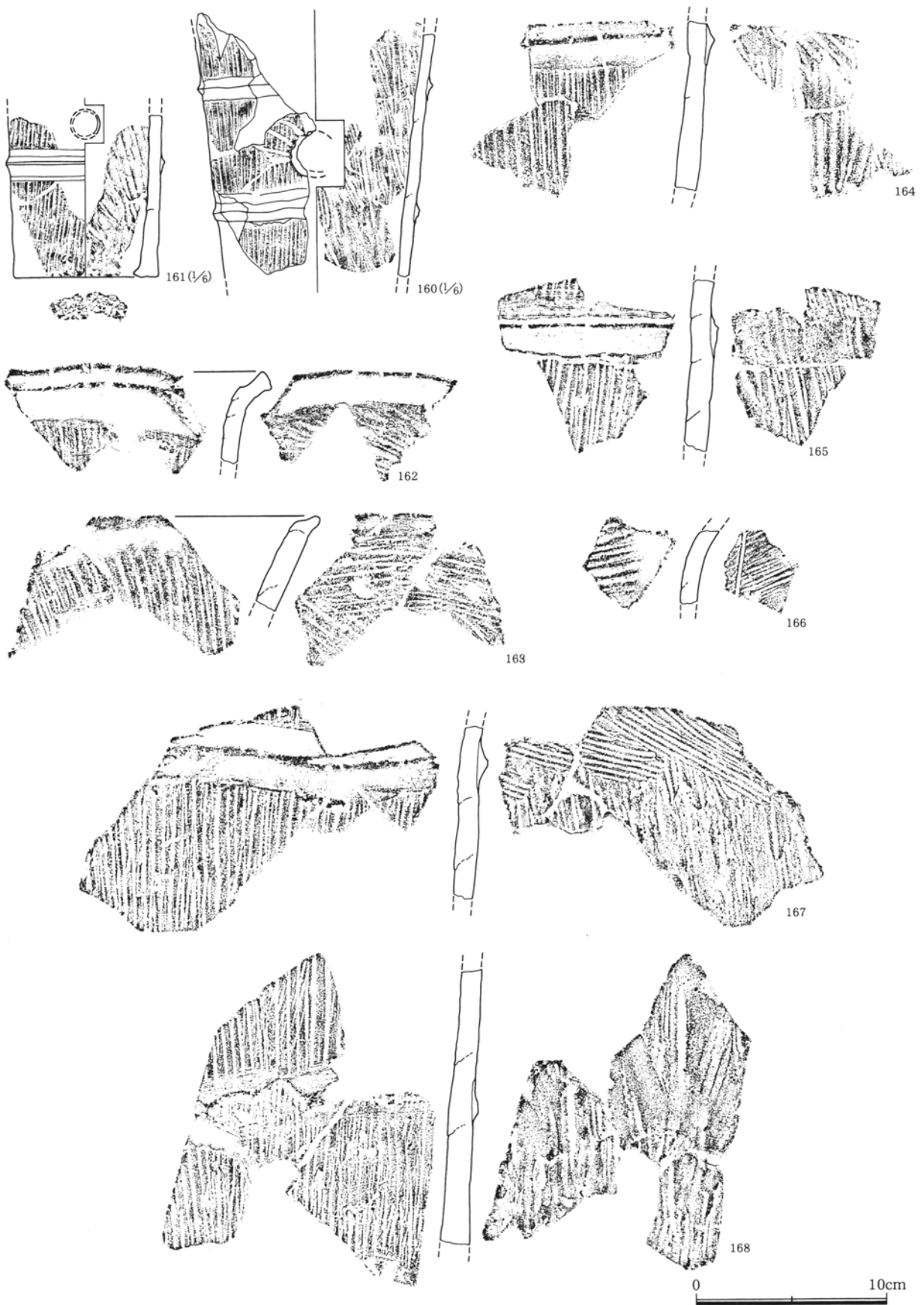


0 10cm

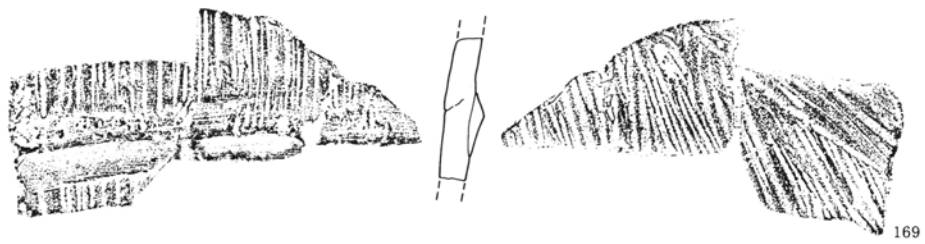
第96図 円筒埴輪(14)



第97図 円筒埴輪(15)



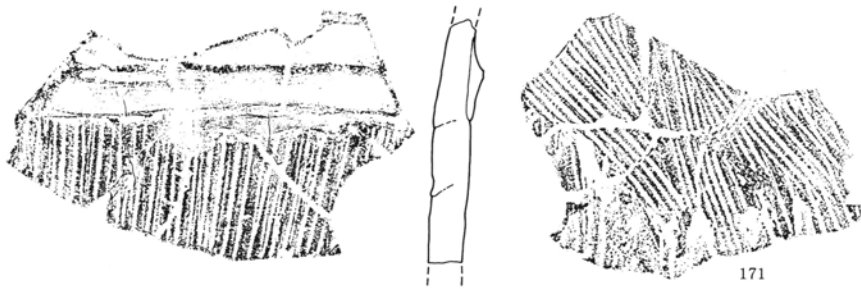
第98図 円筒埴輪(16)



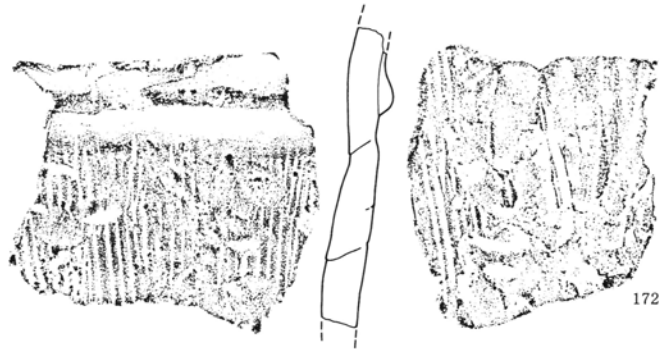
169



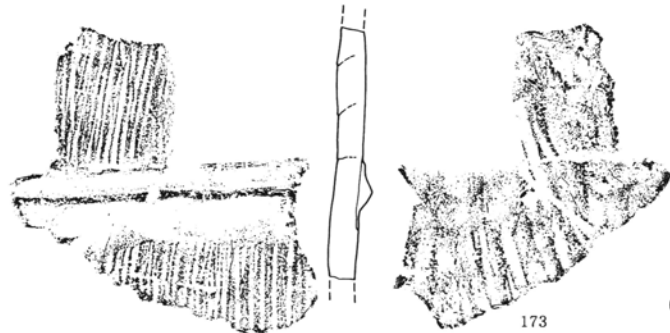
170



171



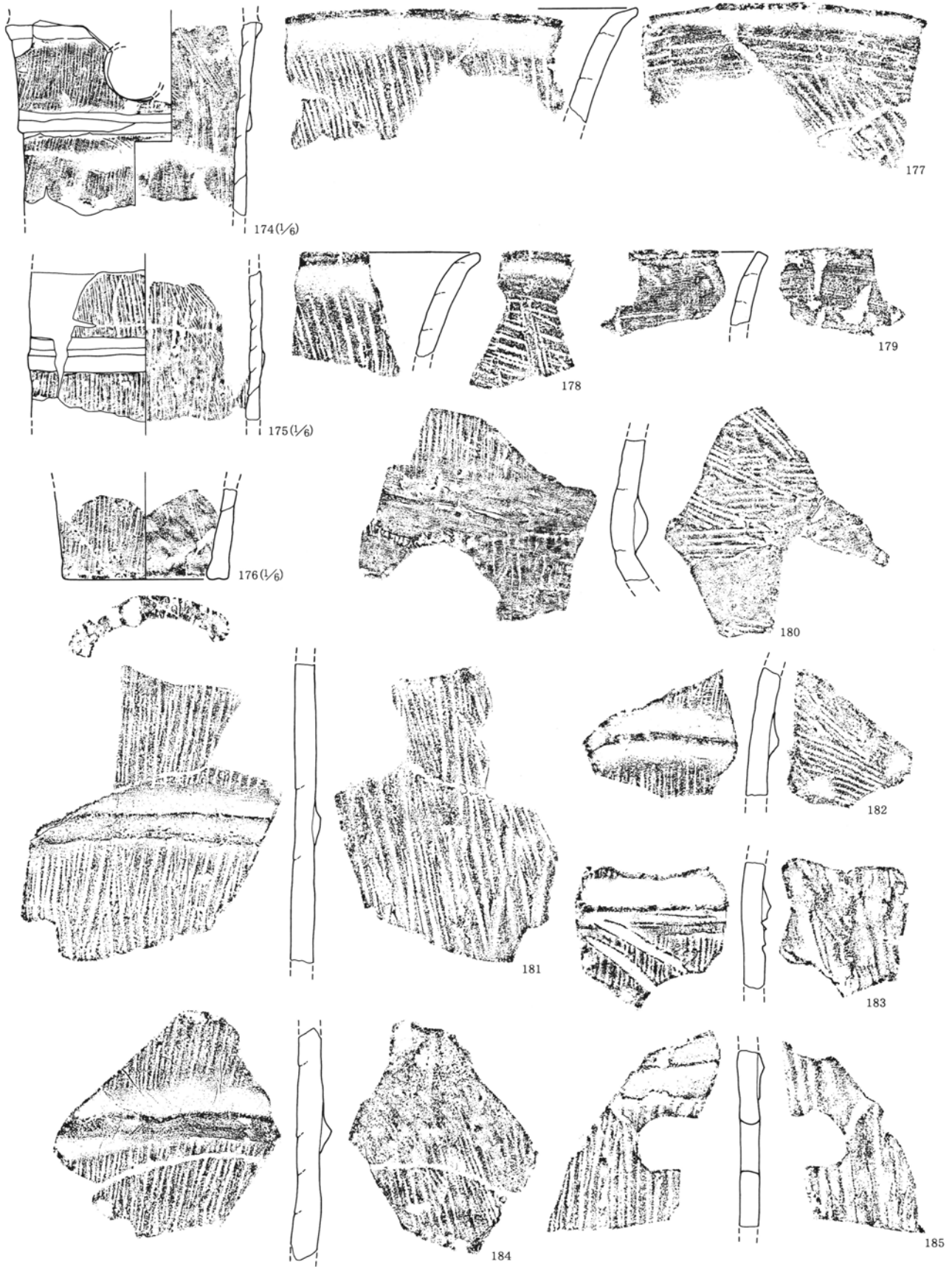
172



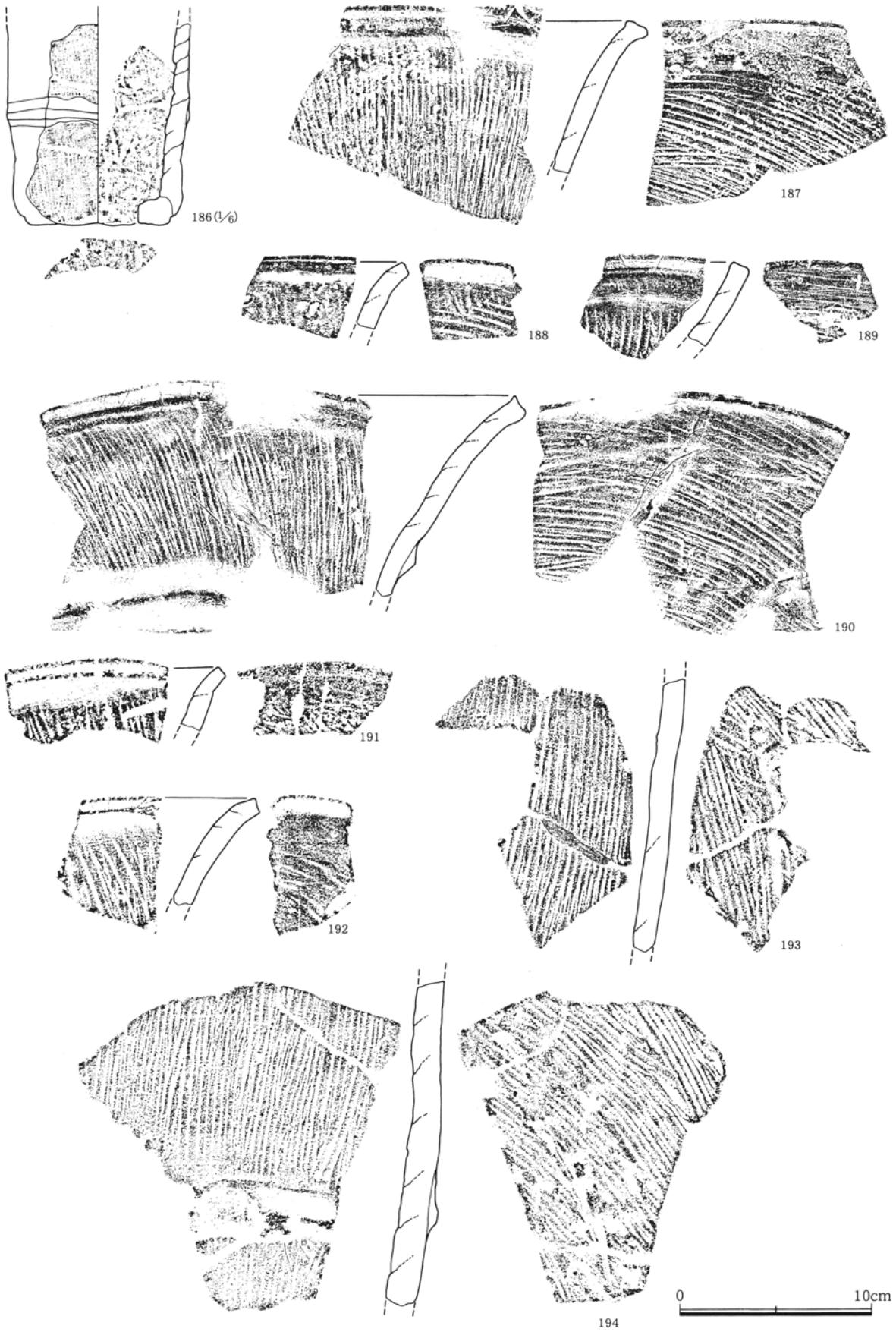
173



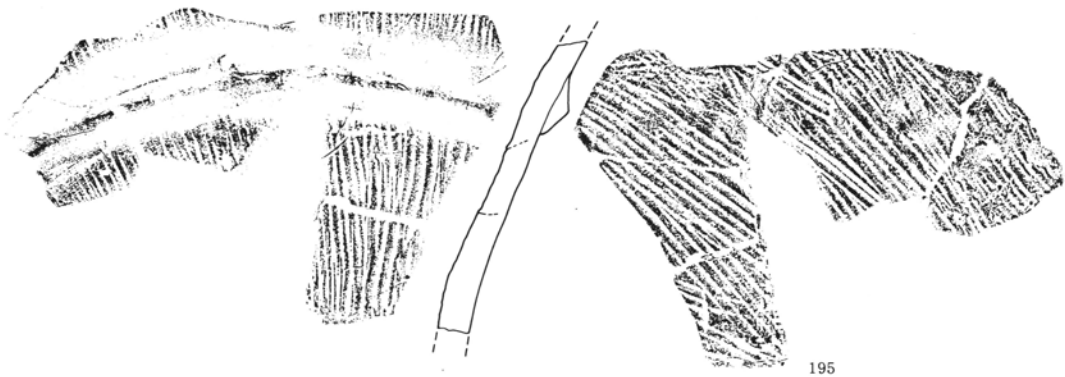
第99図 円筒埴輪(17)



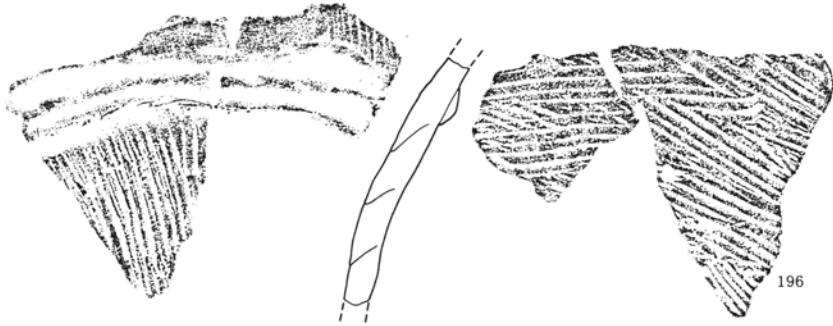
第100図 円筒埴輪(18)



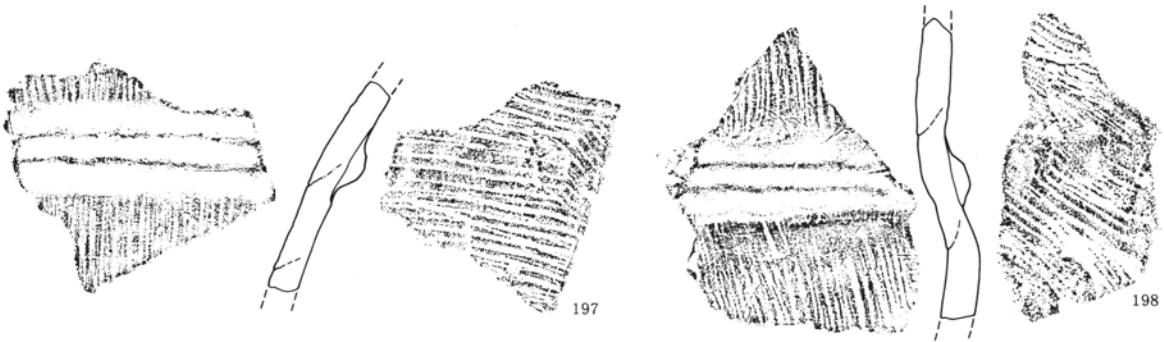
第101図 円筒埴輪(19)



195

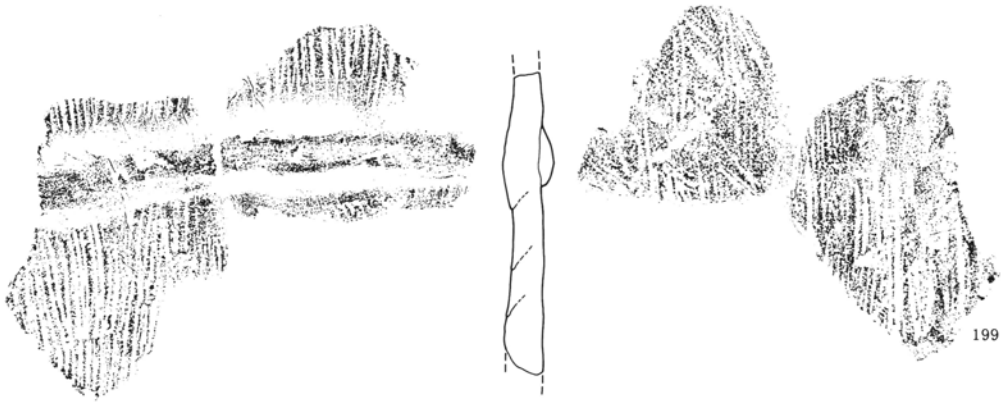


196

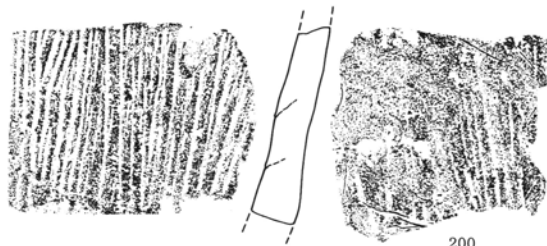


197

198



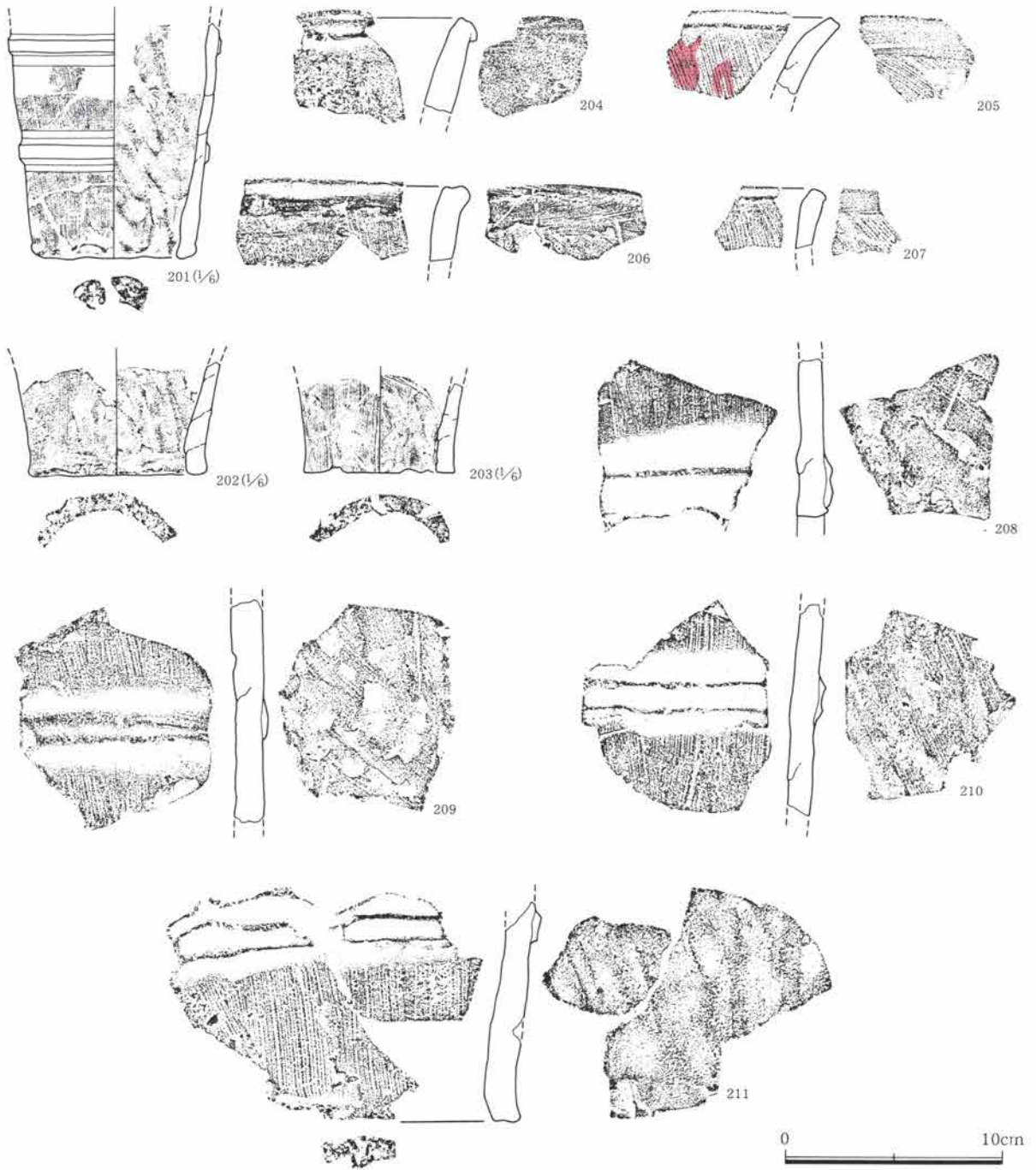
199



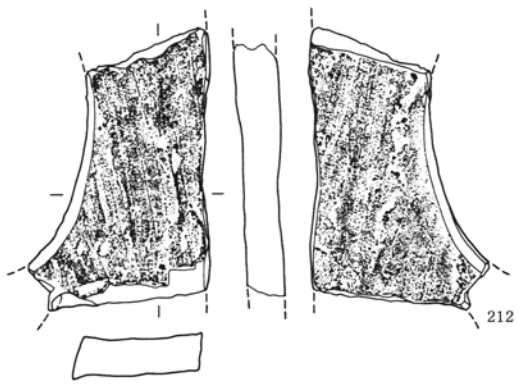
200



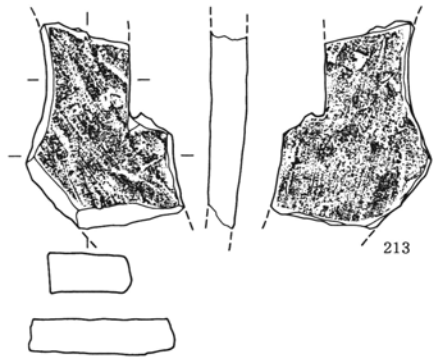
第102図 円筒埴輪(20)



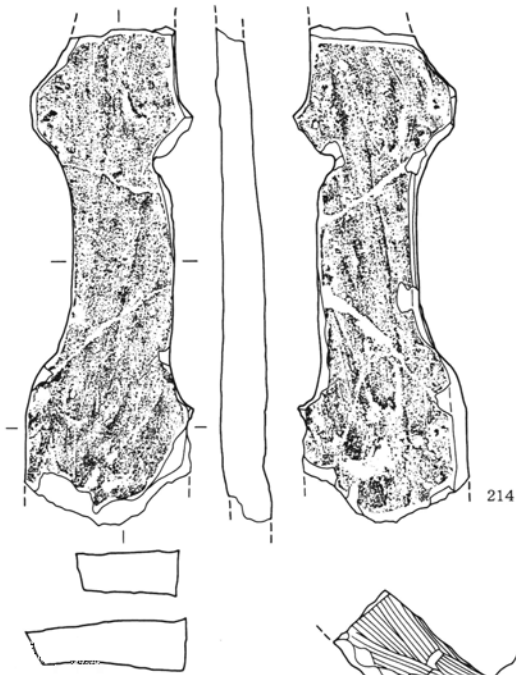
第103図 円筒埴輪(2)



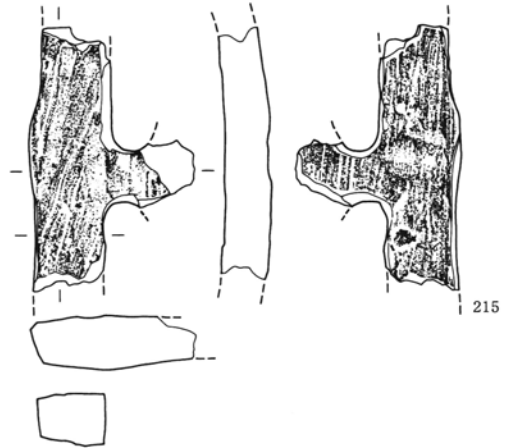
212



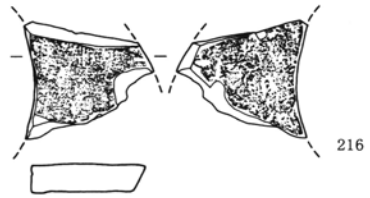
213



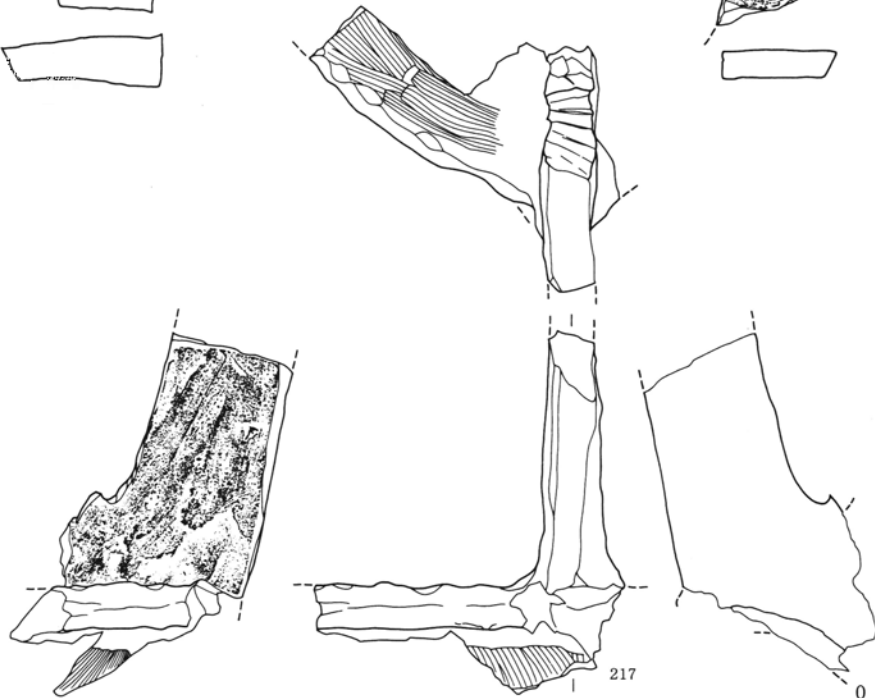
214



215



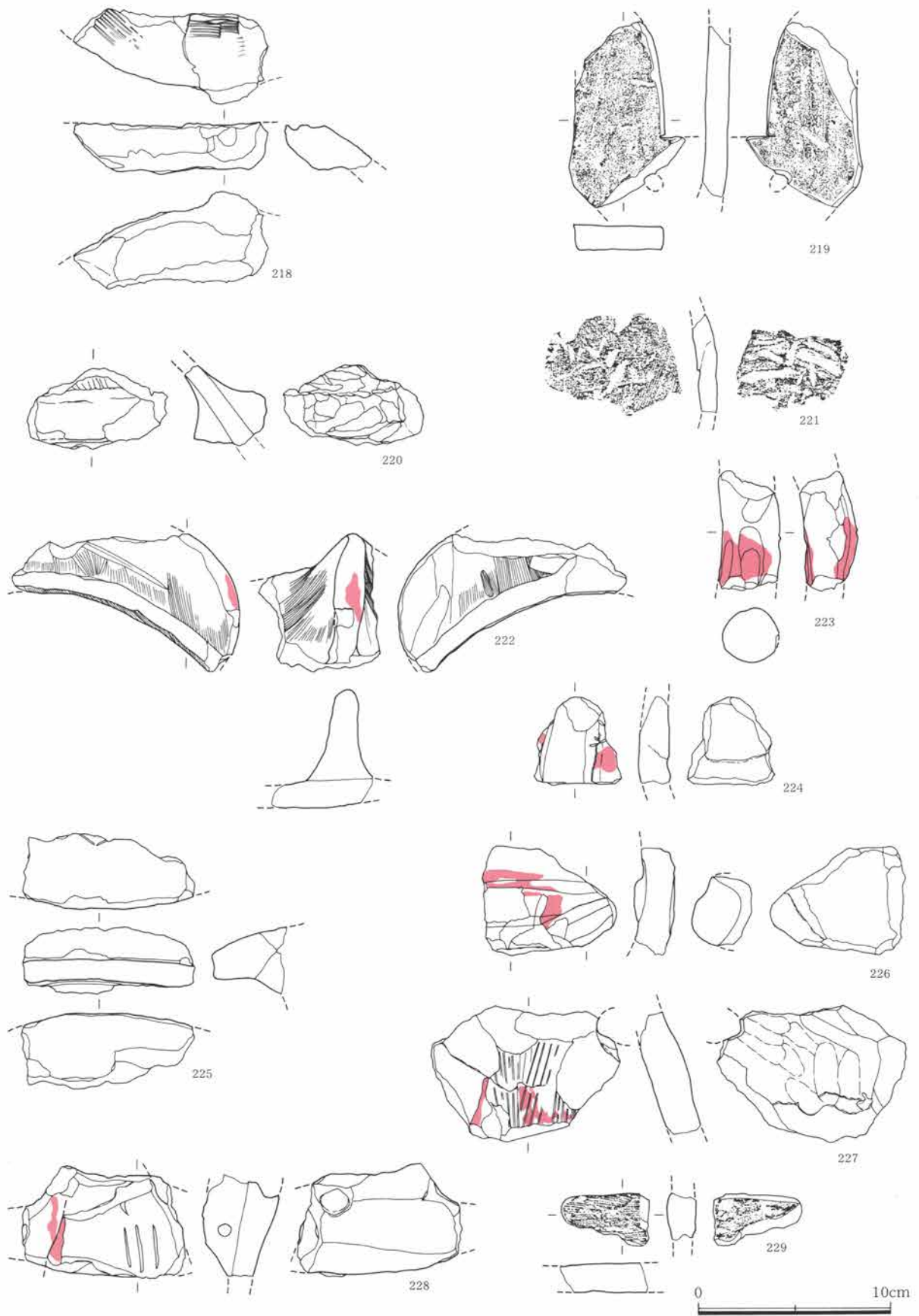
216



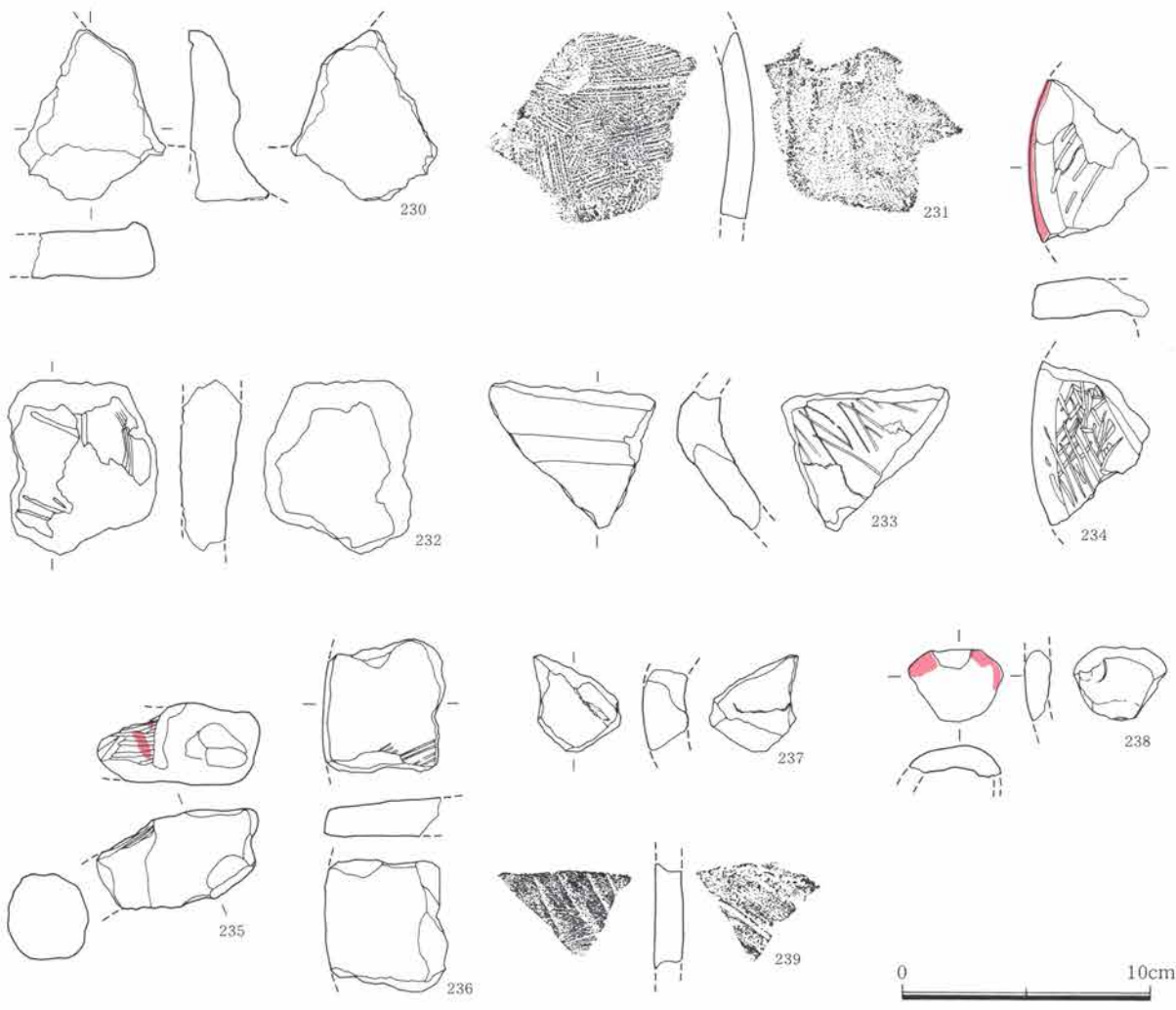
217



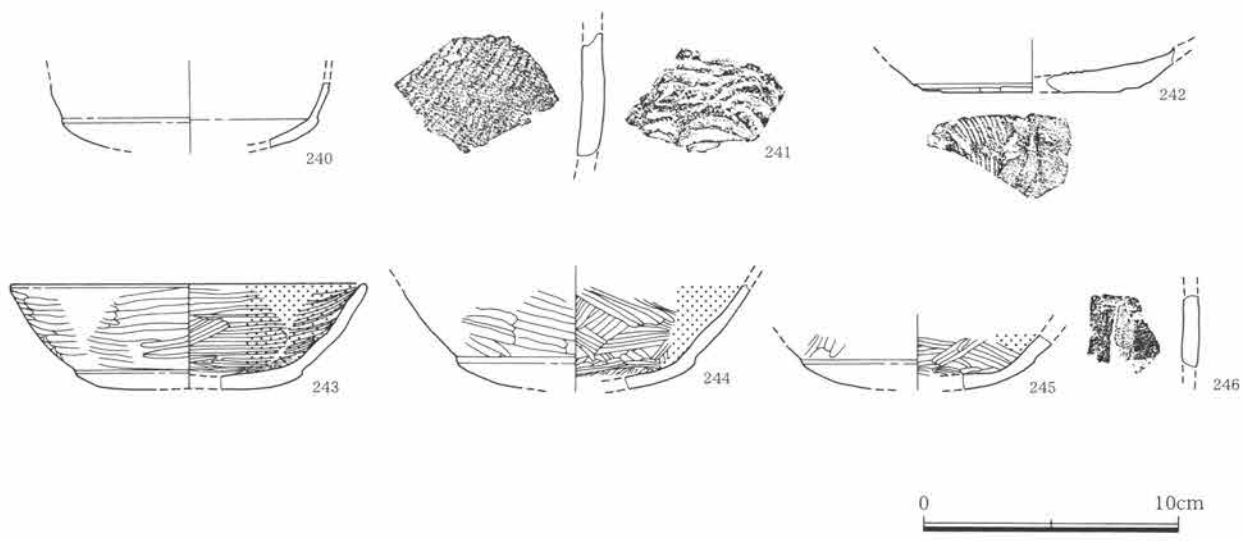
第104図 形象埴輪(I)



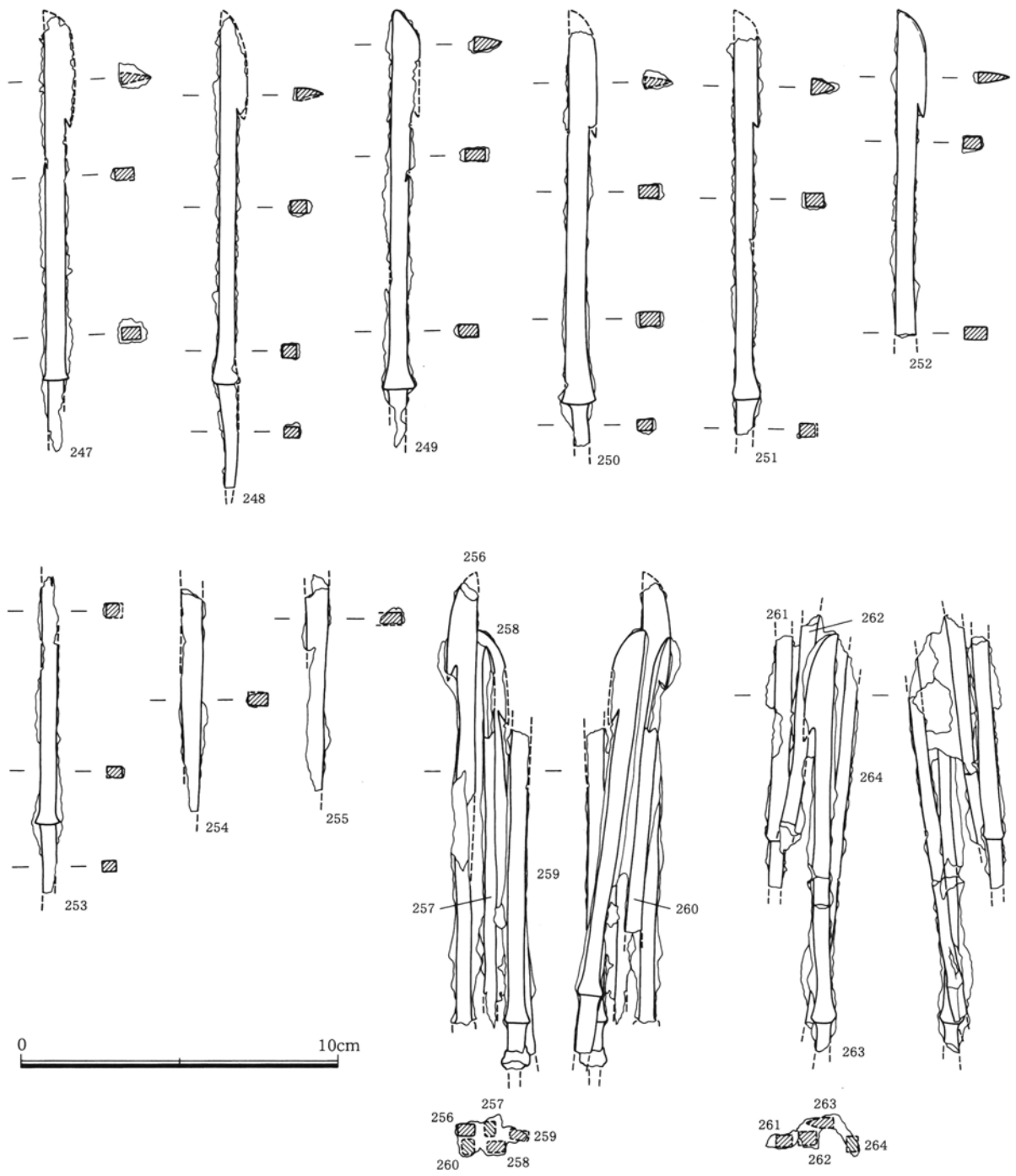
第105图 形象埴輪(2)



第106図 形象埴輪(3)



第107図 その他の土器



第108図 井出二子山古墳採集の鉄鍔

第11表 井出二子山古墳出土円筒埴輪観察表

No.	挿図 写真	量 目	出土位置 (注記)	① 胎 土 ② 色 調 ③ 焼 成	口 縁	突 帯		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備 考
						形状	間 隔				
001	第83図 PL 49	残 口縁部～ 胴部破片 口 (31.0) 高 <13.6>	N-2 T、内 堀・N-2 T、 内堀黒土	①B、白色鈹物 粒・チャート② 明赤褐5YR5/6 ③普通・普通	C				16	器形は大きく歪んでいる。口縁部の復元径は、長径31.0cm、短径28.5cmを測る。口縁部は先端が外反して立ち上がる。外面、タテハケ後突帯貼付をするが大きく波打っている。内面、タテハケ。胴部外面、タテハケ後突帯貼付。内面、タテ方向のナデ。	001・007・009 ・011・012は 同一個体と 考えられる。
002	第83図 PL 49	残 基底部～ 胴部第1段破 片 底 (22.4) 高 <16.7>	N-2 T、内堀 ・N-2 T、内 堀黒土	①A、チャート ② 橙5YR6/6③ 普通・普通		台 1	基	14.0	12	弱く外傾して立ち上がる。外面、タテハケ後突帯貼付。内面、タテ方向のナデ。	
003	第83図 PL 49	残 胴部～底 部破片 底 (20.0) 高 <17.5>	N-2 T、内堀 ・N-2 T、内 堀黒土	①A、チャート ②にぶい橙5YR 7/4③普通・普通		不明	基	16.0	18	外傾弱く立ち上がる。外面、タテハケ後、突帯貼付。下端に基部不粘土板作成時の工作台痕を残す。粘土板は左を上を重ねる。内面、タテハケ、一部にタテ方向のナデ。	
004	第83図 PL 51	残 口縁部破 片 高 < 4.1>	N-2 T、内堀	①B、白色鈹物 粒②にぶい橙5 YR6/4(表)褐 灰5YR6/1(裏) ③不良・普通	A				15	先端は屈曲ぎみに立ち上がり内面に稜をなす。外面、ヨコナデ。内面ハケメ後先端にヨコナデ。	
005	第83図 PL 51	残 胴部破片 高 < 3.6>	N-2 T、内堀	①B②にぶい橙 5YR6/4③普通 ・普通					18	外面、タテハケ。内面、ナデ。	
006	第83図 PL 51	残 胴部破片 高 < 3.3>	N-2 T、内堀 黒土	①A、チャート ② 橙5YR7/6③ 普通・普通				不明	20	外面、タテハケ。内面、ナデ。	器面は磨滅 する。
007	第83図 PL 49	残 胴部破片 高 < 7.4>	N-2 T、内堀 ・N-2 T、内 堀黒土	①B②にぶい橙 5YR6/4③普通 ・普通		台 2		半円	18	外面、タテハケ後突帯貼付。内面はタテ方向のナデ。	
008	第83図 PL 51	残 胴部破片 高 < 6.5>	N-2 T、内堀	①B、白色鈹物 粒② 橙2.5Y6/ 6(表)、にぶい橙 5YR6/4(裏)③ 普通・普通					5	外面、タテハケ。内面ナナメヨコハケ、ナデ。	外面、赤色塗 彩。
009	第83図 PL 49	残 口縁部破 片 高 <10.4>	N-2 T、内堀	①B②橙5YR6/ 6③普通・普通					18	外面、タテハケ。内面、タテ方向のナデ。	
010	第83図 PL 51	残 胴部破片 高 <11.4>	N-2 T、内堀 黒土	①A、チャート ②にぶい橙7.5 YR7/4③普通・ 普通				半円	5	外面、タテハケ。内面、タテ方向のナデ。	朝顔形の可 能性もある か。
011	第83図 PL 49	残 胴部破片 高 < 8.7>	N-2 T、内堀 ・N-2 T、内 堀黒土	① A ② 橙7.5 YR6/6③普通・ 普通		台 2		半円	16	外面、タテハケ後突帯貼付。内面はタテ方向のナデ。	
012	第83図 PL 49	残 胴部破片 高 <10.5>	N-2 T、内堀 ・N-2 T、内 堀黒土	①A、チャート ② 橙5YR6/6③ 普通・普通		台 2		半円	18	外面、タテハケ後突帯貼付。内面はタテ方向のナデ。	

No.	挿図 写真	量 目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	口 突 帯		透孔 形状	ハケ メ	成・整形の特徴	備 考
					形状	間 隔				
013	第83図 PL 51	残 底部破 片 高 < 6.5>	N-2 T、内堀	①B②浅黄橙7.5YR8/6③普通・普通				11	外面、タテハケ。内面、ナナメタテハケ。基部の粘土板は右を上重ねている。	
014	第84図 PL 51	残 底部破 片 高 < 11.8>	N-2 T、内堀 ・N-2 T、内堀黒土	①A、白色鉱物粒②浅黄橙7.5YR8/6③普通・普通				15	外面、タテハケ。内面、タテ方向のナデ。底面に棒状の圧痕が認められる。	
015	第84図 PL 51	残 底部破 片 高 < 5.2>	N-2 T、内堀 黒土	①B②にぶい橙7.5YR7/4③普通・普通				18	外面、タテハケ。内面ナデ。	
016	第84図 PL 49	残 胴部 径 (29.2) 高 < 17.8>	N-2 T、内堀 ～周堤・N-2 T、内堀	①A、石英②橙5YR6/6③不良・普通	台 1		半円	16	外面、タテハケ後突帯貼付。途中で粘土紐が断絶しているようにみえる部分がある。内面、ナナメタテハケに一部ナデを重ねる。	外面に横方向の線刻 1 条。
017	第84図 PL 51	残 口縁部破 片 高 < 6.0>	N-2 T、内堀 ～周堤	①A②橙5YR6/6③普通・普通	D				口縁部先端の内縁は尖る。内外面ともヨコナデ。	外面に赤色塗彩。
018	第84図 朝顔 PL 51	残 口縁部破 片 高 < 8.8>	N-2 T、内堀 ・N-2 T、内堀黒土・N-2 T、内堀～周堤	①A、チャート②橙5YR6/6(表)、にぶい橙5YR7/4(裏)③普通・普通				8	外傾して立ち上がる。外面、タテハケ後先端にヨコナデ。内面、ヨコ方向のナデ。	
019	第84図 PL 51	残 口縁部破 片 高 < 4.8>	N-2 T、内堀 ～周堤	①B②にぶい橙5YR7/3③普通・普通	D			表 8 裏 14	弱く外傾する。外面タテハケ後先端を幅広くヨコナデ。内面、ナデ、ハケメ。	
020	第84図 PL 51	残 胴部破片 高 < 5.5>	N-2 T、内堀 ～周堤	①B、白色鉱物粒②にぶい橙5YR7/4③普通・普通				8	外面、タテハケ。内面、ヨコ方向のハケメ後ナデを重ねる。	外面に赤色塗彩。
021	第84図 PL 49	残 胴部破片 高 < 12.2>	N-2 T、内堀 ～周堤・N-2 T、内堀	①B、白色鉱物粒②橙5YR6/6(表)、褐灰5YR5/1(裏)③不良・やや軟質	台 2			8	外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ナデを加えるが粘土紐の接合痕の残存顕著。	
022	第84図 PL 51	残 胴部破片 高 < 17.0>	N-2 T、内堀 ～周堤	①A、チャート②浅黄橙7.5YR8/6(表)、灰黄褐10YR5/2(裏)③不良・普通	台 1		半円	16	外面、タテハケ後突帯貼付。内面、タテ方向のナデ。	
023	第85図 PL 51	残 胴部 2 段 破片 高 < 7.1>	N-2 T、内堀 ～周堤・N-2 T、内堀黒土	①A、チャート②淡赤橙2.5YR7/4(表)、淡橙5YR8/4(裏)③普通・やや軟質	台 2		円	8	外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ナナメヨコハケ。	
024	第85図 PL 51	残 口縁部破 片 高 < 14.5>	N-2 T、周堤 ～外堀	① A、チャート②にぶい橙7.5YR7/4③普通・普通	D			16	外反弱く立ち上がる。外面、タテハケ。内面、ナナメヨコ方向のハケ後、先端にヨコナデ。	
025	第85図 PL 51	残 底部破 片 高 < 9.0>	N-2 T、周堤 ～外堀	①B、赤色粘土粒②浅黄橙10YR8/4③普通・やや軟質				15	器形は大きく歪んでいるか。外面、タテハケ。内面、タテ方向のナデ。	

No	挿図 写真	量目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	口 縁	突帯		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備考
						形状	間隔				
026	第85図 PL 49 PL 54	残 胴部2段 破片 胴径 (27.5) 高 <20.0>	N-2 T、周堤 ～外堀・N-2 T、外堀落 込・N-2 T、 北外堀落込	①A、チャート ②明赤褐5YR5/ 6③普通・普通		M 1		半円	16	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。残存上位 にハケメがみられる。	上段は口縁 部の可能性 があるか。
027	第85図 PL 51	残 口縁部破 片 高 < 8.9>	N-2 T、外堀 ～中堤	①A、チャート、 赤色粘土粒②橙 5YR6/6③普通 ・普通	A				17	外反して立ち上がる。先端は弱 く外折ぎみになる。内外面、タ テハケ後先端をヨコナデ。	
028	第85図 PL 51	残 口縁部破 片 高 < 5.0>	N-2 T、外堀 ～中堤	①B②橙5YR6/ 6③普通・普通	D				18	器肉は薄い。外反して立ち上が る。内外面、タテハケ後先端を ヨコナデ。	
029	第85図 PL 51 PL 56	残 口縁部破 片 高 < 7.5>	N-2 T、外堀 ～中堤	①A、チャート ② 橙5YR6/8③ 普通・普通	C				15	外反して立ち上がり、先端は短 く外折ぎみになる。外面、ハケ メ。内面、先端ヨコナデ。上位、 ナナメヨコ方向のナデ。下半は ハケメ。	内面に線刻 1条あり。
030	第85図 PL 56	残 口縁部破 片 高 < 3.1>	N-2 T、外堀 ～中堤	①A、石英②橙 7.5YR6/6③普 通・普通					18	外面、タテハケ。内面、ナデ。	内面に線刻 あり。
031	第85図 PL 51	残 胴部破片 高 <12.2>	N-2 T、外堀 ～中堤	①A、チャート ・赤色粘土粒② 橙5YR6/6③普 通・普通		三		円?	18	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、ナデ。	
032	第85図 PL 51	残 胴部破片 高 <10.0>	N-2 T、外堀 ～中堤	①A、チャート ・白色鉱物粒② 橙5YR7/6(表)、 にぶい黄褐10 YR5/3(裏)③ 不良・軟質					表 10 裏 6	器肉、厚い。外面タテハケ後突 帯貼付。内面、タテハケ。	突帯貼付の ための割り 付け線が認 められる。
033	第85図 PL 51 PL 55	残 胴部破片 高 < 8.5>	N-2 T、外堀 ～中堤	①B、白色鉱物 粒②褐灰7.5YR 6/1③不良・普 通、還元状態		台 2			表 8 裏 6	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、ナナメタテハケ。	
034	第85図	残 胴部破片 高 < 4.5>	N-2 T、外堀 ～中堤	①A、チャート ②にぶい橙5YR 6/4③やや不良 ・普通				不明	20	外面、タテハケ。内面、ナデ。	
035	第85図 PL 51	残 胴部破片 高 < 7.1>	N-2 T、外堀 ～中堤	①B②赤橙10R 6/6③普通・普通					9	外面、タテハケ。内面、ナナメ ヨコ方向のナデ。	
036	第86図 PL 49	残 底部部破 片 底 (13.8) 高 <14.0>	N-2 T、周堤 ～外堀	①A、チャート ② 橙2.5YR7/6 ③普通・普通					16	外面、タテハケ。内面タテ方向 のナデ。	器面、粗れて いる。
037	第86図 PL 51	残 底部部破 片 高 <10.9>	N-2 T、周堤 ～外堀	①B、赤色粘土 粒② 橙5YR7/6 ③普通・普通					16	上端は第1突帯間近である。外 面、タテハケ。内面タテ方向の ナデ。	
038	第86図 PL 49	残 口縁部～ 胴部破片 口 31.3 高 <14.6>	N-2 T、外堀 落込・北-2 T、 外側落込	①A、チャート ② 橙5YR6/6③ 普通・普通	D	台 1	口	13.3	15	緩やかに外反して立ち上がる。 外面、タテハケ後突帯貼付。口 縁部の先端はヨコナデを施す。 内面、タテハケ。	

No	挿図 写真	量 目	出土位置 (注記)	① 胎 土 ② 色 調 ③ 焼 成	口 縁	突 帯		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備 考
						形状	間 隔				
039	第86図 PL 49 PL 55	残 胴部～基 底部破片 底 (19.6) 高 <16.1>	N-2 T、外堀 落込・北-2 T、 外側落込	①B、チャート ②橙7.5YR7/6 ③普通・普通					14	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。底面には 工作台の木目痕がつく。	外面に赤色 塗彩。
040	第86図 PL 51	残 口縁部破 片 高 <4.9>	N-2 T、外堀 落込	①B、白色鉾物 粒②橙5YR6/8 ③普通・普通	B				9	斜め上方に立ち上がる。内外面、 ハケメ後先端にヨコナデ。	
041	第86図 PL 51	残 口縁部破 片 高 <5.9>	N-2 T、外堀 落込	①A、チャート ②明赤褐2.5YR 5/6③普通・普通	A				16	内外面、ハケメ後先端をヨコナ デ。	
042	第86図 PL 51	残 口縁部破 片 高 <6.6>	N-2 T、外堀 落込	①A、チャート ②橙5YR6/6③ 普通・普通	A				16	斜め上方に向けて立ち上がる。 内外面、タテハケ後先端にヨコ ナデを施す。	
043	第86図 PL 51	残 口縁部破 片 高 <9.6>	N-2 T、外堀 落込	①A、チャート ②橙7.5YR7/6 ③普通・普通	D				15	緩やかに外反して立ち上がる。 外面、タテハケ後先端ヨコナデ。 内面はヨコ方向のハケメ。	外面に赤色 塗彩。
044	第86図 PL 51 PL 56	残 口縁部破 片 高 <7.0>	N-2 T、外堀 落込	①A、チャート ②明赤褐5YR5/ 8③普通・普通	D				8	緩やかに外反して立ち上がる。 先端は弱く尖る。	外面に弧状 の線刻1条 あり。
045	第86図 PL 51	残 口縁部破 片 高 <12.3>	N-2 T、外堀 落込・N-2 T、 北外堀落込	①A、チャート ②橙5YR6/8・ にぶい黄褐10Y R5/3(表)、橙5 YR6/8(裏)③ 不良・普通	A				17	口縁部は先端が短く外反して立 ち上がる。内外面、タテハケ後、 先端にヨコナデを施す。	
046	第87図 PL 51	残 口縁部破 片 高 <6.0>	N-2 T、北外 堀落込	①B、チャート ② にぶい 橙5 YR6/4③不良・ 普通	A				14	外反して立ち上がる。内外面、 タテハケ後先端にヨコナデ。	
047	第87図 PL 51	残 口縁部破 片 高 <5.1>	N-2 T、北外 堀落込	①B②明赤褐5 YR5/8③普通・ 普通	D				8	緩やかに外反して立ち上がる。 外面、タテハケ後先端ヨコナデ。 内面はヨコ方向のハケメ。	043と同一個 体。
048	第87図 PL 51	残 口縁部破 片 高 <5.9>	N-2 T、北外 堀落込	①B、白色鉾物 粒②にぶい褐7. 5YR5/3(表)、 橙5YR6/6(裏) ③不良・普通	D				13	緩やかに外反して立ち上がる。 内外面、タテハケ後先端をヨコ ナデ。	
049	第87図 PL 49	残 胴部2段 破片 高 <20.0>	N-2 T、外堀 落込・N-2 T、北外堀落 込、北-2 T、 外側落込	①A、白色鉾物 粒②橙5YR6/8 ③普通・普通		台1	胴 約 1 11.0	半円	16	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。透孔は、 穿孔後周縁にナデを加える。	
050	第87図 PL 51	残 胴部破片 高 <10.8>	N-2 T、外堀 落込・N-2 T、 北外堀落込	①A、チャート ②橙5YR6/6③ 普通・普通	M1				9	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテハケを残存上位ではナ デ消している。	器面、磨滅。
051	第87図 PL 51	残 胴部破片 高 <11.2>	N-2 T、外堀 落込	①A、チャート ②橙5YR6/8③ 普通・普通		台1		円	15	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。	

No	挿図 写真	量目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	口 縁	突帯		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備考
						形状	間隔				
052	第87図 PL 49	残 胴部破片 高<13.2>	N-2 T、外堀 落込	①A、白色鉾物 粒②橙5YR6/8 ③普通・やや軟 質		台2		円	9	外面、ナナメハケ後突帯貼付。 内面、ナナメヨコ方向のハケメ。	突帯に赤色 塗彩。
053	第88図	残 胴部破片 高<7.5>	N-2 外堀落 込、N-2 T、 北外堀落込	①A、チャート ②灰褐7.5YR4/ 2(表)、橙7.5Y R6/6(裏)③不 良・普通、やや 還元状態		台1		円	10	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。	
054	第88図 PL 51	残 胴部破片 高<11.8>	N-2 T、外堀 落込	①A、チャート ②橙5YR6/6③ 普通・普通		M2			15	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。	
055	第88図 PL 51	残 胴部破片 高<10.0>	N-2 T、外堀 落込	①A、チャー ト・赤色粘土粒 ②橙5YR6/8③ 普通・普通		台2		円?	15	外面タテハケ後突帯貼付。内面、 タテ方向にナデ。	
056	第88図 PL 51	残 胴部破片 高<15.7>	N-2 T、外堀 落込	①B、赤色粘土 粒②橙7.5YR7/ 6③普通・普通		台2		円	15	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。	
057	第88図	残 胴部破片 高<13.8>	N-2 T、外落 込・北-2 T、 外側落込	①A、チャート ②橙5YR6/6③ 普通・普通		台2		円	5	外面、粗い単位のタテハケ後突 帯貼付。内面、タテ方向のナデ。	器面は磨耗 している。
058	第88図 PL 51	残 胴部破片 高<8.4>	N-2 T、外堀 落込	①A、チャート ②橙7.5YR6/8 ③普通・普通		M2		円	13	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。	
059	第88図	残 胴部破片 高<5.0>	N-2 T、外堀 落込	①B、白色鉾物 粒②橙7.5YR7/ 6③普通・やや軟 質		台2		半円	6	透孔の上辺は幅7.5cm以上。外 面、タテハケ後突帯貼付。内面、 ナデ。	
060	第88図 PL 51	残 胴部破片 高<12.0>	N-2 T、外堀 落込・N-2 T、 北外堀落込	①A、白色鉾物 粒②灰黄褐10Y R5/2(表)、明褐 7.5YR5/6・灰 黄 褐10YR5/ 2(裏)③不良・普 通		三?		円	15	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面ナデ。	
061	第88図 PL 51	残 胴部破片 高<7.8>	N-2 T、外堀 落込	①A、白色鉾物 粒②橙5YR6/8 ③普通・やや軟 質					10	外面、タテハケ。内面ナデ。	外面、赤色塗 彩。
062	第88図 PL 56	残 口縁部破 片 高<3.1>	N-2 T、外堀 落込	①B②橙5YR6/ 8③普通・普通					13	内外面、ハケメ。	外面に線刻。
063	第89図 PL 51	残 胴部2段 破片 高<12.8>	N-2 T、北外 堀落込	①A、チャー ト・白色鉾物粒 ②橙5YR7/6③ 普通・普通		台1		円	17	透孔は上下両段にみられる。外 面、タテハケ後突帯貼付。突帯 の突出度は弱い。内面、タテ方 向のナデ。	
064	第89図 PL 51	残 胴部破片 高<10.2>	N-2 T、外堀 落込	①A、チャー ト・白色鉾物粒② 橙5YR6/8③普 通・普通		台2		半円	16	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。	
065	第89図	残 胴部破片 高<5.0>	N-2 T、北外 堀落込	①A、チャート ②橙5YR6/8③ 普通・普通		台1		円?	18	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、ナデ。	

No	挿図 写真	量 目	出土位置 (注記)	① 胎 土 ② 色 調 ③ 焼 成	口 縁	突 帯		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備 考
						形状	間 隔				
066	第89図 PL 51	残 底部部破 片 高 < 9.5>	N-2 T、北側 落込	① A、チャート・白色鋳物粒 ② 褐灰7.5YR5/1・橙7.5YR7/6(表)、褐灰7.5YR5/1③不良・普通、還元状態		台 2			18	外面、タテハケ。内面、タテ方向のナデ。	
067	第89図 PL 52	残 口縁部破 片 高 < 9.1>	E-1 トレ、内 堀埋土	① A、白色鋳物粒② 橙2.5YR6/6③ 普通・普通	A				表 裏 17 17	器肉が厚い。斜め上方に向かって立ち上がる。外面、タテハケ。内面、ナナメヨコハケ後、先端にヨコナデを施す。	
068	第89図 PL 52	残 口縁部破 片 高 < 4.4>	E-1 トレ、内 堀埋土	① B②にぶい橙7.5YR6/4③ 普通・普通	B				表 裏 9 11	緩やかに外反して立ち上がる。外面、タテハケ後、ヨコナデを重ねる。内面、ヨコ方向のハケメ。	
069	第89図 PL 52	残 口縁部破 片 高 < 4.1>	E-1 トレ、ミ ゾ埋土	① B②橙5YR6/6③ 普通・普通	C				表 裏 15 15	緩やかに外反する。外面、タテハケ。内面はヨコ方向のハケメ。先端はヨコナデ。	
070	第89図 PL 52	残 口縁部破 片 高 < 7.0>	E-1 トレ、ミ ゾ埋土	① A、石英・長石② 橙7.5YR7/6③ 普通・普通					表 裏 17 17	器肉が厚い。斜め外方に立ち上がる。外面、タテハケ。内面、ナナメヨコ方向のハケメ。先端のわずかにヨコナデを施す。	朝顔形の可能性あるか。
071	第89図 PL 52	残 口縁部破 片 高 < 6.0>	E-1 トレ、内 堀埋土	① B② 橙 5 Y R 6 / 6 ③ 普通・普通	C				表 裏 9 9	斜め上方に向けて外反する。外面、タテハケ。内面、上位はヨコ方向、下位はナナメタテ方向のハケメ。	朝顔形の可能性あるか。
072	第89図 PL 52	残 口縁部破 片 高 < 10.4>	E-1 トレ、内 堀埋土	① A、白色鋳物粒② 橙5YR6/6③ 普通・普通	A				表 裏 11 11	先端は強く外反、先端は面を外方に向ける。外面、タテハケ。内面、上位ヨコ方向のハケ。下位タテハケ。	
073	第89図 PL 52	残 口縁部破 片 高 < 9.9>	E-1 トレ、内 堀埋土	① B② 橙 5 Y R 6 / 6 ③ 普通・普通	B				表 裏 20 20	緩やかに外反して立ち上がる。外面、タテハケ。一部器面に工具の静止痕がみられる。内面、ナナメヨコ方向にナデを施す。	内面123と同様。
074	第90図 PL 52	残 口縁部破 片 高 < 11.0>	E-1 トレ、内 堀埋土	① B、白色鋳物粒② 明赤褐2.5YR5/6(表)、橙5YR7/8(裏)③ 良好・普通					表 裏 16 16	緩やかに外反する。外面、タテハケ。内面、ナナメヨコハケ、一部にナデを加えている。	外面に赤色塗彩。
075	第90図 PL 52	残 胴部 2 段 破片 高 < 10.3>	E-1 トレ、ミ ゾ埋土	① B② 橙 5 Y R 6 / 6 ③ 普通・普通		台 2		円	表 裏 18 18	外面、タテハケ後突帯貼付。内面、タテ方向のナデ、一部にヨコ方向のハケメを施す。	
076	第90図 PL 50	残 胴部 2 段 破片 高 < 16.4>	E-1 トレ、内 堀埋土	① A、チャート② 橙7.5YR7/6③ 普通・普通					縦 横 14 17	外面、タテハケ後突帯貼付。残存上段は二次調整ヨコハケ、さらにこの上に波状のハケメを重ねている。内面、タテ方向の粗雑なナデ。	077~081は同一個体と考えられる。
077	第90図 PL 52	残 胴部破片 高 < 6.1>	E-1 トレ、内 堀埋土	① A② 橙 7.5 Y R 7 / 6 ③ 普通・普通					表 裏 14 14	外面、突帯貼付後二次調整ヨコハケ、さらに波状のハケメが重なる。	

No.	挿図 写真	量 目	出土位置 (注記)	①胎土調成 ②色 ③焼成	口 縁		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備 考
					形状	突 帯 間 隔				
078	第90図 PL 52	残 胸部破片 高 < 4.9>	E-1トレ、内 堀埋土	①A②橙5YR6/ 6③普通・普通			不明	15 外面、タテハケ後波状のハケメを重ねる。内面、ナナメヨコ方向のハケメ。	外面に線刻 1条あり。	
079	第90図 PL 52	残 胸部破片 高 < 4.7>	E-1トレ、内 堀埋土	①A②橙5YR6/ 6③普通・普通				14 外面、タテハケ後二次調整ヨコハケ、その後、波状のハケメを重ねる。		
080	第90図 PL 52 PL 55	残 胸部破片 高 < 5.4>	E-1トレ、内 堀埋土	①A②橙5YR6/ 6③普通・普通				表 外面、タテハケ後、二次調整ヨ 16 コハケ、さらに波状のハケメを 裏 重ねる。内面、ハケメ、ナデ。		
081	第90図 PL 52	残 胸部破片 高 < 8.8>	E-1トレ、内 堀埋土	①A②橙7.5YR 7/6③普通・普通			円	12 外面、タテハケ後二次調整ヨコ ハケ、さらに波状のハケメを重 ねる。突帯は剥落している。内 面はタテ方向のナデ。		
082	第90図 PL 56	残 底部破 片 高 < 7.0>	E-1トレ、ミ ゾ埋土	①A、チャート ② 橙5YR6/8③ 普通・普通				15 底面は内側に肥厚、変形著しい。 外面、タテハケ。内面タテ方向 のナデ。	外面にナナ メヨコ方向 の線刻。	
083	第90図 PL 52	残 底部破 片 高 < 5.0>	E-1トレ、ミ ゾ埋土	①B②橙5YR6/ 8③普通・普通				18 底面に棒状の圧痕がみられる。 基部粘土板は右を上に乗ねる。 外面、タテハケ。内面、ヨコ方 向のナデ。		
084	第90図 PL 52	残 底部破 片 高 < 5.9>	E-1トレ、ミ ゾ埋土	①B、白色鉱物 粒②にぶい黄橙 10YR6/4③普 通・普通				16 外面、タテハケ。内面、手のひ らによると思われる圧痕。		
085	第90図 PL 52	残 底部破 片 高 < 7.4>	E-1トレ、ミ ゾ埋土	①B②橙5YR6/ 8③普通・普通				15 外面、タテハケ。内面、ナデ。		
086	第91図 PL 52	残 胸部破片 高 < 10.7>	E-1トレ、内 堀埋土	①B、チャート ② 橙5YR7/6③ 普通・普通	台 1		円	16 外面、タテハケ。内面、ナナメ タテハケに一部ナデが重なる。		
087	第91図 PL 52	残 胸部2段 破片 高 < 10.4>	E-1トレ、内 堀埋土	①B、チャート ② 橙5YR6/6③ 普通・普通	台 3		半円	20 透孔の位置は突帯に近い。外面、 タテハケ後突帯貼付。内面、タ テ方向のナデ。		
088	第91図 PL 52	残 胸部破片 高 < 8.0>	E-1トレ、内 堀埋土	①A、石英・チャ ート ② 橙7.5 YR6/6③普通・ 普通	台 2			11 外面、タテハケ後上辺の広い突 帯貼付。内面、タテハケ。一部 にナデ。		
089	第91図 PL 50 PL 52	残 胸部2段 破片 高 < 10.7>	E-1トレ、内 堀埋土	①B②橙7.5YR 7/6③普通・やや 軟質	台 2		不明	16 外面、タテハケ後突帯貼付。残 存上段は一部分に二次的なタテ ハケがみられる。内面、一部に ナナメヨコハケ。		
090	第91図 PL 52	残 胸部破片 高 < 7.4>	E-1トレ、ミ ゾ埋土	①B、輝石・白 色鉱物粒②橙5 YR6/8③普通・ 普通	台 3			16 外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、ナナメタテ方向のナデ。		
091	第91図 PL 52	残 胸部破片 高 < 7.1>	E-1トレ、内 堀埋土	①A、チャート ・赤色粘土粒② 橙7.5YR8/6③ 普通・普通	台 1			14 外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、ナナメタテ方向に粗いナデ。	器面、磨滅し ている。	
092	第91図 PL 52	残 胸部破片 高 < 5.5>	E-1トレ、ミ ゾ埋土	①B、白色鉱物 粒②橙7.5YR7/ 6③普通・普通	M 1			裏 外面、突帯を貼付する。内面、 10 ナナメタテハケ。		

No	挿図 写真	量 目	出土位置 (注記)	①胎土調成 ②色 ③焼成	口 縁		透孔 形状	ハケメ	成・整形の特徴	備 考
					形状	間 隔				
093	第91図 朝顔 PL 50	残 胴部破片 高〈9.8〉	E-1トレ、内 堀埋土	①A、チャート ②明赤褐5YR5/ 6③普通・普通	台 3			13	口縁部はくびれた頸部から斜め 外方に立ち上がる。肩部は丸み を有している。口縁部はタテハ ケ。内面はナデ調整を施す。	外面は磨滅・ 剥離してい る。
094	第91図 PL 52	残 口縁部破 片 高〈4.8〉	E-2トレ、ミ ゾ埋土	①A、チャート ②明褐7.5YR5/ 8③普通・普通	C			18	外反して立ち上がる。先端は内 外ともつままれたような稜をな す。	器面が磨滅 している。
095	第91図 PL 52	残 口縁部破 片 高〈4.0〉	E-2トレ、ミ ゾ埋土	①C②橙7.5 YR6/6③普通・普通	B			14	先端は欠損する。内外面ともタ テハケ後先端にヨコナデを施 す。	
096	第92図 PL 52 PL 56	残 口縁部破 片 高〈7.8〉	E-2トレ、ミ ゾ埋土	①A、チャー ト・白色鉱物粒 ②灰黄褐10YR5 /2③不良・普通、 還元状態	A			表 裏 9	先端が外反して立ち上がる。外 面、タテハケ。内面、ハケメを ナナメ方向のナデで消す。先端 にはヨコナデを施す。	内面に横方 向の線刻1 条あり。
097	第92図 PL 52	残 口縁部破 片 高〈6.5〉	E-2トレ、ミ ゾ埋土	①C、白色鉱物 粒②橙7.5YR7/ 6③普通・普通	C			表 裏 6	器面は薄く、成形はシャープな 仕上げである。内外面タテハケ。 内面の一部にはナデを施す。後、 先端をヨコナデ。	器面は磨滅 している。
098	第92図 PL 52	残 口縁部破 片 高〈4.9〉	E-2トレ、ミ ゾ埋土	①A、白色鉱物 粒②橙5YR6/8 ③普通・普通	C			裏 16	器肉は薄い。外反して立ち上が る。内外面タテハケ後先端をヨ コナデ。	
099	第92図 PL 52	残 口縁部破 片 高〈5.5〉	E-2トレ、ミ ゾ埋土	①A、白色鉱物 粒②にぶい褐7. 5YR5/3(表)、 褐灰7.5YR5/ 1(裏)③不良・普 通、還元状態	A			16	外面、タテハケ後、先端をヨコ ナデ。内面はナデ。	
100	第92図 PL 52 PL 55	残 胴部破片 高〈11.2〉	E-2トレ、ミ ゾ埋土	①A、白色鉱物 粒②灰黄褐10Y R5/2③不良・普 通、還元状態	M 2		円?	12	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、ナナメハケ後、残存上半は ナデを重ねる。	
101	第92図 PL 52	残 胴部破片 高〈5.6〉	E-2トレ、ミ ゾ埋土	①A、チャート ②にぶい黄褐10 YR4/3③不良・ 普通、還元状態	台 1			16	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。	
102	第92図 PL 52	残 口縁部破 片 高〈2.8〉	E-3トレ、外 濠内側埋土	①C②橙5YR6/ 6③普通・普通	A			18	器肉は薄い。外反して立ち上が る。内外面ともタテハケ後、先 端にヨコナデを施す。	
103	第92図 PL 50	残 口縁部破 片 高〈16.3〉	E-3トレ、外 濠内側埋土	①A、チャート ②明赤褐5YR5/ 6③普通・普通	C	不明	口 14.4	18	口縁部は先端が緩やかに反して 立ち上がる。外面はタテハケ後 突帯貼付。内面はタテハケ。先 端にはヨコナデを施す。	口縁部、突帯 寄りに焼成 前穿孔の小 孔有り。直径 7mm。
104	第92図 PL 52	残 口縁部破 片 高〈8.9〉	E-3トレ、外 濠内側埋土	①A、チャート ②橙5YR6/6 (表)、灰褐5YR 5/2(裏)③不良 ・やや軟質、内 面還元状態	D			6	緩やかに外反する。外面は粗い 単位のタテハケ。内面はナデ。	105と同一個 体か。

No.	挿図 写真	量 目	出土位置 (注記)	①胎土調成 ②色 ③焼	口 縁	突 帯		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備 考
						形状	間 隔				
105	第92図 PL 52 PL 55	残 口縁部破 片 高 < 7.0>	E-3 トレ、外 濠内側埋土	①A、チャート ②橙5YR6/6 (表)、灰黄10Y R5/2(裏)③不 良・やや軟質、 内面還元状態	D				6	緩やかに外反して立ち上がる。 外面、粗い単位のタテハケ。先 端はヨコナデ。内面はナデ。	
106	第92図 PL 52	残 口縁部破 片 高 < 5.5>	E-3 トレ、外 ポリ内側	①A②橙5YR6/ 8③普通・普通	A				12	緩やかに外反、先端は内側に稜 をなす。外面はタテハケ後先端 にヨコハケを重ねる。内面はナ デ。	
107	第92図 PL 52	残 口縁部破 片 高 < 5.6>	E-3 トレ、外 濠内側埋土	①C②にぶい黄 橙10YR7/3③ 普通・普通	C				20	器肉は薄く、成形はシャープな 仕上げである。外面、タテハケ。	器面は磨耗 している。
108	第92図 PL 52	残 口縁部破 片 高 < 6.3>	E-3 トレ、外 濠内側埋土	①A②橙5YR6/ 6(表)、灰黄褐10 YR5/2(裏)③ 不良・普通、内 面還元状態	A				18	緩やかに外反して立ち上がる。 先端は内側に稜をなす。内外面 ともタテハケ後先端にヨコナデ を施す。	
109	第93図 PL 50 PL 56	残 胴部2段 破片 高 < 20.0>	E-3 トレ、外 濠内側埋土	①A、チャート ② 橙5YR6/6③ 普通・普通	台 1				17	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、下半、タテ方向のナデ。上 半、タテ方向のハケメ。	内外面に横 方向の線刻 1条ずつ。
110	第93図 PL 50	残 胴部2段 破片 高 < 10.4>	E-3 トレ、外 濠内側埋土、 E-3 トレ外 ポリ内側	①A、白色鉍物 粒②灰黄褐10 YR6/2・明黄褐 10YR7/6③不 良・普通、一部 還元状態	M 1				17	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、ナデ。	
111	第93図 PL 52	残 胴部破片 高 < 8.5>	E-3 トレ、外 ポリ内側	①B、白色鉍物 粒②にぶい橙7. 5YR6/4③普通 ・普通	M 2				17	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。	
112	第93図 PL 52	残 胴部破片 高 < 8.5>	E-3 トレ、外 濠内側埋土	①A、チャート ②明赤褐5YR5/ 6③普通・普通					16	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面ナデ。	器面、磨耗し ている。
113	第93図 PL 52	残 胴部破片 高 < 8.1>	E-3 トレ、外 濠内側埋土	①A、チャート ② 橙7.5YR7/6 ③普通・普通	台 2			不明	16	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。	
114	第93図 PL 52	残 胴部破片 高 < 8.7>	E-3 トレ、外 ポリ内側	①A、チャート ② 橙7.5YR6/6 ③普通・普通	台 3			半円	17	外面、タテハケ後突帯貼付。一 部に二次調整タテハケが施され る。内面、一部にハケメを残す。	
115	第93図 PL 52	残 胴部破片 高 < 6.4>	E-3 トレ、外 濠内側埋土	①B、チャート ②にぶい橙5YR 6/3③普通・普通	M 1				16	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、ナナメタテハケ後、一部に ナデを重ねる。	
116	第94図 PL 52	残 胴部破片 高 < 9.1>	E-3 トレ、外 ポリ内側	①B、チャート ②明赤褐5YR5/ 6③普通・普通	M 3					外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、ナナメタテハケ後一部にタ テ方向のナデを重ねる。	
117	第94図 PL 52	残 胴部破片 高 < 6.2>	E-3 トレ、外 濠内側埋土	①A②にぶい橙 7.5YR7/4③普 通・やや軟質	台 1				10	外面、ナナメタテハケ後突出度 の高い突帯貼付。内面、ナデ。	

No.	挿図 写真	量目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	口 縁	突帯		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備考
						形状	間隔				
118	第94図 PL 52	残 胸部破片 高<4.4)	E-3トレ、外 濠内側埋土	①C②にぶい橙 7.5YR7/4(表)、 灰黄2.5YR6/ 2(裏)③普通・普 通				半円	16	透孔は突帯直下に穿たれる。外 面、タテハケ後突帯貼付。内面、 ハケをナデ消す。	
119	第94図 PL 52	残 胸部破片 高<6.5)	E-3トレ、外 ポリ内側	①B、白色鉱物 粒②灰褐7.5YR 5/2③不良・軟 質、還元状態					9	外面、ナナメハケ。内面、ハケ メ。ナデ。	
120	第94図 PL 55	残 胸部破片 高<10.0)	E-3トレ、外 ポリ内側	①A②にぶい黄 橙10YR7/4③ 普通・やや軟質					9	外面、ナナメハケ後突帯を貼付 するが現状は突帯が剥落してい る。突帯貼付のための割り付け 線が認められる。内面、ナナメ ハケ。	器面は磨耗 している。
121	第94図 PL 52	残 胸部破片 高<10.0)	E-3トレ、外 濠内側埋土	①A、チャート ②橙7.5YR7/6 ③普通・普通		台1		半円	15	透孔は突帯直下に穿たれる。外 面、タテハケ後突帯貼付。内面、 ナデ。	
122	第94図 PL 50	残 口縁部破 片か 高<11.6)	E-3トレ、外 濠内側埋土	①A、白色鉱物 粒②にぶい橙5 YR6/4・灰黄褐 10YR6/2③普 通・普通		台2			17	外反して立ち上がる。外面、タ テハケ後突帯貼付。残存する2 条の突帯の貼付幅は6.2cmと狭 い。内面、ナデ、一部にハケメ がみられる。	朝顔形の口 縁部分か。
123	第95図 PL 53	残 口縁部破 片 高<3.6)	S-1トレ、内 堀埋土	①B②橙2.5 YR6/6③普通・ 普通	A				12	先端は外反、内面に稜をなす。 外面、タテハケ、内面ナデ後先 端にヨコナデを施す。	
124	第95図 PL 56	残 口縁部破 片 高<5.3)	S-1トレ、内 堀埋土	①A、チャート ②明赤褐5YR5/ 8③良好・普通	B				16	緩やかに外反して立ち上がる。 内外面ともタテハケ後先端にヨ コナデを施す。ハケメは非常に 細かく、ナデ状を呈する。	外面に斜方 向の線刻1 条あり。
125	第95図 PL 56	残 口縁部破 片 高<8.6)	S-1トレ、内 堀埋土	①A、白色鉱物 粒②にぶい橙5 YR6/3③良好・ 普通、やや還元 状態	C				13	外反して立ち上がる。内外面と もタテハケ後、先端をやや幅広 くヨコナデする。内面の一部に ナデ。	外面に赤色 塗彩、横方向 に線刻1条。
126	第95図 PL 53	残 口縁部破 片 高<4.1)	S-1トレ、内 堀埋土	①B②橙5YR6/ 6③普通・普通	B				22	あまり外反せず立ち上がる。外 面はタテ方向にナデ調整後先端 をヨコナデする。内面にはナナ メヨコハケを施す。	
127	第95図 PL 53	残 口縁部破 片 高<4.4)	S-1トレ、内 堀埋土	①B、赤色粘土 粒②橙7.5YR6/ 6③普通・普通	C				17	緩やかに外反して立ち上がる。 内外面ともタテハケ、先端にヨ コナデを重ねる。	
128	第95図 PL 53 PL 55	残 口縁部破 片 高<7.7)	S-1トレ、周 堀	①B②橙5YR6/ 6③良好・普通	D				13	緩やかに外反して立ち上がる。 内面の先端に弱い稜をなす。内 外面ともタテハケ後、先端にヨ コナデを施す。	
129	第95図 PL 53 PL 55	残 胸部破片 高<10.4)	S1周溝・S -1トレ内堀 埋土	①B、チャート ②橙5YR6/8 (表)、にぶい橙 5YR6/4(裏)③ 普通・普通		台2		不明	20	外面、タテハケ後突帯貼付。突 帯は上辺の幅が広い。内面、ナ ナメ方向のナデ。	
130	第95図	残 胸部破片 高<5.5)	S1、周溝	①B②橙5YR6/ 6③普通・普通				円	16	外面、タテハケ後突帯貼付。突 帯貼付に際しへら描き沈線によ る割り付け線を引いている。内 面、ナデ調整を施す。	外面に赤色 塗彩。

No	挿図 写真	量 目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	口 縁		突 帯 形状 間 隔	透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備 考
					形状	間 隔					
131	第95図 PL 53	残 胴部2段 破片 高<11.5>	S 1、周溝	① C ② 橙2.5 YR6/6(表)、橙 7.5YR7/6(裏) ③普通・普通	台 2				14	残存部上段は口縁部か。外面、 タテハケ後上辺の狭い突帯貼 付。内面、タテ方向のナデ。一 部にハケメを残す。	胴部上段・突 帯に赤色塗 彩。
132	第95図 PL 53	残 胴部破片 高<9.9>	S 1、周溝	①B、白色鉱物 粒②橙7.5YR6/ 6(表)、にぶい 橙7.5YR7/3(裏) ③普通・普通	M 3				18	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。	
133	第95図 PL 53	残 胴部破片 高<10.6>	S 1、周溝	①A、チャート ②一部明褐7.5 YR5/8(表)、明 黄褐10YR6/6 (裏)③普通・普 通				半円	20	外面、タテハケ後突帯貼付。突 帯は剥落している。内面、タテ 方向にナデている。	器面は磨減 している。
134	第95図 PL 53 PL 55	残 胴部破片 高<7.8>	S 1、周溝	①B②橙5YR7/ 8(表)、暗灰黄2. 5YR5/2(裏)③ 不良・普通、内 面還元状態	M 2			円	表 12 裏 10	外面、ナナメハケ後突帯貼付。 内面、ナナメハケ、ナデ。	
135	第95図 PL 53	残 胴部2段 破片 高<9.2>	S 1、周溝	①A、チャート ②にぶい橙5YR 6/4③普通・普通	M 2				16	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。	
136	第95図 PL 53	残 胴部2段 破片 高<6.1>	S-1トレ、内 堀埋土	①B、赤色粘土 粒②にぶい橙7. 5YR7/4(表)、 橙2.5YR7/6(裏) ③普通・軟質	台 2				5	外面、ナナメタテハケ後突帯貼 付。内面はナデ調整。	
137	第96図 PL 53	残 胴部2段 破片 高<7.1>	S-1トレ、内 堀埋土	①B②にぶい橙 7.5YR7/4③普 通・普通	台 1				16	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面はタテ方向のナデ。一部にナ ナメハケを残す。	
138	第96図 PL 53	残 胴部破片 高<6.0>	S 1、周溝	①B②橙5YR 6/8(表)、橙5Y R6/6(裏)③普 通・普通	台 2				14	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ。	
139	第96図 PL 53	残 胴部破片 高<5.8>	S-1、周溝	①B②明赤褐5 YR5/6(表)、に ぶい黄橙10YR 6/4(裏)③普 通・普通					4	外面、タテハケ。内面、ナデ調 整。	
140	第96図 PL 53	残 底部部破 片 高<5.4>	S-1、周溝	①C②浅黄橙10 YR8/4③普通・ 普通					15	外面、タテ方向のハケメ。内面、 基部粘土板成形時の木目痕が認 められる。	
141	第96図 PL 53	残 底部部破 片 高<5.9>	S-1、周溝	①A、チャート ②橙7.5YR6/6 ③普通・普通						基部粘土板は厚く、内側に肥厚 する。粘土板は右を上重ねて いる。外面はハケメ、内面はナ デを施す。	器面は磨減 している。
142	第96図 PL 53	残 胴部破片 高<6.2>	S-1トレ、内 堀埋土	① B ② 橙7.5 YR7/6③普通・ 普通	台 2				16	肩部の破片と考えられ、弧状を なす。突帯貼付後二次的にタテ ハケを施す。内面はヨコ方向の ナデを施す。	
143	第96図 PL 53	残 口縁部破 片 高<7.4>	S-2トレ	① C ② 橙7.5 YR6/6③普通・ 普通	D				表 16 裏 12	緩やかに外反して立ち上がる。 内外面ともタテハケ後先端をヨ コナデ。	

No.	挿図 写真	量 目	出土位置 (注記)	① 胎 土 ② 色 調 ③ 焼 成	口 縁	突 帯		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備 考
						形状	間 隔				
144	第96図 PL 53	残 胴部破片 高 < 8.6)	S-2トレ	①B②にぶい黄 褐10YR5/4③ 不良・普通、還 元状態	M 3			円	13	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデに一部ヨコ 方向のナデを重ねる。	
145	第96図 PL 50 PL 55	残 胴部2段 1/4 胴 29.0 高 < 20.6)	S-3トレ	① A、チャ ート・白色鉱物粒 ②にぶい黄橙10 YR7/4③普通・ 普通	台 2				8	外面、タテハケ後突帯貼り付け。 内面、タテ方向のナデ調整。一 部に粘土紐の接合痕を残す。	器面は磨滅 している。
146	第96図 PL 50 PL 54 PL 55	残 底部部～ 胴部第2段 底 19.4 高 < 28.1)	S-3 T	①A、チャ ート・石英・赤色粘 土粒②にぶい橙 7.5YR7/4③普 通・普通	台 1	基 胴 1	11.5 12.0	円	9	透孔の直径は5.5cm。基部粘土板 の高さは約5cm、右を上重ね ている。粘土紐の幅は約2cm。 外面は、タテハケ後突帯を貼付 する。内面はナナメタテハケを 施す。	
147	第96図 PL 53	残 口縁部破 片 高 < 4.5)	S-3 T	① B ② 橙7.5 YR6/8③普通・ 普通	A				11	緩やかに外反して立ち上がると 考えられる。先端は短く屈曲、 内面に弱い稜をなす。内外面と もタテハケ、先端はヨコナデを 施す。	
148	第96図 PL 53	残 口縁部破 片 高 < 4.3)	S-3 T	①B②橙7.5YR 6/6(表)、にぶい 褐7.5YR5/ 4(裏)③普通・普 通、内面還元状 態					14	緩やかに外反して立ち上がる。 内外面ともタテハケ後先端をヨ コナデする。	
149	第96図 PL 53	残 口縁部破 片 高 < 10.1)	S-3 T	①B②橙7.5YR 7/6③普通・普通	C				16	外反して立ち上がる。先端はそ の度合を強める。内外面ともタ テハケ後先端にヨコナデを施 す。	
150	第97図 PL 53	残 口縁部破 片 高 < 5.3)	S-3 T	① B ② 橙7.5 YR7/6(表)、明 褐7.5YR5/6(裏) ③普通・普通	A				10	先端は内面に稜をなして立ち上 がる。内外面ともタテハケ後先 端にヨコナデを施す。	
151	第97図 PL 53	残 口縁部破 片 高 < 6.3)	S-3 T	①B②にぶい橙 5YR7/4③普通 ・普通	A				18	直線的に斜め上方に立ち上が る。先端は内面に稜をなす。内 外面とも細かいタテハケ後、先 端にヨコナデを施す。	
152	第97図 PL 50 PL 53	残 胴部破片 高 < 8.9)	S-3 T	①A②橙2.5YR 7/6(表)、灰オ リーブ5Y6/2(裏) ③普通・普通、 内面還元状態	台 3				16	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、ナナメヨコハケの上に一部 ナデを重ねる。	
153	第97図 PL 53	残 胴部破片 高 < 8.5)	S-3 T	①A、白色鉱物 粒②橙5YR6/8 ③普通・普通	M 2				12	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、ナナメタテハケ後一部にタ テ方向のナデを重ねる。	
154	第97図 PL 53	残 胴部2段 破片 高 < 6.9)	S-3 T	① A ② 橙7.5 YR6/8(表)、に ぶい黄橙10YR 6/3(裏)③普通 ・普通、内面還 元状態	台 3				16	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデ調整を施す。	外面の胴部、 突帯に赤色 塗彩。

No	挿図 写真	量目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	口 縁	突帯		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備考	
						形状	間隔					
155	第97図 PL 53	残 胴部破片 高 < 6.7>	S-3 T	①B②橙7.5YR 6/6(表)、にぶい 橙7.5YR6/4(裏) ③普通・普通、 内面還元状態		台 1		不明	13	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテ方向のナデを施す。		
156	第97図 PL 53	残 胴部破片 高 < 7.3>	S-3 T	① B ② 橙 5 YR 7/6③普通・普通					18	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、ナデ調整を施す。		
157	第97図 PL 53	残 底部破 片 高 <10.0>	S-3 T	①B②にぶい橙 7.5YR7/4(表)、 橙7.5YR6/8(裏) ③普通・やや軟 質					6	外面、タテハケ。内面、タテ方 向のナデを施す。	器面磨滅し ている。	
158	第97図 PL 50 PL 53	残 底部破 片 高 <15.6>	S-3 T	①B②橙7.5YR 6/6③普通・普通					20	内外面ともタテハケを重ねてい る。外面の下端寄りには基部粘 土板成形時についた工作台の木 目痕がヨコ方向にみられる。	器面の剝離 顕著。	
159	第97図 PL 53	残 底部破 片 高 < 8.0>	S-3 T	①B②橙7.5YR 6/6③普通・普通					14	外面、タテハケ。内面、タテ方 向のナデ。		
160	第98図 PL 53 PL 55	残 胴部 3 段 破片 高 <27.5>	詳細不明 (注記はアタ ゴ塚。以下211 まで同様。)	① B ② 橙 5 YR 7/6③普通・普通		三 2	胴 13.5	円	5	上方に向かって弱く外傾する。 外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、粗雑なナデ、タテハケ。	透孔の周囲 線刻 3 条。	
161	第98図 PL 53	残 胴部～基 底部破片 底 (15.2) 高 <16.8>	詳細不明	①B②にぶい橙 5YR7/4③普通 ・普通		三	基 11.9	円	6	基部粘土板の高さは約10cm。右 を上にして重ねている。底面は 歪み、内側に肥厚している。外 面、タテハケ後突帯貼付。内面、 タテハケ。		
162	第98図 PL 53	残 口縁部破 片 高 < 5.0>	詳細不明	①B②にぶい橙 5YR7/4③普通 ・普通	A'				6	先端に強く外反する。外面、タ テハケ。内面、ナナメヨコハケ。 先端にはヨコナデ。		
163	第98図 朝顔 PL 53	残 口縁部破 片 高 < 6.5>	詳細不明	①A、チャート ②明赤褐2.5YR 5/6③普通・普通					6	外反著しく立ち上がる。先端は 薄くなり、内面に稜をなす。外 面、タテハケ。内面、ヨコ・ナナ メヨコハケ。		
164	第98図 PL 53	残 胴部破片 高 < 8.8>	詳細不明	①B②にぶい橙 5YR7/4③普通 ・普通		三			表 7 裏 5	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテハケ、ナナメヨコハケ。		
165	第98図 PL 53	残 胴部 2 段 破片 高 < 8.8>	詳細不明	①B②にぶい橙 7.5YR7/4③普 通・普通		三			円	7	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテハケ。	
166	第98図 PL 53	残 口縁部破 片 高 < 3.7>	詳細不明	①A②にぶい橙 5YR7/4③普通 ・普通					表 5 裏 8	外反して立ち上がる。外面、タ テハケ。内面、ハケメ、ナデ。	内面に斜方 の線刻 1 条。	
167	第98図 PL 53	残 胴部 2 段 破片 高 <12.4>	詳細不明	① B ② 橙 5 YR 6/6③普通・普通		三			円	6	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、下半はタテハケ後ナデ。上 半はナナメヨコハケ。	
168	第98図 PL 53	残 胴部 2 段 破片 高 <17.2>	詳細不明	① B ② 橙 5 YR 6/6③普通・普通		三			5	残存下段は基部部か。外面、タ テハケ。内面、タテハケ、タテ 方向のナデ。		
169	第99図 PL 53	残 胴部 2 段 破片 高 < 7.4>	詳細不明	①B②にぶい橙 5YR6/4③普通 ・普通		三			7	外面、タテハケ後突帯貼付。内 面、タテハケ、ナナメヨコハケ。		

No	挿図 写真	量 目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	口 縁	突 帯		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備 考
						形状	間 隔				
170	第99図 PL 53	残 胴部2段 破片 高<12.6>	詳細不明	①B②にぶい橙 7.5YR7/4③普通・普通		三				7 外面、タテハケ後突帯貼付。内面、タテハケ、一部に指頭痕。	
171	第99図 PL 53	残 胴部2段 破片 高<9.4>	詳細不明	①B②橙5YR 6/6③普通・普通		三			円	7 外面、タテハケ後突帯貼付。内面、タテ方向のナデ、ナナメヨコハケ。	
172	第99図 PL 53	残 胴部破片 高<11.6>	詳細不明	①B②にぶい橙 5YR7/4③普通・普通		三				6 外面、タテハケ後突帯貼付。部分的に指頭痕。内面、タテ方向のナデ。一部にタテハケ。	基底部の可能性もある。
173	第99図 PL 53	残 胴部2段 破片 高<11.8>	詳細不明	①B②橙5YR 6/6③普通・普通		三				6 外面、タテハケ後突帯貼付。内面、タテハケ後タテ方向のナデを重ねる。	
174	第100図 PL 54	残 胴部2段 破片 高<20.5>	詳細不明	①B②橙7.5YR 7/6③普通・やや軟質		三	胴		円	6 透孔は上下2段に配されている。外面、タテハケ後突帯を粗雑に貼付。内面、タテハケ。	
175	第100図 PL 54	残 胴部2段 破片 高<15.8>	詳細不明	①B②橙7.5YR 7/6③普通・やや軟質		三				5 外面、タテハケ後突帯貼付。内面、タテハケ、一部にナナメタテハケ。	
176	第100図 PL 54 PL 55	残 基底部破 片 底(18.0) 高<9.5>	詳細不明	①B、チャート ②にぶい橙7.5 YR7/4③普通・普通						5 外面、タテハケ。内面、ナナメ方向のナデ。	
177	第100図 朝顔 PL 54	残 口縁部破 片 高<7.0>	詳細不明	①A、チャート ②橙5YR6/8③普通・普通						表 外反して立ち上がる。先端は薄い。外面、タテハケ後先端にヨコナデ。内面、ナナメヨコハケ、裏 最上位のみヨコハケ。	
178	第100図 朝顔 PL 54	残 口縁部破 片 高<6.6>	詳細不明	①B②橙5YR 6/8③普通・普通						4 外面、タテハケ。内面、ナナメヨコハケ。その後、先端にヨコナデ。	
179	第100図 PL 54	残 口縁部破 片 高<3.8>	詳細不明	①B②橙5YR 6/6③普通・普通	D					外反して立ち上がる。内外面ともヨコナデ。	
180	第100図 PL 54	残 胴部破片 高<8.8>	詳細不明	①B②橙5YR 7/6③普通・やや軟質		三				7 頸部は丸みのある肩部からくびれる。口縁部は外反して立ち上がる。外面、タテハケ後頸部に突帯貼付。内面、ナナメタテハケ。一部にナデ。	
181	第100図 PL 54	残 胴部2段 破片 高<15.8>	詳細不明	①B②橙5YR 6/8③普通・やや軟質		三			円	5 透孔は小径である。外面、タテハケ後突帯貼付。内面はタテハケ。	
182	第100図 PL 54	残 胴部2段 破片 高<6.7>	詳細不明	①B②浅黄橙10 YR8/4③普通・やや軟質		三				7 外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ナナメヨコハケ。	
183	第100図 PL 54	残 胴部2段 破片 高<6.5>	詳細不明	①A、チャート ②にぶい橙5 YR7/4③普通・普通		三			円	7 外面、タテハケ後突帯貼付。内面、タテ方向のナデ。	外面、透孔に接して線刻2条。
184	第100図 PL 54	残 胴部2段 破片 高<11.0>	詳細不明	①B②明黄褐10 YR7/6③普通・やや軟質		三				6 外面、タテハケ後突帯貼付。内面、タテハケ、ナデ。	
185	第100図 PL 54	残 胴部破片 高<9.2>	詳細不明	①B②橙2.5YR 6/6③普通・普通		三			円	6 透孔は小径。楕円形に近い形状か。外面、タテハケ後突帯貼付。突帯の断面形状はきわめて扁平。内面、タテハケ。	

No	挿図 写真	量目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	口 縁	突帯			透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備考
						形状	間	隔				
186	第101図 PL 54	残 基底部～ 胴部第1段破 片 底(15.0) 高<20.8>	詳細不明	①A、チャート ②浅黄2.5Y7/4 ③普通・普通		台2	基	11.2		6	器形は歪み、底面は内側に肥厚する。外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ナナメタテハケ。	190と同一個体。
187	第101図 朝顔 PL 54	残 口縁部破 片 高<9.0>	詳細不明	①A、チャート ②にぶい橙5YR 7/3③普通・やや 軟質						7		
188	第101図 PL 54	残 口縁部破 片 高<3.6>	詳細不明	①A②にぶい橙 5YR7/3③普通 ・普通	C					6	190と類似するが先端がやや薄い。外面、タテハケ。内面、ヨコハケ。先端は内外面ともヨコナデ。	
189	第101図 PL 54	残 口縁部破 片 高<4.8>	詳細不明	①B②にぶい橙 5YR7/3③普通 ・普通	F					5	形状に歪みが生じているか。弱く内彎して立ち上がる。外面、タテハケ。先端は内外面にヨコハケ。	
190	第101図 朝顔 PL 54	残 口縁部破 片 高<10.5>	詳細不明	①A、チャート ②にぶい橙5YR 7/3③普通・やや 軟質		三				6	大きく外反して立ち上がる。先端から下位8.8cmに突帯を貼付する。外面、タテハケ。内面、ナナメヨコハケ。	
191	第101図 PL 54	残 口縁部破 片 高<3.2>	詳細不明	①B②にぶい橙 5YR7/4③普通 ・普通	C					6	外面、タテハケ。内面、ヨコハケ。先端は内外面ともヨコハケ。	
192	第101図 朝顔 PL 54	残 口縁部破 片 高<5.4>	詳細不明	①B②にぶい黄 橙10YR7/4③ 普通・やや軟質						4	外面、タテハケ。内面、ナナメヨコハケ。先端は内外面ともヨコナデ。	
193	第101図 PL 54	残 胴部破片 高<14.0>	詳細不明	①B②にぶい黄 橙10YR7/4③ 普通・普通					半円	6	外面、タテハケ。内面、ナナメ方向のハケメ。	
194	第101図 PL 54	残 胴部2段 破片 高<17.2>	詳細不明	①B②にぶい黄 橙10YR7/4③ 普通・やや軟質		台2			不明	6	外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ナナメタテハケ。	
195	第102図 PL 54	残 口縁部下 位破片 高<12.4>	詳細不明	①B②にぶい橙 7.5YR7/4③普 通・普通		三				6	外反著しく立ち上がる。外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ナナメヨコハケ。	
196	第102図 PL 54	残 口縁部下 位破片 高<9.6>	詳細不明	①B②にぶい黄 橙10YR7/4③ 普通・普通		三				6	口縁部下半の破片である。斜め上方に向かって大きく開く。中位に断面三角形の突帯を貼付する。外面、タテハケ。内面、ヨコ・ナナメヨコハケを施す。	
197	第102図	残 口縁部下 位破片 高<8.2>	詳細不明	①B②にぶい黄 橙10YR7/4③ 普通・普通		台2				6	外反して立ち上がる。外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ヨコ方向のハケメ。	
198	第102図 PL 54	残 胴部～口 縁部破片 高<12.3>	詳細不明	①B②にぶい橙 7.5YR7/4③普 通・普通		台2				6	肩部の丸みは弱い。外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ナナメタテハケ。	
199	第102図 PL 54	残 胴部2段 破片 高<14.1>	詳細不明	①B②にぶい黄 橙10YR7/4③ 普通・普通		台2				7	突帯貼付の位置の内面側は器形が大きく歪んでいる。成形時の作業単位が存在する。外面、タテハケ後突帯貼付。内面、タテハケ。	
200	第102図 PL 54	残 基底部破 片 高<8.6>	詳細不明	①B②明黄褐10 YR7/4③普通・ やや軟質						6	外面、タテハケ。内面、ナデ、ハケメ。	

No	挿図 写真	量 目	出土位置 (注記)	① 胎 土 ② 色 調 ③ 焼 成	口 縁	突 帯		透孔 形状	ハ ケ メ	成・整形の特徴	備 考	
						形状	間 隔					
201	第103図 PL 50 PL 55	残 底部部～ 胴部第1段 底 (15.3) 高 <21.5>	詳細不明	①B②橙7.5YR 6/6③普通・普通		台2	基 胴 1	9.8 9.8	14	外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ナナメ方向のナデ。下位に基部粘土板成形時の押圧痕が残る。基部の高さ約10cm。		
202	第103図 PL 50	残 底部部破 片 底 (16.6) 高 <10.1>	詳細不明	①A、チャート ② 橙5YR6/6③ 普通・普通					18	外面、タテハケ。内面、ナナメタテ方向のナデ。下端に基部粘土板成形時の押圧痕が残る。		
203	第103図 PL 50 PL 55	残 底部部破 片 底 (14.0) 高 <9.9>	詳細不明	①B、チャート ② 橙7.5YR7/6 ③普通・普通					14	外面、タテハケ。内面、ナナメタテ方向のナデ。一部にハケメがみられる。		
204	第103図 PL 54	残 口縁部破 片 高 <4.4>	詳細不明	①A、チャート ② 橙5YR6/6③ 普通・普通	E					先端は外側に小さく屈曲するか。内面はヨコナデ。	外面は剥離。	
205	第103図 PL 54	残 口縁部破 片 高 <3.5>	詳細不明	①B②橙7.5YR 6/6③普通・普通	C				15	器肉は薄い。外面、タテハケ。内面、ナナメ方向のハケ、先端はヨコナデ。		
206	第103図 PL 54	残 口縁部破 片 高 <3.4>	詳細不明	① B ② 橙 5 YR 6/6③普通・普通	D				18	弱く外反する。外面、タテハケ。内面、タテハケ後内外面の先端にヨコナデ。		
207	第103図 PL 54	残 口縁部破 片 高 <2.8>	詳細不明	①B②橙7.5YR 6/6③普通・普通	A				15	器肉は薄い。外面、タテハケ。内面はナナメハケ。先端はヨコナデ。		
208	第103図 PL 54	残 胴部2段 破片 高 <7.3>	詳細不明	① B ② 橙 5 YR 6/6③良好・普通		台2			半円	18	外面、タテハケ後突帯貼付。ハケメはナデ状を呈する。内面、ナナメ方向のナデ。	
209	第103図 PL 54	残 胴部2段 破片 高 <10.0>	詳細不明	① B ② 橙 5 YR 6/6③普通・普通		台2				12	外面、タテハケ後突帯貼付。突帯は扁平。内面はタテ方向のナデ。	
210	第103図 PL 54	残 胴部2段 破片 高 <9.7>	詳細不明	①B②橙7.5YR 7/6③普通・普通		台2			表 裏	17 14	外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ナナメタテハケ。	
211	第103図 PL 54	残 胴部～基 底部破片 高 <10.9>	詳細不明	①B②橙7.5YR 6/6③普通・普通		台2	基	8.7		12	底部下端は歪み、外側に小さくかえる。外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ナデ。	

第12表 井出二子山古墳出土土形象埴輪観察表

No	挿図 写真	器 種	量 目	出土位置 (注記)	① 胎 土 ② 色 調 ③ 焼 成	特 徴	備 考
212	第104図 PL 57	蓋	残 破片 縦 <10.6> 横 7.2 厚 1.7	N-2 T、 外堀落込	①A、チャート・ 白色鉱物粒②橙5 YR6/8③普通・普 通	212～220までは同一個体と考えられる。217は飾り板が受け部口縁に接合している。受け部口縁はラップ状に外反して立ち上がる。先端の外側は若干粘土が貼付され丸みをもって終わる。飾り板の単位は不明である。212～214・216・230は飾り板の破片である。板状粘土の端部をヘラ状工具で切り込んで成形している。230は受け部口縁に接合していた破片である。218は受け部口縁の先端部分で、内面に飾り板の剥落痕がみられる。220も受け部口縁の下位破片と考えられる。斜め上方に立ち上がる器形の外面に粘土貼付、稜(段)をなしている。217・218の下位の破片か。	
213	第104図 PL 57	蓋	残 破片 縦 <8.1> 横 6.0 厚 1.4	N-2 T、 外堀落込			
214	第104図 PL 57	蓋	残 破片 縦 <19.1> 横 <6.4> 厚 2.0	N-2 T、 外堀落込			
215	第104図 PL 57	蓋	残 破片 縦 <10.4> 横 <6.5> 厚 2.1	N-2 T、 外堀落込			

No	挿図 写真	器種	量目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	特微	備考
216	第104図 PL 57	蓋	残破片 縦<4.4> 横 5.0 厚 1.1	北-2 T、 外側落込			
217	第104図 PL 57	蓋	残破片 高<14.2>	N-2 T、 外堀落込・N2 T、外堀 ~中堤			
218	第105図 PL 57	蓋	残破片 縦<4.7> 横<13.0> 厚 2.5	N-2 T、 外堀落込			
219	第105図 PL 57	蓋	残破片 縦<9.5> 横 5.8 厚 1.2	N-2 T、 外堀落込			
220	第105図 PL 57	蓋	残破片 高<5.4>	N-2 T、 外堀落込			
221	第105図 PL 57	器種不明	残破片 高<5.4> 厚 1.0	N-2 T、 周堤~外 堀	①B、赤色粘土粒 ②明赤褐5YR5/8 ③普通・普通	曲面をなす破片である。外面、ナデ。一部にタテ方向のハケメを残す。内面、ナデ。	
222	第105図 PL 57	馬	残破片 縦<7.1> 横<13.0>	詳細不明	①B②にぶい黄橙 10YR7/4③普通・ やや軟質	鞍の前輪あるいは後輪の一部である。厚さ1cm、三日月形の粘土板を本体に垂直に取り付けている。器面にはハケメ調整を施す。上縁に赤色塗彩が一部残存する。	
223	第105図 PL 57	器種不明	残破片 高<6.2> 幅 3.0 厚 2.8	詳細不明	①A、チャート② 橙5YR6/6③普通 ・やや軟質	棒状粘土の一部である。やや弧状を呈する。赤色塗彩が施されている。	
224	第105図 PL 57	器種不明	残破片 縦<4.5> 横<4.5> 厚 1.6	詳細不明	①A②橙5YR7/6 ③普通・普通	小破片である。縦方向に突出度の低い帯が貼り付く。ヘラ描きの沈線の一部が残存する。赤色塗彩が施されている。	
225	第105図 PL 57	器種不明	残破片 高<3.5> 横<9.0> 厚<3.5>	N-2 T、 周堤~外 堀	①A、チャート② 橙7.5YR7/6③普通 ・普通	円筒状の本体に鋸状に付属する部分と思われる。上面にヘラ描きによる鋸歯文の一部が残存する。蓋の笠部の可能性もあるか。	器面は剝離、磨滅している。
226	第105図 PL 57	器種不明	残破片 高<5.8>	詳細不明	①B②橙7.5YR7/6 ③普通・やや 軟質	筒状を呈するか。幅2.2cmの突出度の低い突帯が横位に貼付され、これに斜方向の突帯が重なっている。一部に赤色塗彩が施される。	
227	第105図 PL 57	器種不明	残破片 縦<7.1> 横<9.9>	詳細不明	①B②黄橙10 YR8/6③普通・普通	筒状を呈する。やや上方に開くと思われる。小孔。粘土紐の剝離痕が認められ、赤色塗彩も施されている。	
228	第105図 PL 57	人物	残破片 縦<5.8> 横<8.5>	詳細不明	①B②橙7.5YR6/ 6③普通・普通	人物に付属する大刀と、これを握る手のひらの一部と考えられる。大刀は幅5.0cm、厚さ2.0cmの板状を呈する。上縁背側欠損は、実物の鹿角装大刀の鞘口にみられる突出部分を表現していたものと考えられる。中実の造りであるが、棒状工具により径6mmの孔が貫通する。手のひらは親指が欠損しているが他の4本の指は粘土板にヘラ描きして区分している。	
229	第105図 PL 57	器種不明	残破片 高<2.4> 厚 1.6	N-2 T、 外堀~中 堤	①B②橙5YR6/8 ③普通・普通	小破片である。欠け口の一端は色調が他の器面と同様になっているが、割れ口の可能性がある。外面、ハケメ。内面ナデ。	天地不明。
230	第106図 PL 57	蓋	残破片 縦<6.8> 横 5.9 厚 1.0 ~3.0	N-2 T	①B②橙5YR6/6 ③普通・普通	立ち飾りの基部破片である。	212~220 と同一個 体か。

No	挿図 写真	器種	量目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	特 徴	備 考
231	第106図 PL 57	器種不明	残 破片 高 < 8.1>	詳細不明	①B②にふい黄橙 10YR7/4③普通・ 普通	やや曲面をなす板状破片である。外面には、ハケメを、内面にはナデを施す。	
232	第106図 PL 57	器種不明	残 破片 縦 < 7.0> 横 < 5.9> 厚 2.1	詳細不明	① B ② 浅黄橙10 YR8/4③普通・普 通	板状の破片。器面にはナデが施され、一部にハケメがみられる。	
233	第106図 PL 57	器種不明	残 破片 縦 < 5.9> 横 < 6.7> 厚 1.3	詳細不明	①C②にふい黄橙 10YR7/4③普通・ 普通	斜め上方に向かって内彎ぎみに立ち上がる。突出度の弱い突帯が貼付されていたか。外面はヨコ方向のナデ。内面はハケメ。	
234	第106図 PL 57	器種不明	残 破片 縦 < 6.4> 横 < 4.8> 厚 1.5	詳細不明	①C②橙7.5YR7/ 6③普通・やや軟質	周縁が弧状を呈する板状片である。外縁に赤色塗彩を施す。表裏両面に粗雑なハケを施す。	
235	第106図 PL 57	人物	残 破片 長 < 6.6> 径 3.7	詳細不明	①B②橙7.5YR6/ 6③普通・やや軟質	棒状の破片で、人物の腕と考えられるか。胴部との接合のため端部を柄状に成形している。一部にハケメを残す。	赤色塗彩。
236	第106図 PL 57	器種不明	残 破片 縦 < 5.3> 横 < 5.0> 厚 1.5	詳細不明	①B②にふい黄橙 10YR7/4③普通・ やや軟質	厚さ1.5cm程の板状の破片である。外縁は緩やかな弧状を呈するか。器面にはナデが施され、一部にハケメを残す。	
237	第106図 PL 57	器種不明	残 破片 縦 < 3.9> 横 < 3.4> 厚 1.8	詳細不明	①C②にふい橙5 YR7/4③普通・普 通	板状の小破片である。器面にはナデが施されている。	
238	第106図 PL 57	器種不明	残 破片 長 < 3.0> 厚 1.0	詳細不明	①C②橙7.5YR7/ 6③普通・普通	小破片、外形は彎曲する。外面に赤色塗彩を施す。	
239	第106図 PL 57	器種不明	残 破片 高 < 4.2> 厚 1.2	詳細不明	①C②橙5YR6/6 ③普通・普通	小破片である。外面、粗いハケメ、ナデ。内面、ナデ。	

第13表 井出二子山古墳出土土器観察表

No	挿図 写真	器種	量目	出土位置 (注記)	①胎土 ②色調 ③焼成	特 徴	備 考
240	第107図 PL 56	土師器 杯	残 底部破 片 高 < 2.5>	詳細不明 アタゴ塚	①精選②橙5YR6/ 6③酸化、普通・普 通	須恵器蓋模倣の杯である。口縁部は、丸底との間に稜をなし、斜め上方に立ち上がるものと思われる。	
241	第107図 PL 56	須恵器 甕	残 胴部破 片 高 < 4.8>	S-2 ト レ	①白色鉱物粒②灰 5Y5/1③還元	甕の胴部破片と考えられる。器肉は0.8cmと薄い。外面、弱いタキメを施す。内面には青海波文状のアテメを残す。	
242	第107図 PL 56	須恵器 杯	残 底部破 片 底 (7.0) 高 < 1.9>	N-2 T、 周堤～外 堀	①精選、混入物少 ない②橙5YR6/6 ③還元、良好・良 好	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がるか。左回転クロロ成形。底部回転糸切り離し後、周縁部のみ回転を伴うヘラケズリ。	
243	第107図 PL 56	土師器 杯	残 1/2 口 (14.3) 底 9.1 高 4.1	詳細不明 アタゴ塚	①精選②橙2.5YR 6/6③酸化、普通・ 普通	口縁部は、斜め上方に向かって立ち上がる。浅い底部との間には弱い稜をなす。調整は内外面とも棒状工具によるミガキが施される。口縁部の工具はヨコ方向に動く。	内面、炭素吸着。いわゆる内黒の状態である。
244	第107図 PL 56	土師器 杯	残 底部破 片 高 < 3.9>	詳細不明 アタゴ塚	①精選②橙7.5YR 6/6③酸化、普通・ 普通	器形、調整とも243と同様。本資料のほうがミガキの方向に傾きがある。	
245	第107図 PL 56	土師器 杯	残 底部破 片 高 < 2.1>	詳細不明 アタゴ塚	①精選②黄褐10YR 5/8③酸化、普通・ 普通	器形、調整とも243と同様。本資料のほうがミガキの方向に傾きがある。	

No	挿図 写真	器種	量目	出土位置 (注記)	①胎土調成 ②胎色 ③焼成	特徴	備考
246	第107図 PL. 56	器種不明	残破片 高〈3.1〉	S-2 ト レ	①白色鉱物粒②明 褐7.5YR5/6(表)、 灰黄褐10YR5/2 (裏)③酸化、良好	本体に貼り付いた厚さ0.7cmの板状品の一部である。外面にはナデを施す。	タテ方向の線刻が1条みられる。

9. 成果と問題点

(1) 外部施設について

今回の報告は、井出二子山古墳の後円部後方に設定した3本のトレンチによる調査の所見である。その結果、墳丘の後円部第1段、基壇面と、墳丘を囲繞する2重の周堀、これに挟まれた中堤を検出し、1930(昭和5)年時の調査内容を補足する成果を得ることができた。各部位の規模、形状などについては、調査の原因が学術調査でなかったため、調査区の設定が、墳丘主軸の方向と合致せず、ここから得られた数値などは参考資料にしかかなり得ないが、1984(昭和59)年に群馬町教育委員会により実施された調査時に得られた内容と大きく食い違うものではなかろう。基壇面から内堀底面にいたる傾斜面には、その全面に葺石が施されていた。構造は、全体にやや乱雑な印象を受けるものの、所々に縦方向に目地の通る積み方が認められ、上の礫が、下の礫の上にきちんと積み上げられた状態であった。

なお、1930(昭和5)年調査の所見として、後藤守一によって図示された中堤内外縁の傾斜面、外堀外縁の傾斜面に施されたと思われる葺石は検出されていない。

墳丘基壇面、中堤上における埴輪樹立については、その原位置を確認することはできなかった。ただし、内堀、外堀の埋没土中からは、円筒埴輪の出土をみている。また、N-2トレンチの外堀部分からは、形象埴輪の蓋形埴輪が出土している。報告したとおり、立ち飾り部分の破片であるが、中堤あるいは、外堀の外縁にはこれまで人物・動物埴輪の存在が指摘されてきていたが、周堤上の埴輪配置を検討する際留意されるべき点となろう。

N-2トレンチ南端の調査では、中島の周縁に施されたと考えられる葺石の一部を検出した。この葺石は、1930(昭和5)年調査時の「中島Ⅲ」のものと考えられるが、その検出地点は、後藤作成の中島配置とはだいぶ異なっている。今回の内容に従えば、後円部後方の内堀内に存在すると思われる2基の中

島は、もっと墳丘中軸線寄りに配されていると考えられ、左右のくびれ部寄りの2基と合わせた4基の中島の位置関係は、保渡田八幡塚古墳のそれに近似するものとなる。

基本層序の項で記したが、今回報告の調査が行われた1971(昭和46)年当時は、降下テフラに対する検討が充分進んでいない状況であった。そのため、周堀内の土層観察に際し、Hr-FAについての認識は無く、注記にその記載は無い。ただ、その後実施された群馬町教育委員会の調査報告と合わせてみると周堀の基底間近に堆積し、V層と注記された土層が、Hr-FAと考えられる。

(2) 出土埴輪について

円筒埴輪については、検出した資料の中に全体形状を把握できるものは無かった。残存部分からは、基底部の直径が19cm前後で、3条4段構成以上の形状が想定される。ただし、1930(昭和5)年時に検出された埴輪円筒棺に転用された円筒埴輪のような5条6段構成の埴輪が樹立されていたかについては、今後の検討課題としたい。

全体形状以外で、本古墳出土の円筒埴輪の特徴を記すと以下のとおりである。

口縁部の外反状況は多様である。突帯の断面形状、発達具合も決して一律では無い。透孔は、半円形、円形の両者がみられ、丁寧な成形で穿孔されていた。

器面の調整は、タテハケを施す事例が圧倒的である。その中で、076から079の資料は、同一個体をなしていた破片と考えられるが、タテハケにヨコハケ、波状のハケを重ねている点が注目される。ハケを施すために使用されている工具も多様である。赤色塗彩や線刻を施す事例も報告のとおりである。

焼成は、窖窯焼成である。その中の少数については、色調が灰色みを帯び、須恵質を呈するものが存在している。これは、かねてから指摘のあったところである。

胎土については、第6章に科学的な分析の成果を掲載した。参照願いたい。

形象埴輪の中で、蓋形埴輪は、群馬町教育委員会の調査において、後円部北側に設定した2トレンチから出土しており、今回は、これに追加資料を加えることとなった。

今回報告の資料は、立ち飾りの破片と、これを受ける部分であったが、ラップ状に外反して立ち上がる受け部の内面に板状の立ち飾りが接合されているものである。立ち飾りの内外両面に突起、切り込みがみられる点が特徴的である。受け部は、分割成形された基部により墳丘上に樹立されたと考えられる。先の、群馬町教育委員会調査資料に形状が類似するものである。この資料では、受け部に4枚の立ち飾りが付くことが確認できる。

蓋形埴輪については、関東地方の資料を中心とした志村^(註)哲氏の研究成果がある。志村氏は、蓋形埴輪を3種、6細分しているが、今回報告の資料は、志村氏の3類に含まれるものと考えられる。近接する

保渡田VII遺跡の突出遺構からは、3a類に分類されて立ち飾りの破片、基台部分が複数出土している。

群馬県内における蓋形埴輪の出土例は、第14表のとおりである。志村氏分類の3類は5世紀後半から6世紀後半にまでおよぶが、井出二子山古墳出土資料は、その中でも古相に位置づけられよう。

(3) まとめ

最後に、井出二子山古墳の築造時期について簡単に記しておきたい。本古墳の築造については、主体部に採用された舟形石棺や、出土埴輪の様相、周堀内にHr-FAが堆積している状況などを考え合わせて5世紀後半とされている。今回報告の調査内容からは、これに変更を加えるような要素が見出せないことから、従来の説に従いたい。

註
志村 哲「関東の器財埴輪」『器財埴輪の世界』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

第14表 群馬県内出土の蓋形埴輪 ◎前方後円墳 ○帆立貝式古墳 △円墳

	古墳名	所在地	墳形規模	時期	出土部位	文献
1	井出二子山古墳	群馬町井出	◎108 m	5 C後	立ち飾り～受け部	1
2	朝子塚古墳	太田市牛沢	◎123.5m	4 C後	笠部破片	2
3	白石稲荷山古墳	藤岡市白石	◎140 m	5 C前		
4	赤堀茶臼山古墳	赤堀町今井	○ 59 m	5 C中	立ち飾り、笠部	3
5	舞台1号墳	前橋市荒子町	○ 42 m	5 C後		3
6	保渡田VII遺跡 突出遺構	群馬町井出		5 C後	笠部～基部 立ち飾り	4
7	若宮八幡北古墳	高崎市八幡原町	○ 47.5m	5 C後	5 個体以上	3
8	保渡田薬師塚古墳	群馬町保渡田	◎	5 C後	立ち飾り	4
9	東原11号墳	前橋市富田町	△	5 C後	立ち飾り	5
10	前二子古墳	前橋市西大室町	◎ 94 m	6 C前	立ち飾り	6
11	蛇塚古墳	吉井町池	△ 20 m	6 C後	立ち飾り	7
12	芝宮79号古墳	富岡市芝宮	△ 17 m	6 C後	笠部～基部	8
13	本郷埴輪窯 (宮下I遺跡)	藤岡市本郷	埴輪窯	6 C後	立ち飾り	9
14	上陽小学校保管資料	玉村町	不明	6 C後	立ち飾り～受け部	10

引用・参考文献

- 1 群馬町教育委員会『二子山古墳』1985
- 2 島田孝雄「群馬県太田市朝子塚古墳採集の蓋形埴輪」『埴輪研究会誌』第3号 1999
- 3 帝室博物館『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』1933
- 4 群馬町教育委員会『保渡田VII遺跡』1990
- 5 前橋市教育委員会『富田遺跡群・西大室遺跡群』1981
- 6 前橋市教育委員会『前二子古墳』1993
- 7 吉井町教育委員会『蛇塚古墳』1987
- 8 富岡市教育委員会『芝宮古墳群』1992
- 9 津金澤吉茂・飯島義雄・三宅孝子「群馬県藤岡市本郷埴輪窯出土の埴輪について」『紀要』1 群馬県立歴史博物館 1980
- 10 中里正憲・小林 修「玉村町上陽小学校保管の形象埴輪」『群馬考古学手帳』9 1999

第4章 引用図版出典

- 第72図 群馬県埋蔵文化財調査事業団「三ツ寺1遺跡」掲載図を使用。
- 第73図左上、右上 後藤守一「上野国愛宕塚」『考古学雑誌』39-1
掲載図を転載。
- 第73図下 群馬県教育委員会「二子山古墳」掲載図を転載。
- 第74図 第73図左上、右上と同じ文献が転載。
- 第75図～第80図上 南雲芳昭・若狭 徹「保渡田3古墳の埴輪」『埴輪の変遷』より転載。
- 第80図下 第73図左上、右上と同じ文献から転載。

第5章 保渡田八幡塚古墳の調査

1. 調査の経過

調査は、1971（昭和46）年11月15日から12月8日にわたり、井出二子山古墳の兆域部分の調査と平行して実施された。

調査の原因は、井出二子山古墳の章でも記したとおり、古墳の周辺を対象とした畑地灌漑整備を目的とした圃場整備事業の実施によるものである。

保渡田八幡塚古墳は、1929（昭和4）年に実施された調査により、墳丘あるいは、周堤上に林立する円筒埴輪列、周堤上の長方形区画内に集中して配置された人物・動物埴輪群が検出されたことで知られる。また、水野正好氏が、これらの埴輪群の分析を通じ、古墳に樹立された人物埴輪群を首長権の継承儀礼を表現したものと規定したことから、人物埴輪群研究の学史上著名な古墳との認識が深まったものである。

今回報告する調査は、1929（昭和4）年の調査の内容を補完する成果が得られるものとして期待されたものである。

古墳の所在する群馬町は、群馬県の中央部に位置し、南側を高崎市と、東側を前橋市と接する。高崎の市街地からの距離は、5 kmである。

町勢は、長く、米麦、養蚕を主体とした農村地帯であったが、近年は、高崎・前橋両市への通勤圏となり、ベッドタウン化が進行するとともに、町内の各所に工業団地が造成されるなど都市化の変貌著しい地域である。

その中であって、保渡田・井出地区には、はにわの里公園構想が企画・立案された。保渡田古墳群の一角に、かみつけの里博物館、土屋文明記念館が建設され、史跡公園としての景観整備が進行中である。井出二子山古墳は、現状の景観を生かした整備が計画されている。保渡田八幡塚古墳は、調査成果を基礎に、復元整備作業が実施されている。墳丘傾斜面を覆う葺石、埴輪、中島、周堀などの外部の諸施設が古墳築造当初の姿へ復元されつつある。内部主体の舟形石棺も原位置で埋葬時の状況が観察できるよ

う施設が作られている。

註
水野正好「埴輪芸能論」『古代の日本』2 1971

2. 調査の方法

調査区は、保渡田八幡塚古墳の周囲に2箇所設定された。

前方部前面には、外部施設の検出を目的に、墳丘の前方部西南隅を起点に、長さ40m、幅2mの試掘坑を南北方向に設定した。この調査区は、Sトレンチと呼称（Aトレンチとも記録されている）され、S-1トレンチからS-3トレンチまでが、墳丘南側に断続的に設定された。S-1トレンチは、11mの長さで設定された。このトレンチの南端から5mの距離を保って、S-2トレンチが設定された。長さ10.8mの調査区である。S-3トレンチは、S-2トレンチの南端から0.6mの間隔をおいて設定された。長さは、12.6mである。

墳丘の東側には、南北方向にEトレンチが配され、E-1トレンチからE-4トレンチが設定された。それぞれのトレンチの長さは10m、幅は、2mである。

ただし、これらのトレンチの設定場所については、現在の墳丘関係図に正確な位置を提示することが困難となってしまう。

調査における表土、遺構内の堆積土の掘削、除去は、全て、人力によるものである。

記録は、調査区ごとに各区の土層堆積状況について20分の1の断面図を作成した。周堀・葺石をはじめとした遺構の検出状況については、20分の1の平面図を平板測量により作成した。

写真の撮影には、6×9版カメラによるブローニーフィルムと、35mmリバーサルフィルムを用いて記録を行った。

3. 基本層序

本古墳における基本層序は、以下のとおりである。

なお、古墳の内堀、外堀は、第3層を掘り込み、その基底面は、第5層に到達している。

第1層 表土、耕作土層 色調は、明褐色で、As-A、As-Cを多量に含み砂質である。約50cmの厚さで堆積していた。

第2層 黄褐色土 墳丘盛土である。周堀を掘削した時の第4層、第5層が積み上げられたもの。

砂礫を含む。厚さ30~50cmを有する。

第3層 黒色土層 As-Cを含む。本古墳築造時の地表面を形成していた。約20cm前後の堆積である。

第4層 暗褐色土層 漸移的にローム層に移行する。厚さは約70cmを測る。

第5層 ローム層

次に、周堀内の堆積土では、基底面直上に Hr-FA (第6層) が堆積、その上に黒色の粘質土、Hr-FP に関連する洪水堆積物が水平に層をなしている。

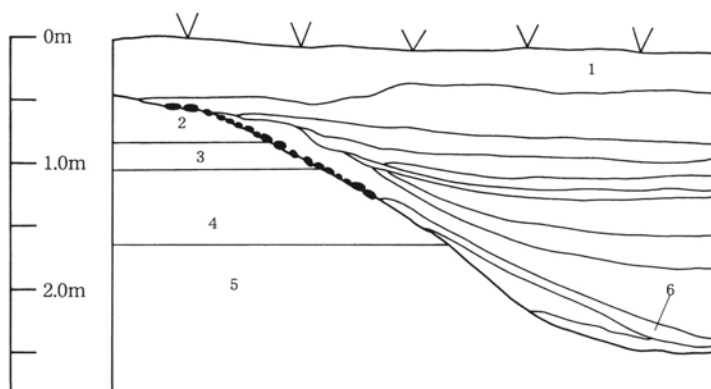
今回報告の1971 (昭和46) 年当時は、As-B、Hr-FA などのテフラに対する認識が充分でなく、調査当時の土層注記には、その点が明示されていない。

4. これまでの調査成果

本章で報告する保渡田八幡塚古墳は、1929 (昭和4) 年、1971 (昭和46) 年、1980 (昭和55) 年、1984 (昭和59) 年の4回の調査を経て、1993 (平成5) 年からは史跡整備にともなう学術調査が実施され、復元整備事業が進行している。ここでは、これまでの八幡塚古墳にかかわる調査成果について概括しておく。

(1) 1929 (昭和4) 年の調査

第1回目の調査は、1929 (昭和4) 年に群馬県史蹟名勝天然記念物調査会によって実施された。この調査は、地元民により円筒埴輪列が発見されたことが契機になったものである。この時既に墳丘の改変



第109図 基本層序

は著しく、江戸時代や明治時代に埋葬施設の検出や遺物の出土があったことが知られていた。

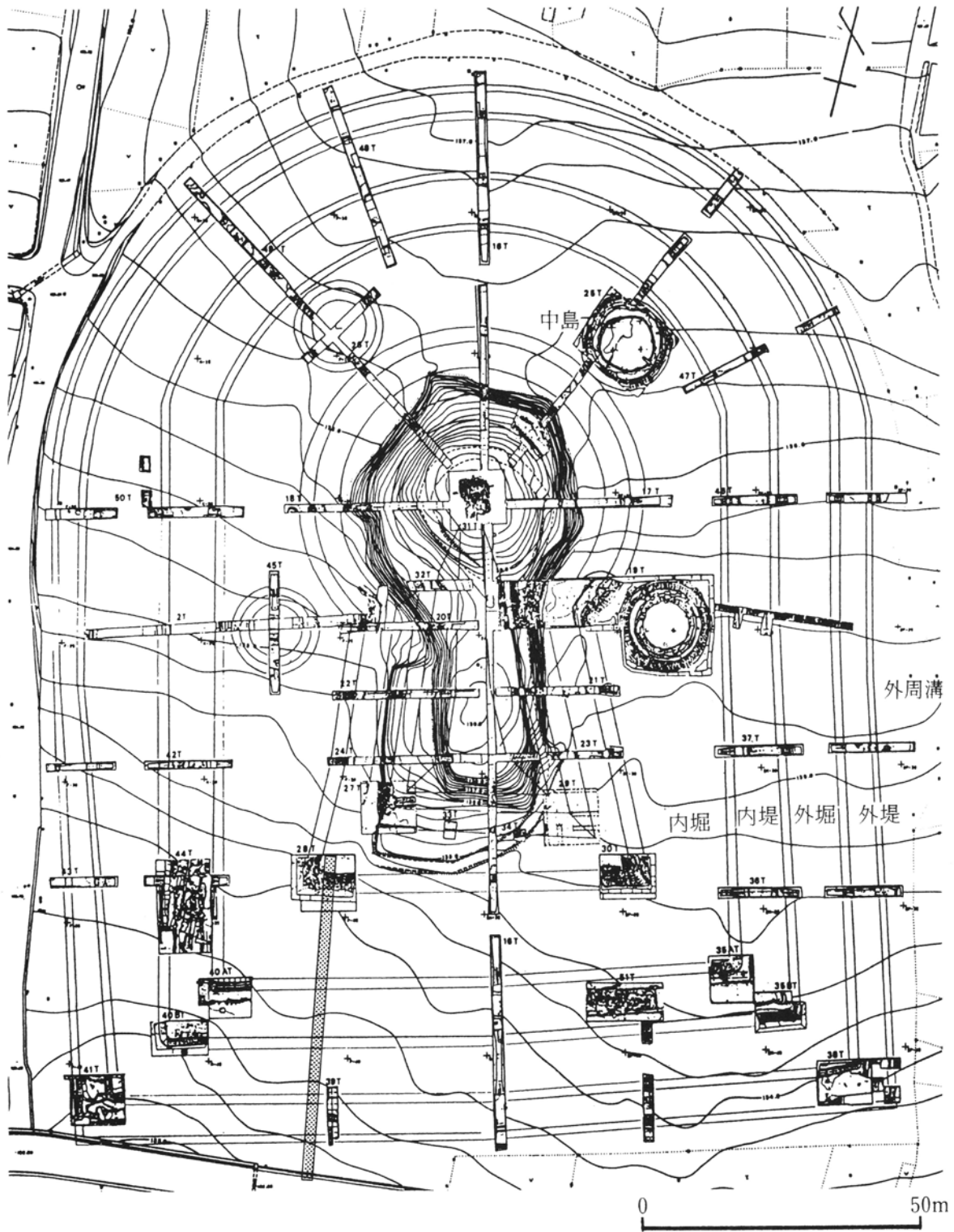
調査は、古墳の兆域の確認、周堀の土層の探索、円筒埴輪列の追求に重点がおかれ、墳丘およびその周辺各所に至るまで調査が及んでいる。その結果、墳丘上では基壇面、墳丘中段の平坦面の二段に円筒埴輪が樹立されていること。周堀の外側、堤上を巡る二列の円筒埴輪列と、その埴輪列に区画された長方形のスペース内に人物・動物埴輪などの形象埴輪が集中する区画2箇所 (A区、B区) の存在を確認した。また、周堀内にはくびれ部の左右に中島 (陪塚) が存在することが確認された。くびれ部東側の中島では、周縁辺を一周する円筒埴輪列が検出され、これに近接する地点から土師器が集中して出土する状況が確認されている。

これらの調査成果は、1932 (昭和7) 年に刊行された『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯に、福島武雄らにより作成された精緻な実測図とともに詳述されている。また、この中で岩澤正作が、古墳の築造と火山灰の関係について記述している点^(註)が注目される。

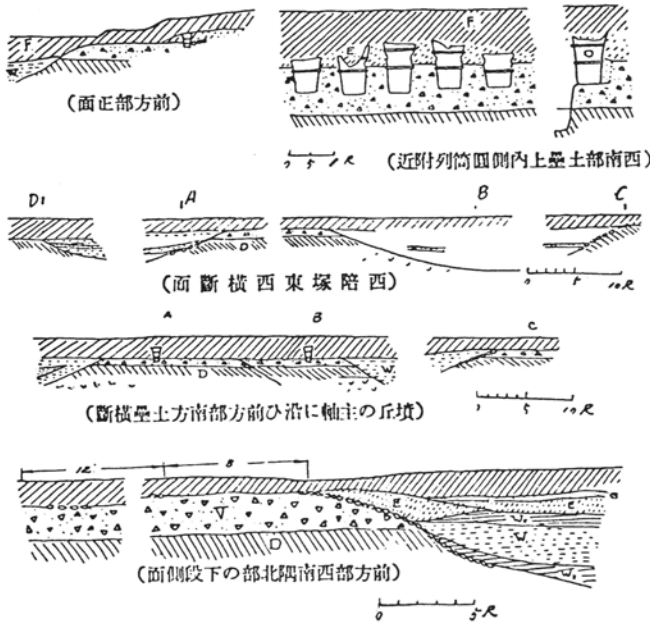
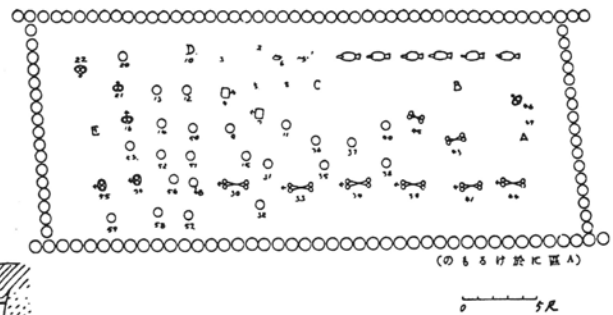
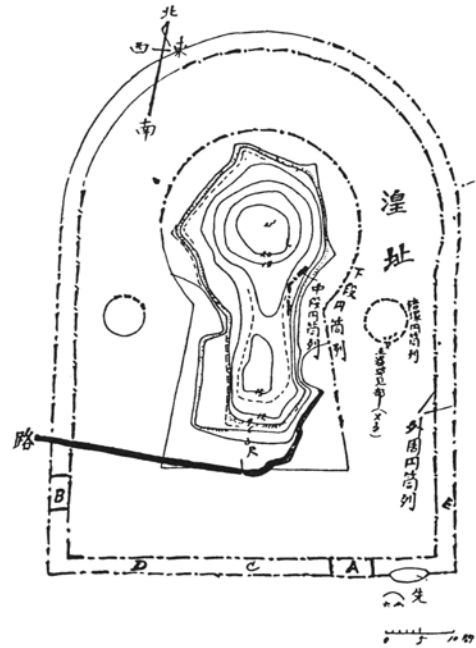
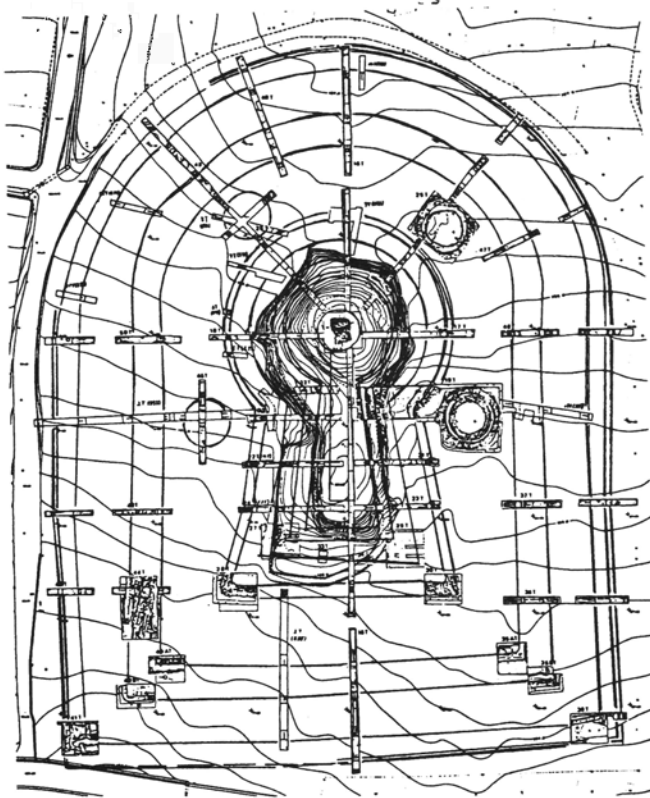
註
福島武雄・岩澤正作・相川龍雄「八幡塚古墳」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯 1932

(2) 1971 (昭和46) 年の調査

この時の調査が、今回報告する調査である。南面する前方部の南西隅に南北トレンチが設定され、小

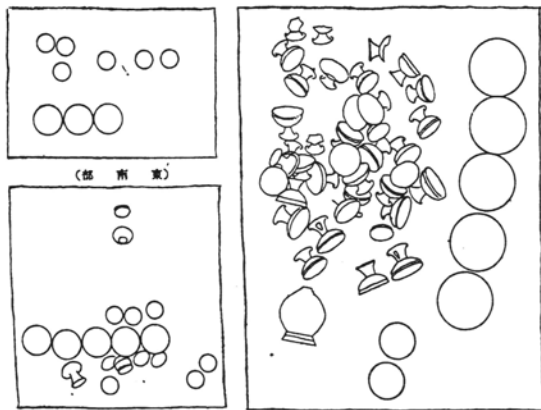
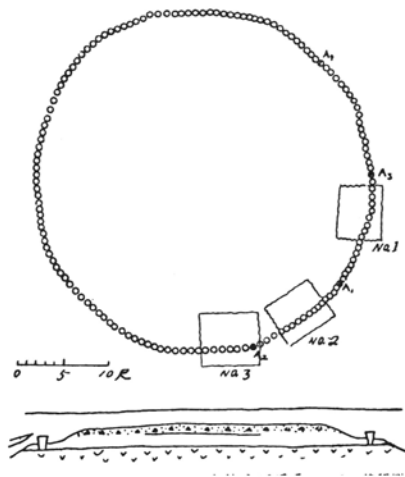


第110図 調査区的位置



1. 鶏 2. 不明 3. 女子(?) 4. 倚座の女子(両手で何かを捧げ持つ) 5. 男子(倚座か) 6. 鶏 7. 倚座の男子 8. 不明
9. 不明 基台部のみ 10. 不明 11. 不明 基台部のみ 12. 不明 基台部のみ 13. 不明 基台部のみ 14. 不明 基台部のみ 15. 基台上的壺(しゃく入り) 16. 武人立像 17. 欠番 18. 欠番 19. 欠番
20. 不明 基台部 21. 小鈴付脚結の武人立像 22. 武人立像 23. 欠番
24. 欠番 25. 欠番 26. 欠番 27. 欠番 28. 欠番 29. 欠番
30. 大型飾馬 31. 不明 基台部のみ 32. 基台部のみ 33. 大型飾馬
34. 大型飾馬 35. 不明 基台部のみ 36. 不明 基台部のみ
37. 不明 基台部のみ 38. 不明 基台部のみ 39. 小型野馬 40. 不明 基台部のみ
41. 小型野馬 42. 欠番 43. 小型野馬 44. 小型野馬
45. 小型野馬 46. 小鈴付脚結の武人立像 47. 小型猪(一面剥離痕有り)
48. 短甲着装武人半身像 49. 欠番 50. 不明 基台部のみ
51. 不明 基台部のみ 52. 不明 基台部のみ 53. 不明 基台部のみ
54. 桂甲着装武人立像 55. 小鈴付脚結の武人立像 56. 短甲着装武人半身像
57. 不明 基台部のみ 58. 不明 基台部のみ 59. 不明 基台部
- R 水鳥

第III図 保渡田八幡塚古墳の墳丘



第112図 保渡田八幡塚古墳の中島

規模な調査が実施された。調査の成果としては、墳丘の周囲に二重の周堀が圍繞することが確認された点にある。これにより、人物・動物埴輪の集中区は中堤上にその区画がなされていることが判明した。調査の内容、成果はその一部が石塚久則氏により(註)発表されている。

註
石塚久則「八幡塚古墳」『考古学ジャーナル』157 1979

(3) 1980 (昭和55) 年の調査

群馬町教育委員会による調査は、古墳周辺で計画された圃場整備事業に対応するため、古墳の兆域を確認することを目的に、後円部の西側を中心に実施された。また、前方部南端にも1971年の調査を補足するために調査区が設定された。その結果、周堀が二重であることが再確認されるとともに、周堀の底

面近くに Hr-FA の堆積が確認された。また、後円部北西方向の内堀内に 3 基目の中島の存在が確認され、井出二子山古墳同様 4 基の中島が存在することが推定された。西側くびれ部の調査区は拡張され、基壇面上に並ぶ円筒埴輪列が検出された。

(4) 1984 (昭和59) 年の調査

群馬町教育委員会による範囲確認調査である。くびれ部東側の中島などを調査している。なお、翌年の1985 (昭和60) 年に、保渡田八幡塚古墳は国指定史跡となっている。

(5) 史跡整備事業に伴う調査

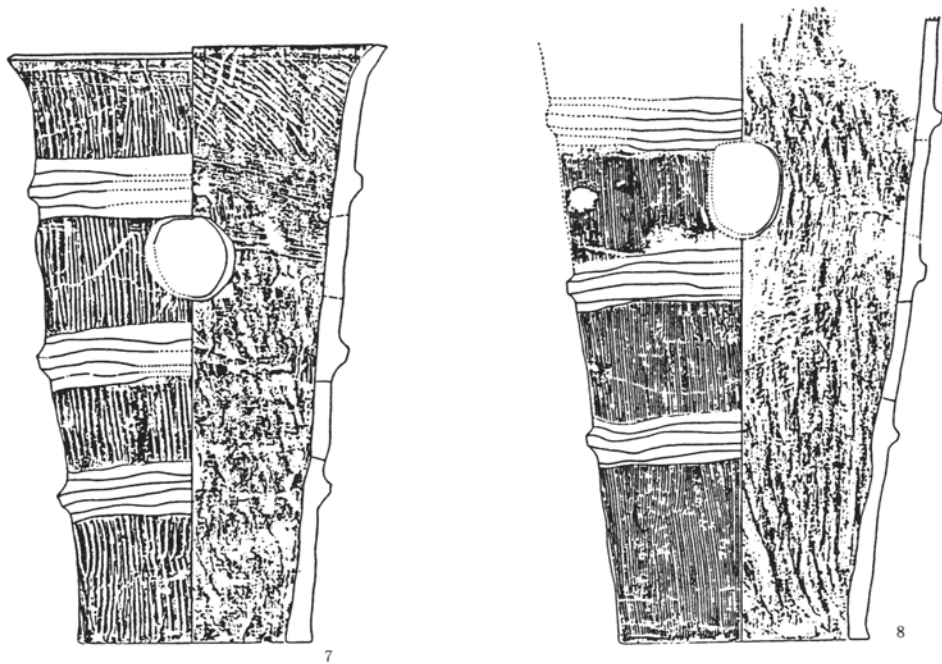
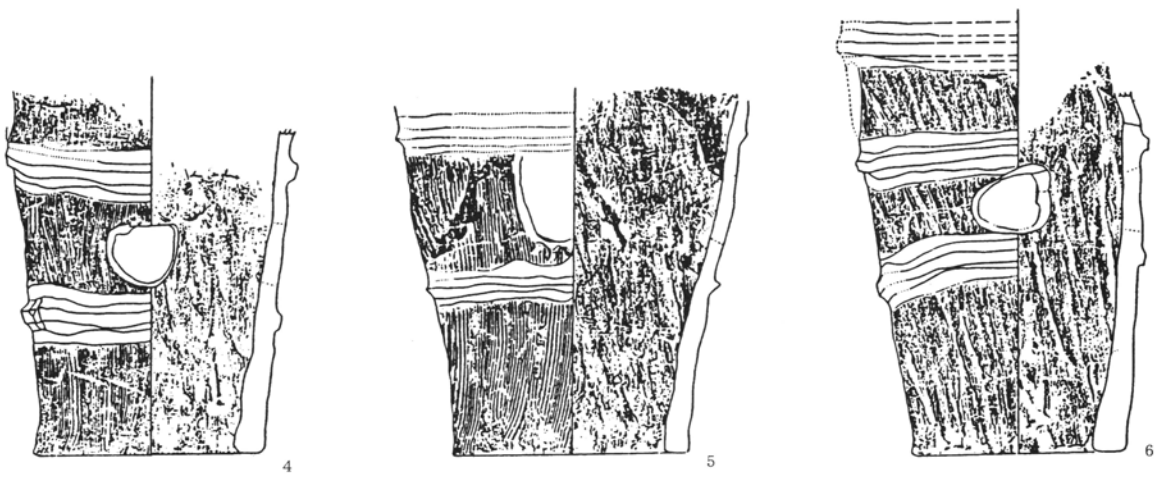
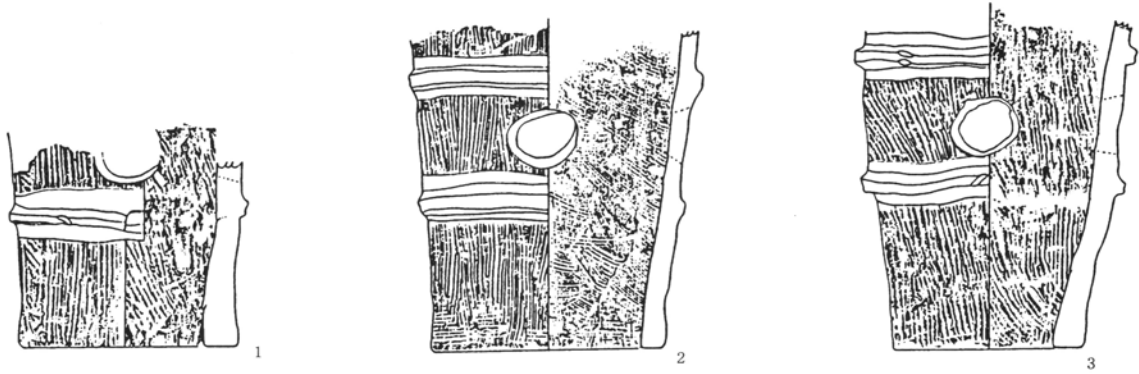
平成5年以降、史跡整備事業に伴う発掘調査が実施され、兆域全体を覆う調査区の設定がなされ、築造当初の古墳を復元するための基礎データが獲得された。1929 (昭和4) 年に調査された中堤上の A 区、B 区の両形象埴輪集中区の再調査も実施されている。

一連の調査により、古墳の全容、墳丘・周堀等外部施設の各部の状況が把握され、築造企画を論ずるに十分なデータも得られた。外堀のさらに外側には三重目の堀、外周溝の存在が確認され、これと外堀との間にある外堤上には要所要所に盾持ち人が樹立されていたことが判明した。また、内堀の調査では、推定されていたとおり後円部北東部分に中島の存在を確認した。

後円部墳丘の調査では、既に破壊されたものと考えられていた舟形石棺が原位置で発見された。棺身は、縄掛突起を含む全長が3.1m、幅1.5mである。棺内には主要な副葬品は皆無であったが、ガラス小玉200余点が出土、棺外から鉄製農工具のミニチュア類が出土している。また、これと近接して、明治時代の開墾時に発見されたとされる竪穴系小石櫛の痕跡も確認され、挂甲の小札が出土している。

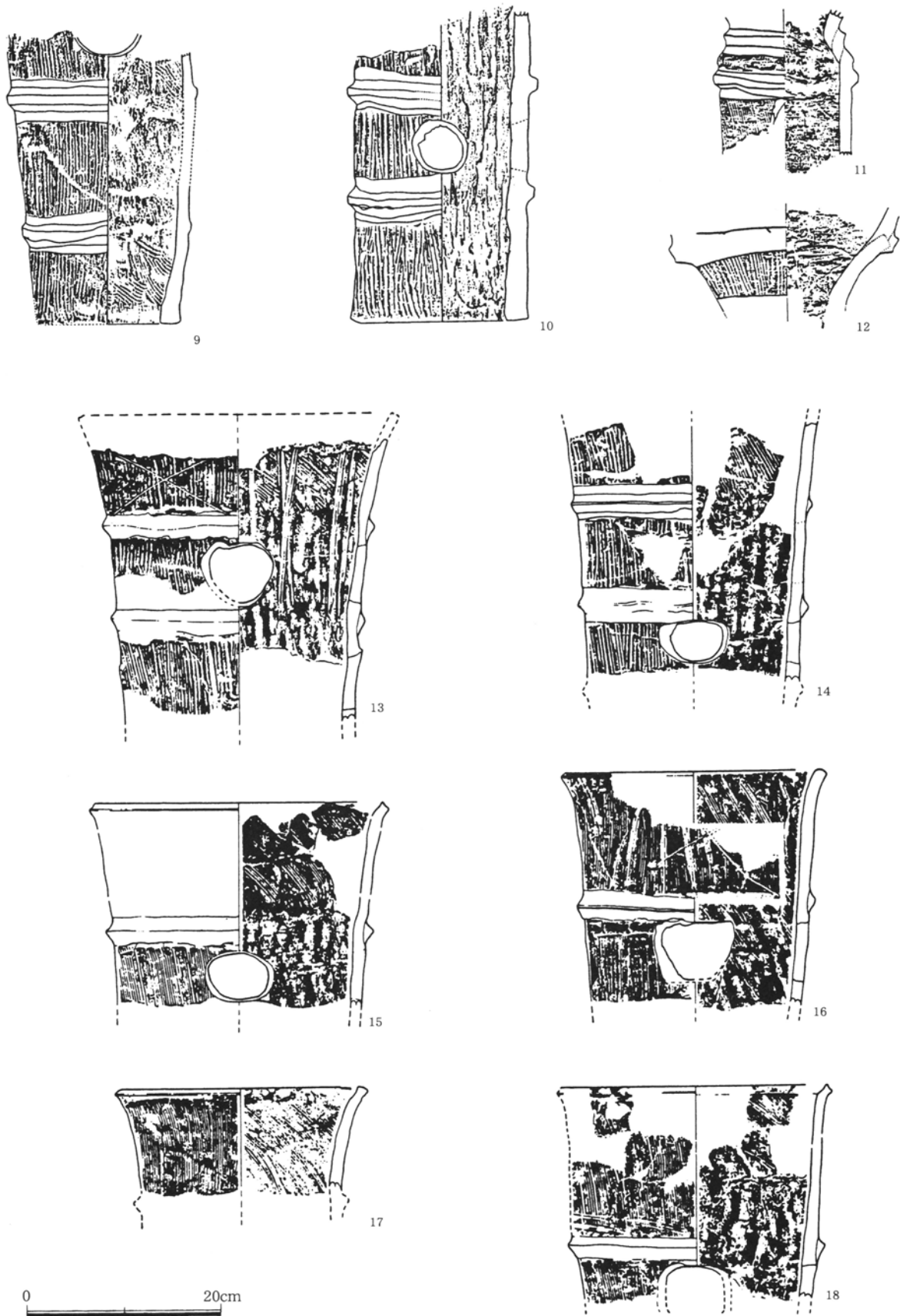
(6) 出土遺物について

保渡田薬師塚古墳の遺物を保管する西光寺には、

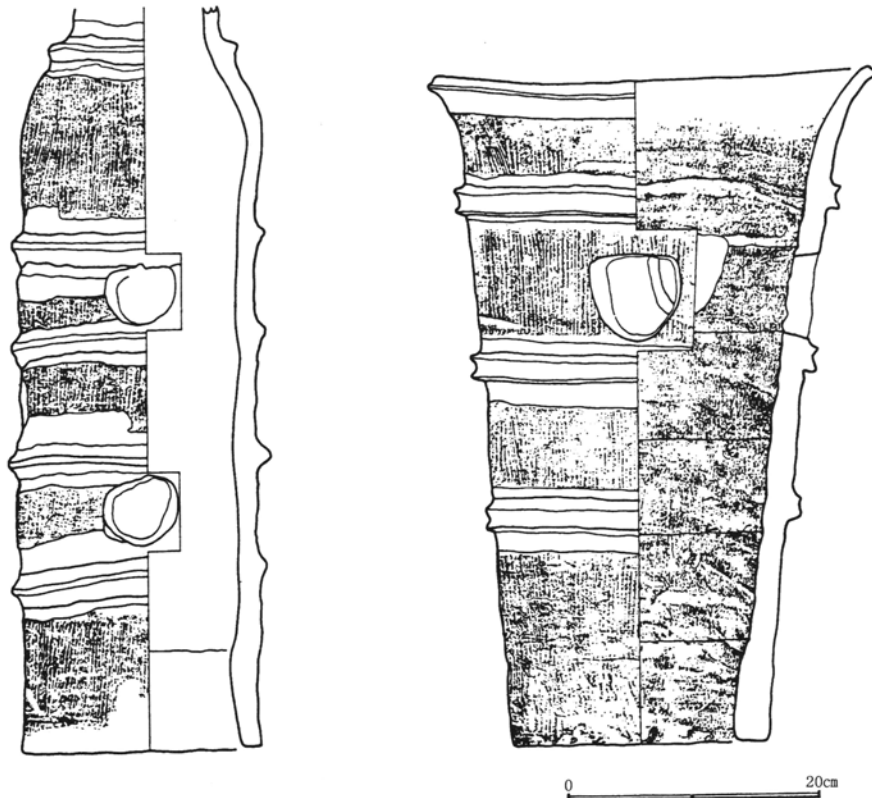


0 20cm

第113図 保渡田八幡塚古墳の埴輪(I)



第114図 保渡田八幡塚古墳の埴輪(2)



第115図 保渡田八幡塚古墳の埴輪(3)

八幡塚古墳出土とされる鉄地金銅張の馬具がある。

円筒埴輪は、1929（昭和4）年の調査においてくびれ部東側の基壇面、中段平坦面の二段、および中堤上に2列が囲繞することが確認されている。また、くびれ部両側の内堀内に設けられた中島にも円筒埴輪列が樹立されていた。

円筒埴輪には普通円筒と朝顔形の存在が知られている。いずれも窖窯焼成である。現在公表されているものは、くびれ部西側基壇面上出土の資料と『同道遺跡』掲載の資料である。完形の個体としては、第113図7と第115図掲載の資料がある。前者の法量は、器高47.4cm、口径29.5cm、底径19.9cmを測るが、これよりも大型の個体も存在するようである。墳丘及び中堤上に配置された個体は3条4段構成であるが、中島上に樹立された個体は法量が小型で、2条3段構成である。透孔は円形、半円形の両者が存在する。器面の調整は、外面が一次調整のタテハケのみで、井出二子山古墳の資料中に少量存在した二次調整ヨコハケの調整技法は認められない。使用された調整工具は複数種の存在ができるものの、法量、

各部の在り方を全体的に見通すと一段と定型化の傾向が認められるという。

朝顔形埴輪は第115図のように胴部に4条の突帯を持つ事例が知られる。

形象埴輪は、1929（昭和4）年の調査時、中堤上の2箇所的人物・動物埴輪が集中して樹立された区画が検出されている。前方部東南方向の区画がA区、前方部西南方向の区画はB区と報告されている。B区の埴輪群は遺存状態が不良でその内容は不詳であるのに対し、A区では人物33体、馬8体、水鳥6体、鶏2体が確認され、個々の出土位置が正確に実測されており、その後の埴輪研究において重要な基礎資料となっている。

A区の埴輪群については史跡整備時に伴う再調査や保管されていた資料の追跡調査などにより、力士、犬、猪、鶏の存在が明らかにされてきた。

埴輪以外に土師器の出土が知られている。これらは、1929年の調査に際し、くびれ部東側の中島が調査された時、中島の周縁辺を一周する153本の円筒埴輪列に近接して、東側と東南の2箇所の調査区から

72個が集中して出土したことが報告されている。このうちの8個体の杯は、4本の円筒埴輪の内側から発見されたものである。また、同時に白玉2個が出土していることも記録されている。

これらの土師器は、東側の調査区から高杯38、埴1、盃1、杯2が出土した。東南側の調査区からは杯11、埴1、盃1、長頸埴2が出土している。群馬県立歴史博物館には八幡塚古墳出土の土師器20個が収蔵されており、その内訳は、杯5、盃1、高杯13、小型壺1となっている。第116図に掲載した資料がこれで、G 1-16・17・19は1932年の報告書には無いものである。

掲載した資料のうち、高杯は、杯部が須恵器蓋模倣の形状をしているもので、内外面とも器面を棒状工具により丁寧に磨いている。G 1-11は、他よりも法量が大きく、脚部に透かしを有している点が他と異なり、特徴的である。杯は、内斜口縁のものと、口縁部が内彎して立ち上がるものがある。後者が盃と報告されているものであろう。内斜口縁の個体は、いずれも器高が低く、扁平である。外面のヘラケズリは下半部だけに止まっている。内面には高杯と同様のミガキが施されている。

掲載図の他に1932年の報告書中には、口縁部が内彎気味に立ち上がりながらも先端が短く直立する形状の杯（碗あるいは盃）や口縁部が大きく外反し、丸底の胴部を有する長頸埴と報告された器種が見られる。

なお、くびれ部西側の中島では東側同様、円筒埴輪列は検出されたものの土師器は全く検出されていない。

(7) 研究史の中の保渡田八幡塚古墳

保渡田八幡塚古墳が研究史上で注目された点のひとつに、埴輪群研究における水野正好氏の「埴輪芸論」^(註1)が1971(昭和46)年に発表されたことがある。

水野氏は、中堤上の人物埴輪群樹立の意味について、葬られた死せる族長の霊を、新たな族長が墳墓の地で引き継ぐ、王位継承儀礼の様子を表現したも

のとした。この説は、その後の埴輪群研究に大きな影響を与え、人物埴輪群研究の基準資料として度々取り上げられている。

また、県内における首長墓の変遷を検討する中で、保渡田古墳群の推移、そして、その系譜に関する研究の成果が、多々、発表されている。特に、1980(昭和55)年に三ッ寺I遺跡が発見されたことにより議論はより活発化した^(註2)。さらに、史跡整備事業にかかわる調査の実施により古墳の全容がほぼ解明されるにいたり、墳丘、周堀などの設計企画についての検討も進み、県内の他古墳との比較が可能になった。今後は、より正確なデータを基礎とした議論が進むことになろう。

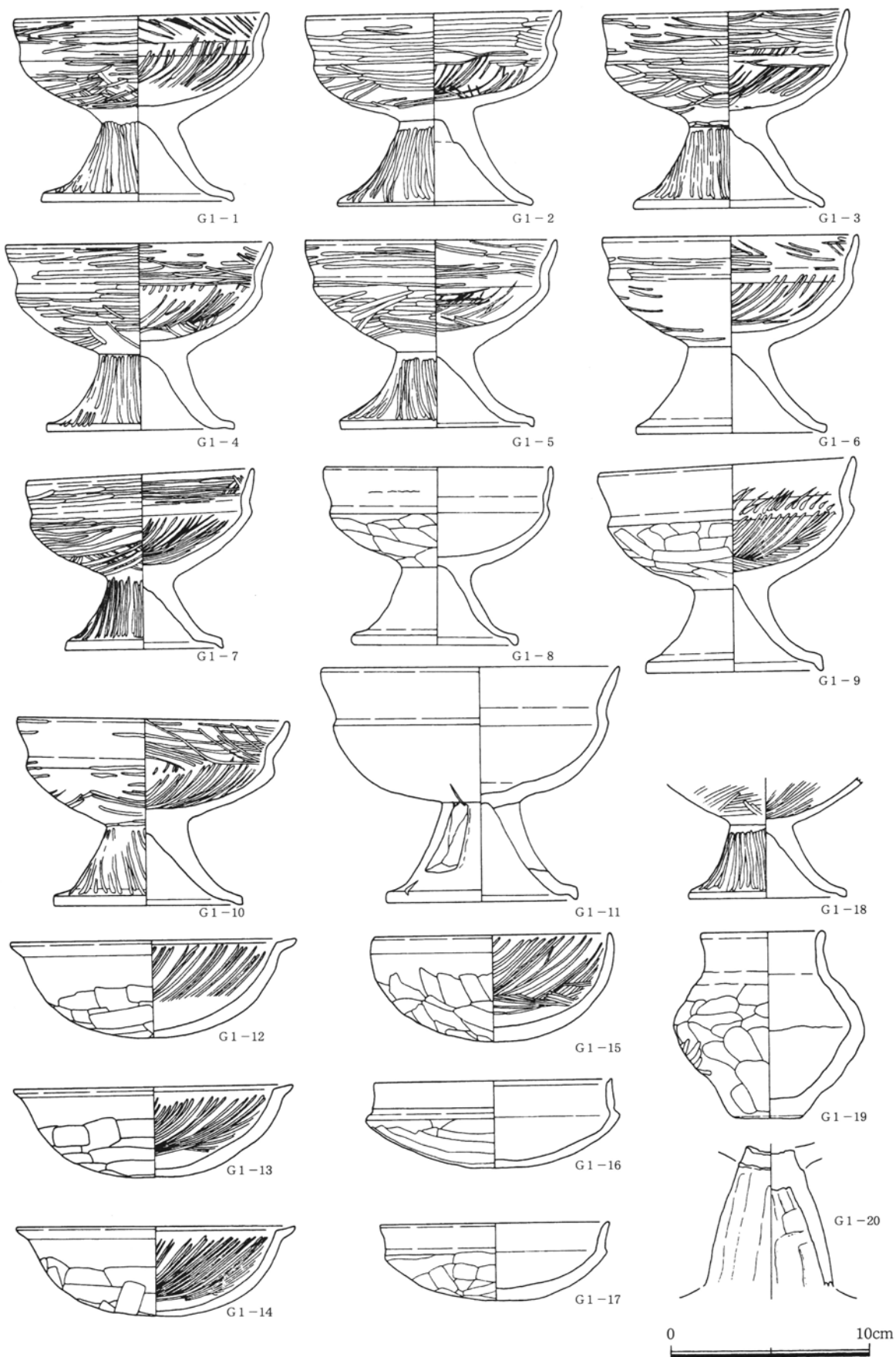
註

1. 水野正好「埴輪芸論」『古代の日本』2 1971
2. 梅澤重昭「毛野の古墳の系譜」『考古学ジャーナル』150 1978
右島和夫「保渡田3古墳について」『三ッ寺I遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
若狭 徹「上野西部における5世紀後半の首長墓系列」『群馬考古学手帳』5 1995

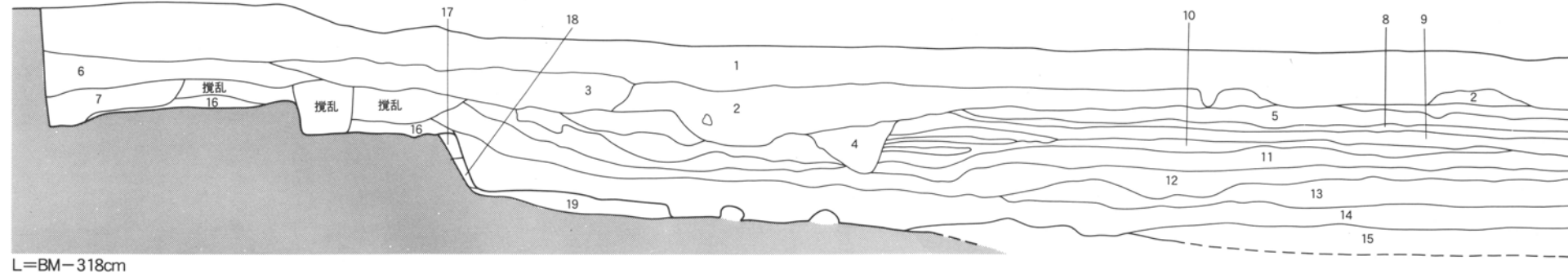
(8) 調査成果のまとめ

史跡整備事業が進行中の現時点における保渡田八幡塚古墳に関する所見は以下にまとめられよう。

保渡田八幡塚古墳は全長96mの規模を有する三段築成の前方後円墳で、前方部は南面する。墳丘の周囲には盾形の周堀が二重に巡る。その外側にも外周溝が巡り、その兆域は主軸方向で190mに及ぶ。内堀内には、東西くびれ部の両側、後円部側方や北側寄りの合計4箇所に平面円形の中島が設けられている。主体部は、後円部墳頂下に埋置された凝灰岩製の舟形石棺と石棺に後出する竪穴系小石槨の2基である。埴輪は、合計7,000本の円筒埴輪と100体以上の形象埴輪が、墳丘、中堤、外堤、中島の各所に樹立されていたと推定されている。築造時期については、井出二子山古墳、保渡田薬師塚古墳との各要素の比較、出土遺物の検討、周堀内のHr-FAの堆積状況などから5世紀後半から末と考えられている。

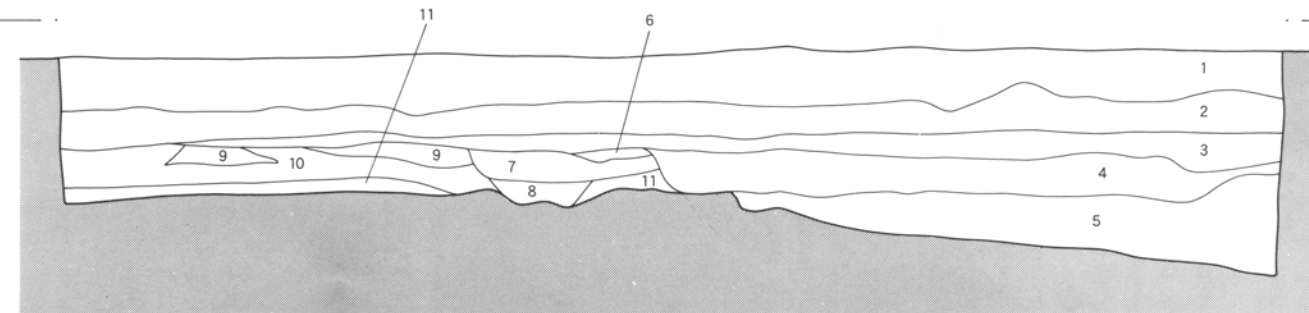
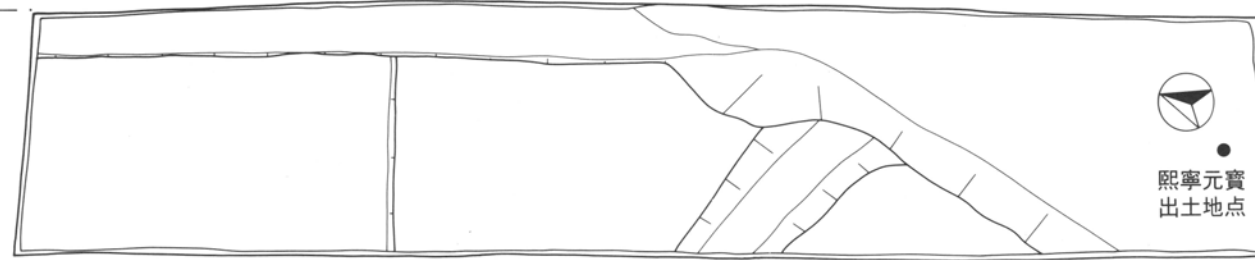


第116図 保渡田八幡塚古墳中島出土の土器



八幡塚古墳E-2トレンチ

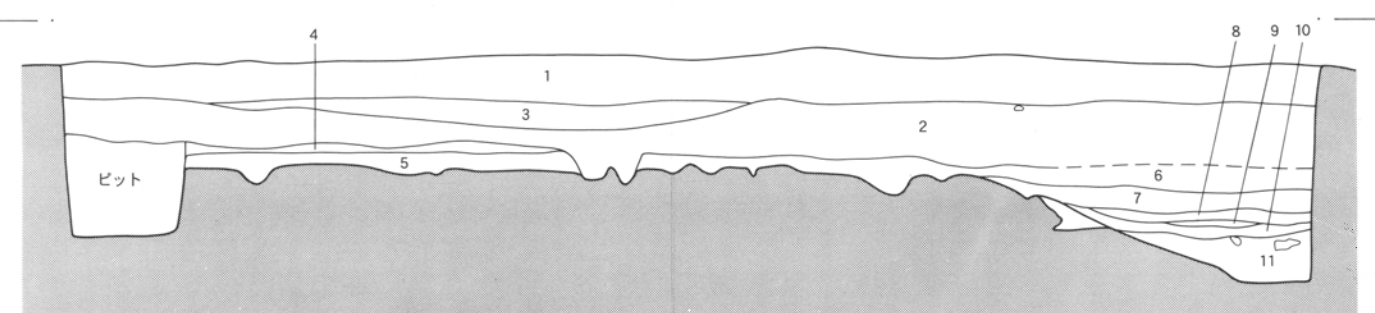
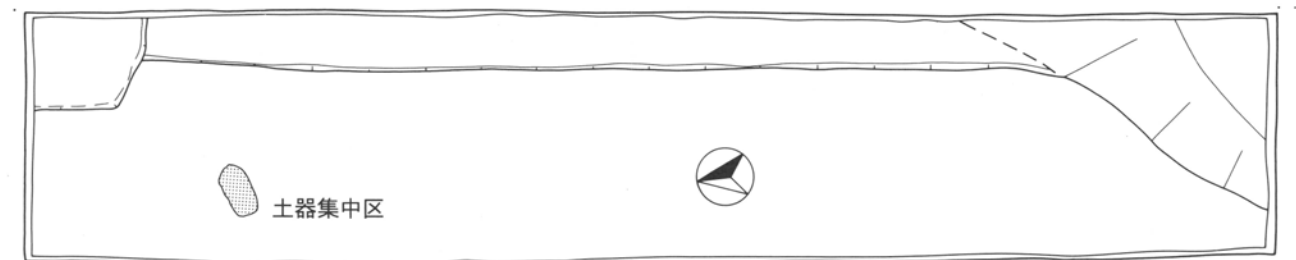
- 1. 表土、耕作土
- 2. 褐色土層 軟らかくバサバサしている。砂を多く混入。
- 3. 砂層 粒子が荒く、ブロック状に数層に分離。
- 4. 褐色土層 2層と同じであるが明るい。小石が目立つ。
- 5. 褐色土層 2層と同様であるが暗い。
- 6. 褐色土層 2層に共通。小石を含む。バサバサしている。
- 7. 褐色土層 上層と共通しており、黄土と小石をわずかに含む。バサバサしている。
- 8. 褐色土層 黄橙色粘質土が混入。上層と共通。
- 9. 砂層 粒子が比較的細かく、褐色土が混入。
- 10. 灰層 紫色を呈し、粒子が極めて細かい。
- 11. 軽石層 数層に分かれているが粒子は荒い。As-Bか。
- 12. 褐色粘質土層 灰を含む。部分的に砂が入る。
- 13. 褐色粘質土層 黄土を含む。砂の混入も多い。
- 14. 褐色粘質土層 小石を含む。砂も多く含み、ザラザラしている。
- 15. 褐色粘質土層 上層と同じであるが黄味が強くなる。
- 16. 黄橙色粘質土層
- 17. 黒色土層 As-C混じり。
- 18. 暗褐色土層
- 19. ローム層



L=BM-430cm

八幡塚古墳E-3トレンチ

- 1. 表土、耕作土 褐色、軽石、ザラザラ。
- 2. 褐色土層 上層の締まったもの。
- 3. 褐色土層 黄色土が微量に混入したもの。上層と同質。
- 4. 褐色土層 砂が多く混入。サラサラしている。
- 5. 砂質層 小石を多量に含む。
- 6. 灰層 灰褐色を呈す。
- 7. 灰層 小石が混入。
- 8. 灰層 灰白色砂混入。
- 9. 黄橙色粘質土層 ブロック状に混入している。
- 10. 褐色土層 灰、砂を含みサラサラしている。
- 11. 黄橙色粘質土層

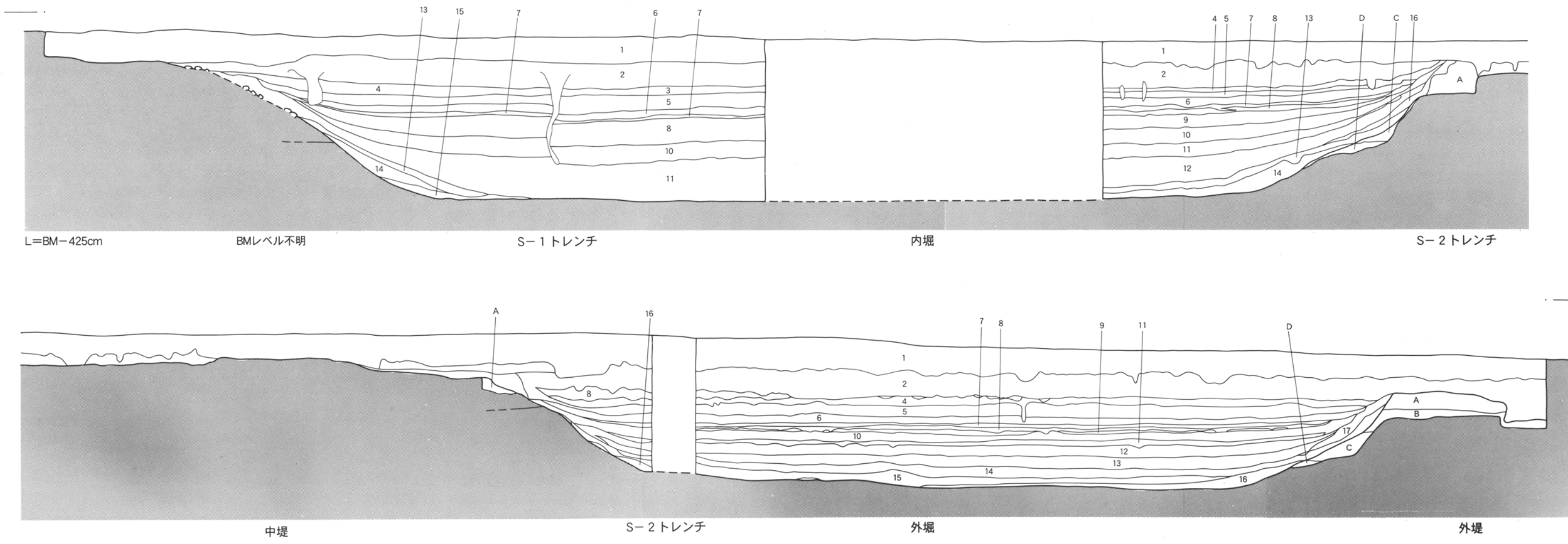


L=BM-540cm

八幡塚古墳E-4トレンチ

- 1. 表土、耕作土
- 2. 褐色土層 軽石を含み固い。耕作土と共通。
- 3. 褐色土層 下層と比し色調が少し黒ずむ。
- 4. 褐色土層 黄橙色土をわずかに含む。上層と同質。
- 5. 黄橙褐色土層 粘質。
- 6. 砂層 粒子が細かい。
- 7. 砂層 黄味を少し帯びる。
- 8. 暗褐色粘質土層
- 9. 砂層 小石を含む。
- 10. 砂層 上層と共通。
- 11. 砂層 石を多量に含む。





保渡田八幡塚古墳Sトレンチ

内堀

- 1. 表土、耕作土
- 2. 黄灰色土層 砂質。耕作土も混入。
- 3. 黄灰色土層 砂質。混入物無し。
- 4. 褐色粘質土層 少し黒ずむ。
- 5. 褐色粘質土層 わずかに砂が混入する。砂の混入量により6層と分層。
- 6. 褐色粘質土層 やや砂質。
- 7. 砂質層 粒子は細かい。
- 8. 黄白色粘質土層 固い。同質層が数層に分かれる。
- 9. 黄白色粘質土層 下層との間には少し黒ずむ層により分層。
- 10. 黒色土層 黒み強い。水を含み軟らかい。
- 11. 黒色土層 上層に比べいくらか明るくなる。
- 12. 黒色土層 上層と同じであるが黒色の薄い層により分層。
- 13. 黄橙色土層 Hr-FA か。(二ツ岳の注記)
- 14. 黒色砂質土層 バサバサになっている。
- 15. 黄橙色土層 13層より色調が黒ずむ。
- 16. 軽石層 粒子が大きい。サラサラしている。

外堀

- 1. 表土、耕作土
- 2. 褐色土層 締まっている。
- 3. 砂質土層 粒子が荒い。混入物が無い。
- 4. 褐色土層 黄色土が混入。
- 5. 暗褐色土層 4層が混入。
- 6. 褐色粘質土
- 7. 暗褐色粘質土
- 8. 褐色粘質土
- 9. 砂層 粒子が細かい。
- 10. 褐色粘質土層
- 11. 暗褐色土層 粒子の細かい砂粒を混入。
- 12. 褐色粘質土層
- 13. 褐色粘質土層
- 14. 褐色粘質土層
- 15. 黄橙色土層 Hr-FA か。(二ツ岳の浮石を含むとの注記)
- 16. 黒色砂質土層 植物性のものが腐食したものか。
- 17. 注記不明

- A. 墳丘盛土 調査時は二次堆積ロームと確認されていた。
- B. As-C混じりの黒色土層
- C. 暗褐色土層
- D. ローム層



第118図 Sトレンチ

5. 調査された遺構

(1) 保渡田八幡塚古墳の周堀

保渡田八幡塚古墳は、前方部を南面して築造された前方後円墳である。この前方部の南西隅にSトレンチを南北方向に設定、全長40mにわたり、断続的に調査区を3箇所設定した。また、墳丘の東側にあたる地点にEトレンチを設定し、調査を実施した。

Sトレンチ

墳丘の前方部前面、南側部分の兆域確認を目的としたトレンチである。設定の方向は、磁北から東偏5°30'である。

墳丘寄りに配置したS-1トレンチでは、調査区の北端から南方1.7mの地点に変換点があり、ここが、墳丘第1段、基壇面の縁辺と考えられる。黄褐色の土層を厚さ50cmの耕作土が覆っていた。

内堀の残高は、2.0m、基底面は、地表下2.4mで、ローム層中にあり、ほぼ平坦な面をなしている。内堀から基壇への傾斜面の角度は、29度である。勾配比は1.82：1である。傾斜面の上位80cmほどに限り、葺石が施されている。葺石は、長さ10cm前後の礫を横長にして、斜面に貼り付けるように置いており、上下の礫は両者が重なる部分がほとんど無い状態で、井出二子山古墳の石積み構造とはやや様相を異している。

内堀を埋める土層は、上層に耕作土とこれに続く黄褐色土が堆積している。中層には途中に砂質層を挟み、上位には褐色粘質土が、下位には黄白色粘質土が堆積している。下層には黒色土が厚く堆積していた。基底面の上位には一層、黒色砂質土の間層において黄橙色土層が堆積していた。この土層には「二ツ岳」との注記が加えられていることから、現在Hr-FA認識されている土層と考えられる。

調査区の北端から南方に7.6mの地点で、水平堆積した土層が途中で約10から15cmほどずれ、不整合の生じている状況が認められる。地震による亀裂・陥没の痕跡であろうか。

S-2トレンチでは、内堀外縁の立ち上がりを検出した。外縁の縁部は、S-2トレンチの調査区の北端から南方18mの地点に変換点がある。

傾斜は、約33度の角度で掘り込まれている。葺石は、施されていない。埋没土の堆積状況は、S-1トレンチと同様の状況が続いている。

S-1・S-2トレンチの調査により、内堀の上幅は、約19.7m、下幅は12.2mを測った。

また、S-2トレンチでは、調査区の中央部分で中堤を、南半部分で外堀内縁の立ち上がりを検出した。中堤の上幅は約7.5mである。検出面は、地表下0.4から0.5mで、大半部分が耕作が及んでいたが、一部に黄褐色土の堆積が確認できた。この土層は、周堀を掘削した際の土砂を掘り上げ、中堤上を整形した土層と考えられる。

外堀への変換点は、S-2トレンチの北端から南方約13.2mの地点にある。外堀内縁は、約32度の傾斜で掘り込まれ、地表下2.05mで基底面に至る。外堀底面の幅は、9.1m、ほぼ平坦な掘り方が続き、32度の傾斜で外堀外縁の傾斜面となる。外堀上端の幅は、約13.5mである。内外両縁とも素掘りのままで葺石は、施されていない。

外堀の埋没土は、上層に耕作土、褐色土の堆積がある。中層から下層には薄い砂層を挟み、その上下に褐色粘質土が堆積している。外堀部分では内堀下層にみられた黒色土の堆積はなかったようである。基底面から黒色砂質土を間層に挟み、黄褐色土の堆積がみられる。内堀同様この土層がHr-FAに相当するもので、中堤寄りでは基底面に接する状況にある。

外堀外縁の上端からさらに南方に向かって2.2mの間については土層観察を行ったが、黄褐色土層を直接耕作土が覆っており、外堤、外周溝に関する情報は得られなかった。

さらに手元に残された調査区概念図にはS-2トレンチから南方約12mの位置に小トレンチが配置され、北から南に傾斜する落ち込みが検出されたようなメモがあるが、詳細は不明である。

E トレンチ

墳丘の東側にあたる地点に設置された南北方向のトレンチである。4箇所トレンチが設定、調査が実施されたが、全体の位置関係は不明である。

E-1 トレンチは、長さ10m、幅2mの調査区である。1号住居を検出した。

E-2 トレンチは、長さ15m、幅2mの調査区である。

調査区北端から南方約3.5mの地点に深さ0.75mの落ち込みがある。掘り方は、断面箱形を呈する。底面は、南側に向かって緩やかに下がっている。堆積土層は褐色土である。

調査区の北端では、N-7°-Wの方向に延びる溝を検出した。上幅1.5m、下幅0.45m、残存深度は、約0.45mである。また、調査区北東隅から南方2.5mの東壁際では、長軸の残存が1.3m以上の土坑状の落ち込みが確認された。

E-3 トレンチは、長さ10m、幅2mの調査区である。調査区の南半部分で、西から東の方向に延びる落ち込みを検出した。残存深度は0.15mである。また、これと重複して、上幅0.85m、下幅0.4mの溝が、N-65°-W方向に延びている。北西隅から東方向に0.83m、南方向に0.33mの地点から熙寧元寶（北宋、初鋳1068）1枚が出土したが、現在は所在不明である。

E-4 トレンチは、長さ10m、幅2mの調査区である。調査区南東隅が落ち込んでいる。掘り方は、上方に向かって、大きく開放する断面形を呈する。残存深度は、0.8mである。

調査区の北東隅から南方へ10m、西方へ2mの地点から土師器杯が集中して出土した。この中の067の杯からは、滑石製模造品の有孔円板1点、白玉7点が出土している。

(2) 竪穴住居

1号住居

保渡田八幡塚古墳の東側の調査区、E-1 トレンチで検出した。

平面形は、南北方向に長辺を有する横長方形を呈する。各四隅はやや丸みをおびている。

床面は多少の起伏を有するものの、ほぼ平坦な面をなす。特別に踏み固められた痕跡は認められなかった。

カマドは、東辺、南東隅寄りに構築されている。長軸を東西方向に向け、燃焼部は壁外に掘り込まれている。

カマドの焚口部右側、住居の南東隅寄りから、小穴が検出された。周辺の床面から河原石4点が出土している。また、住居南西隅寄りにも小穴が穿たれている。この二穴は、他の住居調査において指摘されることの多い、いわゆる貯蔵穴と認識される小穴の位置に近い。さらに、南壁から床面中央の方向の位置にも小穴が存在する。

遺物は、東壁際、カマド焚口部北西の床面から大型甕が出土している。また、埋没土中から土師器杯(017と020)、高台付椀(014~016)、須恵器杯(021・028・029)、灰釉陶器(025~027・032)、土師器甕(035~041・043)、土師器甕(042)、須恵器甕(044)が出土している。また、須恵器甕(044)これらの土器とともに鉄製紡錘車の軸(047)、棒状鉄製品(046)、鉄滓(085)が出土した。

床面からは東壁寄りを中心に炭化材が集中して出土している。これらの炭化材は、その残存状態がいずれも棒状を呈することから、住居の上屋根を構成していた建築部材が焼失、炭化材として遺存したものと考えられる。炭化材の樹種については、第6章2にその分析結果を報告しているよう針葉樹のヒノキ属、落葉樹のクマシデ節をはじめとした10種類であった。

本住居は、出土土器の特徴から、10世紀後半には廃絶していたと考えられる。

なお、本住居の床面中央から北壁に寄った位置からも掘り込みが検出された。平面円形を呈すこの遺構は、井戸と考えられ、本住居に後出して重複関係をなしたものと思われるが掘削時期は不明である。

6. 出土した遺物

(1) 円筒埴輪

001から012は、各トレンチ出土の円筒埴輪である。いずれも、小破片で全体形状を把握できる資料は、皆無である。もちろん、出土状況は、原位置を失っている。

形状の特徴を記しておく。003・006は、口縁部の破片である。上半部が弱く外反して立ち上がる形状で、先端は、弱く内側に戻る。先端の面は、やや窪む。基底部は、008に代表される。008の底径は、22.7cmに復元される。基部は薄い粘土板で形成され、これを基礎に、胴部の粘土紐が積み上げられていたものと想定される。

突帯の形状は、001・005が断面三角形状を、009が断面台形で、上稜の突出が下稜のそれを上回る形状である。

透孔は、005で円形の透孔の一部が残存していることが観察できる。

器面の調整は、外面が全て一次調整のタテハケである。ハケメの工具は、001に代表されるような、やや粗い単位で、ザックリと器面に当たっているものと、002のように、単位の細かい工具が用いられたものがある。内面の調整は、ナナメタテ方向のナデ、あるいはナナメ方向のハケメである。

焼成は、全て窖窯焼成である。

(2) 形象埴輪

013は、人物埴輪の頭部であるが、出土地点が不明である。残存状態も決して良好では無く、後頭部をはじめ後補の部分が多い。頭部に被物をしていたと考えられるが、頭頂部は小孔をもって開放しており、被物の様相は判然としない。顔は小さく端正な作りである。目、口ともに木の葉状に切り込まれている。

(3) 1号住居出土遺物

014から047は、1号住居の出土遺物である。土師

器は、高台付椀(014~016)、杯(017~021)、甕(033~041・043)、甗(042)の器種が出土している。高台付椀、杯は、口縁部下半にヘラケズリが施され、内面は、棒状工具によるミガキが重ねられている。内面は、黒色処理がなされている。甕の口縁部は、直立気味に立ち上がり、中位で屈曲、外反する。器肉は厚い。甗は、大型で底抜けである。鏝状の突起は、発達が弱い。下端に逆V字状の切り込みが認められる。須恵器は、杯(024~026)、甕(041)が出土している。灰釉陶器は、杯(026・027)、高台付椀(032)が出土したが、いずれも小破片である。この他に、鉄滓(045)、棒状鉄製品(046)、鉄製紡錘車(047)が出土している。

(4) トレンチ出土の遺物

048から089は、トレンチ出土の遺物である。048から075は、E-4トレンチから出土した資料である。048から066は、調査区北東隅から南方へ10m、西方へ2mの地点から集中して出土したものである。048から055は、滑石製模造品で、057の土師器杯の内に収められるようにして出土したものである。048は、一部分が欠損するが、直径3.5cmの有孔円板である。049から055は、直径0.6から0.7cmの白玉である。056から066までの土師器のうち、058・061を除く9個体は、いわゆる内斜口縁の杯である。口縁部は短く、屈曲して斜め上方に立ち上がり、内面に稜をなしている。底部は、056以外浅い。外面の調整は、下半にヘラケズリを施し、上半は、成形時のナデ調整を残している。内面には、棒状工具によるミガキが加えられている。058は、短い口縁部が直立ぎみに立ち上がる形状である。061は、口縁部が底部から内彎して立ち上がる形状である。

068は、小径の土師器杯で、内彎ぎみに立ち上がる。069は、須恵器蓋模倣の土師器杯である。

070から075は、E-4トレンチ南端の溝状の落ち込みから出土した資料である。070は、須恵器蓋模倣の土師器杯である。口縁部は、底部との境に明瞭な稜をなした後、直立ぎみに立ち上がる。071・072は、

灰釉陶器の破片である。071は、瓶で取手が付いていたか。球形の胴部から短い口縁部が立ち上がるものと考えられる。072は、杯の口縁部破片である。073は、須恵器高台付椀の破片で、高台は低く、断面三角形を呈している。074は、須恵器であろうか。大型品で、横位に沈線が1条認められる。075は、器種不明の破片で、これも還元焼成である。縦方向の切り込みと横位の沈線が残存する。

076から080は、E-2トレンチからの出土である。076・077は、土師器杯の小破片である。078は、須恵器杯で、底部は、回転糸切り離しである。080は、須恵器の高台付椀あるいは杯の破片である。

081から087・090・091の出土位置は不明である。081から083は、長胴の土師器甕である。両者とも、口縁部は、ラップ状に外反する形状で、口縁部に最大径を有する。083は、胎土中に多量の夾雑物を含むが、その中に、結晶片岩の砂粒の混入が顕著である。

084・085は、ロクロ成形で、底部は、回転糸切り離しによる。両者とも使用による器面の荒れなどが観察できない。084は、口径15.8cm、器高4.6cmで、内外両面にロクロ挽きの痕跡が明瞭に残っている。085は、口径14.8cm、器高4.4cmで、器肉全体が厚みを有している。

086・087は、ロクロ成形の杯あるいは椀である。

090・091は、鉄製品である。090は、断面四角形の棒状製品4本が錆着しているもので、そのうちの2本は、先端が尖っている。また、これらの周囲には木質が付着しており、2方向の木目が観察できる。091は、両端が欠損する棒状品である。断面形は、四角形である。

088・089は、1号住居の埋没土中から出土した縄文土器で、同一個体をなすと考えられる。前期、諸磯a式の深鉢形土器である。

(5) 伊勢廻り地区出土埴輪

092から122は、伊勢廻りの注記のなされた埴輪である。井出二子山古墳の南側に「伊勢廻り」の小字名が残っているものの、これらの資料の出土した調

査区についてはその地点、調査内容が判然としないものである。092から114は、円筒埴輪、115から122は、形象埴輪である。注記の内容は、細分され、円筒埴輪の092から096はNトレNo.1G、円筒埴輪097から114、および、形象埴輪115から121がNトレNo.III、あるいはNIIIトレと記されている。

これらの資料は、いずれも破片であり、全体の形状を把握できる資料はない。焼成は、窖窯焼成である。

円筒埴輪の資料の中で、092、097から100・102・107が口縁部破片である。102・107は、先端が欠損しているが、その他は、先端がきちんとした面を形づくっている。立ち上がりの形状は、092が緩やかに外反して立ち上がるもので、第5章の井出二子山古墳出土埴輪の分類におけるD類、097・100は、小破片のため、やや断定しがたい点があるが、大きく外反するC類、098は、直線的に立ち上がるB類、099は、先端が屈曲して内面に稜をなすA類に相当するものと考えられる。

器面の調整は、内外面ともハケメが施されているが、097は、内外面ともにナデ調整である点がやや異質である。この資料の外面には赤色塗彩が施されている。

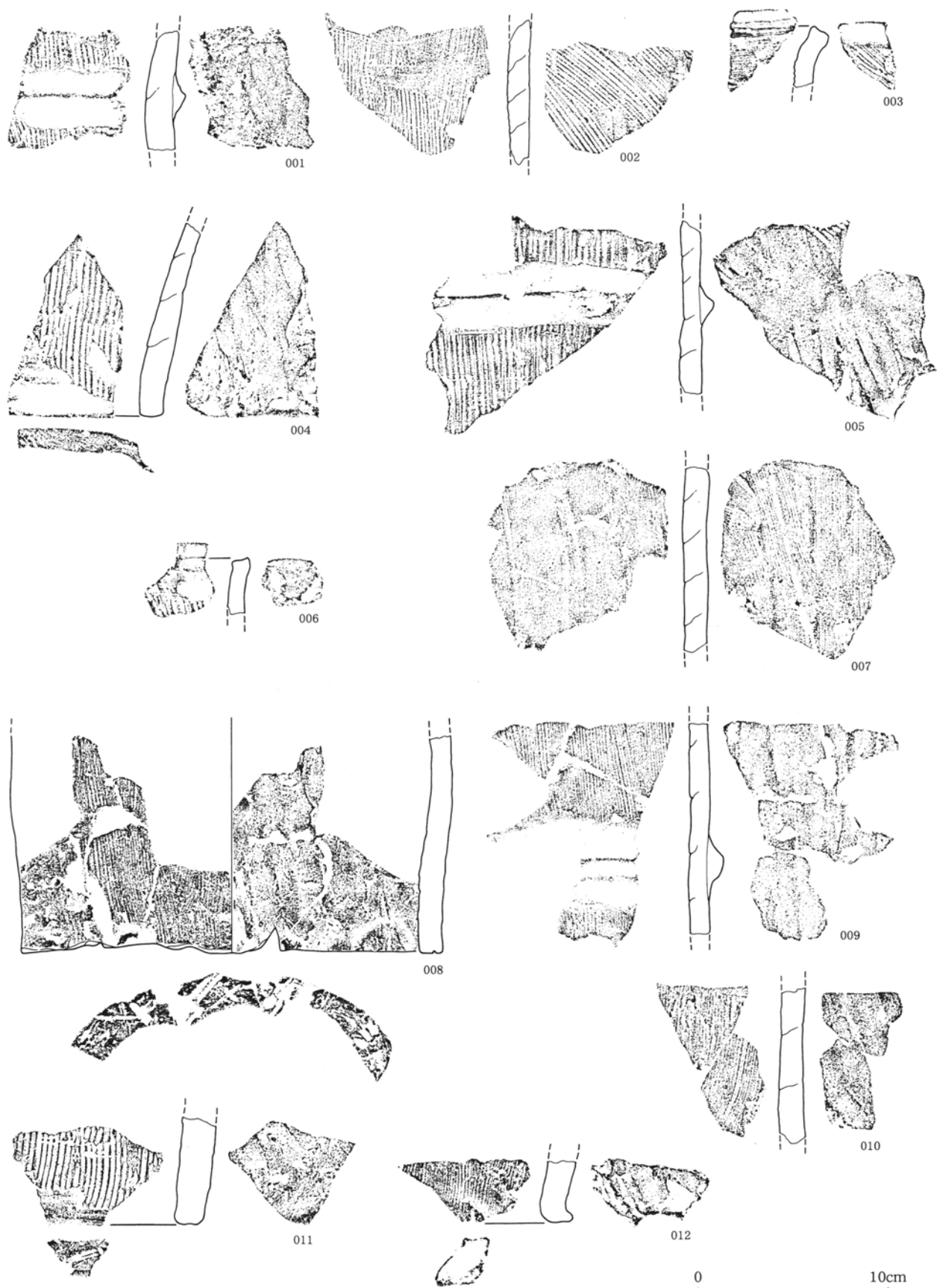
胴部破片では109を含む7点で突帯の形状が観察できる。いずれの資料もあまり発達したものではなく、扁平な断面形状である。井出二子山古墳の分類中の台1あるいは、M1に相当する、上稜が下稜の突出を上回るものであった。

透孔は、094と101・110・111に円形の一部分が確認できる。

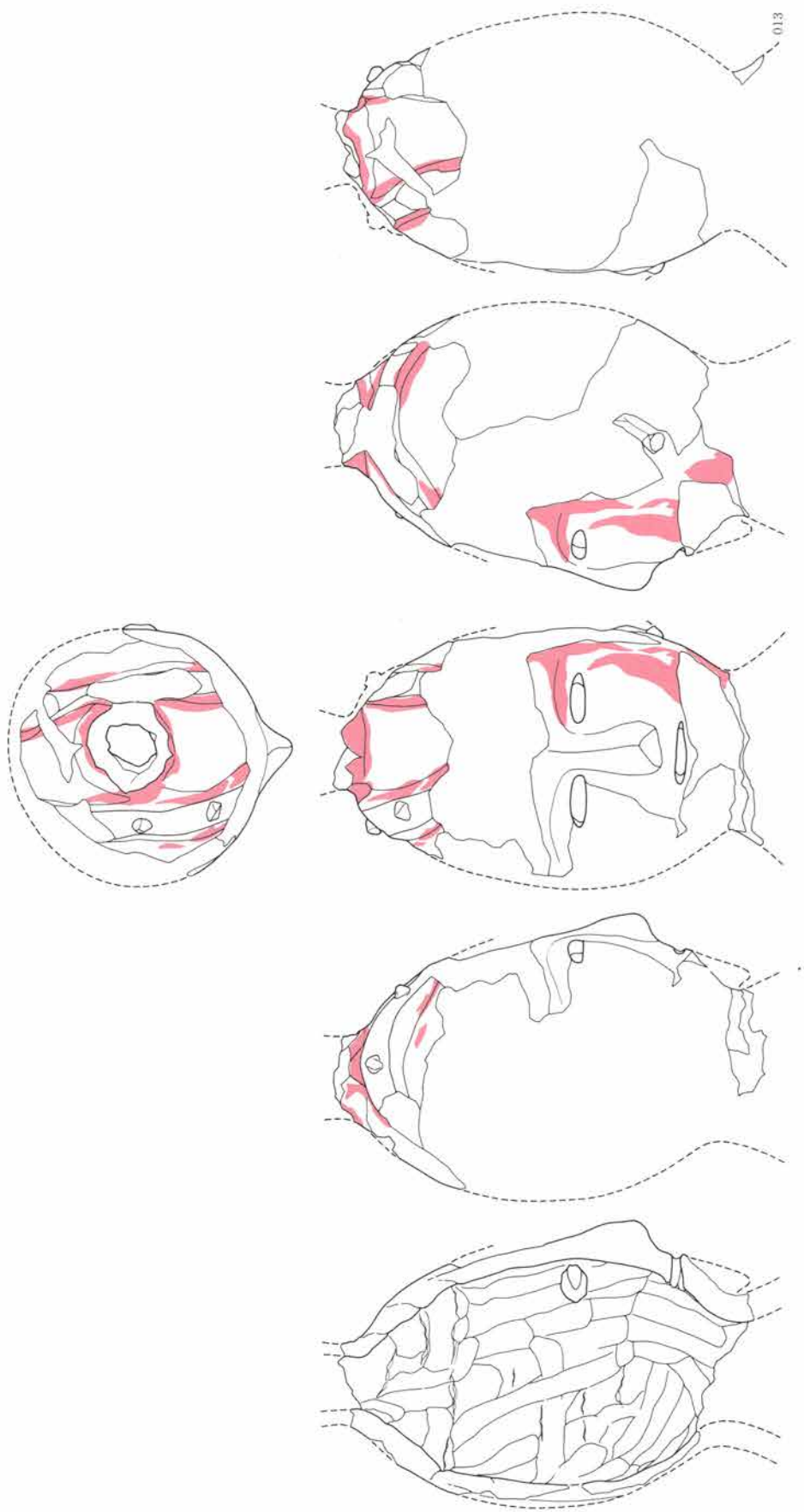
基底部は、113・114の破片資料があり、薄い粘土板により、基部が形成されていることが観察できる。

器面の調整であるが、外面は、一次調整のタテハケによっている。内面は、基底部、胴部ではタテ・ナメタテ方向のナデが施されている。

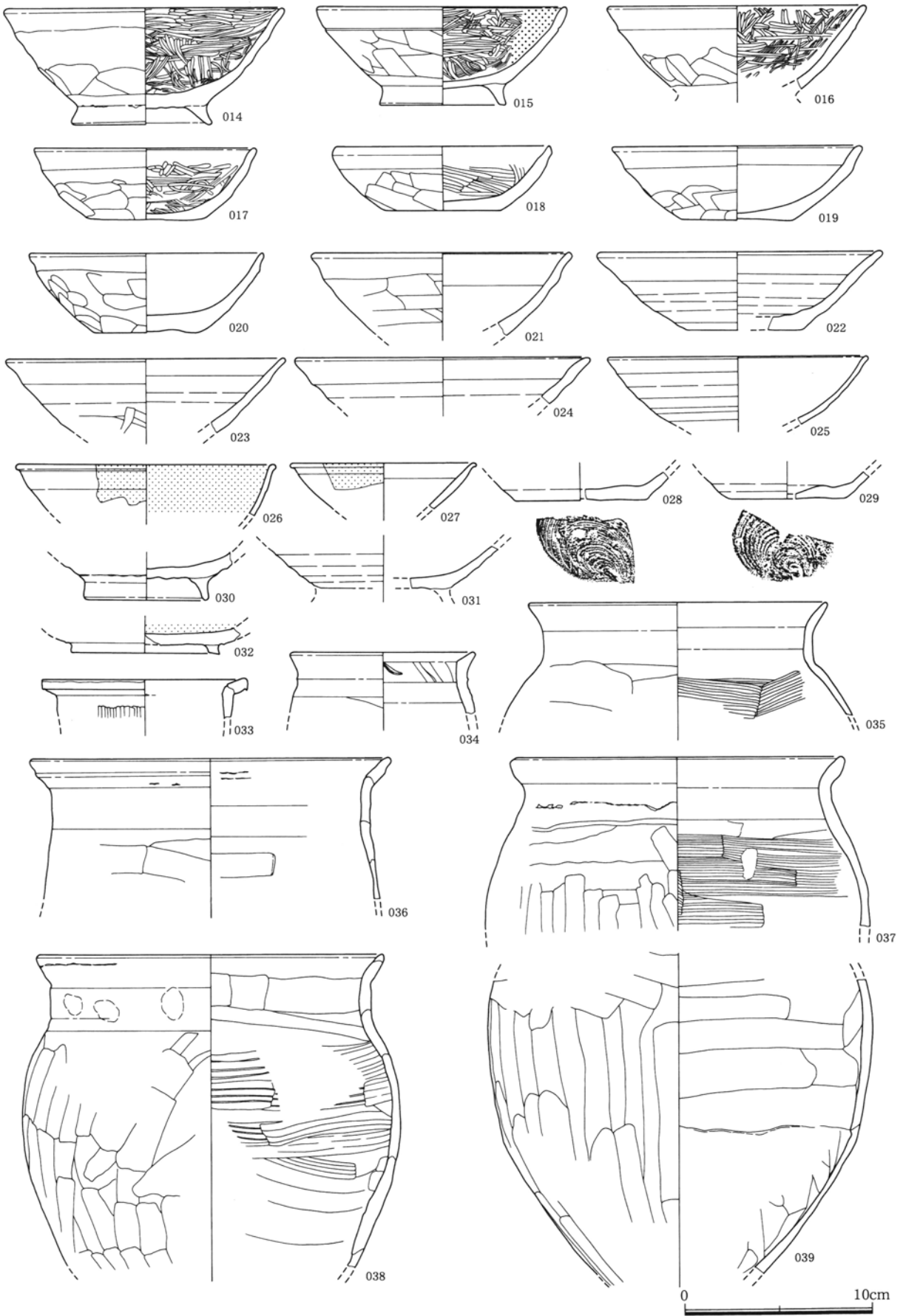
109は、斜め上方に向かって立ち上がるものと考えられることから朝顔形埴輪の可能性も考えられようか。



第119図 円筒埴輪



第120図 形象埴輪



第121図 1号住居出土の遺物(1)